

---

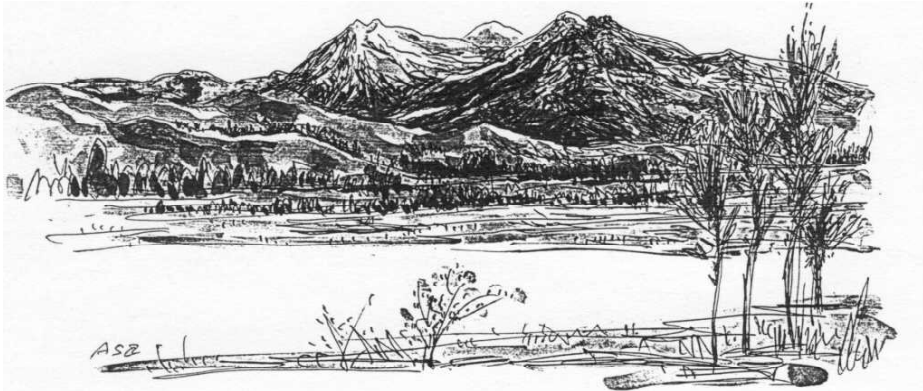
---

# 魚沼の方言

---

---

竹内朝雄



五箇部落から望んだ魚沼三山

## はしがき

魚沼の三山（八海山・中ノ岳・駒ヶ岳）を仰ぎ、魚野川の瀬音を耳にして育った日から八十年が過ぎようとしている。幼少時に聞いた里言葉は、生地の自然や故旧と結び付いて懐かしく甦る。「好い天気」「冷たい水」「田圃」などの言葉は今でも「**エエ**天気」「**ツベテエ**水」「**タッポ**」などと発音してしまう。身に染み付いた方言の根強さに驚嘆するばかりである。

魚沼と言えば、南魚沼・北魚沼・中魚沼の三郡を含んだが、越後では昔から上州・信州・會津に隣接する僻遠の豪雪地として知られていた。此の書で取り上げた語は主に南魚の山村で語られた方言・俗語の約5000語である。

資料に恵まれず乏しい記憶に頼る心許ない作業であった。文字に縁遠かった方言は浮動性が強く固定して記録するには勇気を要する語も多かった。

### I 音韻の部

発音の特徴を調べるためにカナ（音節文字）よりローマ字（単音文字）の方が都合な点もあって、「ローマ字」の利用を試みた。「アクセント」も「**Ā**」のような形で記号化して見たが、ただ日本語のアクセントは音の振動数（高低）で無く、振幅（強弱）に依るものであり、話者の感情で左右される事もあって、曖昧な記録になって居る。

### II 自立語の部

農山村の日常生活を思い付く俣の項目に分類し、それぞれを品詞別・五十音順に配列した。辞書としての活用より往時の「暮らし」を確かめるよすがにと編集したものである。自立語ながら特殊な働きを持ち、意味上の分類に馴染まない語（形式名詞・代動詞）なども混じって居る。

動詞・形容詞は語法的な「活用」「転成」にも触れたが、学校文法の十品詞の一つ「形容動詞」は〔広辞苑〕に倣い設けない立場を採った。

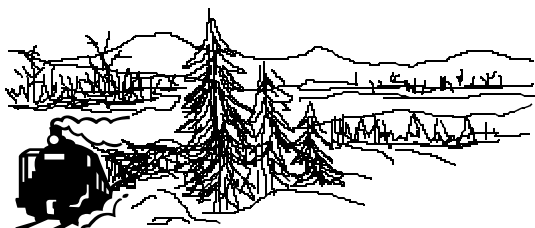
### Ⅲ 付属語の部

単独で意味を持たないが、方言を特徴付ける「助動詞」「助詞」及び「接頭語」「接尾語」などを採り上げた。その他に方言独特の語法なども僅かながら触れて居る。

### 附録

具体的な文脈の中で使われた方言を識るための資料である。念仏や呪文の意味は解せない所も多いが、童唄や昔話は曲節を伴って方言の想起には役立った。

I	音韻の部	.....	4
II	自立語の部	.....	49
III	付属語の部	.....	136
	附録 1	童唄・俗謡	..... 194
	附録 2	念仏唄	..... 214
	附録 3	昔話	..... 224



ふるさとの訛り懐かし 停車場の人混みの中に そを聞きに行く 石川啄木

## I 音韻の部

母音について .....	5
【母音の種類】 .....	5
【母音の変換】 .....	6
【母音の結合】 .....	19
【母音の消去】 .....	27
子音について .....	30
【子音の種類】 .....	30
【子音の変換】 .....	30
【子音の添加】 .....	33
【子音の消去】 .....	35
【撥音の多用】 .....	38
【濁音の多用】 .....	42
【濁音の清音化】 .....	44
【濁音の半濁音化】 .....	44
【半濁音の濁音化】 .....	44
【拗音の多用】 .....	45
《参考》 北国の方言 .....	48

※ 音韻の部で「例」に挙げた語は一部であり、網羅を意図したもので無い。

## 母音について

### 【 母音の種類 】

〔a〕 〔i〕 〔u〕 〔e〕 〔o〕  
「ア」 「イ」 「ウ」 「エ」 「オ」

※ 母音の表記には上記の他に次の様な記号もあり、方言にも利用できそうだが今回は触れない事にした。

〔A〕 〔ɑ〕 〔æ〕 〔ɛ〕 〔ɔ〕 〔ə〕 〔ü〕

※ 半母音として〔w〕〔y〕を加える事もある。

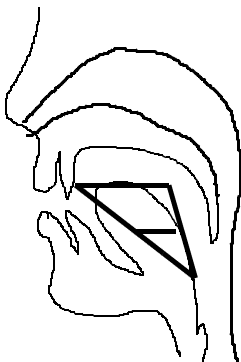
〔w〕 ≙ 〔u〕 〔y〕 ≙ 〔i〕

※ 〔n〕 「ン」は単独で音節を成すため母音に扱う説もある。ここでは時に「母音」、時に「鼻子音」として扱った。

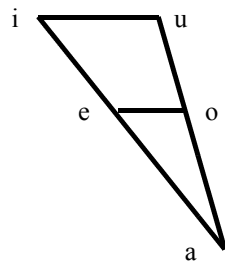
※ 方言で、母音の「変換」が目立つのは「舌面位置」や「開口の大小」などが関係したものと思われる。

※ **三角形図**で隣接する音の混同が目立つ。(〔i〕と〔e〕、〔u〕と〔o〕など。)

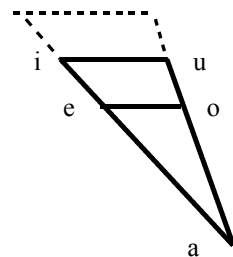
### 舌面位置



### 母音三角形図



〔共通語〕



〔魚沼方言〕

## 【 母音の変換 】

### 《A》 → 《O》

[a] → [o]      「ア」 → 「オ」

<sup>0</sup>アラッ 大変！ → <sup>0</sup>オラッ おごった！（感動詞）

☆ ア段の音に「ウ」「フ」が付いてオ段の長音となる変換は  
【母音の結合】（開音）を参照。

[ka] → [ko]      「カ」 → 「コ」

川・河 → コお（河渡れ・コーツたれ）（河童・コーツパ）

<sup>こま</sup>小カ<sup>い</sup> → ちッコえ（のッコえ）

<sup>で</sup>大カ<sup>い</sup> → でッコえ

[ga] → [go]      「ガ」 → 「ゴ」

<sup>しやが</sup>蹲む → しゃゴむ（しゃゴなる）

<sup>なが</sup>長い → なーゴえ

<sup>にが</sup>苦い → にゴえ

<sup>みょうが</sup>茗荷 → ミョーゴ

[wa] → [wo] → [o]      「ワ」 → 「ヲ」・「オ」

<sup>かわ</sup>河 → カヲ（コオ・コー）<sup>かつば</sup>河童（コーツパ）

<sup>がわ</sup>川 → ガヲ（ゴオ・ゴー）<sup>さかい がわ</sup>境川（村名・サケゴー）

<sup>さわ</sup>沢 → サヲ（ソオ・ソー）<sup>みょうがさわ</sup>茗荷沢（村名・ミョウゴソー）

<sup>ざわ</sup>沢 → ザヲ（ゾオ・ゾー）<sup>い か ざわ</sup>五十沢（村名・エカゾー）

### 《I》 → 《U》

[ti] → [tu]      「チ」 → 「ツ」

<sup>ちまき</sup>粽 → ツまき

<sup>ちり</sup>塵 → ツり（魚沼より下越地方で目立つ。）

[hi] → [hu] 「ヒ」 → 「フ」

ひ  
挽く → フく  
ひさ  
久 → フさ  
ひたい  
額 → フてえ  
引ったくる → フったくる

[bi] → [bu] 「ビ」 → 「ブ」

あけび  
木通 → アケブ  
こめびつ  
米櫃 → こめブつ  
びしゃもん  
毘沙門 → ブしゃもん

[mi] → [mu] 「ミ」 → 「ム」(ン)

しやみせん  
三味線 → しゃムせん

《I》 → 《E》 ※ 語頭・語中・語尾いずれの「イ」も「エ」になる。

[i] → [e] 「イ」 → 「エ」 (魚沼方言の際立つ特徴)

〔語頭の例〕 名詞・動詞・副詞

慰安 → エあん  
言う → エう (合音で「ヨー」となる)  
家 → エえ  
いおり  
庵 → エおり  
いか  
烏賊 → エか  
息 → エき  
幾つ → エくつ  
行く → エぐ  
池 → エけ  
意向 → エこう  
いさか  
諍い → エさけえ  
石 → エし

椅子	→	イス
伊勢	→	イセ
忙ぐ	→	イそぐ
<small>いたち</small> 鼬	→	イタチ
<small>いちご</small> 苺	→	イチゴ
<small>いつ</small> 何時	→	イツ
<small>いて</small> 凍	→	イテ
糸	→	イト
<small>いなご</small> 蝗	→	イナゴ
<small>いにしえ</small> 古	→	イにしえ
<small>いぬ</small> 犬	→	イン
稲	→	イネ
<small>いのしし</small> 猪	→	イノシン
位牌	→	イはえ (イへえ)
<small>いびつ</small> 歪	→	イぶつ
異変	→	イへん
<small>いぼ</small> 疣	→	イぼ
今	→	イま
意味	→	イみ
<small>いむ</small> 忌む	→	イむ
<small>いめい</small> 遺命	→	イめえ
芋	→	イモ
嫌がる	→	イヤがる
<small>いえ</small> 癒る	→	イえる
<small>いよいよ</small> 愈々	→	イよイよ
<small>いらだ</small> 苛立つ	→	イらだつ
入口	→	イりぐち
居る	→	イる
容れ物	→	イれもん
<small>いろろ</small> 遺漏	→	イろー
員	→	イン



## 〔語尾の例〕 形容詞

### 《色彩・明暗》

赤い	→	あけ <b>エ</b>
明るい	→	あかり <b>エ</b>
暗い	→	くれ <b>エ</b>
黒い	→	くろ <b>エ</b>

### 《状態・形態》

浅い	→	あせ <b>エ</b>
厚い	→	あつ <b>エ</b>
薄い	→	おす <b>エ</b>
深い	→	ふけ <b>エ</b>
太い	→	ふて <b>エ</b>
細い	→	ほせ <b>エ</b>

### 《感覚》

暖かい	→	あつたこ <b>エ</b>
暑い	→	あつちや <b>エ</b>
寒い	→	さぶ <b>エ</b>
痛い	→	えて <b>エ</b>
痒い	→	かよ <b>エ</b>
涼しい	→	すずし <b>エ</b>

### 《味覚》 ※ 「a」と「i」の結合は「e」（後記）

甘い	→	あめ <b>エ</b>
辛い	→	かれ <b>エ</b>
酸っぱい	→	すっぺ <b>エ</b>
<small>にが</small> 苦い	→	にげ <b>エ</b>

### 《情緒》

嬉しい	→	おれし <b>エ</b>
苦しい	→	くるし <b>エ</b>

切ない → せつね**エ**  
 情けない → なさけね**エ**

※ 「イ」が「エ」となるため、「話し言葉」では判別できない語も生じる。

ええ 家				→	ええ (応答)		
えき 生き	えき 行き	えき 息	えき 雪	→	えき 駅	えき 易	えき 役
えちご 苺	えちご 一期	えちご 一語		→	えちご 越後		
えび 指				→	えび 海老		
え 入り口	くち			→	えりくち 襟口		
こうえん 工員				→	こうえん 公園	こうえん 講演	こうえん 高遠
えんしゅう 因習				→	えんしゅう 演習	えんしゅう 円周	えんしゅう 遠州

[ki] → [ke] 「キ」 → 「ケ」

消える → ケえる (後述の「前母音消去」とも見られる。)  
 kĭ e ru → kē ru

[gi] → [ge] 「ギ」 → 「ゲ」

魂消る → たまゲる (後述の「前母音消去」とも見られる。)  
 ta ma gĭ e ru → ta ma ge ru

[si] → [se] 「シ」 → 「セ」

シ得る → セえる。 (後述の「前母音消去」とも見られる。)  
 sĭ e ru → sē ru

※ 可能動詞に関しては「II 自立語・動詞」を参照。

[ni] → [ne] 「ニ」 → 「ネ」

賑か → ネぎやか  
 虹 → ネじ  
 憎い → ネ<sup>0</sup>つくえ  
 人形 → ネんぎょう  
 人参 → ネンジン  
 ぜに  
 銭 → ぜ<sup>0</sup>ネ

[hi] → [he]      「ヒ」 → 「ヘ」  
<sup>ひる</sup>  
 蛭            → <sup>o</sup>ヘル  
 昼前            → ヘえりめえ  
<sup>ひん</sup>  
 品              → へん（品が悪い）

[bi] → [be]      「ビ」 → 「ベ」  
<sup>え び す</sup>  
 恵比寿        → えべす  
<sup>かび</sup>  
 黴              → かべ  
<sup>くちびる</sup>  
 唇              → くちべろ

[mi] → [me]      「ミ」 → 「メ」  
 見える        → メえる      （後述の「前母音消去」とも見られる。）  
 m̄ i e ru → mē ru  
 見つける     → メつける

《U》 → 《I》

[su] → [si]      「ス」 → 「シ」  
<sup>す</sup>  
 為る            → シる      方言では、「サ変」で無く「サ行上一段」に活用する。  
<sup>こすき</sup>  
 木鋤            → くシき

[nu] → [ni]      「ヌ」 → 「ニ」  
 主              → ニし（君・お前）

[hu] → [hi]      「フ」 → 「ヒ」  
 屋根葺き      → やのヒき

[mu] → [mi]      「ム」 → 「ミ」  
 虫              → ミし  
<sup>むし</sup>  
 糞る            → ミしる  
<sup>むしろ</sup>  
 蕨              → ミしろ

[yu] → [yi・ye]      「ユ」 → 「イ・エ」 (ユ・エ・ヨ は通韻)  
行く            → エぐ

[ru] → [ri]            「ル」 → 「リ」  
明るい        → あかりえ  
けなる  
羨い            → けなりえ  
昼時            → ひーりどき (へえーりどき)  
悪い            → わりえ

### 《U》 → 《E》 《O》

[u] → [e]            「ウ」 → 「エ」  
上の山        → エえの山

[u] → [e・o]          「ウ」 → 「エ・オ」  
動く            → エごく            → オごく  
動かす        → エごかす        → オごかす  
うわつら  
表面            → エわつたら      → オわつたら

[su] → [se]          「ス」 → 「セ」 (前母音の消去とも見られる。)  
末              → セえ              s ɸ e → sē  
西瓜            → セえくわ        s ɸ e ka → sē kwa  
据え風呂      → セえふろ        s ɸ e bu ro → sē bu ro  
雑炊            → ぞうセえ        zo u s ɸ e → zo u sē

[hu] → [he]          「フ」 → 「ヘ」  
ふぐり  
鞆丸            → へっくり

[bu] → [be]          「ブ」 → 「ベ」  
ぶしや  
棄る            → ベしやる (ぶちやる → ベちやる)

[yu] → [ye・yo] 「ユ」 → 「エ・ヨ」 (魚沼では「ユ」「エ」「ヨ」は通韻)

歩 <sup>あゆ</sup> む	→ あエぶ	→ あヨぶ
お粥 <sup>かゆ</sup>	→ おかエ	→ おかヨ
痒 <sup>かゆ</sup> い	→ かエえ	→ かヨえ
結 <sup>ゆ</sup> い付ける	→ エえつける	→ ヨえつける
浴衣 <sup>ゆかた</sup>	→ エかた	→ ヨかた
雪 <sup>ゆき</sup>	→ エき	→ ヨき
揺 <sup>ゆ</sup> さぶる	→ エさぶる	→ ヨさぶる (「揺する」も同様)
譲 <sup>ゆず</sup> り物	→ エずり物	→ ヨずり物
茹 <sup>ゆ</sup> でる	→ エぜる	→ ヨぜる
ゆっくり	→ エっくり	→ ヨっくり
湯 <sup>ゆ</sup> と <sup>と</sup> り	→ エとり (腰巻き)	→ ヨとり
指 <sup>ゆび</sup>	→ エび	→ ヨび
夢 <sup>ゆめ</sup>	→ エめ	→ ヨめ
緩 <sup>ゆる</sup> む	→ エるむ	→ ヨるむ

《U》 → 《O》 ※ 語頭の「u」は全て「o」になると考えて良い。

[u] → [o] 「ウ」 → 「オ」

植える	→ オえる
浮かぶ	→ オかぶ
受ける	→ オける
鶯	→ オごえす
兎	→ オさぎ
牛	→ オし
後	→ オしろ
臼	→ オす
嘘	→ オそ
歌	→ オた
家 <sup>うち</sup>	→ オち
内 <sup>うち</sup>	→ オち

うかつ 迂闊	→	オ <sup>○</sup> っかり
腕	→	オ <sup>○</sup> で
うど 独活	→	オ <sup>○</sup> ど
うなぎ 鰻	→	オ <sup>○</sup> なぎ
うね 畝	→	オ <sup>○</sup> ね
うぼ 乳母	→	オ <sup>○</sup> ば
海	→	オ <sup>○</sup> み
濃	→	オ <sup>○</sup> み
産む	→	オ <sup>○</sup> む
うむ 熟む	→	オ <sup>○</sup> む
敬う	→	オ <sup>○</sup> やもう
裏	→	オ <sup>○</sup> ら
うれ 末	→	オ <sup>○</sup> ら
瓜	→	オ <sup>○</sup> り
売る	→	オ <sup>○</sup> る
うるい 擬宝珠	→	オ <sup>○</sup> るえ
嬉しい	→	オ <sup>○</sup> れしえ
上役	→	オ <sup>○</sup> わやく
運	→	オ <sup>○</sup> ん

[ku] → [ko]      「ク」 → 「コ」  
低い      → ひコえ

[gu] → [go]      「グ」 → 「ゴ」  
ぐみ  
茱萸      → ゴ<sup>○</sup>み  
雨具      → あまゴ  
鶯      → おゴえす  
えぐ  
薮い      → えゴえ  
天狗      → てんゴ  
道具      → どうゴ  
拭う      → のゴう  
年貢      → ねんゴ

[su] → [so] 「ス」 → 「ソ」

摺り鉢 → ソリ鉢  
飛白<sup>かすり</sup> → かソリ  
薬 → くソリ  
手摺<sup>てすり</sup> → てソリ

[zu] → [zo] 「ズ」 → 「ゾ」

根性なし<sup>ずく</sup> → ゾくなし  
葛の葉 → くゾ<sup>は</sup>葉

[syu] → [syo] 「シュ」 → 「シヨ」

衆 → シヨ (男<sup>おつこ</sup>シヨ 女シヨ 若えシヨ)  
祝儀 → シヨ一ぎ (祝言 シヨ一げん)  
修身 → シヨ一しん  
舅 → シヨ一と

[jyu] → [jyo] 「ジュ」 → 「ジョ」

数珠 → ジヨ一ず  
十能 → ジヨ一のう  
家中 → おちジョ一  
鎮守 → ちんジョ

[tyu] → [tyō] 「チュー」 → 「チョー」

中学 → チョーがく (中位 チョーぐれえ)  
忠義 → チョ一ぎ  
注射 → チョ一しゃ (注文) チョ一もん  
仲人 → チョ一にん

[nu] → [no] 「ヌ」 → 「ノ」

縫う → ノう  
糠 → ノか

抜く	→	ノぐ
脱ぐ	→	ノ <sup>〇</sup> ぐ
拭う	→	ノごう
主	→	ノし (江戸小咄でも「オノシ・貴方」が頻出する。)
盗人	→	ノすつと
布子 <sup>ぬのこ</sup>	→	ノのこ
滑り <sup>ぬめ</sup>	→	ノめり
塗る	→	ノる
温い	→	ノるえ
濡れる	→	ノれる
狸	→	たノき

[mu] → [mo]      「ム」 → 「モ」

聳	→	モ <sup>〇</sup> こ
貉	→	モじな
結ぶ	→	モすぶ
娘	→	モすめ
六つ	→	モつつ
南無	→	なモ

[yu] → [yo]      「ユ」 → 「ヨ」      ※ [yu] [ye] [yo] は通韻

湯	→	ヨ
雪	→	ヨ (エ) き
揺する	→	ヨ (エ) さぶる
夕刻	→	ヨ一さり
濯ぐ	→	ヨ (エ) すぐ
譲る	→	ヨ (エ) ずる
油断	→	ヨだん
夢	→	ヨ (エ) め
百合	→	ヨり
緩む	→	ヨ (エ) るむ
幽霊	→	ヨ一れえ



鮎	→	あヨ (エ)
粥	→	かヨ (エ)
痒い	→	かヨ (エ) え
石油	→	せきヨ (肝油 醤油 灯油 桐油)
露	→	つヨ
梅雨	→	つヨ

[ru] → [ro]      「ル」 → 「ロ」

留主	→	ロす
親類	→	しんロえ
野蒜 <small>のびる</small>	→	のんびロ

《U》 → 《N》 ※「n」は単独で音節を成すため母音の一つとも見られる。

[u] → [n]      「ウ」 → 「ン」

馬	→	ンま
旨い	→	ンまえ (ンめえ)
海	→	ンみ
濃	→	ンみ
産む	→	ンむ
梅	→	ンめ
埋める	→	ンめる

《E》 → 《U》

[be] → [bu]      「ベ」 → 「ブ」

術 <small>すべ</small>	→	すブ
---------------------	---	----

《E》 → 《O》

[e] → [o]      「エ」 → 「オ」

動く <small>えご</small>	→	オごく
----------------------	---	-----

[se] → [so]      「セ」 → 「ソ」  
 所以<sup>せい</sup> → ソえ  
 背負う → ソう (前母音の消去でもある。) sɛ o u → so u

[ye] → [yo]      「エ」 → 「ヨ」  
 エて (得手) → ヨて  
 つエ (杖) → つヨ (杖の棒・ツヨンボ)

### 《O》 → 《U》

[ko] → [ku]      「コ」 → 「ク」  
 木鋤<sup>こすき</sup> → クしき  
 今度こそ → 今度クそ  
 損ねる<sup>そこ</sup> → そクねる  
 ちよっくら → ちよっくら

[so] → [su]      「ソ」 → 「ス」  
 遊ぶ → あスぶ  
 剃刀<sup>かみそり</sup> → かみスリ  
 密り<sup>こっそ</sup> → こっスリ  
 ソっけえ → スっけえ  
 ソんつれえ → スんつれえ

[to] → [tu]      「ト」 → 「ツ」  
 男 → おツこ  
 佛 → ほツけ

[ho] → [hu]      「ホ」 → 「フ」  
 蓬ける → フうける  
 鬼灯<sup>ほおずき</sup> → フうずけ  
 朴の木 → フうの木

ほく  
解す → フぐす  
本当 → フんとう

[bo] → [bu] 「ボ」 → 「ブ」

南瓜 → か**ブ**ちや  
藁帽子 → 藁**ブ**うし

### 【 母音の結合 】

《A I》 → 《A E》 ・ 《Ē》

[a i] → [a e] ・ [ē] 「アイ」 → 「アエ」・「エー」

挨拶 → エーさつ  
合図 → エーず  
愛想 → エーそ  
開いた → エーた  
彼奴 → エーつ  
相手 → エーて

[ka i] → [ka e] ・ [kē] 「カイ」 → 「ケエ」・「ケー」

貝 → ケエ  
權 → ケエ  
飼葉 → ケエば  
赤い → あケエ  
境 → さケエ  
世界 → せケエ  
高い → たケエ

[ga i] → [ga e] ・ [gē] 「ガイ」 → 「ゲエ」・「ゲー」

死骸 → し**ゲ**エ  
損害 → そん**ゲ**エ

大概 → てえ**ゲ**エ  
苦い → に**ゲ**エ

[sa i] → [sɤ e]・[sē] 「サイ」 → 「セエ」・「セー」

歳 → **セ**エ  
細工 → **セ**エく  
最後 → **セ**エご  
幸先 → **セ**エさき  
裁判 → **セ**エばん  
災難 → **セ**エなん  
財布 → **セ**エふ  
五月蠅 → おる**セ**エ

[za i] → [zɤ e]・[zē] 「ザイ」 → 「ゼエ」・「ゼー」

在郷 → **ゼ**エごう  
材木 → **ゼ**エもく  
財産 → **ゼ**エさん  
自在 → じ**ゼ**エ  
東西 → とう**ゼ**エ  
土左衛門 → ど**ゼ**エもん

[ta i] → [tɤ e]・[tē] 「タイ」 → 「テエ」・「テー」

鯛 → **テ**エ  
体裁 → **テ**エせえ  
大層 → **テ**エそう  
態度 → **テ**エど  
一体 → えっ**テ**エ  
世帯 → しょ**テ**エ

[da i] → [dɤ e]・[dē] 「ダイ」 → 「デエ」・「デー」

台 → **デ**エ  
大工 → **デ**エく

大根 → **デエ**こん  
 台所 → **デエ**どこ  
 台無し → **デエ**なし  
 代々 → **デエ****デエ**  
 内裏 → **デエ**り

[na i] → [næ e]・[nē] 「ナイ」 → 「**ネエ**」・「**ネー**」

無い → **ネエ**  
 内緒 → **ネエ**しょ  
 泣いた子 → **ネエ**た子  
 家内 → か**ネエ**  
 担い桶 → に**ネエ**おけ

[ha i] → [hæ e]・[hē] 「ハイ」 → 「**ヘエ**」・「**ヘー**」

肺 → **ヘエ**  
 灰 → **ヘエ**  
 排気 → **ヘエ**き  
 廃棄 → **ヘエ**き  
 俳句 → **ヘエ**く  
 這出る → **ヘエ**でる  
 入る → **ヘエ**る

[ba i] → [bæ e]・[bē] 「バイ」 → 「**ベエ**」・「**ベー**」

倍 → **ベエ**  
ばいきん  
 黴菌 → **ベエ**きん  
あんばい  
 塩梅 → あん**ベエ**  
 商売 → しょう**ベエ**  
せば  
 狭い → せ**ベエ**  
 やばい → や**ベエ**

[pa i] → [pæ e]・[pē] 「パイ」 → 「**ペエ**」・「**ペー**」

一杯 → えっ**ペエ**

金牌 → きん**ペエ**  
 失敗 → しっ**ペエ**  
 塩っぱい → しょっ**ペエ**  
 心配 → しん**ペエ**  
 酸っぱい → すっ**ペエ**

[ma i] → [mæ e]・[mē] 「マイ」 → 「**メエ**」・「**メー**」

参る → **メエ**る  
 毎日 → **メエ**んち  
 一枚 → えち**メエ**  
 新米 → しん**メエ**  
 狭い → せ**メエ** (せべ**エ**)  
ぜんまい  
 薇 → ぜん**メエ**  
 手前 → て**メエ**

[ya i] → [yæ e]・[yē] 「ヤイ」 → 「**ヤエ**」・「**エー**」

焼いた → **エー**た  
 早い → は**エー**  
もやい  
 舫船 → も**エー**船

[ra i] → [ræ e]・[rē] 「ライ」 → 「**レエ**」・「**レー**」

来年(月) → **レエ**ねん (げつ)  
 辛い → か**レエ**  
 嫌い → き**レエ**  
 暗い → く**レエ**  
 狙い撃ち → ね**レエ**うち  
 祓い → は**レエ**  
 笑い顔 → わ**レエ**がお

[wa i] → [wæ e]・[wē] 「ワイ」 → 「**ウェ**」・「**ウェー**」

猥褻 → **ウェー**せつ

沸いた湯	→	ウェー	た湯
賄賂	→	ウェー	ろ
祝い	→	えウェー	
弱い	→	えウェー	
可愛い	→	かウェー	
怖い	→	こウェー	
幸い	→	さえウェー	
賑わい	→	にぎウェー	

《AU》 → 《O》 開音 「ア段の音」に「ウ・フ」が付く場合、オ列の長音になる。(「フ」は旧仮名遣い)

[a u] [a hu] → [ō]

アウ (フ)	→	オー
カウ (フ)	→	コー
ガウ (フ)	→	ゴー
サウ (フ)	→	ソー
ザウ (フ)	→	ゾー
タウ (フ)	→	トー
ダウ (フ)	→	ドー
ナウ (フ)	→	ノー
ハウ (フ)	→	ホー
バウ (フ)	→	ポー
パウ (フ)	→	ポー
マウ (フ)	→	モー
ヤウ (フ)	→	ヨー
ラウ (フ)	→	ロー
ワウ (フ)	→	オー

「アウ」「アフ」→「オー」

あ 会ふ	あ 和ふ	あふぎ 扇
かうどう 行動	せんかう 線香	かうさ 交差
たが 違う	がうき 豪気	がうたう 強盗
くさうづ 臭水	さうぎ 葬儀	さうしよ 草書
ざふすい 雑炊	ざうげ 象牙	ざうしよ 蔵書
たう 臺	うた 唄ふ	こた 答ふ
もんだふ 問答	ほんだふ 本堂	だうらく 道楽
かな 叶ふ	な 縷ふ	なふひん 納品
は 這ふ	ほうはふ 方法	はふ 抛る
かぼ 庇ふ	ぼうず 坊主	ぼうふう 防風
せつぽふ 説法	げ ぼう 尻っ方	てつぼう 鉄砲
かんま 弄ふ	すまふ 相撲	まうもく 盲目
こしや 拵ふ	やうき 陽気	やうかう 洋行
あば 慾らふ	らふそく 蠟燭	らうじん 老人
えわ 祝ふ	わうさま 王様	わうちやく 横着

《OU》 → 《Ō》 合音①

「オ段の音」に「ウ」・「フ」が付く場合、オ列の長音になる。

[o u] [o hu] → [ō]

オウ (フ) →	オー
コウ (フ) →	コー
ゴウ (フ) →	ゴー
ソウ (フ) →	ソー
ゾウ (フ) →	ゾー
トウ (フ) →	トー
ドウ (フ) →	ドー
ノウ (フ) →	ノー
ホウ (フ) →	ホー
ボウ (フ) →	ボー
ポウ (フ) →	ポー
モウ (フ) →	モー
ヨウ (フ) →	ヨー
ロウ (フ) →	ロー
ヲウ (フ) →	ヲー

「オウ」「オフ」 → 「オー」

お追ふ	せお 背負ふ (振り仮名は旧仮名)
こ乞ふ	じこう 時候
いんごふ 因業	おくごう 億劫
そ添う	たいそう 大層
こぞう 小僧	ぞうお 憎悪
とうふ 豆腐	とうぶ 東部
どうらん 胴乱	どうし 同士
のう 能	のうかう 農耕
ほふいん 法印	ほふじ 法事
ぼう 棒	ぼ 背負ふ
ねんぼう 年報	ねんぼう 年俸
おも 思ふ	もうふ 毛布
よ 能う	ようき 容器
とうろう 燈籠	しょうろう 鐘楼
をう 苧績み	をう 終ふ

《EU》 → 《YŌ̄》 合音②

「エ段の音」に「ウ」・「フ」が付く場合、オ列の長音・拗長音になる。

[e u] [e hu] → [yō̄]

エウ (フ) →	ヨー
ケウ (フ) →	キョー
ゲウ (フ) →	ギョー
セウ (フ) →	ショー
ゼウ (フ) →	ジョー
テウ (フ) →	チョー
デウ (フ) →	ヂョー

「エウ」「エフ」 → 「ヨー」

ごえふ 五葉	めんえふ 面妖 (振り仮名は旧仮名)
けふ 今日	てっけう 鉄橋
じげふ 事業	げうかう 僂倖
せうねん 少年	せうだい 請待
どぜう 泥鯱	ぜうぜつ 饒舌
てうし 調子	てふてふ 蝶蝶
でうもく 条目	でふ 量



ネウ (フ) → ニョー	ねうだめ 尿溜	しんねう 之繞
ヘウ (フ) → ヒョー	へうたん 瓢箪	へうりう 漂流
ベウ (フ) → ビョー	いくべう 育苗	そべう 素描
ペウ (フ) → ピョー	じっぺう 十俵	かんべう 干瓢
メウ (フ) → ミョー	めうが 茗荷	めうぼう 妙法
レウ (フ) → リョー	れふし 獵師	れうかい 了解
エウ (フ) → ヨー	ゑ 酔ふ	まんえふ 万葉

《IO》 → 《YO》 ※ [y̥o → yo] の前母音消去とも見られる。

[y̥o → yo]

「イオ」 → 「ヨ」

魚釣り → ヨー釣り (y̥o tu ri → yo tu ri)

糸魚 → えとヨ (e to y̥o)

鯉の魚 → こえのヨ → コエニヨ (ko e n̄ yo → ko e nyo)

鮭の魚 → さけのヨ → サケニヨ (sa ke n̄ yo → sa ke nyo)

蜂魚 → はちヨ (ha ti y̥o → ha ti yo)

[ki o → kyo]

気を付ける! → キョつける!

[si o → syo]

「シオ」 → 「シヨ」

塩辛い → シヨ つかれえ

牛尾菜 → シヨで

[ti o → tyo]

「チオ」 → 「チヨ」

枳尾又 → とチヨまた (村名)

[ni o → nyo]

「ニオ」 → 「ニヨ」

ニオ → ニヨ (えな・ほえ・わらの堆積、民俗語「入場」)

《UI》 → 《UE》 → 《Ē》

[ru i] → [ræ e] → [rē]      「ルイ」 → 「ルエ」 → 「レー」

軽い      → かルエ      → かレー  
温い      → のルエ      → のレー  
古い      → ふルエ      → ふレー  
緩い      → よルエ      → よレー  
悪い      → わルエ      → わレー

《OI》 → 《OE》 → 《Ē》

[ko i] → [kø e] → [kē]      「コイ」 → 「コエ」・「ケー」

しゃっこい → しゃっコエ → しゃっケー  
ちっこい    → ちっコエ    → ちっケー  
でっこい    → でっコエ    → でっケー  
のっこい    → のっコエ    → のっケー  
はっこい    → はっコエ    → はっケー  
ひっこい    → ひっコエ    → ひっケー  
まるっこい → まるっコエ → まるっケー  
みじっこい → みじっコエ → みじっケー  
やっこい    → やっコエ    → やっケー

[go i] → [gø e] → [gē]      「ゴイ」 → 「ゴエ」・「ゲー」

<sup>すご</sup>  
凄い      → すゴエ      → すゲー  
<sup>にご</sup>  
苦い      → にゴエ      → にゲー

[so i] → [sø e] → [sē]      「ソイ」 → 「ソエ」・「セー」

遅い      → おソエ      → おセー  
細い      → ほソエ      → ほセー

[zo i] → [zø e] → [zē]      「ゾイ」 → 「ゾエ」・「ゼー」

<sup>おぞ</sup>  
賢い      → おゾエ      → おゼー

見るぞイ → 見る**ゾエ** → 見る**ゼー**

[to i] → [tø e] → [tē] 「トイ」 → 「トエ」・「デー」

聡い → さトエ → さデー

太い → ふトエ → ふデー

[do i] → [dø e] → [dē] 「ドイ」 → 「ドエ」・「デー」

諄い → くドエ → くデー

酷い → ひドエ → ひデー

[yo i] → [yø e] → [yē] 「ヨイ」 → 「ヨエ」・「エー」

痒い → かヨエ → かエー

強い → つヨエ → つエー

[ro i] → [rø e] → [rē] 「ロイ」 → 「ロエ」・「レー」

黒い → くロエ → くレー

白い → しロエ → しレー

広い → ひロエ → ひレー

鈍い → のロエ → のレー

## 【 母音の消去 】

《 前母音消去 》 母音が重なると前の母音が消える。

[æ o gu] → [ø gu]

仰ぐ → **オーグ** (開音と同じ結果)

扇ぐ → **オーグ** (開音と同じ結果)

[a zø a ga ri] → [a za ga ri]

あざあ  
畔上がり → **アザガリ**

[i sɰ u su] → [e su su]

石臼 → **エスス**

[i ti n̄e e] → [e ti ne]

市之江 → エチネ (村名)

[k̄e ru] → [k̄e ru]

消える → ケエル

[s̄e o u] → [so u]

背<sup>せ</sup>負<sup>お</sup>う → ソウ

[hi to mu r̄a o] → [hi to mu ro]

一村尾 → ヒトムロ (村名)

[m̄e ru] → [m̄e ru]

見える → メエル

[ȳ o] → [yo] ※ [I O] → [Y O] の結合と関連。

魚<sup>いお</sup> → ヨ

[to ha] → [t̄e a] → [ta] 「トハ」→「トア」→「タ」

案じる事は → あちこトア → あちこタ (係助詞「ハ→ア」は子音 h の消去)

[do ha] → [d̄e a] → [da] 「ドハ」→「ドア」→「ダ」

今度は → こんドア → こんダ (係助詞「ハ→ア」は子音 h の消去)

[na n zu ha] → [na n z̄e a] → [na n za]

なんずは → なんザ (…などは) (係助詞「ハ→ア」は子音 h の消去)

[no ha] → [n̄e a] → [na] 「ノハ」→「ノア」→「ナ」

食うのは → くらノア → くらナ (係助詞「ハ→ア」は子音 h の消去)

[re ha] → [rɛ a] → [ra] 「レハ」 → 「レア」 → 「ラ」

あれは → あレア → あラア (係助詞「ハ→ア」は子音 h の消去)

俺は → おレア → おラア (係助詞「ハ→ア」は子音 h の消去)

其れは → そレア → そラア (係助詞「ハ→ア」は子音 h の消去)

## 《 単純消去 》

[n ɸ] → [n]

「ニ」 → 「ン」

死ニた → 死ンだ (動詞・撥音便)

銭・ゼニ → ゼン (名詞)

中日 (ちゅうニち) → ちょンち (名詞)

なニ ? → なン ? (名詞) (副詞)

舟ニ乗る → 舟ン乗る (格助詞)

水見ニ行く → 水見ンえぐ (格助詞)

[n ɸ] → [n]

いぬ  
犬  
きぬ  
衣

「ヌ」 → 「ン」

→ えン (名詞)

→ きン (名詞)

[n ɸ] → [n]

「ノ」 → 「ン」

青物 → 青もン (名詞)

獣 → けだもン (名詞)

怠け者 → 怠けもン (名詞)

蟻の子 → アリンゴ (名詞) (格助詞)

竹の棒 → 竹ン棒 (名詞) (格助詞)

何処の子 → どごン子 (格助詞)

山の中 → 山ン中 (格助詞)

## 子音について

### 【 子音の種類 】

清音 aiueo と結合	濁音 aiueo と結合	半濁音 aiueo と結合	拗音 a u o と結合
k (無声子音)	g (有声子音)		ky (kwa gwa)
s (無声子音)	z (有声子音)		sy zy
t (無声子音)	d (有声子音)		ty dy
h (無声子音)	b (有声子音)		hy by
n (有声子音)			ny
m (有声子音)			my
y (有声子音)			
r (有声子音)			ry
w (有声子音)			
n [ン] (鼻音)		p (無声子音)	py

※ 「有声・無声」は声帯振動の有無を表す。

※ y w を「半母音」と呼ぶ事もある。

※ n は単独で音節を成すため「母音」に扱う事もある。

### 【 子音の変換 】

#### 《K》 → 《H》

[ko] → [ho]          「コ」 → 「ホ」

ココの衆！ → ホコ ン しょ！          (代名詞)

#### 《T》 → 《N》

[ta] → [na]      「タ」 → 「ナ」

い**タ**だく → え**ナ**だく          (動詞・拝受する)

《D》 → 《R》

[da] → [ra] 「ダ」 → 「ラ」  
ダっくり → ラックリ (副詞・擬態語)  
降りそうダ → 降りそうラ (助動詞・様態)  
然<sup>そ</sup>うダ! → 然<sup>そ</sup>うラ! (助動詞・断定)

[do] → [ro] 「ド」 → 「ロ」  
見るドも → 見るロ<sup>め</sup>も見えねえ (接続助詞・逆接)

《N》 → 《D》

[na] → [da] 「ナ」 → 「ダ」  
静かナラ聞こえる。 → 静かダラ聞こえる。 (断定の助動詞・仮定)  
雨ナラ止める。 → 雨ダラ止める。 (断定の助動詞・仮定)  
他人の物ナラ、 → 他人の物ダラ、 (断定の助動詞・仮定)

《H》 → 《W》 (語中・語尾の「ハ行」 → 「ワ行」) 共通語と同様

[ha] → [wa] 「ハ」 → 「ワ」  
草<sup>はら</sup>原 → クサワラ

[hi] → [i] 「ヒ」 → 「イ」  
懸<sup>ひ</sup>け樋 → カケイ (カケエ)

[hu] → [u] 「フ」 → 「ウ」  
屠<sup>ほふ</sup>る → ホウ<sup>る</sup>

[he] → [e] 「ヘ」 → 「エ」  
山へ → 山エ

[ho] → [o] 「ホ」 → 「オ」  
高千穂 → 高千オ

《M》 → 《B》 (語中・語尾の「マ行」 → 「バ行」)

[ma] → [ba] 「マ」 → 「バ」

狭い → セバエ

<sup>とま</sup>苦 → トバ

[mi] → [bi] 「ミ」 → 「ビ」

気味 → キビ

寂しい → サビしえ

[mu] → [bu] 「ム」 → 「ブ」

煙い → ケブエ

眠い → ネブエ

[me] → [be] 「メ」 → 「ベ」

歩め → アエベ アヨベ

冷たい → ツベテエ

[mo] → [bo] 「モ」 → 「ボ」

灯す → トボス

紐 → ヒボ

《R》 → 《D》

[ra] → [da] 「ラ」 → 「ダ」

楽(ラク)を為る → ダくを為る

埒(ラち)が開かん → ダちや あかん

[ro] → [do] 「ロ」と「ド」

六三(ロクサン) → ドクサン

緑青(ロくしょう) → ドクショウ



## 《R》 → 《N》

[ra] → [na] 「ラ」 → 「ナ」

霰 (あラれ) → あナれ

## 【 子音の添加 】

### 《 n 音 》

[a n o n] → [a n no n]

安穩 (あんオん) → あんノん

[i n e n] → [i n ne n]

因縁 (いんエん) → いんネん (方言では えんネん)

[o n a i] → [o n na i]

恩愛 (おんアい) → おんナい (方言では「おんネエ」)

[kwa n o n] → [kwa n no n]

観音 (くわんオん) → くわんノん

[ge n o u] → [ge n no u]

玄翁 (げんオう) → げんノう

[si nyō] → [si n nyō]

し (しにょう) → しンにょう

[si ri no a na] → [si ri nə a n na] → [si n na n na]

尻の穴 (しりのあな) → しんなンな (「リ」は「ン」)

[te n o u] → [te n no u]

天皇 (てんオう) → てんノう

[ha n o u] → [ha n no u]

反応 (はんオう) → はんノう

[ma n yo u] → [ma n nyo u]

万葉 (まんヨう) → まんニョう

## 《 促音 》

※ 促音 は、ローマ字表記の面からすれば [k]・[p]・[s]・[t] の子音添加である。

(促音は発声の「一時中断」であり、[ツ] と言う「音声」では無い。)

### [ k + k ]

あつきや 呆然	えつくら 幾許	おつかり 迂闊	かたっこ 片栗	けえっこ 交換
げえつけ 嘔吐	きつきな 先刻	すつけ 左様な	せっこう 周章	そつくら 酷似
だつくり 安堵	ち 小っこえ	てっこう 頂上	とつくり 徳利	にくく 憎え
のる 温っこえ	ね 根っこ	の 乗っかる	のっこ 小え	ほっこ 冷え
ひっこ 低え	ふつくら 豊頬	へつくり 鞞丸	へっこ 凹む	ぽつくり
まる 丸っこえ	みじ 短っこえ	めつける	もつくら	もっこ 畚
やっこ 柔え	よつくり 緩慢	らつくり 安堵	若つけえ	

### [ p + p ]

あつば 糞	あつぶり 水溺	えつぶり 杵	おつぼ 尾	かっぼ 合羽
かっぼ 河童	がっぼーぎ 粗暴	きっぶ 切符	くぞっば 葛葉	ゲッブ
こっぼ 木端	ゴツボー 牛蒡	さっぼ 三本	し 尻ッぺた	しっぼ 尻尾
すっべ 藁沓	せっば 切羽	そっぼ 外方	たっぼ 田圃	ち 小っぼげ
つ 突っ撥ねる	てっぺん 天辺	でっほ 嘘	とっび 鳶	とっぺつ 特別
どッポ 落とし穴	なっば 菜葉	にっほん 日本	のっべ 濃醬	はっば 葉
ばっば 婆	びっぼー 貧乏	へっべ 蛇	ほ 頬ッぺた	みそぼ 味噌ッ歯
やつば 矢張り	よえ 宵ッぴかり	よっべな 昨夜	ろっぼ 六本	わっば 輪

### [ s + s ]

えつさえ 一切	えっそえ	おつすら	こっそら	さっしやる
どっさら	のっそら	ひっそら	ほっそら	みっしら
めっそら	もっそら	わっさもっさ		

### [ t + t ]

あつた 暖こえ	あつち 彼方	あつちや 熱え	えつち 一番	おつち 聾
かつちき 標	きったね 汚え	くつちえ 満腹	ごつたく 騒動	ごつおう 御馳走

さつち  
三進  
だつてえ  
台無し  
ねつつえ  
篤実  
べつちよ  
女陰  
もつてえ  
勿体

しつた  
下  
ちつと  
僅少  
のつち  
塗師  
ほつたる  
蛭  
やつとこ  
漸く

せつたく  
洗濯  
つ　つ  
突ッ衝く  
はつたり  
虚栄  
まつちや  
町屋  
よつたり  
緩慢

せつちん  
雪隠  
てつちよう  
天頂  
ひつつり  
瘻癧  
みたくねえ  
不格好  
らつち  
埒

そつち  
其処  
なな  
七つつ  
ぶつつけ  
即刻  
むつつら

《促音便》 キ・チ・リ・イ(ヒ) → (ツ) (動詞の連用形)

行キた → 行ツた  
立チた → 立ツた  
切りた → 切ツた  
笑イ(ヒ)た → 笑ツた

※ 「フ・ク・ツ・チ・キ」で終わる漢字(入声)は促音化する。(共通語と同様)

がっ　　がっ　　げっ　　きつ　　てっ  
合体(t)　　学校(k)　　月給(k)　　吉報(p)　　敵機(k)  
がフ　　がク　　げツ　　きチ　　てキ

《促音の特殊用法》

《複合語》 結合に用いられる「ツ」は格助詞「ノ」の意。(文語文法と同様)

おつこ　こ　こ　がけ　がち　くぞ　ば  
男ツ子(k)　　女ツ子(k)　　崖ツ縁(p)　　葛ツ葉(p)  
こ　　ば　　つる　　ばし　　な　　ば　　みち　　ばた  
木ツ端(p)　　鶴ツ嘴(p)　　菜ツ葉(p)　　道ツ端(p)

《幼児語》 語の中間に「ツ」を挟んで音節を明瞭にさせる。

アツチ(他人)(t)　　コツコ(鶏)(k)　　シツコ(尿)(k)  
ダツコ(抱擁)(k)　　トツト(鳥)(t)　　ホツペ(頬)(p)

【子音の消去】

《n音の消去》

[ka n be ɳ] → [ka n be]  
勘弁(かんべん) → かんべ

[ka n ni ㄱ] → [ka n ni]  
堪忍 (かんにん) → かんニ

[ge n ka ㄱ] → [ge n ka]  
玄関 (げんかん) → げんカ (げんくわ)

[sa n bo ㄱ] → [sa n bo]  
三本 (さんぼん) → さんボ (さつぽ)

[syo n be ㄱ] → [syo n be]  
小便 (しょうべん) → しょんベ

[tya ㄱ] → [tya]  
ちゃん (接尾語・愛称) → チャ

[ha n te ㄱ] → [ha n te]  
絆纏 (はんてん) → はんテ

#### 《 その他の子音消去 》 g · h · k

[g a] → [a] 「ガ」 → 「ア」 (格助詞・連体修飾)  
おら ガ<sup>おち</sup> 家だ。 → おら ア<sup>おち</sup> 家だ。

[h a] → [a] 「ハ」 → 「ア」 (係助詞・区別 提示)  
嫌と ハ 何事だ。 → 嫌と ア<sup>えや</sup> 何事だ。 → 嫌 タ<sup>えや</sup> 何事だ。  
今度 ハ 俺だ。 → 今度 ア 俺だ。 → こんダ 俺だ。

[k i] → [i] 「キ」 → 「イ」 (イ音便) (動詞の連用形、k の消去)  
書キ た → 書イ (エ) た  
咲キ た → 咲イ (エ) た  
焚キ た → 焚イ (エ) た

泣 <b>キ</b> た	→	泣 <b>イ</b> (エ) た
吐 <b>キ</b> た	→	吐 <b>イ</b> (エ) た
巻 <b>キ</b> た	→	巻 <b>イ</b> (エ) た
焼 <b>キ</b> た	→	焼 <b>イ</b> (エ) た
湧 <b>キ</b> た	→	湧 <b>イ</b> (エ) た

※ 魚沼方言では「エ音便」とも言うべきか。

<b>[g i]</b> → <b>[i]</b>	<b>「ギ」</b> → <b>「イ」</b> (イ音便) (動詞の連用形、 <b>g</b> の消去)
漕 <b>ギ</b> た	→ 漕 <b>イ</b> (エ) だ
騒 <b>ギ</b> た	→ 騒 <b>イ</b> (エ) だ
削 <b>ギ</b> た	→ 削 <b>イ</b> (エ) だ
研 <b>ギ</b> た	→ 研 <b>イ</b> (エ) だ
脱 <b>ギ</b> た	→ 脱 <b>イ</b> (エ) だ
剥 <b>ギ</b> た	→ 剥 <b>イ</b> (エ) だ
挽 <b>ギ</b> た	→ 挽 <b>イ</b> (エ) だ

<b>[k u]</b> → <b>[u]</b>	<b>「ク」</b> → <b>「ウ」</b> (ウ音便) (形容詞の連用形、 <b>k</b> の消去)
暑 <b>ク</b> なる	→ 暑 <b>ウ</b> なる
嬉し <b>ク</b> なる	→ 嬉し <b>ウ</b> なる
厳し <b>ク</b> なる	→ 厳し <b>ウ</b> なる
苦し <b>ク</b> なる	→ 苦し <b>ウ</b> なる
煙 <b>ク</b> なる	→ 煙 <b>ウ</b> なる
寂し <b>ク</b> なる	→ 寂し <b>ウ</b> なる
切な <b>ク</b> なる	→ 切の <b>ウ</b> なる
高 <b>ク</b> なる	→ 高 <b>ウ</b> なる
近 <b>ク</b> なる	→ 近 <b>ウ</b> なる

<b>[ɾ e]</b> → <b>[e]</b>	<b>「レ」</b> → <b>「エ」</b> (受身の助動詞・連用形、 <b>ɾ</b> の消去)
褒めら <b>レ</b> る	→ 褒めら <b>エ</b> る
殴ら <b>レ</b> る	→ 殴ら <b>エ</b> る

【 撥音の多用 】 「ン・ン」

《幼児語》 撥音を加えてリズム感・親近感を持たせる。

アンボ (餅)	アンヨ (足)	ウンチ (糞)
オンモ (庭)	オンブ (背負)	カンコ (下駄)
コンコ (咳)	タンタ (足袋)	チンコ (指似)
ネンネ (睡眠)	ポンポ (腹)	マンコ (女陰)
マンマ (御飯)	ミンミ (耳)	メンメ (虫)
カン カン (缶ガラ)	コン コン (咳)	タン タン (足袋)
チン チン (指似)	テン テン (頭)	ヒン ヒン (馬)

《擬態》

ガラ <span>ン</span> ガラ <span>ン</span>	ギラ <span>ン</span> ギラ <span>ン</span>	グラ <span>ン</span> グラ <span>ン</span>
ゴロ <span>ン</span> ゴロ <span>ン</span>	ザラ <span>ン</span> ザラ <span>ン</span>	ジタ <span>ン</span> ジタ <span>ン</span>
ズタ <span>ン</span> ズタ <span>ン</span>	ゾロ <span>ン</span> ゾロ <span>ン</span>	ダラ <span>ン</span> ダラ <span>ン</span>
チラ <span>ン</span> チラ <span>ン</span>	ツル <span>ン</span> ツル <span>ン</span>	テラ <span>ン</span> テラ <span>ン</span>
トロ <span>ン</span> トロ <span>ン</span>	ノラ <span>ン</span> ノラ <span>ン</span>	フラ <span>ン</span> フラ <span>ン</span>

《擬音》

カタ <span>ン</span>	カチ <span>ン</span>	カツ <span>ン</span>
コツ <span>ン</span>	コト <span>ン</span>	スト <span>ン</span>
チ <span>ン</span>	ト <span>ン</span>	パ <span>ン</span>
ピ <span>ン</span>	ポ <span>ン</span>	リ <span>ン</span>

《他音からの変換》

「ニ」→「ン」 (名詞) ([ni] から [i] の母音消去と考えられる。)

兄 (あニ) さ	→ あ <span>ン</span> さ
銭 (ぜニ)	→ ぜ <span>ン</span>
何 (なニ?)	→ な <span>ン</span> ?

「ニ」→「ン」 (格助詞) ([ni] から [i] の母音消去と考えられる。)

草刈りニ行く	→ 草刈り <span>ン</span> 行く
手ニ取る	→ 手 <span>ン</span> 取る

舟ニ乗る → 舟ン乗る  
水見ニ廻る → 水見ン廻る  
山ニなあれ → 山ンなあれ

「ニ」→「ン」 (動詞・撥音便) ([ni] から [i] の母音消去と考えられる。)  
死ニた → 死ンだ

「ヌ」→「ン」 (助動詞・打消) ([nu] から [u] の母音消去と考えられる。)  
書かヌ → 書かン  
喰わヌ → 喰わン  
読まヌ → 読まン

「ノ」→「ン」 (格助詞・連体) ([no] から [o] の母音消去と考えられる。)  
あノ衆 → あンしょ  
蟻ノ子 → 蟻ン子  
川ノ中 → 川ン中  
此処ノ所 → ほこン所  
そノ人 → そン人  
手ノ毬 → 手<sup>まる</sup>ン毬  
目ノ玉 → 目ン玉

「ノ」→「ン」 (語の一部) ([no] から [o] の母音消去と考えられる。)  
…物 → 着もン 食いもン 飲みもン 乗りもン  
…者 → あふれもン 馬鹿もン 利巧もン  
…です モノ! → …だ モン!

「ビ」→「ン」 (動詞・撥音便)  
転ビた → 転ンだ  
叫ビた → 叫ンだ  
飛ビた → 飛ンだ  
並ビた → 並ンだ

「ミ」→「ン」 (名詞の一部) ([mi] から [i] の母音消去とも考えられる。)

かミさま → かんさま (神様)  
かミざし → かんざし (髪挿し・簪)  
かミそり → かんそり (剃刀)  
かミなり → かんなり (神鳴り・雷)  
かミぶくろ → かんぶくろ (紙袋)  
のミはき → のんばき (蚤掃き)  
ひミぞ → ひんぞ (干溝・地名)

「ミ」→「ン」 (動詞・撥音便) ([mi] から [i] の母音消去とも考えられる。)

<sup>はな</sup>涙をかミた → <sup>はな</sup>涙をかンだ  
<sup>しよ</sup>歯に浸ミた → <sup>しよ</sup>歯に浸ンだ  
<sup>へっぺ</sup>蛇を踏ミた → <sup>へっぺ</sup>蛇を踏ンだ  
<sup>べろ</sup>舌を嚙ミた → <sup>べろ</sup>舌を嚙ンだ  
本を読ミた → 本を読ンだ  
水を汲ミた → 水を汲ンだ  
湯を飲ミた → 湯を飲ンだ

「ラ」→「ン」 (動詞・助動詞の一部)

判ラない → 判ンねえ  
眠ってはなラない。 → 眠っちゃなンねえ  
行かっしやラない。 → 行がっしやンねえ  
書きなさラない。 → 書きなさンねえ

「リ」→「ン」 (ラ行・上一段動詞の一部)

<sup>お</sup>降リる → <sup>お</sup>降ンる  
借リる → 借ンる  
<sup>こ</sup>懲リる → <sup>こ</sup>懲ンる  
足リる → 足ンる

「リ」→「ン」 (名詞・副詞の一部)



し**リ**の穴 → し**ン**なんな  
 し**リ**拭い → し**ン**のごえ  
 ガ**ラリ**とした → が**ら**ンとした  
 ち**らリ**ち**らリ** → ち**ら**ンち**ら**ン  
 の**らリ**く**らリ** → の**ら**ンく**ら**ン  
 ぶ**らリ**ぶ**らリ** → ぶ**ら**ンぶ**ら**ン

「**ル**」→「**ン**」 (「**る**」で終わる動詞の終止形が禁止の「な」に接続する場合)

上**ル** な → 上<sup>あが</sup>ンな  
 居**ル** な → 居<sup>え</sup>ンな  
 売**ル** な → 売<sup>お</sup>ンな  
 折**ル** な → 折ンな (おしよんな)  
 苺**ル** な → 苺ンな  
 切**ル** な → 切ンな  
 来**ル** な → 来ンな  
 蹴**ル** な → 蹴ンな  
 凝**ル** な → 凝<sup>こ</sup>ンな  
 去**ル** な → 去ンな  
 為**ル** な → 為<sup>し</sup>ンな  
 競**ル** な → 競<sup>せ</sup>ンな  
 反**ル** な → 反<sup>そ</sup>ンな

「**ル**」→「**ン**」 (用言の語尾「**ル**」が助動詞「べえ」「めえ」に接続する場合)

有 **ル** べえ・めえ → 有 **ン**べえ・めえ  
 高**か**ル べえ・めえ → 高**か**ンべえ・めえ  
 無**か**ル べえ・めえ → 無**か**ンべえ・めえ  
 憎**か**ル べえ・めえ → 憎**か**ンべえ・めえ  
 愛<sup>めご</sup>**か**ル べえ・めえ → 愛<sup>めご</sup>**か**ンべえ・めえ  
 安**か**ル べえ・めえ → 安**か**ンべえ・めえ  
 良**か**ル べえ・めえ → 良**か**ンべえ・めえ  
 悪**か**ル べえ・めえ → 悪**か**ンべえ・めえ

「レ」→「ン」 (ラ行下一段動詞・語尾「れ」の変換)

売**レ**ない → 売**ン**ねえ (未然形)  
枯**レ**た → 枯**ン**た (連用形)  
切**レル** → 切**ンル** (終止形)  
暮**レル**時 → 暮**ンル**時 (連体形)  
擦**レレ**ば → 擦**ンレ**ば (仮定形)  
反**レロ・レレ!** → 反**ンレ!** (命令形)

「レ」→「ン」 (受身・可能の助動詞「れる」「られる」の変換)

泣か**レ**ない → 泣か**ン**ねえ (未然形)  
煮ら**レ**た → 煮ら**ン**た (連用形)  
抜か**レル** → 抜か**ンル** (終止形)  
寝ら**レル**夜 → 寝ら**ンル**夜 (連体形)  
伸さ**レレ**ば → 伸さ**ンレ**ば (仮定形)  
運ば**レロ・レレ!** → 運ば**ンレ!** (命令形)

※ (Ⅲ部 助動詞参照)

居 **ラレ**ない → 居**ラン**ねえ (未然形)  
射 **ラレ**た → 射**ラン**た (連用形)  
起き **ラレル** → 起き**ランル** (終止形)  
着 **ラレル**服 → 着**ランル**服 (連体形)  
煮 **ラレレ**ば → 煮**ランレ**ば (仮定形)  
見 **ラレレ!** → 見**ランレ!** (命令形)

※ (Ⅲ部 助動詞参照)

【濁音の多用】 無声子音 → 有声子音

### 《 単純変化 》

[k] → [g]

蛙 (カエル) → ゲエル  
蟹 (カニ) → ガニ

行く (エク) → え ク  
 何処 (ドコ) → ど コ ?

[t] → [d]

時 (トキ) → ドキ  
 所 (トコ) → ドご  
 蜻蛉 (トンボ) → ドンボ

### 《 連濁現象 》

#### 「複合語」

有り難<sup>がて</sup>え  
 後<sup>おしろだて</sup>楯<sup>たて</sup>  
 恋<sup>こえごころ</sup>心

えたばり  
 板<sup>いた</sup>張<sup>はり</sup>  
 かみぎえく  
 紙<sup>かみ</sup>細<sup>ぎ</sup>工<sup>く</sup>  
 さるちえ  
 猿<sup>さる</sup>知<sup>ち</sup>恵<sup>え</sup>

え ぐち  
 入<sup>い</sup>り口<sup>ぐち</sup>  
 けえがら  
 貝<sup>けい</sup>殻<sup>がら</sup>  
 したがき  
 下<sup>した</sup>書<sup>がき</sup>

#### 「ン」音の次。

がんぎ  
 雁<sup>がん</sup>木<sup>ぎ</sup>  
 こんじよう  
 根<sup>こん</sup>性<sup>じよう</sup>  
 なんぎよう  
 難<sup>なん</sup>行<sup>ぎよう</sup>

ぐんばい  
 軍<sup>ぐん</sup>配<sup>ばい</sup>  
 しんちゆう  
 心<sup>しん</sup>中<sup>ちゆう</sup>  
 にんげん  
 人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>

げんぶく  
 元<sup>げん</sup>服<sup>ぶく</sup>  
 たんじよう  
 誕<sup>たん</sup>生<sup>じよう</sup>  
 へんげ  
 変<sup>へん</sup>化<sup>げ</sup>

#### 「ウ」音の次。

しやうじ  
 生<sup>しやう</sup>死<sup>じ</sup>  
 つうぶん  
 通<sup>つう</sup>分<sup>ぶん</sup>

しやうだえ  
 招<sup>しやう</sup>待<sup>だえ</sup>  
 とうぎえ  
 東<sup>とう</sup>西<sup>ぎえ</sup>

そうじよう  
 僧<sup>そう</sup>正<sup>じよう</sup>  
 しようだえ  
 容<sup>よう</sup>態<sup>だえ</sup>

#### 「疊語」

かねがね  
 兼<sup>かね</sup>々<sup>がね</sup>  
 こご  
 懲<sup>こ</sup>り懲<sup>ご</sup>り  
 それぞれ  
 夫<sup>それ</sup>々<sup>ぞれ</sup>  
 つねづね  
 常<sup>つね</sup>々<sup>づね</sup>  
 はやばや  
 早<sup>はや</sup>々<sup>ばや</sup>  
 ほうほう  
 方<sup>ほう</sup>々<sup>ほう</sup>

きぬぎぬ  
 衣<sup>きぬ</sup>々<sup>ぎぬ</sup>  
 さまざま  
 様<sup>さま</sup>々<sup>ま</sup>  
 たえだえ  
 絶<sup>たえ</sup>々<sup>だえ</sup>  
 ところどころ  
 所<sup>ところ</sup>々<sup>どころ</sup>  
 ひび  
 日<sup>ひ</sup>々<sup>び</sup>

くろぐる  
 黒<sup>くろ</sup>々<sup>ぐる</sup>  
 しみじみ  
 沁<sup>しみ</sup>々<sup>じみ</sup>  
 ちち  
 千<sup>ち</sup>々<sup>ち</sup>  
 とりどり  
 取<sup>とり</sup>々<sup>どり</sup>  
 ふかふか  
 深<sup>ふか</sup>々<sup>ふか</sup>

【濁音の清音化】 ※ 濁音の前の撥音「ン」が促音「ツ」に変わる。

[g] → [k]	「ガ」行→「カ」行
あん <b>ゲ</b> エ の事	→ アッ <b>ケ</b> エ の事
こん <b>ゲ</b> エ の事	→ コッ <b>ケ</b> エ の事
そん <b>ゲ</b> エ の事	→ ソッ <b>ケ</b> エ の事
どん <b>ゲ</b> エ の事	→ ドッ <b>ケ</b> エ の事

[d] → [t]	「ダ」行→「タ」行
禪・フンドシ	→ フッ トシ
嫌 <sup>や</sup> なこ <b>ン</b> <b>ダ</b>	→ 嫌 <sup>や</sup> なコッ <b>タ</b> (断定・助動詞)

【濁音の半濁音化】 ※ 濁音の前の撥音「ン」が促音「ツ」に変わる。

[b] → [p]	「バ」行→「パ」行
ばん <b>バ</b> (婆)	→ ばっ <b>パ</b>
とん <b>ビ</b> (鳶)	→ とっ <b>ピ</b>
沢ん <b>ブ</b> ち (淵)	→ さわっ <b>プ</b> ち
しょん <b>べ</b> ん (小便)	→ しょっ <b>ぺ</b> ん
たん <b>ボ</b> (田圃)	→ たっ <b>ポ</b>

【半濁音の濁音化】

[p] → [b]	「パ」行 → 「バ」行
スカ <b>ン</b> <b>ポ</b> (虎杖)	→ スッカ <b>ン</b> <b>ボ</b>
チ <b>ン</b> <b>ポ</b> (陰莖)	→ チョ <b>ン</b> <b>ボ</b>

【 拗音の多用 】

《拗音の種類》

清音	濁音	半濁音
キヤ キユ キョ	ギヤ ギユ ギョ	
シヤ シュ ショ	ジヤ ジュ ジョ	
チャ チュ チョ	(ヂヤ ズユ ズョ)	
ニヤ ニユ ニョ		
ヒヤ ヒユ ヒョ	ビヤ ビユ ビョ	ピヤ ピユ ピョ
ミヤ ミユ ミョ		
リヤ リユ リョ		
クワ	グワ	
クエ	グエ	

方言音  
方言音

《名詞》 ※ 用例は一部。

- 兄やん → あん**ニヤ** (n音の添加)
- 会議 → **クワ**工議・**クエ**工議
- 外国 → **グワ**工国・**グエ**工国
- 患者 → **クワ**ン者
- 頑固 → **グワ**ン固
- 左官 → **シャ**グワん
- 三味線 → **シャ**味線
- 母 → **チャ**チャ
- 鳩 → **ニョ**

《動詞》 ※ 用例は一部。

- 啞える → **クエ**る
- 撥る → **コ**チョばす
- 背<sup>せ</sup>負<sup>お</sup>う → **ショ**う (そう)
- 捨てる → **ブ**チャる **ベ**シヤる

《形容詞》 ※ 用例は一部。

暑い → あつ**チャ**え  
汚い → き**チャ**ねえ  
小さい → ちつ**チャ**え  
冷たい → **シャ**っこえ

《副詞》 ※ 用例は一部。

ご**タ** ご**タ** → ご**チャ** ご**チャ**  
め**タ** く**タ** → め**チャ** く**チャ**

《語の結合に依る拗音化》

☆ 「名詞」の一部と係助詞「ハ」。

あ**レ** **ハ** → あ **リヤア** (名詞の一部+ハ)  
こ**レ** **ハ** → こ **リヤア** (名詞の一部+ハ)  
そ**レ** **ハ** → そ **リヤア** (名詞の一部+ハ)  
ど**レ** **ハ** → ど **リヤア** (名詞の一部+ハ)  
果**テ** **ハ** → **は** **チャア** (接続詞) (名詞の一部+ハ)  
道(み**チ**) **ハ** → **み** **チャア** (名詞の一部+ハ)

☆ 「動詞」の連用形語尾と係助詞「ハ」。

書**キ** **ハ** しねえ。 → 書 **キヤア** しねえ。 (カ五)  
刺**シ** **ハ** しねえ。 → 刺 **シャア** しねえ。 (サ五)  
立**チ** **ハ** しねえ。 → 立 **チャア** しねえ。 (タ五)  
死**ニ** **ハ** しねえ。 → 死 **ニヤア** しねえ。 (ナ五)  
吐**キ** **ハ** しねえ。 → 吐 **キヤア** しねえ。 (ハ五)  
蒔**キ** **ハ** しねえ。 → 蒔 **キヤア** しねえ。 (マ五)  
焼**キ** **ハ** しねえ。 → 焼 **キヤア** しねえ。 (ヤ五)  
割**レ** **ハ** しねえ。 → 割 **リヤア** しねえ。 (ラ五)

☆ 「動詞」の仮定形語尾と接続助詞「バ」。

書**ケ** **バ**、 → 書 **キヤア** 判る。 (カ五)

来 <sup>く</sup> レバ、	→	来 <sup>く</sup> リヤア、	(カ変)
探セバ	→	探 <sup>た</sup> シヤアめっかる。	(サ五)
為 <sup>し</sup> レバ、	→	為 <sup>し</sup> リヤア、	(サ変)

☆ 「形容詞」の假定形語尾と接続助詞「バ」。

無 <sup>な</sup> けレバ、	→	無 <sup>な</sup> けリヤア、	(形容詞)
苦 <sup>に</sup> げレバ、	→	苦 <sup>に</sup> げリヤア、	(形容詞)

☆ 「助動詞」の假定形語尾と接続助詞「バ」。

子供 <sup>こ</sup> なラバ、	→	子供 <sup>こ</sup> なリヤア、	(助動詞)
静 <sup>しず</sup> かなラバ、	→	静 <sup>しず</sup> かなリヤア、	(助動詞)
為 <sup>せ</sup> ネバ、	→	為 <sup>せ</sup> ニヤア、	(助動詞)

☆ 「助詞」と係助詞「ハ」。

書 <sup>か</sup> いテハ消す。	→	書 <sup>か</sup> えチャア消す。	(接続助詞テ+ハ)
聞 <sup>き</sup> いテハ泣く。	→	聞 <sup>き</sup> えチャア泣く。	(接続助詞テ+ハ)
見 <sup>み</sup> テハ笑う。	→	見 <sup>み</sup> チャア笑う。	(接続助詞テ+ハ)
揉 <sup>も</sup> んデハ解す。	→	揉 <sup>も</sup> んジャア解す。	(接続助詞テ+ハ)
地獄 <sup>じごく</sup> デハ閻魔。	→	地獄 <sup>じごく</sup> ジャア閻魔。	(格助詞デ+ハ)
お前 <sup>おまえ</sup> ニハ無理だ。	→	お前 <sup>おまえ</sup> ニヤア無理だ。	(格助詞ニ+ハ)
お盆 <sup>おぼん</sup> ニハ踊る。	→	お盆 <sup>おぼん</sup> ニヤア踊る。	(格助詞ニ+ハ)

☆ 格助詞「ト」と動詞「イウ」。

お前<sup>おまえ</sup>トイウ奴は、→ お前<sup>おまえ</sup>チュウ奴は、

### 《感動詞》

あれっ！	→	アリヤ！	アツキヤサ！
否！	→	ンニヤ！	
然うだトモ！	→	ホウツチャレ！	
では又！	→	ハチャマ！	

## 《 参考 》 北国の方言

宮沢賢治『春と修羅』より

…… 岩手県・花巻地方 ……

〈あめゆじゅ とてちてけんじゃ。〉

〈おらあ おらで したりで えぐも。〉

〈うまれでくるたて こんどは こたに  
わりやのごとばかりで くるしまなあよに  
うまれでくる。〉

〈ああい。さっぱりした。まるで林の  
ながさ 来たよだ。〉

〈おらあ おかないふうしてらべ。〉

〈うんにゃ ずいぶん立派だじゃい、  
きょうは ほんとに立派だじゃい。〉

〈それでも からだ くさえがべ?〉

〈うんにゃ いっこう。〉

〈おらあ ど死んでもいいはんて、あの  
林のながさ行くだ。うごいで 熱は  
高くなっても、あの林のながでたら、  
ほんとに死んでも いいはんて。〉

…… 新潟県・魚沼地方 ……

〈エキ雨 取って来てくらっしゃれ。〉

〈おらあ おらで 独りで逝えぐぜえノ。〉

〈生まれて来るだつて こんだあ こっけに  
おらんごとばっかで苦しまねえよーに  
生まれて来る。〉

〈ああええ。さっぱりした。まるで林の  
中へでも来たよーだ。〉

〈おらあ <sup>おつか</sup> 怖 <sup>ふり</sup> ねえ容貌してるがんだろ?〉

〈んーにゃ えっそえ めごげだざえ、  
きょうは ふんとに めごげだざえ。〉

〈そりでも からだあ 臭えがんだろ?〉

〈んーにゃ ちつとも。〉

〈おらあ くたばっても ええすけえで、あん  
林ン中へ行くんだあ。動えて 熱は  
高くなっても、あん林ン中でたら、  
ふんとに死んでも ええすけえで。〉



## II 自立語の部

名詞	52
【人間関係】	52
【人性】	53
【人体・生理】	56
【病気・障害】	58
【衣服】	60
【食物】	61
【住居・設備】	63
【雨具・履物】	64
【日用雑貨】	65
【趣味・嗜好】	67
【情緒】	67
【社交・儀礼】	68
【金銭・貧富】	69
【職業・身分】	69
【時間】	70
【分量】	72
【方向・場所】	72
【様態・形態】	73
【通過儀礼】	75
【慶弔催事】	75
【年中行事】	76
【土俗・信仰】	77
【禁忌・崇り】	81
【農作業】	82
【農作物】	83
【農具・工具】	84
【養蚕関係】	86
【山仕事】	86

【 冬仕事 】 .....	87
《 藁細工・菅細工 》 .....	87
《 竹細工 》 .....	87
《 雪対策・雪利用 》 .....	88
《 雪具 》 .....	89
【 女仕事 】 .....	89
《 屋外 》 .....	89
《 屋内 》 .....	89
【 作業の工夫・形態 】 .....	90
【 作業の不如意 】 .....	91
【 資材・用材 】 .....	91
《 採取 》 .....	91
《 加工 》 .....	92
【 漁法・漁具 】 .....	92
【 鳥 】 .....	93
【 獣 】 .....	94
【 虫 】 .....	94
【 魚 】 .....	96
【 山野草・茸 】 .....	97
【 樹木・果実 】 .....	100
【 自然現象 】 .....	101
《 気象関係 》 .....	101
《 地形関係 》 .....	101
《 その他 》 .....	102
【 子供社会 】 .....	103
《 遊戯 》 .....	103
《 喧嘩 》 .....	105
《 未熟 》 .....	106
《 叱責 》 .....	106
《 幼児語 》 .....	108
動詞 .....	108
【 動作・存在・思考 】 .....	109

形容詞	119
【 性質・形状・感覚・感情 】	119
【 色彩・明暗 】	122
副詞	123
【 状態・程度 】	123
【 呼応 】	125
【 擬態語 】	126
【 擬音語 】	127
【 擬声語 】	128
連体詞	129
【 事物指示 】	129
【 様態 】	130
【 気配 】	130
【 種類 】	130
【 程度 】	131
接続詞	131
【 対等の関係 】	131
【 条件・順接 】	132
【 条件・逆接 】	132
感動詞	133
【 呼び掛け・応答・挨拶・その他 】	133
☆ [参考] 慣用の挨拶語	134

## 名詞

※ 名詞は、固有・普通・抽象・物質・時間・場所・数量などにも分類されるが、方言語法では特に関係がない。

### 【人間関係】

アッチ <sup>〇</sup> サ	他人様。他所様。(サ は接尾語「さん」)
アネ <sup>〇</sup> サ	姉様、新婦。(サ は接尾語「さん」)
アバ <sup>〇</sup> サ	叔母さん。(サ は接尾語「さん」)
アン <sup>〇</sup> サ	兄様。(サ は接尾語「さん」)
アンニ <sup>〇</sup> ヤ	兄やん。(ン の添加) (ヤ は接尾語「やん」)
アンネ <sup>〇</sup>	姉。(ン の添加)
オカッ <sup>〇</sup> ツアマ	中年の既婚婦人。(ツアマ は接尾語「さま」)
オジ <sup>〇</sup>	弟・次男以下を指す。
オジ <sup>〇</sup> ゴッポウ	オジ牛蒡。[複合語] (弟の蔑称)
オッ <sup>〇</sup> カ	おっ母。(オ は接頭語)
オッ <sup>〇</sup> サ	弟様。(サ は接尾語「さん」)
オッ <sup>〇</sup> チャ	弟さん。(チャ は接尾語「ちゃん」)
オ <sup>〇</sup> トー	お父 <sup>とう</sup> 。(オ は接頭語)
オ <sup>〇</sup> ト ッコ	末っ子。
オ <sup>〇</sup> トッ ツア	お父 <sup>とう</sup> 様。(オ は接頭語) (ツア は接尾語「さま」)
オ <sup>〇</sup> トミ ッコ	上の子が乳離れしない内に生まれた子。(年子)
オ <sup>〇</sup> バ	妹・次女以下を指す。(おもに次女)
オ <sup>〇</sup> メエ	御前、本家。
ガキ	子供の蔑称。(餓鬼)
カッカ <sup>〇</sup> ア	母。(嬬とは別、子供が母を呼ぶ時の称。)
ジ <sup>〇</sup> サ	爺さん。(サ は接尾語だが敬意は無い。)
ジジ	爺。 <b>ジィ ジージゴ ジンジ</b>
ショート	姑、舅。(「しゅ」は「ショ」と発音される。)
シン タク	分家。(新宅)
シン ロエ	親類。(「るい」は「ロエ」と発音される。)
チャ <sup>〇</sup> チャ	母。(接尾語「ちゃん ちゃん」の短縮形。)

ツァ ツァ	父。(接尾語「ツァマ ツァマ」の短縮形。)
ツァマ	父。(接尾語「ツァマ・様」から転成。)
トシゴ	一歳違いの兄弟。
トト	父。
ネエ	姉。
ネエ ヤ	姉。(ヤ は接尾語「やん」)
ネンネ	姉。(世間ずれしていない女性)
バァ	婆。(親近感を含む。)
バ サ	婆様。(敬意は消滅して不快感。「鬼バサ」)
バツパ	婆。(親近感を含む。)
ババ	婆。(不快感・「鬼婆」、巨大感・「婆カジッカ」)
バンバ	婆。(親近感を含む。)
ヒトラ モン	独身者。[複合語] (「リ」→「ラ」)
ポポ ッコ	少女。(世間知らずの純情娘)
ミ オチ	身内。(「ウ」→「オ」)
メン	娘・姫。(軽い敬意を含む。)
モコ	婿。(「ム」→「モ」)
モスメ	娘。(「ム」→「モ」)
ヤ オチ	家内、家族。(「ウ」→「オ」)
ヤゴメ	寡夫、寡婦。
ヤシャゴ	曾孫より更に一代下。
ヨ モタ ズ	独身者。[複合語] (「ヨ」は「男女間」の意。)

## 【 人性 】

アフレ モン	暴れ者。
アマサレ モン	卑猥な事を好む者。(「余され」の意か?)
アマ ン ジャク	反抗的な拗ね者。天邪鬼。
エソ ナシ	愛想無し。(a i → e)
エジ クサレ	意地悪、腐った根性。
エジク ナシ	意地悪、弱い者苛め。
エジクレ モン	ひねくれ者。

エジケ モン	拗ね者。
エッチョウ メエ	一人前。成人並み。
エワツ クソ	弱虫。(クソ は接尾語)
エンゴウ モン	因業者、融通のきかない者。
オオ マクレエ	大めし食らい、大食漢。
オキョウ ツキ	調子に乗って騒ぎ立てる者。
オス コキ	嘘つき。 <b>デッポコキ・ドスコキ</b> (コキは「…する者」)
オンナツ タレ	女性に甘える男性。(タレ は「…する者」)
ガシン	我辛・辛抱強い性格。 <b>ガシン タレ</b>
カタッ パリ	意地っ張り。
ガッポー ギ	手荒な乱暴者。(ギ は気性)
キエ タ フウ	生意気、偉ぶり。[複合語] (聞いた風)
キモ ヤキ	肝焼き。腹立ちやすい人。
キリ ナシ	欲求の際限なし。
キンマ	神経質で怒りっぽい性質。 <b>キンマツ カス</b>
クエツ タレ	食いしん坊。(タレ は「…する者」)
ケッチ ポ	吝嗇家。(ポ は坊)
ゴウツ タレ	厚かましい人。(タレ は「……する者」)
ゴウツク バリ	強情張り。(バリ は「……する者」)
コスツ タレ	狡猾者。(タレ は「……する者」)
コッチョウ ワル	根性悪。(「…… <b>ヨシ</b> 」と対)
コッペツ	生意気。(主に若年者)
コマ シャクレ	出しゃばり。(主に年少者の態度)(コマ は接頭語)
サベツ チョウ	お喋り。
ジギ ナシ	辞儀なし、遠慮なし、不作法。
ジクネ モン	剽軽者。
シッタカ ブリ	智者振り。(ブリ は「…らしく振る舞う者」)
シャレ コキ	オシャレ好き。(コキは「……する者」)
ショーシ ガリ	恥ずかしがり。(ガリは接尾語、「…する者」)
ショーツ タレ	不潔者。(タレ は「……する者」)
ショード ナシ	同じ過ちを繰り返す困り者。
ジョッペエ	出しゃばり。

シリ ヤケ	尻灼け、飽きっぽい性質。
シンケ ヤミ	心配性、神経病み。
ズルケ モン	怠け者。
ゼエゴウ モン	在郷者、田舎者。
セッコウ カキ	せっかち。(カキは「…する者」)
ゾク ナシ	根性なし、臆病者。 <b>ドク ナシ</b>
ソッケ ナシ	不愛想な人。
タケツ チョウ	腹立ちやすい性質。(タケ は「猛」か?)
ダテ コキ	伊達者、オシヤレ。(コキは「…する者」)
デッポ コキ	嘘つき。 <b>オス コキ</b> <b>ドス コキ</b>
テメエ ガッテ	自分勝手。
ナガ ッチリ	長居をする遠慮無し。(便秘からの派生)
ナキッ タレ	泣き虫、泣き上戸。(タレ は「…する者」)
ノメシ コキ	怠け者。(コキ は「……する者」)
ハツ メエ	発明、利発、伶俐者。
ヒト モジリ	人見知り。
フウ ノケ	腑抜け。
プキッ チョ	不器用。
フラ ヤロー	風来坊、馬鹿者。
ヘン ナシ	変人、変わり者。(「気品無し」か?)
マメ	実直、誠実。
メエスツ タレ	おべっか野郎。(タレ は「…する者」)
モウグレ	耄碌 (モウロク)。ずぼら人間。
モウゾツ カキ	妄想狂。(カキ は「……する者」)
ヤクザ モン	役立たず、体力の衰退者。
ヤッケェ モン	厄介者、邪魔者。
ヤシン ボ	欲しがり屋。(ボ は「坊」)
ヨーズツ パリ	夜更かし癖の者。
ヨッ カキ	欲張り、欲深。(カキ は「……する者」)
ロクデ ナシ	碌で無し、役立たず。

【 人体・生理 】

ア <sup>○</sup> クド	踵 (カカト)。
アッパ	大便、糞。
アメ アタマ	禿げ頭。「 <b>アメ</b> る」は「禿げる」
ア <sup>○</sup> ンヨ	足、歩行。(幼児語)
エバリ	夜尿、寝小便。(「 <b>ヨーバリ</b> 」とも言う。)
エビ	指。 <b>ヨビ</b> (「エ」「ユ」「ヨ」は通韻。)
オダ	肌。
オデ	腕。(語頭の「ウ」は「オ」になる。) <b>オデメエ</b>
オチ マタ	内股。(語頭の「ウ」は「オ」になる。)
オネ	胸。(ム → オ)
オネ エタ	胸板。(ム → オ)
クソ ッカワ	皮膚の薄皮。(クソ は接頭語)
クチ ベロ	唇。
クビ ッタマ	首。 <b>クビン タマ</b>
クルミ	踝。(クルブシ)
ケツ	尻。 <b>シッ ケツ シッ ペタ</b>
コマ ブテエ	こめかみ。(「フテエ」は額のこと)
コ <sup>○</sup> ムラ	脹ら脛。
サカリ	発情期。働き盛り。壮年。
サ <sup>○</sup> ネ	陰核、女陰。
シッ ケツ	尻穴、臀部。
シ <sup>○</sup> ッコ	小便。(幼児語)
シッ ペタ	尻の膨らみ・臀部。(「ペタ」は接尾語)
シト	尿。
シヨン ベ	小便、尿。
シ <sup>○</sup> リゴ	肛門。
シン ナン ナ	肛門。(si <u>ri</u> n̄ a na → si <u>n</u> na [n] na)
セ	息、呼吸。(「セ」が切れる。→ 息遣いが激しい。)
チョンボ	男性器。 <b>チョンボッコ チョンチョ</b>
ツバキ	唾、唾液。
ツラ	顔、面。



デブツ チョ	太った体、肥満体。(チョ は接尾語。)
ドウシン アタマ	坊主頭、道心頭。[複合語]
ドウ バナ	青漬。(ド は罵倒の意を持つ接頭語か?)
ドッピン ダマ	睾丸。[複合語] (土瓶状のキンタマ)
ドテ ッパラ	土手っ腹、中央腹部。(ドテ は接頭語)
ナド	涙。
ノド ダンゴ	のど仏。
ノド ベロ	懸壺垂。
ハチ ブテエ	鉢額。(おでこの突出した形)
ハッ クソ	歯垢。
バリ	小便、尿。
ビーノジ	小児の陰茎。(カワニナ から連想)
ヒカリ ゴエ	小児や女性特有の甲高い声。
ヒザッ カブ	膝小僧。
ヒッ カガミ	膝小僧の裏側の凹み。
ヒラ アシ	足の甲。
フトツ チョ	デブ。(チョ は様態の接尾語) <b>フトツポ</b>
フテッ クボ	額。 <b>フテッコブ</b> <b>フテツツラ</b>
フル マラ	素っ裸、全裸。(摩羅を振る状態。)
ヘックリ	睾丸、ふぐり。
ベッチョ	女性器。 <b>へへ</b> <b>べべ</b> <b>ポポ</b> (江戸小咄にも登場。)
ベツツオ	泣き出しそうな顔。(ベソを掻く)
ヘノコ	成人男子の性器。(江戸小咄にも登場。)
ペロ	舌。
ホゾ	臍。
ホソツ チョ	痩せっポ。(チョ は様態の接尾語) <b>ホソツポ</b>
ホッ ペタ	頬。 <b>ホッペ</b> (ペタ は接尾語)
ボンノ クボ	首後部の凹み。
ボンポ	腹。(幼児語)
マキメ	つむじ。
マミヤ	眉毛。
マメ	達者、健康。

マラ	摩羅。(男根、共通語)
マンジョ	女性器。 <b>マンジョッコ</b> (少女)
ミンミ	耳。(撥音の添加、タンタ・ボンボ・マンマの類)
ムコウツ ツネ	脛の前側。(ス → ツ)
メンダク ダマ	目玉。
モモッ タマ	太股。
ヨーズ	涎。
ヨー バリ	夜尿、寝小便。

### 【 病気・傷害 】

アエマチ	過失、怪我 (アヤマチ・ケガ)。
アカ ガリ	輝。(ヒビ・アカギレ)
アカ ミドコ	創傷の内部。「ミドコ」は中身)
アッチャ マケ	日射病、熱射病。
アッパツ タレ	下痢。(タレ は「垂れ」)
エキ ヤケ	凍傷、霜焼け。
エボ	疣 (イボ)。
エモ	痘瘡。
オッチ	聾啞。
オネ ヤケ	胸焼け。胃酸過多。
オミ	膿。
オルシツ カセ	漆かぶれ。(ウ は オ)
カタ ギッチョ	利き手が左右反対。(片利き手?)
カ ノ クチ	蚊に食われた痕。(オデキ)
カマ エタチ	突如の裂傷。(越後七不思議の一つ。)(鎌鼬?)
ガメ	赤く爛れたオデキの痕。
カラス	痙攣。(カラスが入る。)
カン	幼児の病気、疳。(情緒不安定)
ギッチョ	片利き。(ヒダリッコギ)
キツネ ツキ	常軌を逸した行動。(狐憑き・奇行)
キンクワ	老人性難聴。

クサ	蚊に食われた痕のオデキ。
ゲ <sup>○</sup> ェツケ	嘔吐。 <b>ゲェロ</b>
シッ <sup>○</sup> カタマリ	糞詰まり。尻固まり・便秘。
シラ クモ	白癬、疥癬。
シンケ	精神異常。 <b>シンケ ヤミ</b> (神経衰弱)
ソッ パ	反った歯、出っ歯。
セ ボンコ	背むし。(ボンコ は凸状の事。)
チサ <sup>○</sup> ゴ	小人。
デキ モン	オデキ。
テッカ カキ	癩癩持ち。
テッ パグシ	手外し、不注意の誤った動作。
テ モズレエ	痙攣などの「手煩い」。
トリ メ	夜盲症。
ナガッ チリ	便秘症。長い用便。
ナンギ	病気。(難儀 とは別意)
ネ <sup>○</sup> ブツ	膿を持つ腫れ物。
ビービ ッタレ	下痢。(タレ は「垂れ」)
ヒカ <sup>○</sup> ッ チョ	斜視。「(「チョ」 は接尾語)
ビ <sup>○</sup> ッコ	片チンバ。
ヒッ ツリ	火傷痕。(引き吊り)
ブキッ チョ	不器用。「(「チョ」 は接尾語)
ブスッコ	打撲などで生ずる青紫の傷色。
フスベ	黒子 (ホクロ)。
ブチホウ	過失、怪我。「(「不調法」が元か?)
ママ ナキ	どもり。
マメ	水腫または血マメ。
ミソッ パ	子供の虫歯。
ミーミン ダレ	耳漏。(ダレ は「垂れ」)
ムシッ タカリ	回虫の所有者。(タカリは「集まり」「発生」)
ムシ ヤメ	腹痛。
メ クサレ	眼病。(目腐れ)
メ <sup>○</sup> ッ パス	麦粒腫。(モノモレエ)

モギレ 腹が捻れる様な痛み。  
モックシ あばた。  
ヤケッ パタ 火傷。ヤケ ヅツリ。

## 【 衣服 】

アテ ンコ 前掛け、涎掛け。  
エ トリ 湯取り、女性の腰巻き。ヨ モジ (女房言葉)  
オダ ノギ 肌脱ぎ。(ヌグ → ノグ)  
カクシ ポケット。(「隠す」の連用形・転成名詞)  
キ モン 着物。(「ノ」は多く「ン」、no から o の消去)  
キン ツリ 水泳時の少年用褌。(「キンタマ 吊り」)  
ザト ギ 座頭衣？(腰周りが袋状で山菜採りに使用)。  
サル マタ 猿股、西洋褌。少年用パンツ。  
サン ジャク 普段着の帯。 サッチャク  
サン パク 山袴、モンペの一種。  
シコウ 支度・身なり・服装・格好。  
シッ パシヨエ 尻端折り。(幼児・老人の裾をまくった着衣)  
シメシ お襦袢(オムツ)。  
ソデ ナシ ちゃんちゃんこ。  
ツギ 布切れ。(「ツギアテ」は衣服修理)  
テ ノゴ 手拭。(テノゴエとも言う。ヌグウ → ノゴウ)  
ネンネ コ 子守用具。(「コ」は愛称の接尾語か。)  
ノノ コ 布子・襦袍。(語頭の「ヌ」は「ノ」になる。)  
フウコッ カブリ 手拭いの「頬被り」。  
ブウトウ 寒冷期の野良着。  
フットシ 褌。  
ベンベ 衣服。(幼児語)  
ポッポ ふところ。(幼児語)  
ヨー ギ 夜着。(袖の着いた掛け蒲団。)  
ヨーズ カケ 涎掛け。  
ヨカタ 浴衣。(語頭の「ユ」は多くは「ヨ」になる。)

## 【 食物 】

アガリ	食後の白湯。
アズキ マンマ	赤飯。糯米を使用した場合は御強。
アンベエ	塩梅、味。
アンボ	餅。(幼児語)
エモ ガラ	芋柄。(「イ」は「エ」)
エモ ン ボシ	甘藷を乾したもの。(「ン」は格助詞・連体修飾「ノ」)
エリゴモチ	屑米を使った餅。
オコワ	御強、餅米を蒸かした赤飯。(「オ」は接頭語)
オセエ	御菜、おかず。(「オ」は接頭語)
オツケ	汁。(一般に味噌汁)(「オ」は接頭語)
オツヨ	汁。(ユは多くヨとなる。)(「オ」は接頭語)
オツツキ	嫁入り行列が到着直後に食べる料理。(転成名詞)
オテノコメシ	掌に載せた御飯。(「オ」は接頭語)
オヨ	湯。(風呂を指す事もある。)(「オ」は接頭語)
オヨツケ	お粥、湯漬け。(「オ」は接頭語)
カタケ	一回分の食事。(食事の数量詞)
カタモチ	固餅。(乾燥させた後に焼いて食べる。)
カテ	米飯の補足材、大根の葉や薯類。
キナコ	大豆の粉、黄粉。
キナコモチ	黄粉をまぶした餅。
クチヨゴシ	口汚し。軽い食事。
ケンチョンジル	巻織(ケンチン)汁、油汁。
コウコウツケ	大根の漬け物、沢庵。
コウセンカキ	香煎搔き。
コウタレモチ	川渡り餅。(軟らかな搗き立てに餡をまぶした餅。)
コクショウ	正月料理の煮物。(濃漿または濃餅・ノッペイ。)
ゴツツオ	御馳走。(ゴは接頭語)
コナカキ	屑米の粉食。(薯・南瓜を混ぜた粗食)
ササモチ	笹の葉に包んだ餅。(黴の発生を防ぐ。)

シヨ	塩。
シヨ一ヨ	醤油。(ユは多くヨとなる)
シン ノ ミ	汁の具。
ゾウ セエ	雑炊・おじや。(七草のゾウセエ餅)
チャ ノ コ	茶の子、朝飯。
チヨ一ハン	中飯、昼食と夕食の中間食。
ツキ <sup>〇</sup> ゲシ	ヨモギ餅に餡を入れたもの。
ツケ モン	漬け物。
ツマキ	粽(チマキ)。(笹の葉を利用)
テッコウ モリ	山盛り。
トト	魚。(幼児語)
ニー ナ	煮た菜の葉。
ニガリ	粗塩からできる苦汁。(豆腐の凝固に使用)
ニゴリ	米の磨ぎ汁。(ニゴシとも言う。)
ニ モン	煮物、濃漿(コクショウ)。
ノシ モチ	押し板で平らに伸ばした餅。
ハラ ゴシャエ	食事補給。(コシャウ は「作る」事。)
ヒシ <sup>〇</sup> モチ	雛節句に飾る菱形の餅。
フカシ	赤飯、おこわ。(蒸かした御飯)
フカフカ モチ	搗きたての柔らかな餅、ちぎり餅。
フクデ モチ	正月の飾り餅。[複合語] (円盤状)
ヘーリ	昼飯。(ヒーリ)
マンマ <sup>〇</sup>	白米御飯。
ミ ジョウヨ	搾り前の醤油。(大豆・麦・麴が混じった状態)
ミドコ	汁物の具。
ミノ ボシ	干し大根。
メッコ メシ	生炊きの米粒が混じる御飯。
ヤク <sup>〇</sup> モチ	屑米・ヨモギを材料にした粗食。(円盤状)
ヤジ <sup>〇</sup>	納豆の糸。
ヨ <sup>〇</sup> ゲ	湯気。(ユは多くヨとなる。)
ンモ	水。(幼児語)

## 【 住居・設備 】

アッパン ジョ	雪隠、大便所。[複合語] (シ = 連体格・ノ)
アンカ	行火。
エスス	石臼。(製粉・豆腐造り)
エタ ノ マ	板張りの間。
エ マ	居間。「イ」は「エ」と発音する。
エモ アナ	冬季に藪類を貯蔵する土間の穴。
オー ソラ	天井梁の上でモヤ下の空間。(大空)
オキ ゴタツ	熾炬燵。
オシ エレ	押入。
オ スベリ	薄縁・莫産。(オ は接頭語)
オチ	家屋、または内部。(語頭の「ウ」は「オ」)
オトシ エタ	落とし板。(取り外しできる囲い板)
オネ	棟。(オネ アゲ = 上棟式)
オラ グチ	裏口。(語頭の「ウ」は「オ」)
カギ サマ	自在鉤。「サマ」は接尾語
ガン ギ	玄関・雁木。 <b>ゲンクワ</b>
キ ジリ	木尻。(囲炉裏近くに設けた薪の置き場)
グシ	棟。(魚沼だけで無く東北・関東一円の方言。)
ケブ ダシ	排煙窓、煙突の役目をする。
コバ ヤネ	木羽葺き屋根。(石で圧さえる板屋根)
コメ ブツ	米櫃。「ビ」 → 「ブ」
ジョウバ エシ	上場石・藁叩き石。
シオンベン ジョ	小便所。(シヨツペン ジョ とも言う。)
セエ フロ	据え風呂。
チョー モン	中門。(曲屋の縦になった部分)
デエ	座敷・床の間。
テノゴ カケ	手拭い掛け。
トマ グチ	戸間口、入り口。
ド マ	床板がなく筵敷きの間。
トヨ	雨樋。

ニワ	屋内の土間、作業場。(庭とは異なる。)
ネ マ	寢室。
ノキ	貫。 <sup>ぬき</sup> (軒とは異なる。)
ハタキ	三和土。
ハバカリ	便所。(転成名詞)
ヒ ダナ	火棚。(囲炉裏の上の乾燥棚)
ヒ ドコ	火床。
ヒラキ	縁側。(転成名詞)
ヘツツエ	竈。
ホー口	食器戸棚。
ポチャ	風呂。(幼児語)
ホ ド	火処、囲炉裏の中。
マセ ン ボウ	馬柵 (マセ) の棒。[複合語] (ン = の)
ミシロ	筵。
ミズ ブネ	水槽。
ミン ジャ	水屋・台所。(水は小川を引き込んで利用)
ヤ コボシ	廃屋の解体。
ヨコ ザ	囲炉裏の上座。(家長が坐る。)
ロ エン	炉縁、囲炉裏。

☆ 方言では無いが、建築関係には判りにくい語が多い。

あおりえた 障泥板	えびづか 蝦束	かまち 框	かもえ 鴨居	くわんのんびらき 観音開	こまえ 木舞	したみえた 下見板
しよえん 書院	すきや 数寄屋	すじかえ 筋交	た た き 三和土	だき 抱	たるき 垂木	ちどりぶき 千鳥葺
どえた 土板	なげし 長押	は ふ 破風	ほおづえ 頬杖	もや	らんま 欄間	れんじ 連子

### 【 雨具・履物 】

アシ ナカ	粗製の草履。
カンコ	下駄。(幼児語)
ゴム ソク	ゴム底。地下足袋。
ジョウリ	草履。
シブ ガラミ	踵を覆う藁工品。



スッペ	藁で編んだ短沓。
ツ ッカケ	藁製のスリッパ。(便所用)
ツマ ッカケ	雪道で草鞋・シブガラミと併用。
トウ ヨ	桐油。(紙製の雨具。)
ハシラ ゲタ	高足駄。
ハツパキ	はばき、脛当て。
ブーシ	藁・菅を編んだ雪具。(帽子の詠り。)
フカ グツ	脛まで覆う藁沓。
ポックリ	駒下駄。
ワラッチ	草鞋。

☆ 冬季の「藁製雨具・履物」は【冬仕事】《藁・菅細工》の項にも記載。

## 【日用雑貨】

アカシ タテ	蠟燭立て、燭台。[複合語]
オカワ	携帯便器。(病人・老人用)
オチワ	団扇。(語頭の「ウ」は「オ」)
オトシ ガミ	トイレット ペーパー。[複合語] シン ノゴエ
キビシャ	急須。
キンチャク	小物を入れる布袋。
クソーズ	臭水・石油。(照明用)
クソリ	藁。(「ス」が「ソ」)
クミタテ	手桶。(汲み立てる用具)
ケ ノキ	毛抜き。(「ヌ」は「ノ」)
ゲンノウ	玄翁・玄能。(金槌 ← 木槌)
ゴトク	五徳。(薬缶を載せ鉄製用具)
コネ バチ	捏ね鉢。(木を削り抜いて作る。)
サエ ツチ	木槌。コヅチ。
シ ビン	尿瓶。
シャジ	匙、杓子。 シャツペ
シャ モジ	杓文字、杓子。(女房言葉)

ジョーゴ	容器の栓。(漏斗では無い。)
ジョー ノウ	十能、熾 (オキ)・熱灰を運ぶ道具。
ジョーメン ボウ	十面棒。(餅・蕎麦を伸す <sup>の</sup> 道具)
シン ノゴエ	尻拭い。(葛の葉が用いられた。) (「ヌ」は「ノ」)
スエ ハク	漏斗。
セエー フ	財布。
セエー ロ	蒸籠。(炊飯用器具・曲げ物)
セッタク エタ	洗濯板。(波形に彫られた板)
タタン バリ	畳針。
タチ エタ	裁ち板。
チョーナ	手斧。
ツケ ギ	薄く剥いだ木に硫黄を塗った誘火材。
ツヨ ン ボ	杖。(杖の棒) (「エ」 = 「ヨ」)
テ シャボロ	手鋤、小型の鋤。
テ ジョノウ	手十能、小型の十能。
トックリ	徳利。陶製容器。
ト <sup>○</sup> ボウ	斗棒、一斗升に入れた物を均す棒。
ノシ エタ	餅・蕎麦などを伸す <sup>の</sup> 板。
ハリ エタ	糊着けした布を張る板。
ハン ギリ	半切り、木製の盥。
ヒー フキ ダケ	火吹き竹。
ブラ	提灯。(擬態語からの転成か?)
ヘエ タタキ	蠅叩き。
ホー チョ	庖丁。
ホヤ <sup>○</sup>	ランプの火焰筒。
マス カキ	舂搔き棒。
マネ エタ	俎板、真魚板。(ma na <u>i</u> ta → ma <u>ne</u> ta)
メンパ	面桶、わっぱ、曲木の食器。
ヤス	稽。カジカ突きの漁具。
ワタシ	火床で餅などを焼く半円形の金具。
ワッカ	輪、タガ。

## 【 趣味・嗜好 】

オキ モン	床の間の飾り物、置き物。(「ノ」は「ン」)
オタ	唄。(語頭の「ウ」は「オ」)
カ モジ	義髪。(カ文字・女房言葉)
キャラ ナブラ	化粧品。(伽羅の油) (no_a → na)
シャム セン	三味線。
ズッキレ	煙管 (キセル) の容れ物。
タブコ	蓑、煙草。
ツボ ドコ	壺所、ミニ庭園。
ナリ モン	鳴り物、楽器。(「ノ」は「ン」)
ニワ エジリ	庭弄り、盆栽道楽。[複合語]
ネンギョウ ゴシャエ	人形造り。[複合語]
ハチ モン	鉢物、盆栽。(「ノ」は「ン」)
メッケ モン	掘り出し物。(「ノ」は「ン」)
ヨ サン	遊山、旅行。(「ユ」は「ヨ」)
ヨロツ キ	流木。(「燃料」で無く「飾り物」にする。)

## 【 情緒 】

アチ コト	案じ事。(懸念・心配)
アツラ	大切、貴重。(愛惜)
アツチャ ムキ	ソツポ向き。(無関心)
アテ コト	期待する事。(期待)
アテ ズツポ	出鱈目。(予測)
アラタ カ	靈驗著しい様子。(敬虔)
エーネエ	異様。(不審)
エテエ エケ	幼な気、可愛気。(愛憐)
エツ キビ	いい気味。(冷淡)
オー ゴト	大変、困惑。(心配)
オダ	気炎。(空威張り)
オタゲエ	疑い。(語頭の「ウ」は「オ」) (疑念)

キエタ フウ	聞いた風、生意気な素振り。[複合語] (不快)
ク ドキ	ぼやき。(後悔)
ゴーギ	豪気。(贊嘆)
ショーシ	恐縮。(「恥しい・ <b>ショーシエ</b> 」の名詞化か?) (羞恥)
ジョー	自由・気儘。(解放)
ジョン ノビ	自由伸び、長閑。[複合語] (解放) <b>ジョー ノビ</b>
ダッテエ	台無し。(失望)
トツ トキ	愛蔵。(取って置き) [複合語] (愛着)
マメ	甲斐甲斐しい態度。(誠実)
ムカッ パラ	立腹。(憤怒) (ムカ は接頭語)
メエ ヨウ	面妖。(不審)
メゴ ゲ	可愛気。(愛情) (ゲ は接尾語)
メジョ ゲラ	哀憐。(同情) (ゲラ は接尾語)
モチャ ツケエ	持ち扱い。[複合語] (「… <b>擧</b> く」の形で。) (厄介)
ヤツケエ	厄介。(迷惑)
ラチャ カン	埒が明かない。[複合語] (失望)

## 【 社交・儀礼 】

エエ ソ	愛想、付き合い。
エサケエ	諍い、喧嘩。
オソ・オス	嘘。(社交の方便) (「ウ」が「オ」に) <b>デッポ・ドス</b>
カラ テップリ	手土産を持たない事。[複合語] (空手振り)
カンベ	勘弁、許容、容赦。(「ン」の消去)
ギ ナシ	義無し、出鱈目。(社交の方便)
ギョウサ	行儀、作法。
ゴッタク	振る舞い騒ぎ。
ジギ ナシ	辞儀無し、遠慮無し。
ジョ セエ	如才。(「……ねえ」の形で使用、「愛想好し」)
ジョン ギ	仁義、改まった礼儀。挨拶の口上。
ダシ エー	出し合い。(食材を出し合う会食)
ツゲ	告げ、会合・慶弔の案内。

デッポ	嘘。オソ オス ダマカシ ドス
テ モチ	手土産、祝儀。
トナン	隣人、近所付き合い。
ハンコ	判子、印形。
フレ	触れ、通告。(鐘・法螺貝・板木を利用)
マキ	地縁・血縁に依る互助集団。
ムラ オチ	村内、村仲間。
モレエ プロ	貰い風呂。[複合語]
ヤ オツリ	家移り、引越。[複合語] (ウ → オ)
ヨリ エー	寄り合い、集会。(a i → e)

### 【 金銭・貧富 】

カヨエ	通帳。
カン ジョウ	勘定、精算。
シッケエ	臍繰り。(シッケエ稼ぎ) シンゲエ
セッキ バレエ	節季払い、盆暮れの決算。[複合語]
ゼネ	銭。お金。
ダクダ	無駄、浪費。
ダンナ ショ	金持ち、地主。(旦那衆)
ツケ	付け・借り、後払い。
トセ モチ	所帯運営、損得勘定。[複合語] (渡世持ち)
ビツ ポウ	貧乏。
ヒリョウ	駄賃、給料、褒美。
ミジコク	惨め、貧窮。

### 【 職業・身分 】

アン ジョ	庵主、尼さん。
エモ ジ	鋳物師。
エン キョ	隠居。
カジ ヤ	鍛冶屋。

キョウジ ヤ	表具屋。
ゴゼン ボ	瞽女。
コ ブキ	木挽。(ビ → プ)
コモ ソ	虚無僧。(ム → モ)
サエコウ ヤ	修繕屋。(主にゴム靴)
ザト	座頭。
シャ グアン	左官。
チュウショウ トリ	調声取り、念仏声明の先導者。
チョウリン ボウ	新平民。
デー ク	大工。
テッポウ ブチ	獵師。
トギ シ	研ぎ師。
トッピ	高所で作業する鳶職。
ノスツ ト	盗人。(ヌ → ノ)
ノツ チ	塗師。(ヌ → ノ)
ハリ ヤ	張り物を専門とする職。
ヒリョツ トリ	給料取り、サラリーマン。
フルテ ヤ	古着屋。
ホエ サマ	法印様。(神主)
マゲ シ	曲げ物の細工師。
マス カキ	鱒搔き。(漁師)
モグリ	鑑札を持たずに密漁する者。
ヤノ ヒキ	屋根葺き、屋根屋。

【時間】 (※ 時間を表す語は「副詞」的に用いられる。) 【副詞】参照

アサツ テ	明後日。(テは時間詞の接尾語)
アサツ パラ	早朝。
エツ?	いつ?
エツツオケ	何時も。
エツツン カ	いつかの時。
エマ	今。

エマシ ガタ	今ほど、先ほど。
エマ ニ	近い将来。
オットエ ナ	一昨日。(ナは時間詞の接尾語)
オ ットシ	一昨年。
キヨネン ナ	去年。(ナは時間詞の接尾語)
キン ナ	昨日。(ナは時間詞の接尾語)
コ ッタ	今度 (は)。(係助詞「ハ」の結合した用法。)
コ ネエダ	この間、先日。[複合語] (ko <u>na</u> i da → ko <u>ne</u> da)
コマ	小間、短い時間。(見てる「コマ」に)
コン ダ	今度。(係助詞「ハ」の結合した用法。)
サッキ ナ	先刻。(ナは時間詞の接尾語)
サレエン ナ	再来年。(ナは時間詞の接尾語)
ショテ ッパナ	最初。(初手鼻?) ショテッパツ ショッパナ
センダ ッテ	先日。(テは時間詞の接尾語)
ソンマ	即刻。(副詞とも考えられる。)
チャ メエ	茶前・早朝・午前。 チャノコ メエ
ドキ	時点。(複合しない単独の場合も濁音。)
ドコ	所。(寝ようとした「ドコ」だ。)(「場所」と同音)
バン ガタ	晩方、夕方。
ヒト ッキリ	短時間。
ヒナ ノケ	日中。
ヒヨウ シ	機会、途端、はずみ。
ヒンチ	日々、日取り。
フサ	久しい間。
ヘーリ マ	昼間。
ヘーリ メエ	昼前、午前。
メエ	前。(時間・未到達) (「位置」「場所」も同音)
メエー デ	前手、往時、昔。
メエー ンチ	毎日。
ヤナ アサツテ	明明後日。(テは時間詞の接尾語)
ヨー サリ	夕去り・夜。
ヨッピテ	夜通し。(テは時間詞の接尾語)

ヨッペ ナ	昨夜。(ナは時間詞の接尾語)
レエン ナ	来年。(ナは時間詞の接尾語)

【分量】 (※ 分量を表す語は「副詞」的に用いられる。)

ゴーギ	豪儀、大量。(副詞としても用いられる。)
シャキラ	尺量。シャキラ も無え (際限も無い。)
ツメ アカ	爪垢。(少量。)
ドード	大量。(副詞としても用いられる。)
ボッ カサ	体積。
メノ コ	目分量。
ム サンコウ	無闇な大量。(ニを伴って副詞ともなる。)

☆ 指示代名詞に副助詞「…パカ」「…ボチ」及び「…グレエ」が付く例は【代名詞】の項を参照。

【方向・場所】 (※ 方向・場所を表す語は「副詞」的に用いられる。)

アツ チ ※1	あちら、遠くの方。[指示代名詞]
エワツ コウ	上つ面、表面。
オシロツケタ(ペタ) ※2	後方。「ケタ」「ペタ」は接尾語(ウ → オ)
オラ	裏。(ウ → オ)
オラ	先端、末。(ウレ)
オラツ ケタ(ペタ) ※2	裏側。「ケタ」「ペタ」は接尾語
カド	屋外、庭。「角」とは無関係
クラツ ツマ	暗がり。
ゲツ ポ	最後尾。(尻の方)
コ ッチ ※1	こちら。[指示代名詞]
シツ タ	下。(促音化)
ソツ チ ※1	そちら。[指示代名詞]
テエズ	方角。(東のテエズが明るくなった。)
テツ コウ	上方、頂上。
テツ チョウ	天頂・頂上。



テッペン	天辺。
ドゴ？ ※1	何処？。〔不定代名詞〕（疑問）・
ドコ ※1	場所、処。（人の住むドコ。）
ドッカ ※1	何処か。（ドッカの国。）
ドッチ ※1	どちら。〔指示代名詞〕
トナン	隣。
ネッコ ※1	近辺、近隣。（「根っこ」とは無関係）
ハジッコ ※1	側端、末端。
メエツケタ（ペタ） ※2	前方、前側。（「ケタ」「ペタ」は接尾語）
メグラ	周辺。
ヨコツチョ ※1	横側。 <b>ヨコツケタ（ペタ）</b>
ワキツチョ ※1	脇、傍ら。

※1 語末の「カ」「コ（ゴ）」「チ（チョ）」は「場所」の意を持つ接尾語。

※2 語末の「ケタ」「ペタ」は「方向」の意を持つ接尾語。（Ⅲ部 参照。）

【 様態・姿態 】 （※ 様態・姿態を表す語は「副詞」的に用いられる。）

アオンケ	上向きの格好。 <b>アオノケ</b>
エブツ	歪（イビツ）。
オツブセ	俯せ。
カスツパゲ	白茶けた様子。
ケエツツオ	逆さの状態。
ケモクジャラ	毛が密生した態。
ソツポムキ	よそ向き。
ゾロビッコ	不揃いな態。
ダツテ	台無し、目茶苦茶。（乱雑な様子）
タテツチョウ	縦ざま。（ <b>チョウ</b> は「様子・状態」）
テツチョウムキ	上向き。（天頂向き）
テエラ	平ら、水平。（安座の状態）
ナギツチョウ	斜めざま。（ <b>チョウ</b> は「様子・状態」）

ナセエ	傾斜の緩やかな態。
ヘンゴウ ブツ	歪んだ形。(ヘンゴウビツ とも言う。)
ボンコ	盛り上がった態。
マツ ツグ	真っ直ぐ。
ワヤ	混乱状態。

☆ 「ナ」・「ノ」・「ニ」を伴って連体詞・副詞に用いられる語。

アツ ケエ (ナ・ノ) (ニ)	あんな気配 (な・の) 連体詞 (に) 副詞
アン ゲエ (ナ・ノ) (ニ)	あんな気配 (な・の) 連体詞 (に) 副詞
アン グレエ (ナ・ノ) (ニ)	あんな程度 (な・の) 連体詞 (に) 副詞
アン ツレエ (ナ・ノ) (ニ)	あんな種類 (な・の) 連体詞 (に) 副詞
コツ ケエ (ナ・ノ) (ニ)	こんな気配 (な・の) 連体詞 (に) 副詞
コン ゲエ (ナ・ノ) (ニ)	こんな気配 (な・の) 連体詞 (に) 副詞
コン グレエ (ナ・ノ) (ニ)	こんな程度 (な・の) 連体詞 (に) 副詞
コン ツレエ (ナ・ノ) (ニ)	こんな種類 (な・の) 連体詞 (に) 副詞
ソ(ス) ッ ケエ (ナ・ノ) (ニ)	そんな気配 (な・の) 連体詞 (に) 副詞
ソ(ス) ン ゲエ (ナ・ノ) (ニ)	そんな気配 (な・の) 連体詞 (に) 副詞
ソ(ス) ン グレエ (ナ・ノ) (ニ)	そんな程度 (な・の) 連体詞 (に) 副詞
ソ(ス) ッ ツレエ (ナ・ノ) (ニ)	そんな種類 (な・の) 連体詞 (に) 副詞
ソ(ス) ン ツレエ (ナ・ノ) (ニ)	そんな種類 (な・の) 連体詞 (に) 副詞
フツ ツレエ (ナ・ノ) (ニ)	そんな種類 (な・の) 連体詞 (に) 副詞
フン ツレエ (ナ・ノ) (ニ)	そんな種類 (な・の) 連体詞 (に) 副詞
ドン グレエ (ナ・ノ) (ニ)	どんな程度 (な・の) 連体詞 (に) 副詞
ドツ ケエ (ナ・ノ) (ニ)	どんな気配 (な・の) 連体詞 (に) 副詞
ドン ゲエ (ナ・ノ) (ニ)	どんな気配 (な・の) 連体詞 (に) 副詞
ドン ツレエ (ナ・ノ) (ニ)	どんな種類 (な・の) 連体詞 (に) 副詞

## 【 通過儀礼 】

アト ヤク	男女大厄の一年後。 <b>メエ ヤク</b> (一年前)
オオ ヤク	大厄。男 (二五・四二歳)、女 (一九・三三歳)
オスナ メエリ	産土参り。男 (三十二日目)、女 (三十三日目)
オビヤ キ	産屋明き。(産後二十一日目)
サネ アレエ	陰核洗い。(女性の四十歳)
シッペタ モチ	尻餅。(赤ん坊が一歳になる十五夜)
トボウ クバリ	八十八歳・米寿の祝い。(斗棒は舂掻きのこと)
ヘックリ オトシ	男性四十二歳の厄払い。(ヘックリは辜丸)
メエ ヤク	男女大厄の一年前。

## 【 慶弔催事 】

エシバ カチ	石場かち、建物の基礎固め。
オネ アゲ	棟上げ、上棟式。
ゴッタク	振る舞いごと。
サワギ	騒ぎ、催し。
シン ゴト	死に事騒ぎ、予期しない事態。
ソウ レエ	葬礼。
タチワ	嫁遣り・賀遣り・出征兵士など出立の宴。
タテ メエ	建て前、家屋の新築工事。
ドウギョウ ヨーレエ	同行寄り合い。(伊勢参り同行者の会)
フルメエ	振る舞い、慶弔の集い。
モコ ドリ	賀取。(婚姻)
モコ ヤリ	賀遣り。
モチ マキ	新築祝いに餅を撒く。
ヤ オツリ	屋移り、引っ越し。
ヤ コボシ	廃屋の解体。
ヨ トギ	夜伽、通夜。
ヨメ ドリ	嫁取り。(婚姻)
ヨメ ヤリ	嫁遣り。

【年中行事】 ☆ 印は次の【土俗・信仰】で再記。

エベス コウ	恵比寿講。(十一月二十日・泥鰯汁を食べる。)
オカミ オクリ	出雲へ神を送る。(旧暦十月一日、堀之内大神宮迄)
オシラ コウ	蚕の神を祀る。(一月の農閑期。)
オニ ハレエ ☆	鬼祓い、節分、豆撒き。(二月二日)
カラ コエ ☆	小正月の行事。(天の三本足鳥を呼ぶ・臈料理)
カリ アゲ	稲刈りの完了祝い。(十月中旬頃)
カン ク	寒に入った九日目。(一月上旬・南瓜を食べる。)
キンノギ ツェタチ	衣脱ぎ朔日。(蛇の脱皮、七月一日・固餅を食べる。)
コウシン コウ ☆	庚申講。(二月月に一回・庚申の夜)
サナ プリ	田植えの完了祝い。(六月下旬頃)
サンゲツ ミッカ	毘沙門天の祭日。(三月三日の裸祭り、餅撒き)
ジージゴ タチ ☆	精霊迎え。(八月十三日)
ジョーゴ ヤ	ススキ祭り、シツペタ餅。(九月十五日)
ジョーニ コウ ☆	十二講。(三月十二日)
ショウヨ シボリ	大豆・麦・麴などで仕込んだモロミの精製。(寒冷期)
シングワツ ヨウカ	灌仏会、甘茶を釈迦像に灌ぐ。(四月八日)
スス ハレエ	正月前の大掃除。(十二月二十五日頃)
セエノ カミ ☆	正月の飾り物を焼く。(一月十五日)
セッキ ジメエ	屋外作業の終了。(十一月下旬)
ダシ エエ	食材を持ち寄る若者の集団生活。(三月頃)
ダンゴ マキ	涅槃会、村の観音祭り。(三月十五日)
チンジョ マツリ	村により異なるが大方は夏期(八月中)。
デシ コウ	大師講。(十一月二十三日・小豆粥)
トオカン ヤ	田の神が山に戻る日。(十一月十日)
トシ トリ	年越し。(大晦日、塩鮭・豆腐・納豆・濃漿などを用意)
トリ オエ	子供の雪洞祭り。(一月十五日・焼いた餅)
ナツト ネセ	煮た大豆を「ツト」に入れて天井に保存。(正月前)
ネンギョウ ミ	ひな祭り。(四月三日・他家を廻って甘酒を頂く)
ノボリ タテ	若衆が協力して幟竿を建てる。(八月十三日)

**ノン バキ** 蚤掃き。(正月前の煤掃きに対し、盆前の大掃除)  
**ハカ メェリ ☆** 春の彼岸・お盆。(三月二十一日・八月十四日の早朝)  
**ハツ サク ☆** 八海神社の祭礼。(九月一日)  
**ブシャモン コウ ☆** 毘沙門講。(庚申の日に豆煎り 煮物を楽しむ少年の茶会)  
**ミソダマ ツリ** 味噌玉を囲炉裏の上に吊るす。(寒冷期)

## 【土俗・信仰】

**アマ ゴエ** 雨乞い。  
 村人が寄り集い八海登山して祈願した。  
**「アシタ テンキニ ナーレ！」** は子供の下駄投げ。

**アマン ジャク** 天の邪鬼。  
 四天王像の足下に這う小鬼。 反抗的な拗ね者。  
 昔話では「人食い」の悪鬼。

**エベス ゼン** 恵比寿膳。  
 木目を縦にした配膳、神仏に供える形。

**オニ ハレエ ☆** 鬼祓い。  
**「鬼は外！ 福はオチ！」**  
 子供は歳の数だけ豆を拾う。

**カラ コエ ☆** 小正月の行事。  
**「カーラ来え！ カラ来え！」**  
 「カラ」は天に住むと言う三本足の鳥。

**カンナリ ヨケ** かんなりよ 雷 除け。  
**「クアバラ エンジョ クアバラ エンジョ。」**  
 縁側に線香を立てて唱える。

**キ モン** 鬼門。  
 鬼の出入りすると言う不吉な門。家屋の北西隅。

**コウシン コウ ☆** こうしん 庚申講。  
**「オコウシンデ コウシンデ  
 マイタリ マイタリ ソワカ。」**  
 「ソワカ」・蘇婆訶は梵語で円満・成就の意。真言陀羅尼の  
 後に付ける。「功德あれ」の意。

コーツバ

河童。

「シリゴ<sup>の</sup>抜き」の架空動物。暑い日、予備の水掛けをしないで川に飛び込むと急性大腸カタルになる。

コウミョウ シンゴン

こうみょうしんごん  
光明真言。

梵語に依る真言宗の経文。(附録・念仏を参照)

「オン アボキャ ベェロシャノウ  
マカ ボタラ マニ ハンドマ  
ジンバラ ハラ ハリタヤ ウン。」

真言宗の信者は毎晩就寝前に唱え、この後で「南無大師  
遍照金剛」を百遍繰り返した。

コックリ

狐狗狸。

稲荷を利用した呪い遊び。盆と三本の箸を使って占う。

イヌ年生まれの場合は仲間に入れない。

コンジン

金神。

陰陽道で祀る方位の神。歳徳神と反対に位置し、この神  
の方位を忌み、旅行・婚姻・新築などが選ばれる。

ジージゴ タチ ☆

しょうりょう  
精 霊迎え。

「ジージゴたち パーバゴたち  
ジーサ 舟を 漕ぎナレモ！  
パーサ 舟ン 乗んナレモ！  
この夜の灯りに ゴザーレ ゴザーレ！」

八月十三日の宵、庭先で葎柄を焚きながら歌う。

シオ ケエ

汐汲み。

間引きの事、嬰兒を川に流す。

シッペタ モチ

尻餅。

一歳の誕生を迎えた赤子の尻に餅を載せて祝う。

シビレ ヨケ

しびれ 除け。

「シビレ シビレ 跳んで 行げ。足の  
シッタあ<sup>せめ</sup>狭めえぞ、京の町あ広えぞ。  
京の町へ ヒョーンと跳べ！」

(唾・ツバキで濡らした藁シベを額に貼って唱える。)

## ショウグワツ ゼン

正月膳。

乳幼児を含めて家族全員の数を揃える。箸は正月だけに使う栗の若木を削った物を秋の内に用意した。

濃漿や脛の他、「焼き鮭」「干し栗」「干し柿」を添えるのが一般であった。

## ジョーニ コウ ☆

十二講。山仕事の安全祈願。

「テッコウグリ ヤマグリ カラグリ  
人の眼に当んな 飼いモンの眼に  
当んな！ トッピ<sup>からす</sup> 鳥の眼に当たれ！」

三月十二日早朝、山の神の前で弓を射る際に唱えた。

山の神は女性を避ける事から、祭具弓・矢・的および供物の全ては男性が調達した。

## シンダン メグリ

死んだもの廻り。

左回りの事。葬列が墓場で棺桶と共に廻る方向。

村童の遊び事で鬼を決める時にも避けられた。

## セエノ カミ ☆

斉の神。(注連焼き)

「オシロ山の 子供は 意地の悪え<sup>えじわり</sup>  
子供で 雪隠口へ隠れて 指のマラを<sup>せつちん</sup>  
吹えた 吹えた。」

正月の飾り物を雪の壇で焼く行事。

## セエノ カワラ

賽の河原。

夭折すると、「際限のない石積み」をさせられると言う

三途の川の河原。

## テンゴ サマ

天狗様。

祭礼時は神輿の先頭に立ち、一枚歯の下駄を履く。

赤面長鼻の怪物。

## テンマブリ・ジマブリ

天守り・地守り。

一日中、天または地を見守り続ける修行。

## トリ オエ

鳥追い。

「鳥追えだ 鳥追えだ。あらア 誰が<sup>だ</sup>  
鳥追えだ。こらア 誰が<sup>だ</sup> 鳥追えだ。」

(附録「童唄」参照)

ノゲバ

抜け歯。

「ハヤ ハヤ <sup>お</sup>生えれ！」

上歯の抜けた時は屋根、下歯の抜けた時は縁の下に投げる。

<sup>の</sup>ノシ

のし主。

森や沼などに宿る霊的支配主。

ハカ メェリ ☆

墓参り。春の彼岸と盆の十四日。

春は残雪が多く石塔も埋まっているが、三角の雪洞を作り、中に杉の葉を敷いてボタモチを供えた。

凍み渡りをしながらボタモチを拾うのは村童の楽しみであった。夏は子供が主役となり、葎で祭壇を作り、スッカンボの線香立てを用意した。

「シンバエ コンバエ 菜のコンコン畑。

山じゃ藤の実 河原じゃ蓬。

スズクダレ スッポン ポン。」

ハシッカ ナガシ

麻疹 流し。

サッペェシ・俵の蓋に笹の葉を乗せて川へ流した。

ハツ サク ☆

八朔

萱の簀でボタモチを食べる。この日を境に「夜なべ」仕事を開始し、「昼寝」を中止した。この事からボタモチは「ニガ餅」とも呼ばれた。

ハンニヤ

般若。

「智恵」の意を離れ「鬼」の意味で理解された。仮面は鎮守の社殿に架けられて居た。

ブシャモン コウ ☆

<sup>びしゃもん</sup>毘沙門講。(庚申の夜)

「オンセンニッシン エエ ソワカ」

「オンベェシラマンダヤ ソワカ」

「オンマカシーリヤ エエ ソワカ。」

「オンヤクセーベエ エエ ソワカ。」

「オンロキャロ キャロ キャロヤーソワカ」

尚武崇拜の故から、参加は少年男子に限られた。

ヘッコキ アテ

屁の主アテ。



「ベロベロ カメロ。 尻をブーッと  
こえた方へ 向きやれ 向きやれ！」

穂先を折ったノエゴを廻して、尻の主を当てる。

<sup>0</sup>  
ホコ

ほこら  
祠。

山野には様々な祠があり、独特の霊域を保った。

マムシ ヨケ

蝮除け。

彼岸の「団子撒き」の団子を携帯して山仕事に出る。

ヨーレエ

幽霊。

柳の下に濡れた白衣を着て立つお化け。

ロクサン ヨケ

六・三 除け。ドクサン

患者の年齢を九で割り、病気の部位を推測して祓う。

【 禁忌・祟り 】

《 衣服関係 》

ケエ ツツオ  
シツケ エト  
ヒダリ メエ

逆さ。(衣服を裏返しに着ると悪夢を見る。)

仕付け糸。(付いた儘着ると幽霊が纏い付く。)

和服の左衽が上になる着方。(死人の着衣)

《 食事関係 》

アワセ バシ  
エベス ゼン  
オシ グエ  
ハシ オツシ  
ハシ タテ

木と竹の箸を一本ずつ使う。(葬儀の作法)

木目を縦にした配膳。(神仏に限る。)

牛喰い・寝喰いは行儀の悪い代表。

箸と箸の遣り取り。葬儀の作法。

盛った御飯に箸を立てる。(葬儀の作法)

《 住居関係 》

コンジン

厠を巽(東南)に設けると凶事を招く。

《 その他 》

オシ ツメ  
クウジ ノゾキ

夜間に爪を剪ると割れた「牛爪」になる。

障子の穴から火事を覗くと啞の子が生まれる。

シヨンベ カケ	ミミズに小便を掛けるとチンポコが腫れる。
シラ クモ	ネズミを頭に載せると疥癬になる。
シリゴ ノギ	突如川に飛び込むと河童にシリゴを抜かれる。
テッカ カキ	切った爪を火床に棄てると癩癩持ちになる。
テ ナタ	蛇の太さを指の輪で示すと、曲った儘になる。
ハン ゴロシ	生き物は何でも半殺しにすると祟りがある。

### 【 農作業 】

アゼ カキ	畔欠き。
アゼ カケ	畔掛け。
アゼ カリ	畔苳り。
アゼ ノリ	畔塗り。
エ サレエ	穢川の浚い、用水堰の掃除。
エスス ヒキ	粉挽きや豆乳造り。
エネ コキ	稲穂から粃を扱き落とす。
オトシ	大豆・蕎麦などの脱穀作業。
オロ ノギ	間引き。 <b>ノギ</b> は「抜き」
カブツ コギ	古桑の株抜き。 <b>カブツ ノギ</b>
ケーシ クミ	肥汲み。(「コヤシ」の訛りか。)
コエ ダシ	厩舎の清掃。(汚物を肥場に積み重ねる。)
コエ ヒキ	残雪期に櫓で堆肥を田に運ぶ作業。
コエ マキ	馬籠を背負って堆肥を田中に撒く作業。
コメ ダシ	保有米以外の米の出荷。
コメ ツキ	精米、米糠取り。
サク キリ	野菜畑の土寄せ。
シツ トリ	馬耕の後役、尻取り。(「鼻っ取り」の対。)
ジ ボシ	地干し。乾田を利用した稲の乾燥。
タ オエ	田植え。
タ オネエ	田畝い。
タ カキ	田搔き。(タブチの後で主に牛馬を使用。)
タテ ゴシャエ	大根・粃の貯蔵施設作り。(晩秋)

タノクサ トリ	田の草取り。
タ ブチ	田打ち。(田起こし・春耕の始まり)
ニオ ツミ	稲・藁・薪などを小山状に積む作業。(鳩)
バ コウ	田起こし機を馬に牽かせる作業。
ハタケ オネエ	畑畝い。
ハツテ ガケ	はざ・稲架け作り。
ハナ ットリ	田搔き馬の誘導係。(主に女性・子供が担当)
ヒー ノギ	稗抜き。(田中の稲に混じる稗を抜く)
ヒグサ カリ	干し草蒞り。(冬期の飼葉に用いる。)
ミズ ミ	水田に引く水を見て廻る。
モミ スリ	調製、粃殻を剥ぎ取る。

## 【 農作物 】

アオ ズッコ	未熟な青果物。
アオ ナ	大崎菜、臺菜。
アゼ マメ	田の畦に栽培する大豆。
エネ	稲。(他の穀物、麦・粟・黍・豆)(胡麻・蕎麦)
エモ	芋・薯類の総称。
エリゴ	不完全熟の屑米。(エルゴとも言う。)
オカ ボ	陸稲。
オリ	瓜類の総称。
カタ オリ	固瓜。
カブチャ	南瓜。
キョー リ	胡瓜。
ゴッポー	牛蒡。
ササギ	ササゲ。
サット マメ	三度豆、莢豌豆。
ジャガラ エモ	馬鈴薯。
セツツェ モン	季節野菜。
タナ オチ	熟れ過ぎた瓜。(タナオチ スイカ)
チリメン カブチャ	縮緬南瓜。

ツケ ナ	漬け物用の菜。野沢菜・蕪菜。
ツル モン	蔓物の全般。
デェ コ	大根。
トウ ガン	冬瓜。
トウ ナ	薑菜。
トウ マメ	玉蜀黍。
ナシ オリ	梨瓜・メロンの一種。(ウリ → オリ)
ナ ッパ	菜っ葉。
ナマス オリ	膾瓜。
ナリ モン	生り物、果実を結ぶ作物。
ナン バン	ピーマンに似るが辛い。
ネン ジン	人参。
マックワ	甜瓜 (マクワ ウリ)。
ミョウゴ	茗荷。
ヨーゴー	夕顔。
ヨリ	百合根、百合玉。

## 【 農具・工具 】

エスス	石臼。(i s ĩ u su → i su su) 前母音消去
エタチ	狭い隙間を通す木製の小道具。(鼈)
エップリ	杓 (エブリ)・田均し。
エモツ ポリ	長芋掘りに使う槍状の金具。
オシ キリ	押し切り。(糞・堆肥の切断に使用)
カケヤ	大型の木槌。(杭打ちに使用)
カワツ パギ	皮剥ぎ。(杉の皮を剥ぐへら状の金具)
クワ ガラ	鍬柄。鉄の刃を嵌める鍬の木部。
ゲンノウ	玄翁、金槌。
コ ツチ	木槌、木製で小型の槌。
サエ ツチ	小型の木槌。
サッポン グワ	三本鍬。(田打ち用)
ジョ リン	鋤簾 (ジョレン、用水工事に用いる。)

センバ コキ	千齒扱き、千把扱き。(脱穀の道具)
ソエ オケ	背負い桶。(糞尿を入れる。四角の栓が特徴。)
タ ガラ	小型の馬籠 (玉石などを運ぶ)
タタン バリ	畳針。
チョウ ナ	手斧。
ツル ッパシ	鶴嘴。(土木工所用)
トウ グウ	唐鍬。(荒地地起こしに使用)
トウ ミ	唐箕、風車式で粃の選別に使う。
ト エシ	砥石。
トオシ	篩。
トヨ	樋。
ニネエ オケ	担い桶。(天秤棒で担ぐ。)
ノメシ	藁仕事をする時、足の代用をさせる道具。
ハ グルマ	田の春耕に使用する農機具。
ハタキ ボウ	粟・胡麻などの脱穀に使う「叩き」棒。
ヒラ ックワ	平鍬。(畑畝いに使用)
フルエ	篩。
ベト オス	土臼。
ボウ トウ	材木に穴を穿つ螺旋状の錐。(棒通し?)
マサッカリ	鉞。
マブシ アミ	蔴(まぶし・蚕具)の編み具。
マン グウ	馬鍬、田搔きに使用。(馬に牽かせる)
マン ゴク	万石・選米機。
ミシロ アミ	筥編み。
メ タテ	鋸の目立て具。
モッコ	畚(もっこ)。重い物を二人で担ぐ道具。
ヨコ ツチ	横槌、上場石で藁叩きをする槌。
ワラ スグリ	藁の稽(シビ)を取り用具。
ンマ カゴ	馬籠。(木枠に縄を張った背負い籠)

## 【 養蚕関係 】

エト ヒキ	糸引き車を使つての製糸作業。
クウ クレ	給桑。
クウ トリ	桑摘み。
ケエコ ダナ	蚕棚。
ケバ トリ	繭玉に付着する毛羽を除く。
コグソ ノギ	蚕糞抜き、蚕座の清掃。
コモ アミ	蚕座に敷く菰作り。
ザグリ バタ	坐繰り機。 <sup>はた</sup> (製糸)
サン ザ	蚕座。(竹を編んだ蚕具)
シ チョウ	紙帳(?)。稚蚕の保温用具。(蚊帳に似る。)
シ ンゴ	死に蚕。 <sup>し</sup> <sup>こ</sup>
タマ メエ	玉繭(蛹が複数の繭)。真綿として利用。
ハキ タテ	種紙から孵化した幼虫を蚕座に移す。
ボコ サマ	蚕の名称。(敬称を付ける。)
マブシ	<sup>まぶし</sup> 簇。(繭作りする抛り所のスダレ・エビラ)
マワタ ハリ	真綿張り。(玉繭を茹でて膳に張る。)
メエ カキ	<sup>まぶし</sup> 簇から繭を掻き取る作業。
メエ ダシ	繭の出荷。
ヤスミ	蚕の休眠、脱皮。
ワラダ	蚕座に併用した蚕具。(菰)

## 【 山仕事 】

アオモン トリ	山菜採り。
エダ ブチ	枝おろし。
カリボシ カリ	堆肥用の草を刈り、山肌で乾燥させる。
カンノ カリ	山裾の崩れ地(刈り野)の草刈り。
ケシゴ ヤキ	軟炭作り、炭焼き。
スダ カリ	粗朶刈り。
ドウゴ ダシ	雪道を利用した材木の搬出。
ボエ キリ	薪用の雑木伐り。
ボエ ダシ	雑木の運搬。

ミチ ゴシャエ  
モジナ エブシ

道拵え。(雪崩などで壊れた山道を修復する。)  
冬眠の貉を煙で追い出して捕獲する。

【 冬仕事 】

《 藁細工・菅細工 》

アシナカ 粗製の草履。(履物)  
カマ シキ 釜敷き、浮き輪状に作る。  
カマス 凧。(俵と共に藁製容器の代表)  
サツペシ 栈俵法師、俵の上下の藁蓋。  
シブガラミ 踵を覆う藁工品。(履物)  
ジョウリ 草履。(履物)  
スッペ 藁で編んだ短沓。(履物)  
セナッコウジ 荷負いの補助具。  
タス 藁で編んだ容れ物。紐を付けて担ぐ。  
タテ 粃の保存、野菜の貯蔵。  
ツグラ 藁製の育児用具。  
ツツカケ 藁製のスリッパ。(履物)  
ツト 藁を束ねた容れ物。(ツトッコ)  
ツマ ッカケ 雪道で草鞋と併用。(履物)  
トバ 苫、篷、雨覆い。(マ→バ)  
ナベ シキ 鍋敷き、円座。  
ニ ナワ 荷負い縄。(縄類の一つだが左縫りにする。)  
ネコ 藁をネコダに編んだ物。  
バツトリ 荷負い時の背中当て。  
ハツパキ 脛巾・脛布・箆履(ハバキ)、脛あて。  
ブーシ 藁・菅で編んだ雪除け帽子。  
フカ ゲツ 脛まで覆う藁沓。(履物)  
ミシロ 筵。(機械の無い時代は二人の共同作業で織った。)  
ワラッチ 草鞋。(履物)

《 竹細工 》

<b>カッチキ</b>	標 (カンジキ)。
<b>サシ</b>	差し。(葦織りの相方が使う竹棒)
<b>スカリ</b>	標 (カンジキ) と併用する大型の雪具。
<b>スクエ</b>	掬い。(茹で蕎麦などを掬う用具)
<b>トオシ</b>	湯通し。冷たい蕎麦などを温める道具。
<b>トオシ</b>	粩・大豆などの篩。
<b>ドジョ ツボ</b>	一升瓶の形をした竹製漁具。
<b>ハケゴ</b>	魚籠 (ピク)。瓢箪型の竹製漁具。
<b>フルエ</b>	篩。
<b>ボテ</b>	竹筴の一種。

※ 団扇・花器・傘・熊手・笊・尺八・扇子・算盤・竹馬・竹釘・竹串・竹竿・竹櫓・竹鉄砲・竹蜻蛉・竹ヒゴ・竹笛・竹篋・竹箒・竹箕・凧・水鉄砲・耳掻き・物差…などの「竹製品」は日々消えつつある。

※ 竹の特性に似せた素材はプラスチックであるが、竹製には及ばぬものが多い。

## 《 雪対策・雪利用 》

<b>アク マキ</b>	灰撒き。(消雪)
<b>エキ ガコエ</b>	雪囲い。(住宅・庭木などの保護)
<b>エキ サラシ</b>	藁・菅・竹などの細工品を晒す。(強化)
<b>エキ ダナ</b>	雪消し用の小池。(流水の利用)
<b>エキ フミ</b>	雪を踏み固めて道を作る。
<b>エキ ホリ</b>	主に屋根の雪を掘り除く作業。
<b>エキ マクラ</b>	雪枕。(解熱療法に利用)
<b>エキ ミチ</b>	雪道、谷道。(夏期は通れない谷が道になる。)
<b>エキ ムロ</b>	雪室。(野菜の長期保存に利用)
<b>エキ ワリ</b>	道路の除雪作業。
<b>コエ ヒキ</b>	雪原の近道と橇を利用した堆肥運搬。
<b>ダエコ ダテ</b>	雪中の大根貯蔵施設。
<b>ダラ ノリ</b>	墮蠟塗り。(雪の付着を防止する。)
<b>タレ ガコエ</b>	簾囲い。(防雪対策)
<b>ドウゴ ダシ</b>	山中の木材を橇で運び出す作業。
<b>ナゼ ヨケ</b>	雪崩の防御施設。



ベト マキ 土撒き。(消雪)  
ボエ ダシ 薪出し。(雪道を利用する。)

### 《 雪具 》

カッチキ 標 (カンジキ)。  
ク シキ 木鋤 (コスキ)。  
シャボロ スコップ。カク シャボロ ケン シャボロ  
スカリ 標 (カンジキ) の一種。  
トヨ 樋。(排雪の用具)  
ブーシ 藁・菅で編んだ雪除け帽子。

☆ 代表的な雪の遊具には ソリ・スキー・スケート などが挙げられるが、これらは共通語と同様である。

### 【 女仕事 】 (調理・裁縫・育児・洗濯・採集など)

#### 《 屋外 》

アオモン トリ 山菜採り。  
クゾツパ トリ 葛の葉採り。  
スギツパ ヒロエ 雪上に落ちた杉の葉拾い。(燃料用)  
スミ カキ 鍋底・釜底の炭掻き。  
セツ タク 洗濯。(小川または半切で)  
ナツパ アレエ 菜っ葉洗い。(洗い場は社交場でもあった。)  
ヒロロ ノギ 笠菅 採り。

#### 《 屋内 》

エスス ヒキ 石臼挽き。(エルゴ・ソバ・大豆)  
エト ヒキ 製糸。  
チチ クレ 授乳。(育児)  
ノエ モン 縫い物、裁縫。(ヌ → ノ)  
マンマ シ 食事係。「シ」は「為」で造る事

ヲ オミ

苧績み。

【 作業の工夫・形態 】

アギ

釣り針から獲物の脱落を防ぐ仕掛け。

アエ ドリ

餅搗きの相棒役。 **エエ ドリ**

アエ ナシ

帳消し。 **エエ ナシ**

アエ<sup>〇</sup> ホウ

手伝い、相方、相棒。

アツタメ ケエシ

二番煎じ。(主に風呂の湯)

アミ ドウゴ

簾編み、俵編みの道具。(簡素で便利)

エタチ

冬囲いの茅などに縄を通す道具。(鼈から)

エボ エ

疣結い。解けにくい結び方。

サエコウ

修理・修繕・継ぎ剥ぎ。(主にゴム靴)

ザト ソエ

座頭背負い。(包みを肩から腋下に廻す負い方)

ジョウ ヤ

常備。

スケ

手伝い、扶助。

スブ<sup>〇</sup>

術 (スベ)・技術・方法。

セコ

作業の手伝い、協力。

セッキ カセギ

季節労働、出稼ぎ。(農閑期)

セック カセギ

普段は怠けて祭日に働く事。(節句稼ぎ)

テコ

手子、作業の手伝い。

テコ ツキ

手つき、手の動かし方。

トウ ド

作業援助。(「田人」から?)

トショリ シゴト

年寄り仕事、留守番や子守役など。

ニョ ツミ

にお  
鳩積み。 **エナニョ** **ボエニョ**

ハカ

仕事の能率。(「ハカ」が行く・ハカドル)

ヘエ マキ

灰撒き。(消雪)

ベト マキ

土撒き。(消雪)

ヨテ

得手・得意。

ヨナベ

夜業。(一般に八朔の餅を食べた翌日から。)

ワケッチョ<sup>〇</sup>

分け前、配分。

ワッ パカ

作業の割り当て量。

## 【 作業の不如意 】

アエマチ	過失。
アテ ズッポ	出任せ、当て推量。
テツツァ マツツァ	周章狼狽。
テツ パズシ	手から落とす、失策、失敗。
テ モズレエ	手煩い。
トツ バグシ	偶然、まぐれ。
モチャ ツケエ	持ち扱い。モチャ ツケエ カク
ヤツケエ	厄介。

## 【 資材・用材 】

### 《 採取 》

エナ ワラ	稲藁。
ガラ	屑石、石垣の内側に詰め込む。
クヅッ パ	葛の葉。(落とし紙の代用)
ケシ	鳥獣の糞、肥料。
ケシ ゴ	消しご、軟炭。(炬燵用)
コッ パ	材木の切れっ端。(燃料用)
コバ	木羽、屋根葺き材。
コロ	薪の太い物、割り木。(燃料用)
ササッ パ	笹餅・笹飴・味噌蓋に使用。(防腐効力あり)
シーナ	結実しない穂(死稲)。家畜の飼料にする。
シナッ カワ	シナノキの樹皮。藁紐より強い。
シバ	柴。(蔓物を支え雑木、「芝」草では無い。)
シビ	稽。(土間の簀下に敷き、藁蒲団にも用いた。)
スギッ カワ	屋根葺き材。
スギッ パ	杉の葉。(燃料用)
スタ	粗朶。(灌漑・砂防工事などに使う生木)
タマ エシ	楕円形の自然石。

ツ <sup>〇</sup> ツ コ	苞 (ツト)、藁束の上下を結んだ入れ物。
ツナギ	薪・稲・刈草などの結束材。
ドウゴ	丸太、建築材。
ネ <sup>〇</sup> ジッ キ	雑木を束ねる捻り木。(マンサクを常用)
ノエゴ	稲の穂茎。箒・蓑などの素材。(抜き子)。
ヒグサ	干し草。(冬期の家畜飼料に利用)
ヒロロ	蓑の材料。
フカグラ (…オラ)	雪折れした杉材。(ハザ・雪囲いなどに利用)
ヘエ	灰。(肥料・雪消し・滑り止め)
ベト	土。
ボ <sup>〇</sup> エ	雑木・薪。(燃料用)
ホオツパ	朴の葉。(包装用)
モミガラ	土間の筵下に敷く。(防湿・燐炭・肥料に利用)
ヨ <sup>〇</sup> ロツキ	流木。(燃料用)
ヲ	苧 (カラムシ)。

## 《 加工 》

アラナワ	粗縄。(ワラ・スゲが素材)
エタ	板。(用途は広汎、主に雪囲い)
グミ	組み。(三本以上の紐を編む。三つ組・五つ組)
ケシゴ	軟炭。(炬燵用)
コノカ	米糠。(肥料・漬け物)
コ <sup>〇</sup> バ	木羽。(屋根葺き材)
シヨウヨ ッカス	醤油粕。(副食)
スベナワ	繕 <sup>しべ</sup> 縄 (シベナワ)、細縄。
ツトツコ	藁ツト。(藁を利用した容器)
ツナギ	繋ぎ。(藁利用の結束具)
ヒボ	紐。(布利用の結束具)
モミガラ	粃殻。(土間の下敷き、焼き殻は肥料)

## 【 漁法・漁具 】

アエ カケ	鮎（アエ）の友釣り。
アミ ブチ	投網。
エクリ	並んだ二艘の舟を使って鮭を掬う漁法。
カジッカ オトシ	<sup>カジカ</sup> 鮎 落とし。一人が板を踏み、一人が網を持つ。
カジッカ ツキ	箱眼鏡（又は板ガラス）とヤスを利用。
カワ ポシ	川干し。（川を堰き止めて水を汲み出し魚を捕る。）
クジ リ	石の下に隠れた魚を手で掴み捕る。
ケエ ツリ	貝釣り。（川底の泥穴に草の穂を差し込んで釣る。）
ザッコ スキ	笊で小川を漁る。雑魚掬き。
ス ツリ	摺り釣り。釣り竿を水中で摺りながら釣る。
ドジョ ツボ	一升瓶に似た竹製の壺。
ドジョツ ポリ	泥鰌掘り。（川干しして泥中の泥鰌を掘り捕る。）
ハネ ツリ	虫または毛針を水上に浮かせた釣り方。
マス カキ	水中に潜って鱒を搔き捕る。
マチ カワ	岸の仮小屋で、網に掛かる鮭を待つ。
モグリ	潜水漁。
ヨー ツリ	魚釣り。（「ヨ」は「イオ」で魚。）

## 【 鳥 】

オゴエス	鶯。（語頭の「ウ」は「オ」になる。）
ギシ ギシ	燕。
クエナ	水鶏。
ケラ ツツキ	啄木鳥（キツツキ）。
サンギ	鶯。
シッ パタタキ	鶺鴒（セキレイ）。
ツバクラ	ツバメ。ツバクロ <b>ギシギシ</b>
トットツ コ	鶏。 <b>トット コ    コッコ</b>
トッピ	鳶（トビ）。 <b>トンビ</b>
ヒトト	ヒタキ。（春先ごろ人家近くに来る渡り鳥）
ヒヨツ コ	ひよこ。
ミソツ チ	鶺鴒（ミソサザイ）。

【 獣 】

エタチ	鼬。
エン	犬。エン コロ
オサギ	兎。(「ウ」→「オ」)
オシ	牛。(「ウ」→「オ」)
カワソ	獺。(カワウン)
コーツバ	河童。
タノキ	狸。(「ヌ」→「ノ」)
チュー	鼠。(幼児語)
ニヤンコ	猫。(幼児語)
モウモッコ	ムササビ。
モジナ	貉。(「ム」→「モ」)
ワンコ	犬。(幼児語)
ンマ	馬。(「ウ」→「ン」)

【 虫 】

アカ ムシ	恙虫。
アメンボ	川蜘蛛。
アリンゴ	蟻。
エキ ムシ	春先に雪上を這う虫。
エナゴ	蝗。
エモリ	井守。(背は黒く腹は赤色の両棲類、蜥蜴に似る。)
オジ	蛆。(「ウ」→「オ」)
オナッコージ	蛆虫。(オナゴージ)
オニ グモ	女郎蜘蛛。
カナギッチョ	カナヘビ。
カネ タタキ	泥中に棲む、水カマキリ。
カマッキリ	螻蛄 (カマキリ)。
カミ キリ	甲虫の一種。

カン バチ	虎斑の大柄な蜂。
ギャク	蛙。 <b>ゲール</b>
キリ	蟋蟀 (コオロギ)。
キリギス	キリギリス。
ゲールンゴ	オタマジヤクシ。(ンは「の」と同意)
ゲッコロー	源五郎。甲虫目の昆虫、沼沢に棲む。
ケラ	地中に棲む褐色の昆虫、水上をも巧みに泳ぐ。
ザザ ムシ	釣りの餌に使う川虫。
サシ	蛆、ショウジョウ蠅の幼虫。
シバ ムシ	緑色で背部に刺を持つ。樹枝に作った卵殻で越冬。
ジ モグリ	土中に棲む蛇。
シャクトリ ムシ	歩き方に特徴が有る。
スエッチョ	ウマオイムシ。
ダエロウ	蝸牛。(カタツムリ・デンデンムシ)
チョウチョ	蝶。(モンシロ・アゲハ・カラスアゲハ)
ツブ	田螺 (タニシ)。
ドンボ	蜻蛉 (赤・糸・鬼・蚊などの各種)。
ノノ モグリ	布潜り。(蚊の一種、布の目を潜る程に小さい蚊) (ヌーノ)
ハタハタ	機織り虫。(バッタの一種か、体色は緑。)
ビーノジ	川蝻 (カワニナ)。
ブト	ブヨ。(蚊の一種、食われた痕は黒胡麻状の痕が残る。)
ヘエ	蠅。
ヘチマ ムシ	蛾の一種。(蛹の入る殻は繭状で指サックに利用。)
ヘックサ ムシ	悪臭を放つ亀形扁平の虫。
ヘッコキ ムシ	尻から白色のガスを噴き出す鞘翅目昆虫。
ヘッペ	蛇。(青大将・縞蛇・地潜り・蝮・山かかし)
ヘッペノ ツバキ	ミミブシ。(白い泡状で漆の枝などに付く。「ツバキ」は唾。)
ヘル	蛭 (ヒル)。
ポコ	ウスバカゲロウの幼虫。(蟻地獄)
ポコサマ	蚕。
ホツタル	蛍。
マツ ムシ	馬追い虫。(共通語の松虫と異なる。)

ミズ スマシ	黒色で米粒大、水上を旋回する虫。
メドノ ツケエ	冥土の使い、斑猫（ハンミョウ）。
メンメ	這い廻る虫の総称（幼児語）。
メンメズ	蚯蚓（ミミズ）。
ヤマツ カガシ	赤棟蛇。
ヨガ	夜蚊。ヤブガ
ヨド	夜盗虫、根切り虫。
ワンザ	蟬の幼虫。

## 【 魚 】

アエ	鮎。（「ユ」→「エ」）
エワ ナ	岩魚。（「イ」→「エ」）
オコジョ	ハゼに似た淡水魚。
オナギ	鰻。（語頭の「ウ」→「オ」）
オルメ	ウルメ、メダカ。（語頭の「ウ」→「オ」）
カジッカ	鰻（カジカ）。（オトシまたはヤスで捕る。）
カナ	牡鯉。（腹子を持つ。）
ガニ	蟹。（沢蟹・毛蟹）
カヨナギ	川鰻。（体長は20センチほど。）
ケエ	カラス貝。（淡水・泥田で繁殖。）
コエ ニヨ	鯉。（「コイ ノ イオ」の短縮）
コケ	魚鱗（ウロコ）。（コケラ とも言う。）
サケ ニヨ	鮭。（「サケ ノ イオ」の短縮）
サバ	淡水で獲れた鮭・鱒の称。（海水魚の鯖と異なる。）
タラシ	タナゴ。（河水の薬害で絶滅に近い。）
トト	魚。（幼児語）
ハチヨ	蜂魚、外敵を針で刺す。（ナマズに似るが体色は赤。）
ハヨ	ウグイ。（セバヨ・アブラッパヨ）
ピヤコ	脇腹に鮮やかな斑紋がある魚だが不味。
メナ	牝鮭。（筋子を持つ。）



【 山野草・茸 】

アカ ソ	赤麻。
アケブ <sup>〇</sup>	通草、木通 (アケビ)。
アサズキ	ワケギ。
アズキ ナ	マメ科の山菜。
アマンダレ	ヤブ茸、コケ。
エカリ ソウ	碓草。
エキノ シタ	ユキノシタ。(腫れ物の吸い出しに特効)
エチゴ <sup>〇</sup>	苺。(草・木・蔓・蛇・薬缶苺 など)
エブ	山葡萄。
エモ ゴ	自然薯の実。蔓に球状で結ぶ。(ムカゴ)
エラ クサ	皮膚を刺激する野草。
エワ カガミ	岩鏡。
エンキ グサ	紫露草。(花を搾ると紫色のインキができる。)
エンノ キンタマ	イヌフグリ。
オーミン ドロ	ドブ池に生ずる水藻の一種。(青海泥)
オサギ タケ	兔茸。
オド	独活 (ウド)。
オニ ゼンメエ	鬼薇。(大型で毛が多く食用にならない。)
オルエ	擬宝珠、ギボン。(ウルイ)
カタッコ <sup>〇</sup>	片栗。(若葉は食用・球根は片栗粉)
カタハ <sup>〇</sup>	杉平茸。(白色で貝殻状)
カラ エモ	菊芋。
カラス オリ	烏瓜。(多年生の蔓草で卵大の実を結ぶ。)
カラ ムシ	越後縮みの素材、茸。
キツネノ ネドコ	杉林の中などに生える蔓草、葉は毛状。
キノ メ	アケビの芽。(若芽は食用)
クゾ ッパ <sup>〇</sup>	葛。(球根は葛粉、往時は葉をチリ紙に代用)
クワエ	慈姑。
グワン ゾウ	萱草 (カンゾウ)、忘れ草。
ゲェール ッパ	車前草 (オオバコ)。

コーコー ツル	昼顔。朝顔に似た野草。
コーズ	楮。皮は和紙の原料。
コーツパ ノ シンノゴエ	河童の尻拭い・タケニグサ。
コーツポネ	河骨、スイレン科の水草。(一茎一花)
コーモリ	禾本科の雑草。(穂を洋傘風に結んで遊ぶ。)
コクワ	サルナシ。(マタタビ状の甘い実を結ぶ。)
コゴメ	シダ類の一種。(若芽は食用)
ゴン ベエ	滑りヒユ。(根を擦ると赤くなる。)
シシ タケ	舞茸?
ジージー ゼンメエ	丸い穂を持つゼンマイ。
ジ シバリ	地縛り。(地を覆うように群生する乳草)
ジボコ	潰すと煙状に菌を飛ばす毒茸。
シモ タケ	平茸?
ショデ	牛尾菜。(林中の蔓草、若芽は食用)
ジョーズ ダマ	数珠玉草。(実は乾燥させて数珠玉に使用)
スギナ	畑の雑草。(ウサギの好餌。「繋ぎ当て」に遊ぶ。)
スズメノ カタビラ	寒冷期も枯れない強靱な雑草。
スズメノ テツポウ	田中に群生する禾本科の雑草。
スズメノ チョンチョンゲ	カタバミ。(葉は家紋にデザインされる。)
スッカシ	ギンギシ。(穂莖は塩漬けにして食用)
スツカンボ	虎杖 (イタドリ)。
スツパツ	イガホウズキ、酸漿。
ズミ	苔桃。
ゼンメエ	ゼンマイ。
ソバ ススリ	蕎麦 (ソバ) 啜り。(食用にはならない野草)
ダエ チカラ	蕨。
ダエロウツ パ	大葉ギンギシ。
タ ガラシ	田芥子、タネツケバナ。
タツノ ケ	竜の髭。
チチ グサ	乳草。(白汁を出す草の総称)
チドメ グサ	血止め草。
チャワン バナ	一輪草。

チヨウセン バナ	猩々袴。
ツクシン ボ	土筆。
テンゴノ ハナ	天狗の鼻、自然薯の花殻（三稜翼）。
トリ アシ	ユキノシタ科の山菜、鳥足升麻。
ドンボ グサ	半月形の平たい萼が特徴の雑草。
ネコ ジャヤラカシ	ネコジャラシ。（穂は仔猫の尾に似る）
ネジ バナ	文字摺り草。（球根で冬をこす多年草）
ネズミ タケ	箒茸。（黄色の珊瑚に似る）
ノスト ハギ	萩。
ノドクシ	牛尾菜（シオデ）。（山アスパラ）
ノノ バ	香りは無いが青紫蘇に似た山菜。（布葉？）
ノン ピロ	野蒜。（「ノビル」の撥音化）
バカ グサ	草虱。（種子の撒布を動物に頼る。）
ハサミ グサ	ツメクサ。（道端に群生する。）
ハッカ グサ	薄荷草。
ハンダウ	升麻の一種。（若芽は食用）
ハンゲ	カラスビシャク。（畑の雑草）
ヒヨウ ナ	萹（ヒユ）。（若芽は食用）
ヒヨッコ グサ	ハコベ。（畑の雑草）
ヒル ゴオ	昼顔。
ヒロロ	笠菅。（蓑の主材）
フーキ	蒨。（茎は食用、葉は苺搾りに利用）
フーキン トウ	蒨の莖。（苦味の強い山菜）
フーズケ	鬼灯（ホウズキ）。
ヘッペ ノ アカシタテ	鑑草（アブミソウ）、天南星。マムシグサ
ペンペン グサ	ナズナ。（田畑に多い雑草の一種）
ポウ ナ	ヨブスマソウ。（若葉は食用）
ホツタル バナ	蛸袋。（薄紫、釣り鐘状）
ボン バナ	盆花。
マス	蚊帳釣り草。（茎を両端から裂くと舂型になる。）
ミズ ナ	ウワバミ草。（赤・青の二種とも食用）
ミズヒキ グサ	水引草、蓼科の雑草。

ミズ マツ	梅花藻。(清流に繁殖する。)
ミツ グミ	オサ シダ (方言名は疑問。)
ミツバ	クローバー。
ミヤマツ	山葡萄、野葡萄。
メクラ ショウブ	射干。(シヤガ)
モチ グサ	蓬、または兔の餌になる乳草。
ヤクワン エチゴ	薬缶苺。
ヤマツ カブ	球根は焼いて食用にする。(水芭蕉の一種か?)
ヤマ ミチ	おさ羊歯。
ヲ	苧・カラムシ。繊維は織物の原料。
ンマ ゼリ	馬芹、キンポウゲ科の毒草。(当帰に似る。)
ンマノ ボタモチ	兔の餌になる野草。(苧環の一種。)

## 【 樹木・果実 】

エチジク	無花果。(イ → エ)
エッチョウ	銀杏。(イ → エ)
エンジョ	槐 (エンジュ)。(ジュ → ジョ)
オジ ゴロシ	蛆殺し。(ハナシュンギ) (ウ → オ)
オツギ	空木、卯木 (ウツギ)。(ウ → オ)
オッコ	這いおっこ。(笏の材となる所から「一位」とも。) <b>エチエ</b>
オラ ジロ	裏白。(正月飾りに用いる。)(ウ → オ)
オルシ	漆 (ウルシ)。(ウ → オ)
カタシヨ	楓。(杵の用材)
カブツ	切り株。
キワダ	黄檗。(眼疾・胃腸の薬となる。)
クワ	桑。(蚕の餌。子供の関心は桑葚)
クワシバミ	殻の形は小粒な銀杏に似る。(食用)
ケンブ	玄圃梨。
コウズ	楮。(繊維は織物の原料)
コクワゴ	コクワ、猿梨。(シラクチヅル)
ゴミ	茱萸 (グミ)。(初夏の田植え茱萸・晩秋の川原茱萸)

サンショ	山椒。
シナ	樹皮は紐として使用。(菩提樹の一種か。)
ズックシ	熟し柿。
ズミ	苔桃、棠梨。
ナラガマ	ドングリ。
ネックシ	根本。ネッコ
ノバタマ	ムクロジ、烏羽玉。(実を羽子に使う。)
ハン	榛、サトトネリコ。(畔に植えて稲架けに利用。)
ピッピ	椿。(葉で笛「ピッピ」を作る。)
ヒメコ	胡桃の一種。(菓子グルミ)
フウ	朴(ホウ)の木。(放射状の葉で風車を作る。)
マシ	毒空木(ドクウツギ)。
モチノキ	亀の木。
ヤドメ	枝葉が密生して矢を止めると言う庭木。
ヤマツクワ	コクワゴ、コクワ、猿梨。
ヨーズ	柚子。(ユ→ヨ)

## 【自然現象】

### 《 気象関係 》

アナレ	霰。(ラ→ナ)
エキ(ヨキ)	雪。(ユ=エ=ヨ)
エキ アメ	霰。
エキレ	高温多湿で無風の天気。(動詞・エキレル)
エテエ	凍みつく寒さ。(動詞・エテル)
オ シメリ	慈雨、小雨。
カナツクリ	氷柱・つらら。
カンナリ	雷。
キ チゲエ	急変する天候。
ギロ	低温のため氷って滑る雪面。
グーグー エキ	水分の少ない締まった雪。
コナ エキ	粉雪。

ザラメ エキ	水分の多いザクザク雪。
シミ	凍み。(凍みがヒル)
ゼエ	氷。(ゼエが張る)
ダシ アレ	荒天。
ツヨ	露。梅雨時 (ツヨドキ)。
ナゼ	雪崩 (ナダレ)。
ネジ	虹。
フキ	吹雪。
ベシャ エキ	雨雪。
ホータエ エキ	粉雪。(包帯雪?)
ヨーダチ	夕立。
ヨーダ ツツアマ	雷様。

#### 《 地形関係 》

アナ ポコ	地面の窪み。
エシッ クワラ	一面の石原。
エリ	奥まった地。(沢の <b>入り</b> ・千の <b>入り</b> ・滝の <b>入り</b> )
ガラン ポコ	空洞。
ガンクラ	峻しい崖。
カン ノ	苺り野、山裾の崩れ地。
タナ	水溜まり、池。 <b>タマリ</b>
ツルネ	尾根・峯。
ト <sup>〇</sup> ロ	澗。川水の深く淀んだ処。
ナセエ	なだらかな傾斜。
ヒラ	山肌の開けた斜面。(陰平・野老平)
フ <sup>〇</sup> チ	淵、崖下の底無し沼。
ヘッコミ	凹み。
ヘツリ	絶壁や川縁などの峻岨な通路。
ホーリ	堀、凹み、人工の小川。
ボンコ	盛り上がった状態。(窪みの反対)
ママ	流れが停滞した深み。(魚の隠れ場)
ヤチ	谷地・湿地。

ヨド

水が淀む所、底なし沼。

### 《 その他 》

アワ ポコ

泡。アワ フク（水中の発酵気体）

オズ マキ

渦巻き。（ウ→オ）

ケブ

煙、靄。（マ行→バ行、ム→フ）

ナゼ

雪崩。

ナリ ケシ

鳴り返し、硯。（反響）

ネバ

粘土、青ベト。

ノメ

水垢などの滑り。（ヌ→ノ）

マキメ

渦、竜巻。（頭のツムジと形が似る。）

ヨゲ

湯気、水蒸気。（ユ→ヨ）

## 【 子供社会 】

### 《 遊戯 》

アシガキ オニ

鬼ごっこの一種。（片足での追いかっこ。）

アヤツ トリ

綾取り。（網・川・鼓・箒などを作る）

アエコ

互角、勝負無し。エエコ

エキ ダルマ

雪達磨。

エシ ケリ

石蹴り。

エッサン プッサン

木の枝に乗って揺さぶる遊び。

エッチョ ッコ

銀杏の賭け合い。

オッ カケッコ

追い掛けごっこ。

オデ ズモウ

腕相撲。（指相撲、草相撲）

オニ ゴト

鬼ごっこ。（足掻き・隠れ・手繋ぎ・目閉り。）

カゲ オツシ

影絵映し。（イヌ・キツネなどを障子に映す。）

カゲ フミ

影を踏み付ける鬼ごっこ。

ギロ フカシ

雪面を擦って氷の様に光らせる。

クルミ ッコ

胡桃の賭け合い。

ケッコ

交換遊び。

ゲッポ	勝負事の最下位。(ピリッケツ)
ケン	ジャンケン。(拳)
ザク	お手玉。
シミワタリ	凍み渡り。
ショウタレガミ	唾液で濡らす写し絵。
ジレエ	地雷遊び。
ズエノー	雪で作った滑り台。
タガマワシ	針金のタガを路上で廻す。
タケドンボ	竹蜻蛉。
タケンマ	竹馬。
チブントリ	地分捕り。
デングリゲェシ	転回。
デングルマ	肩車。
テンマル	手鞠。
トッピートッピー	仰向けに寝て挙げた足に幼児を乗せる。
ドッポ	雪道の落とし穴。
トリオトシ	籠を利用した小鳥の捕獲。
ナワットビ	縄跳び。
ニラメッコ	睨み合い。
ハジキ	おはじき。
パチ	メンコ。
バンバフミ	雪上の馬場(相撲場)作り。
ピッピーナラシ	笛鳴らし。(竹・椿の葉・草の葉などを利用)
ブエチョウ	ぶらんこ。
フーキッパシボリ	蔦の葉を漏斗状にして桑苺を搾る。
フーズケナラシ	鬼灯を鳴らす遊び。
ベロカキ	落書き。
ポウサガシ	宝探しの一種。
ホーッパマワシ	朴の葉で作った風車を廻す。
ホツタルトリ	蛍狩り。(各種の虫採り・「虫」の項を参照)
ホンコ・オソッコ	賭け事の真偽。
マメノテアミ	豆の手細工。(ガラメンドウ・鞍・座布団)



マルツ トビ	ケンケンパー。
マンマ ゴト	ママゴト。
ミズ アビ	水泳ぎ。
ミツ ナメ	ユリの花卉やミツバナを吸う。
モチ カミ	麦・糯・杉ヤニ・松ヤニなどを噛む。
ンマツ トビ	馬跳び。

※ 「オニ」の決め方

「ベントオン シュウベントオン オシラクラ ナマヨモギシ。」(男子)

「ボンさん ボンさん ドゴ行ぐの 私は田圃へ稲刈りに お前が来ると邪魔になる このカンカン坊主クソ坊主 後の正面ダーレ？」(女子)

※ 「…ツクラ」「…ッコ」は「…競べ」の意。

(跳びツクラ・ッコ、投げツクラ・ッコ、银杏ッコ、胡桃ッコ)

《 喧嘩 》

アカメンクサレ	あかんべえ！
アテ ナシ	喧嘩の仕返し。
エケツ ツラ	生意気顔。
エサケエ	いさか 諍い、喧嘩。
エジ クサレ	意地悪。
エジク ナシ	悪戯。「意気地なし」とは異なる。
エジメ	イジメ。
エツ キビ	いい気味。
カンベ	勘弁、過失の容赦。 <b>カンニ</b>
ダマカシ	騙し事。
ドミソ	臆病者、弱虫。
ナキ ベッツォ	泣きべそ。
ハギリ	端切り、遊び仲間から外す事。
ハッチン コ	鉢合わせ。
ベエツツリ エエ	奪い合い。

※ 喧嘩時の囃子 (附録「囃子唄」参照)

「エマ（今） ナエタ（泣いた） コゾウガ チョエト デテ ワラッタ ワラッタ。」

「ナキムシ ケムシ ハサンデ ブチャレ（捨てる） オーカワ（大川） ヘ ブチャレ。」

「マケテ ニゲルハ カナギツチョウ（かな蛇） ヘツベ（蛇） ニ オワレテ シカタガ ネエ。」

## 《未熟》

アオ ズッコ	青二才。
アップリ	水溺。
ガニ グソ ヤロウ	蟹糞野郎。（体便の取れない嬰兒）
コーツ タレ	川に落ちて衣服を濡らすこと。（川渡り餅）
サンピン	役立たず。
シッ パネ	尻跳ね。（草履の後ろで跳ね上げる泥）
ハナツ タレ	洩垂れ。（幼童を見下げた表現）
ヒヨッコ ヤロウ	幼鳥、世間知らず。
ボボツ コ	甘えん坊。
ボンクラ ヤロウ	間抜け者。
ヨーズツ タレ	涎を垂らす様な小僧ッ子。

## 《叱責》 ※（【人性】と重複する語が混じる。）

アゴ ツリ	口答え。
アフレ（モン）	乱暴。（者）
アマサレ（モン）	卑猥なことを口にする。（者）
エジクレ（モン）	捻くれ。（者）
エジケ（モン）	卑屈。（者）
エワツ クソ	弱虫。
オキョウ スキ	お調子者。
オス コキ	嘘つき。 <b>ドス コキ デッポ コキ</b>
オッカナ ガリ	弱虫、臆病者。
オツツアレ	叱責。（「叱られる」の名詞化）
カタツ パリ	意地っ張り、ひねくれ者。
ガツポウ ギ	乱暴。
キモ ヤキ	短気、怒りっぽい子。

ギョウサ ワル	不作法。
キリ ナシ	欲求の際限なし。
キンマ	神経質。キンマッカス
クエツ タレ	食いしん坊。
コッペツ	小生意気。
サベツ チョ	お喋り。
ジクネ (モン)	惚け。(者)
シッタカ ブリ	知った振り。
ショーシ ガリ	恥ずかしがり。
ショーツ タレ	不潔者。
ショード ナシ	過ちを繰り返す困り者。
ジョッペエ	出しゃばり。
シリ ヤケ	尻灼け・飽きっぽい性格。
ズルケ (モン)	怠慢。(者)
ソク ナシ	根性無し。ズクナシ
ソモツ チョ	悪戯。
タケツ チョ	癩癩持ち。「 <sup>たけ</sup> 猛」か?
ドクサレ	臆病者。ドミソ
ナキツ タレ	泣き虫。「タレ」は接尾語。Ⅲ部を参照)
ネボツ コキ	寝坊者。
ノメシ	怠慢。ノメシ コキ (怠け者)
ヒト モジリ	はにかみや、人見知り。
フラ ヤロウ	風来坊、阿呆者。
ベロ カキ	落書き。
ヘン ナシ	常識外れ、変人。
ポボツ コ	甘えん坊。
ヨーズツ パリ	夜更かし。(朝寝坊の反対)
ヨーバリ コキ	寝小便垂れ。
ヨエツ ピカリ	夜更かし。
ワルサツ コキ	いたずら者。(コキ「…する者」)

## 《幼児語》

## 促音

ア <sup>o</sup> ッチ (他所)	カッカ (母)	コッコ (鶏)
シッコ (尿)	ダッコ (抱擁)	チッコ (少量)
トット (鳥)	パッパ (煙草)	ホッペ (頬)
ポッポ (鳩)	ポッポ (懐)	ポッポ (汽車)

## 撥音

アンボ (餅)	アンヨ (足)	ウンチ (糞)
オンモ (外)	オンブ (背負)	カンコ (下駄)
コンコ (咳)	タンタ (足袋)	チンコ (陰茎)
ネンネ (就寝)	ポンポ (腹)	マンコ (女陰)
ミンミ (耳)	メンメ (虫)	モンモ (化物)
ワンコ (犬)		

## 畳音

アバアバ (別離)	アンアン (開口)	ウンウン (排便)
オキオキ (目覚)	カミカミ (咀嚼)	コンコン (咳)
タンタン (足袋)	チンチン (陰茎)	テンテン (頭)
ナエナエ (保存)	ノウノウ (神様)	ノミノミ (嚙下)
ハエハエ (匍匐)	ヒンヒン (馬)	メーメー (山羊)
モーモー (牛)	ワンワン (犬)	リンリン (鈴)

## 動詞

- ※ 動作を表し、言い切りは全て[u]の段になる。(活用は五種、Ⅲ部)
- ※ 主語の「性」「数」に依る語形の変化は無い。
- ※ 時制は名詞・副詞・助動詞などの補助に依り判断できる。
- ※ 接尾語「ガル」と助動詞「タガル」の付く動詞は類似するが、前者は形容詞の語幹、後者は動詞の連用形に接続する。

【 動作・存在・思考 】

アエ ブ〔自バ五〕	歩む。 <b>アヨブ</b> <b>エエブ</b>
アガル〔他ラ五〕	食べる。家に入る。
アゲル〔他ガ下一〕	供える。
アゲル〔他ガ下一〕	嘔吐する。
アゴヲ ツル〔複・他ラ五〕	口答えをする。〔複〕・(アゴを吊る。)
アス ブ〔自バ五〕	遊ぶ。(動作・行動の余裕)
アダケル〔自カ下一〕	暴れる。発情する。
アッタラ ガル〔他ラ五〕	惜しがる。(ガルは接尾語。)
アッチャ ガル〔他ラ五〕	暑がる。(ガルは接尾語。)
アツバル〔自ラ五〕	集まる。 <b>アツベル</b> 〔他バ下一〕(マ行→バ行)
アバラウ〔自ワ五〕	欲張る。
アフレル〔自ラ下一〕	暴れる。
アマサレル〔自ラ下一〕	猥褻なことを口にする。
アメル〔自マ下一〕	禿げる。
アヨブ〔自バ五〕	歩む。 <b>アエブ</b> とも言う。(マ行 → バ行)
エエノリオー〔自ワ五〕	相宣り合う。〔複〕・(言い争う)
エガル〔他ラ五〕	好がる。(ヨ→エ) (「ガル」は動詞化の接尾語。)
エキレル〔自ラ下一〕	暑く湿気がこもる。
エグ〔自ガ五〕	行く。(語尾の濁音化)
エゴガル〔他ラ五〕	蔽がる。
エゴク〔自カ五〕	動く。(「ウ」→「エ・オ」) <b>エゴカス</b> 〔他サ五〕
エサブル〔他ラ五〕	揺り動かす。 <b>ヨサブル</b> (「ユ」 = 「エ」 = 「ヨ」)
エジクレル〔自ラ下一〕	拗ねる。
エジクル〔他ラ五〕	弄(イジ)る。 <b>エジル</b> の延言か。
エジケル〔自カ下一〕	怖さに萎縮する。
エジメル〔他マ下一〕	苛める、虐める。
エジル〔他ラ五〕	弄る。
エスグ〔他ガ五〕	濯ぐ、洗う。 <b>ヨスグ</b> (「ユ」 = 「エ」 = 「ヨ」)
エスル〔他ラ五〕	揺する。(「ユ」 = 「エ」 = 「ヨ」)
エタガル〔他ラ五〕	痛がる。(「ガル」は動詞化の接尾語。)
エツケル〔他カ下一〕	結いつける。(「ユ」 = 「エ」 = 「ヨ」)

エテル〔自タ下〕	凍てる、冷える。
エナダク〔他カ五〕	頂く、拝受する。
エブス〔他サ五〕	煙を立てる、燻す。 <b>エブル</b> 〔自五〕
エボクル〔自ラ五〕	ふてくされる。 <b>エボクレル</b> 〔自下〕
エボム〔自マ五〕	果実が熟しかかる。
エム〔自マ五〕	果実が熟す。(笑む?) <b>オム</b>
エワル〔自ラ五〕	弱る、困る、疲れる。(「ヨ」=「エ」)
オエル〔自ア下〕	雑草や体毛が生える。 <b>オヤス</b> 〔他五〕
オエル〔他ア下〕	植える。(語頭の「ウ」→「オ」)
オエル〔自ア下〕	終わる。 <b>オヤス</b> (終やす)〔他サ五〕
オカブ〔自バ五〕	浮かぶ。 <b>オカベル</b> 〔他バ下〕
オキョウズク〔自カ五〕	調子に乗って騒ぐ。
オゴク〔自カ五〕	動く。(「ウ」→「エ・オ」) <b>オゴカス</b> 〔他サ五〕
オシコクル〔他ラ五〕	背後から突き押す。 <b>コクル</b> は強意。
オシヨル〔他ラ五〕	折る。 <b>オッポシヨル</b> 〔他ラ五〕
オシヨレル〔自ラ下〕	折れる。(「押し折れる」か。)
オスメル〔他マ下〕	薄める。(語頭の「ウ」→「オ」)
オズメル〔他マ下〕	埋める。(語頭の「ウ」→「オ」) <b>ンメル</b>
オタウ〔他ワ五〕	歌う。(語頭の「ウ」→「オ」)
オタガウ〔他ワ五〕	疑う。(語頭の「ウ」→「オ」)
オダケル〔自カ下〕	動物が発情する。
オチョクル〔他ラ五〕	かまう、弄ぶ。
オッカナガル〔他ラ五〕	怖がる。(「ガル」は動詞化の接尾語)
オックェル〔他ア下〕	塞ぐ。(「押し塞ぐ」か。)
オッコス〔他サ五〕	打ち壊す。 <b>ブッコス</b> <b>ポッコス</b>
オッタクル〔他ラ五〕	追い立てる。 <b>オッタテル</b>
オツァンル〔他ラ下〕	叱られる。(受身 <b>レル</b> 「 <b>ンル</b> 」の複合。)
オツメル〔他マ下〕	押し詰める。押し詰める。
オツポシヨル〔他ラ五〕	へし折る。
オツル〔自ラ五〕	映る。 <b>オツス</b> 〔他サ五〕(映す) ウ→オ
オツル〔自ラ五〕	感染する。 <b>オツス</b> 〔他サ五〕(感染させる)
オツル〔自ラ五〕	移る。 <b>オツス</b> 〔他サ五〕(移す) ウ→オ

オド ケル〔自カ下一〕	道化する、巫山戯る。
オナ ウ〔他ワ五〕	畝う。(語頭の「ウ」→「オ」)
オム〔他マ五〕	生む。(語頭の「ウ」→「オ」「ン」) <b>ンム</b>
オム〔他マ五〕	績む。(語頭の「ウ」→「オ」「ン」) <b>ンム</b>
オム〔自マ五〕	熟す。(語頭の「ウ」→「オ」「ン」) <b>ンム</b>
オヤマ ウ〔他ワ五〕	敬う。(語頭の「ウ」→「オ」)
オル〔他ラ五〕	売る。(語頭の「ウ」→「オ」)
オルサ ガル〔他ラ五〕	煩がる。(語頭の「ウ」→「オ」)
オレシ ガル〔自ラ五〕	嬉しがる。(語頭の「ウ」→「オ」)
オロ ノグ〔他ガ五〕	間引く。 <b>ノグ</b> は「抜く」(「ヌ」→「ノ」)
カウ〔他ワ五〕	塞ぐ。(栓をカウ) 支える。(棒をカウ)
カグル〔他ラ五〕	勘ぐる、疑う。
カケル〔他カ下一〕	家畜を交尾させる。
カジカ ム〔自マ五〕	手足が凍えて自由に動かなくなる。
カシガル〔自ラ五〕	傾く。 <b>カシゲル</b> 〔他下一〕(傾ける。)
カズケル〔他カ下一〕	責任を転嫁する。
カセル〔他サ下一〕	かぶれる。漆にかぶれる。
カタガル〔自ラ五〕	傾く。 <b>カタブク</b> 〔自カ五〕
カタル〔自ラ五〕	仲間に加わる。 <b>カテル</b> 〔他下一〕(加える)
カツネル〔他ナ下一〕	担ぐ。
カッパラウ〔他ワ五〕	盗み取る。
ガナル〔自ラ五〕	怒鳴りたてる。 <b>ガル</b> 〔自ラ五〕
カメル〔自マ下一〕	赤く爛れる。
ガメル〔他マ下一〕	盗む。
カヨガル〔他ラ五〕	痒がる。(「ガル」は動詞化の接尾語)(ユ→ヨ)
カラゴク〔他カ五〕	絡み付ける。
ガリタテル〔自タ下一〕	怒鳴り立てる。
カンマウ〔他ワ五〕	弄う、相手にする、手を出す。(撥音の添加)
カンモス〔他サ五〕	掻き回す。(主に液体など。)
カナル〔他ラ上一〕	借りる。(「リ」の撥音化。)
カナル〔他ラ上一〕	枯れる、潤れる。(「レ」の撥音化。)
キッタナガル〔自ラ五〕	汚ながる。(「ガル」は動詞化の接尾語)

キモ ヲ ヤク〔自カ五〕	腹立つ。〔複〕
キンル〔自ラ下一〕	切れる。〔「レ」の撥音化。〕
クサル〔自ラ五〕	水に濡れる。〔腐敗と同音だが別語〕
クジル〔他ラ五〕	生きた魚を掴み捕る。
クダス〔他サ五〕	下痢をする。
クタバル〔自ラ五〕	斃れる、伸びる、死ぬ。
クツツク〔自カ五〕	付く、繋がる。クツツケル〔他下一〕
クドク〔自カ五〕	嘆く、口説く。
クベル〔他バ下一〕	燃やす、焚く。
クラシツケル〔他カ下一〕	喰らわしつける、殴りつける。〔複〕
クルム〔他マ五〕	包む。クルマル〔自ラ五〕
クウェル〔他ア下一〕	啜える、口に入れて歯で噛む。
クンル〔自ラ下一〕	暮れる。〔「レ」の撥音化。〕
クンル〔他ラ下一〕	呉れる。〔「レ」の撥音化。〕
ケエル〔他ア下一〕	液体を汲む。〔汲み出す → ケエダス〕
ケエル〔他ア下一〕	交換する。〔ケエッコ〕
ケツタクル〔他ラ五〕	蹴飛ばす。〔複〕〔タクルは強意の接尾語〕
ケツツマヅク〔自カ五〕	蹴り躓く。〔複〕
ケナッチョガル〔他ラ五〕	羨 <sup>けな</sup> りがる。〔「ガル」は動詞化の接尾語。〕
ケブツタガル〔他ラ五〕	煙がる。〔「ガル」は動詞化の接尾語。〕
コウッチナガル〔他ラ五〕	固がる。〔「ガル」は動詞化の接尾語。〕
コク〔他カ五〕	「する」の代動詞。
コク〔他カ五〕	扱く、穀物の穂から実を落とす。
コグ〔他ガ五〕	引き抜く。〔「漕ぐ」は別語〕
コクル〔他ラ五〕	擦る。〔藁細工の艶を出す。〕〔人体の垢を落とす。〕
コザク〔他カ五〕	草や雪を掻き分けて進む。
コジクル〔他ラ五〕	振って引っ張る。〔「コジル」の延言か〕
コシャウ〔他ワ五〕	拵える・作る。
コチヨパス〔他サ五〕	擦る。
コツク〔他カ五〕	小突く、叩く。
コネクル〔他ラ五〕	捏ねる。〔「コネル」の延言か〕
コマザク〔他カ五〕	細かく切り裂く。



コ ンル〔自ラ上一〕	懲りる。(「リ」の撥音化。)
サガ ネル〔他ナ下一〕	探す。
ササリ コム〔自マ五〕	嵌り込む、熱中する。〔複〕
サ <sup>o</sup> ス〔他サ五〕	密告する。
サバ ク〔他カ五〕	薄い物を切り破る。(「裁く」とは別語)
サブ ガル〔他ラ五〕	寒がる。(「ガル」は動詞化の接尾語。)
サベ クル〔他ラ五〕	喋る。(「サベル・喋る」の延言か)
サラ ウ〔他ワ五〕	攫う。(鬼が <b>サラ ウ</b> 。)
サラ ゴク〔他カ五〕	寄せ集める。
サワ ス〔他サ五〕	茹でる。(柿のシブを抜く。)
ジク ネル〔自ナ下一〕	拗ねる(幼児)。道化する(大人)。
シク ル〔他ラ五〕	閉じる、瞑る。(目を「シクル」)
シケル〔自カ下一〕	水分を含んで湿気を帯びる。
シゲル〔他ラ五〕	購入する。買う。
シゴク〔他カ五〕	扱く、穂粒を擦り落とす。
シタ ム〔他マ五〕	茶・湯などの液体を注ぐ。汲む。
シナク レル〔自ラ下一〕	萎びて軟らかくなる。
シブ ガル〔他ラ五〕	渋がる。(「ガル」は動詞化の接尾語)
シマ ウ〔他ワ五〕	仕舞う、保存する、片付ける。
シ <sup>o</sup> ヤ グ〔他ガ五〕	叩きつける。
シャゴナ ル〔自ラ五〕	しゃがむ。チヨゴナ ル〔自五〕
ジャ ミル〔自マ上一〕	泣き喚く、駄々を捏ねる。
ショーシ ガル〔他ラ五〕	恥ずかしがる。(「ガル」は動詞化の接尾語)
ショッカラ ガル〔他ラ五〕	塩辛がる。(「ガル」は動詞化の接尾語)
ショ ミル〔自マ上一〕	患部が痛む。
ショ ム〔自マ五〕	味が浸み込む。
シル〔他サ上一〕	為 <sup>す</sup> る。(方言ではサ変より サ行上一段に活用する。)
スクダマ ル〔自ラ五〕	しゃがみ込む。
スグル〔他ラ五〕	藁をスグ <sup>o</sup> る。(シビを取る。)
スケル〔他カ下一〕	援助する、手助けする。
スゲル〔他ガ下一〕	挿す、付ける。(下駄の緒など)
ズッ コケル〔自カ下一〕	緩んで抜け落ちる。

スツツナベル〔自ラ五〕	滑る。 <b>スナナベル</b> 〔自ラ五〕
スツペェガル〔他ラ五〕	酸っぱがる。「ガル」は動詞化の接尾語
スツポノゲル〔自ガ下一〕	履いた靴・嵌めた物が脱ける。〔複〕
スナゴク〔他カ五〕	擦り落とす、しごく。
スビル〔自バ上一〕	鬆（ス）が入る。（腫れが萎む。） <b>ツビル</b>
スベル〔他バ下一〕	藁細工などで縄・紐を結び付ける。
スボム〔自マ五〕	萎む。 <b>スボメル</b> 〔他下一〕（傘などを）
ズル〔自ラ五〕	場所を動く、移動する。 <b>ズラス</b> 〔他サ五〕
スワグル〔他ラ五〕	吸い付く、しゃぶる。 <b>スワブル</b>
セエル〔他ア下一〕	勧める、強いる。
セガム〔他マ五〕	無理に頼む、ねだる。
セギル〔他ラ五〕	流れを堰き止める。（瀬 切る）
セツナガル〔他ラ五〕	悲しがる。「ガル」は動詞化の接尾語
ソウ〔他ワ五〕	背負う（荷物）。「人」を背負う場合は「 <b>ボウ</b> 」
ソクネル〔他ナ下一〕	損ねる、失敗する。 <b>ソコネル</b>
ソツケル〔自カ下一〕	そびれる。（寝ソツケル）
ソベエル〔自ア下一〕	甘える。
ソベル〔自ラ五〕	横になる、寝そべる。
ソロゴク〔他カ五〕	揃える。（ <b>ソロゴエル</b> とも言う。）
タガク〔他カ五〕	携える、手に持つ。（持参する）
タカル〔自ラ五〕	集まる。発生する。（蠅がタカル）
タクダマル〔自ラ五〕	纏れ固まる、蟠る。
タゼル〔他ザ下一〕	患部を薬湯に浸す。
ダマカス〔他サ五〕	騙す。（ <b>ダマクラカス</b> 。「カ」はⅢ部【延言】参照）
タマゲル〔自ガ下一〕	魂消る、驚く。
タンネル〔他ナ下一〕	訊ねる、訪ねる、探す。
タンル〔自ラ上一〕	足りる。「リ」の撥音化。）
タンル〔自ラ下一〕	垂れる。「レ」の撥音化。）
チッコガル〔他ラ五〕	小さがる。「ガル」は動詞化の接尾語
チビル〔他ラ五〕	シッコ（小便）を洩らす。
チヨゴナル〔自ラ五〕	蹲る、しゃがむ。 <b>チヨチヨコナル</b> 。
ツオガル〔自ラ五〕	強がる。「ガル」は動詞化の接尾語（ヨーオ）

ツクバル〔自ラ五〕	坐る。
ツツケル〔自ア下一〕	つか 瘡える。流れが止まる。
ツツコクル〔他ラ五〕	突き飛ばす。(コクル は強意の接尾語)
ツツビル〔自バ上一〕	腫れが引く。
ツツベタガル〔他ラ五〕	冷たがる。「ガル」は動詞化の接尾語
ツツマジル〔他ラ五〕	抓む。
ツツマッコガル〔他ラ五〕	窮屈がる。「ガル」は動詞化の接尾語
ツツム〔自マ五〕	交尾する。
ツツノメル〔複・自ラ五〕	俯せに倒れる。
ツツデッコガル〔他ラ五〕	大きがる。「ガル」は動詞化の接尾語
ツツテッパグス〔他サ五〕	手違える。
ツツテモズレカク〔他カ五〕	手煩いする。〔複〕
ツツドカス〔他サ五〕	退かす。ドケル〔他カ下一〕(ノ→ド)
ツツドク〔自カ五〕	退く。(ノ→ド)
ツツドツク〔他カ五〕	殴る。(ド は強意の接頭語。)
ツツトッパグス〔他サ五〕	取り違える。誤る。
ツツトブ〔自バ五〕	走る、跳ぶ。(「飛ぶ」と異なる。)
ツツトボス〔他サ五〕	灯す。(マ行はバ行と共通、ボ=モ)
ツツトンガル〔自ラ五〕	尖る。(撥音・「ン」の添加)
ツツナス〔他サ五〕	借りた物を返済する。
ツツナドル〔他ラ五〕	準る。
ツツナメクル〔他ラ五〕	舐める。「ナメル」の延言か?)
ツツナメズル〔他ラ五〕	舐め廻す。
ツツネクガル〔他ラ五〕	憎がる。「ガル」は動詞化の接尾語
ツツネコジル〔複・他ラ五〕	寝相が悪く首筋などを痛める。
ツツネジケル〔自カ下一〕	捻れる。ネジケル〔他ラ五〕
ツツネソツケル〔自カ下一〕	寝そびれる。〔複〕
ツツネソベル〔自ラ五〕	横たわる。
ツツネブタガル〔自ラ五〕	眠がる。「ガル」は動詞化の接尾語
ツツネブル〔自ラ五〕	眠る。(マ行はバ行と共通、ム=フ)
ツツネブロケル〔自カ下一〕	寝惚ける。
ツツネマル〔自ラ五〕	坐る、横になる。

ノカル〔自ラ五〕	ぬかる、埋まる。(「ヌ」→「ノ」)
ノグ〔他ガ五〕	抜く。(「ヌ」→「ノ」)
ノグ〔他ガ五〕	脱ぐ。(「ヌ」→「ノ」)
ノゲル〔自カ・ガ下一〕	脱げる。(「ヌ」→「ノ」)
ノゴウ〔他ワ五〕	拭う。(「ヌ」→「ノ」)
ノス〔他サ五〕	平らに伸ばす。(ノシ餅)
ノスム〔他マ五〕	盗む。(ノストツ → 盗人) (「ヌ」→「ノ」)
ノッカル〔自ラ五〕	上に乗る。ノツケル〔他カ下一〕
ノッコガル〔他ラ五〕	小さがる。(「ガル」は動詞化の接尾語)
ノツタクル〔他ラ五〕	塗り着ける。〔複〕 (「ヌ」→「ノ」)
ノメス〔他サ五〕	倒す。(多く「ブチ・打ち」と複合)
ノレル〔自ラ下一〕	濡れる。
ノル〔他ラ五〕	塗る。(「ヌ」→「ノ」)
ノル〔他ラ五〕	伸びる、反り返る。
ノルム〔自マ五〕	温む。(「ヌ」→「ノ」)
ハギル〔他ラ五〕	仲間から外す。(「端切る」か?)
ハグル〔他ラ五〕	覆いを剥ぐ。頁を捲る。
ハジケル〔自カ下一〕	出しゃばる。ハジク は他動詞
ハゼル〔自ザ下一〕	飛び散る。(燃烧・乾燥して中の実が飛び出す。)
ハタク〔他カ五〕	叩く。(戸を……、頭を……)
ハダケル〔他カ下一〕	広げる。(胸・股の「肌」を開ける。)
ハッコガル〔他ラ五〕	冷たがる。(「ガル」は動詞化の接尾語)
ハメル〔他マ下一〕	騙す。(「嵌める」と関連)
ハヤケル〔自カ下一〕	孵化する。(主に魚類) ハヤカス〔他五〕
ヒッコウバル〔自ラ五〕	表皮などが引き硬ばる。〔複〕
ヒッコノグ〔他ガ五〕	引き抜く。〔複〕 フッコノグ (「ヌ」→「ノ」)
ヒツサワク〔他カ五〕	干乾く。桶に隙間ができる。〔複〕
ヒンマゲル〔他ガ下一〕	曲げる。ヒンマガル〔自ラ五〕
フウケル〔自カ下一〕	蓬ける・草葉が徒長する。(「ホ」→「フ」)
フグス〔他サ五〕	解す。(ほぐす) (「ホ」→「フ」)
フタグ〔他ガ五〕	塞ぐ。蓋をする。
ブチノメス〔他サ五〕	打ち伸ばす。〔複〕

ブチャル〔他ラ五〕	棄てる。 <b>ベシャル</b> <b>ビシャル</b>
ブッコス〔他サ五〕	打ち壊す。 <b>ボッコス</b>
フッコクル〔他ラ五〕	蹴飛ばす。〔複〕 <b>フッコケル</b> （「ヒ」→「フ」）
フッタクル〔他ラ五〕	引ったくる。〔複〕 <b>タクル</b> は強意の接尾語。
フドク〔他カ五〕	解く（ほどく）。 <b>フドケル</b> 〔自下一〕
フヤカス〔他サ五〕	水に浸す。 <b>フヤケル</b> 〔自下一〕
フルガウ〔他ワ五〕	振り払う。（「ガ」の添加）
フルケナゲル〔他ガ下一〕	抛り投げる。〔複〕 <b>ホゲナゲル</b>
フンツケル〔他カ下一〕	踏み付ける。〔複〕
ブンナゲル〔他ラ五〕	殴りつける。〔複〕 <b>シャギツケル</b>
ベェツル〔他ラ五〕	欲張る、奪い合う。 <b>ベェツリ</b> <b>アウ</b>
ヘエル〔自ラ五〕	入る。 <b>ヘエリ</b> <b>グチ</b> （玄関）
ヘッコム〔自マ五〕	凹む。
ヘナス〔他サ五〕	貶（ケナ）す、馬鹿にする。
ボウ〔他ワ五〕	人をオンブする。（「ソウ」は荷物）
ホカス〔他サ五〕	柔らかくする。（綿をホカス）
ホゲル〔他ガ下一〕	土・灰を掘り返す。
ホザク〔他カ五〕	「言う」の卑語。（喚く）
ホジクル〔他ラ五〕	孔を明ける。 <b>ホジル</b> 〔他五〕の延言か。
ボタル〔自ラ五〕	木鋤・スコップなどに雪が付着する。
ボッコス〔他サ五〕	壊す。 <b>ボッコレル</b> 〔自下一〕 <b>オッコス</b>
ボッタテル〔他タ下一〕	追い立てる。〔複〕 <b>オッタテル</b>
ボツァル〔自ラ五〕	人の背に載る。
ホトバス〔他サ五〕	浸して軟らかくする。 <b>ホトビル</b> 〔自五〕
ホトル〔自ラ五〕	患部が熱を持つ。（火照る）
マクダマル〔自ラ五〕	蟠（ワダカマ）る。（ <b>タクダマル</b> と同意）
マクレオチル〔自タ上一〕	転げ落ちる。〔複〕
マクレル〔自ラ下一〕	刃物が丸く減って切れ味が悪くなる。
マグレル〔自ラ下一〕	道に迷う。（ <b>ハグレレル</b> とも言う。）
マクロウ〔他ワ五〕	食べる。「 <b>食らふ</b> 」〔古語〕の残存か。
マケル〔他カ下一〕	桶・椀の溶液をこぼす。
マタゴク〔他カ五〕	跨ぐ。

マツベル〔他バ下一〕	纏める、集める。(ベ = メ)
マネル〔他ナ下一〕	告げ口する。(虐められた子が親に訴える。)
マブス〔他サ五〕	塗(マブ)す。まみらせる。
ママナク〔自カ五〕	吃る。
マルケル〔他カ下一〕	結ぶ、束ねる。マルゴケル
ミシル〔他ラ五〕	筆(ムシ)る。
ムザク〔他カ五〕	細かく裂く。
ムサジル〔他ラ五〕	筆(ムシ)る。
メエル〔自ア下一〕	見える。
メゴガル〔他ラ五〕	可愛がる。(「ガル」は接尾語) <b>メジョガル</b>
メツケル〔他カ下一〕	見つける。(メツケモン・掘り出し物)
メングル〔他ラ五〕	廻る、巡る。
モエル〔自ア下一〕	時間が経過する。(「燃える」とは無関係)
モギレル〔自ラ下一〕	腹が痛む。
モゴカス〔他サ五〕	<sup>くすぐ</sup> 擦る。
モゴツチャガル〔他ラ五〕	<sup>くすぐ</sup> 擦ったがる。(「ガル」は動詞化の接尾語)
モスブ〔他バ五〕	結ぶ。(「ム」→「モ」)
モチヤツケカク〔他カ五〕	持ち扱いに困る。手こづる。〔複〕
モトル〔自ラ五〕	滞る。(口がモトルは「ドモル」こと。)
モンジャクル〔他ラ五〕	揉みくちやにする。
モンダラカス〔他サ五〕	ゴツチャにする。
モンダラガル〔自ラ五〕	絡み合う。モンダラケル〔自カ下一〕
ヤギル〔他ラ五〕	藁工品の仕上げに(焚き火で屑を「焼き切る」)
ヤシナウ〔他ワ五〕	口に含ませる。(病人や乳幼児に対して。)
ヤダガル〔他ラ五〕	嫌がる。(「ガル」は特殊な結合。)
ヤッコガル〔他ラ五〕	柔らかがる。(「ガル」は動詞化の接尾語)
ヤメル〔自マ下一〕	頭・歯・腰などがツンツンと痛む。
ヨスル〔他ラ五〕	揺する。エスル(ユはエ・ヨに。) <b>ヨサブル</b>
ヨドレル〔自ラ下一〕	ドロドロに腐敗する。
ヨバル〔他ラ五〕	呼ぶ。招く。(古語「呼ばふ」と関連するか。)
ヨルム〔自マ五〕	緩む。(ユはエ・ヨになる) <b>ヨルメル</b> 〔他マ下一〕
ワク〔自カ五〕	発酵する。発生する。(蛆がワク)

ワス <b>ンル</b> [他ラ下一]	忘 <b>レ</b> る。(「レ」の撥音化。) I音韻 参照
ワ <b>ニル</b> [自ナ上一]	はにか <b>む</b> 。(上方方言とも言われる。)
ワン <b>ル</b> [自ラ下一]	割 <b>レ</b> る。(「レ」の撥音化。) I音韻 参照
ンゴ <b>ク</b> [自カ五]	動 <b>く</b> 。(語頭の「ウ」→「オ」「エ」「ン」)
ンマ <b>ガル</b> [他ラ五]	美味し <b>が</b> る。(「ウ」→「ン」) (「ガル」は接尾語)
ンマ <b>ンル</b> [自ラ下一]	生ま <b>れ</b> る (語頭の「ン」は「ウ」) (語中の「ン」は「レ」)
ンム [他マ五]	生 <b>む</b> 。(「ウ」→「オ」「ン」になる。)
ンメル [他マ下一]	埋 <b>め</b> る、混 <b>ぜ</b> る、冷 <b>ま</b> す。(「ウ」→「ン」になる。)

## 形容詞

- ※ 性質・形状を表す。言い切りは方言音「**エ**」になる。(活用は一種、Ⅲ部)
- ※ 動詞を伴わず単独で「述語」となり、また「修飾語」になる。
- ※ 修飾語となる場合、一般に被修飾語の前に用いられる。
- ※ 接尾語「**コエ**」「**ポエ**」の付く語が多い。(Ⅲ 接尾語 参照)
- ※ 語尾に形容詞「**ネエ・無い**」が結合した「複合語」が多い。
- ※ 接尾語「**ガル**」が語幹に付くと「動詞」に転ずる。(動詞の項 参照)
- ※ 接尾語「**サ・ミ**」が語幹に付くと「名詞」に転ずる。(Ⅲの接尾語 参照)

### 【 性質・形状・感覚・感情 】

アセ <b>エ</b>	浅い。(a sa i → a sē)
アセツ クラシ <b>エ</b>	慌ただしい。(「焦り苦しい」か? 「汗臭い」か?)
アッタ <b>コエ</b>	暖かい。アッタ <b>ケエ</b>
アツ <b>チェー</b>	熱い・暑い。
アブ <b>ネエ</b>	危ない。
アメ <b>エ</b>	甘い。アマ <b>ツポエ</b>
アリガテ <b>エ</b>	有り難い。
エ <b>エ</b>	良い。(ヨ → エ)
エガ <b>ツポエ</b>	靱の棘が肌を刺す感じ。
エガラ <b>ツポエ</b>	喉がシクシク痛い。

エガレエ	えぐ 蕨い。(生の馬鈴薯の味) <b>エゴエ</b>
エ ッソエ	酷い、凄い、大層な。(副詞に近い。)
エテエ	痛い。
エブエ	煙い。 <b>ケブエ</b> (ム→ブ)
エワエ	弱い。(ヨ→エ)
オカシエ	可笑しい。
オゾエ	賢い、伶俐だ。 <b>オゼエ</b>
オッカネエ	怖い、恐ろしい。
オモシヨエ	面白い。 <b>オモシレエ</b>
オモテエ	重たい。
オルセエ	五月蠅い、煩わしい。(ウ→オ)
オレシエ	嬉しい。(ウ→オ)
カガッポエ	眩しい。
カカリッ クセエ	纏い付いて煩わしい。
カッテエ	硬い。
カテエ	固い。
カヨエ	痒い。(ユ=ヨ)
カレエ	辛い。
キツチャネエ	汚い。
キナ クセエ	焦げ臭い。
クセエ	臭い。
ケナリエ	羨ましい。
ケブエ (テエ)	煙い。 <b>ケブテエ エブエ</b> (ム→ブ)
コスエ	狡い。 <b>コッスエ</b>
コマツケエ	細かい。
コウッチネエ	固くて噛みきれない。
コワエ	苦しい、難儀だ。
サブエ	寒い。(ム→ブ)
シカクエ	四角い。
シナッコエ	柔らかい。
シヨーシエ	恥ずかしい。
シヨッカレエ	塩辛い。 <b>シヨツペエ</b>



シンナラ ツオエ	軟弱に見えて芯が強い。シンネラ ツオエ
スッペエ (スツケエ)	酸っぱい。
スベッコエ	滑らかだ。
セツネエ	悲しい。
セベエ	狭い。セバッコエ [マ行 → バ行]
セワシ エ	忙しい。
セワシ ネエ	慌ただしい。
ゾーサ ネエ	造作無い、簡単だ。
ソッケ ネエ	淡白だ、薄情だ、無関心だ。
タツケエ	高い。値段が貴い
ダルッコエ	だるい。
チッコエ	小さい。チツケエ チンコエ
ツオエ	強い。
ツベテエ	冷たい。(メ→ベ)
ツマッコエ	窮屈だ。 ツマツケエ
ツラッパシ ネエ	厚かましい。
ツレエ	辛い。
デッコエ	大きい。デツケエ
ドズケ ネエ	凶々しい、礼儀知らずだ。
ドツケ ネエ	味気ない。
トツペツ ネエ	とんでもない。
ナーゴエ	長い。ナーゲエ
ナマツケ ネエ	卑猥だ。ナマズケ ネエ (怠惰・不精)
ナンギエ	苦しい、大層だ。
ニゴエ	苦い。ニゲエ ニガッポエ
ネエ	有るに対する「無い」。(助動詞・打消は別語)
ネ グセエ	腐り臭い。
ネツエ	丁寧だ、義理堅い。ケチ臭い。
ネツケエ	憎い。
ネバッコエ	粘っこい。
ネブツテエ	眠たい。(ム→ブ)
ネブエ	眠い。(ネブツテエ) [ム→ブ]

ノッコエ	小さい。 <b>ノツケエ</b>
ノメッコエ	滑っこい。(ヌ→ノ)
ノルエ	温い。(茶・風呂の温度)(ヌ→ノ)
ノルツタコエ	生温い。(ノルマッコエ)(ヌ→ノ)
ハガヨエ	歯痒い。(ユ→ヨ)
ハシッコエ	ずる賢い、動作が素早い。
ハッコエ	冷たい。(シャッコエ)
ハラ クツチェ	満腹だ。
ヒッコエ	低い。 <b>ヒツケエ</b>
フットエ	太い。 <b>フツテエ</b>
ホソッコエ	細い。 <b>ホソツケエ</b>
マルッコエ	丸い。 <b>マルツケエ</b>
ミジッコエ	短い。 <b>ミジツケエ</b>
メゴエ	可愛い。 <b>メジヨエ</b>
メゴク ネエ	可愛くない、醜い。 <b>ミッタクネエ</b>
モゴツチェエ	くすぐりたい。
モツテエ ネエ	勿体ない。〔複合語〕
ヤッコエ	柔らかい。
ヤベエ	危ない。
ワリエ	悪い。
ワケエ	若い。
ワケ ネエ	容易だ、たやすい。
ワリエ	悪い。
ンメエ	巧みだ、上手だ、美味だ。

### 【 色彩・明暗 】

アオエ	青い。
アカエ	赤い。 <b>アケエ</b>
アカリエ	明るい。
キーロエ	黄色い。
クレエ	暗い。

クロエ	黒い。	クレエ
シロエ	白い。	シレエ
チャエロエ	茶色い。	
ブスッコエ	痣色だ。	

※ 青・赤・黒・白などは名詞だが、「ポエ」が付くと形容詞になる。

アオoppoエ    アカoppoエ    クロoppoエ    シロoppoエ

## 副詞

- ※ 活用の無い「連用修飾語」である。
- ※ 助詞「ニ・ト」、助動詞・断定「…ニ」との結合が目立つ。
- ※ 「程度」を表す副詞は「体言」をも修飾する。

### 【 状態・程度・時間 】

アラ カタ	大方、大体。(粗かた)
エツソ	寧ろ。
エツソエ	ひどく、とても、大変。
エッチ	最も、いちばん。
エツツオケ	いつも、毎々。
エツペエ	沢山、大量。
エツポド	余程。(ヨ = エ)
オスラ	凡そ、いい加減。(ウ = オ)
オッカリ	迂闊に。(ウ = オ)
オナ(ト)	わざと、故意に。
ギッシリ(ト)	濃密に。
ギッチリ(ト)	緊密に。
キッチン(ト)	整理された状態。
キリ ナシ (ニ)	限度無しに。〔複〕
ゴーギ	大量に、山ほど。(豪儀・豪気)

ゴエサラ	ごっそり。
ゴッコ(ト)	さっさと。(ゴッコト 出て行げ！)
サッサ(ト)	早急に。
サツァ	十分、腹一杯、沢山。
シズカ(ニ)	ゆっくりと。(「緩慢」の意で「音」とは無関係)
ジッコオ シテ	ジット動かないで。〔複〕
ジット	何時も、常に。
シャキラ ナシ(ニ)	尺量も無く。〔複〕(無制限に)
ソンマ	直ぐ、間も無く。
タッタ	只。
タント	充分に。
チット	僅かに。(体言をも修飾する。 「 <b>チット</b> 」西の方。)
チョコッ(ト)	少量。
チョックラ	ちょっと。
デェコウ	沢山、山ほど。 <b>タント</b> と同じ。
テェソウ	大層、大変な。
ドォード	沢山。(「デェコウ」と同じ。)
トット(ト)	さっさと。
ナカ ナカ	大層。
ナカ ラ	大方、大半。
ノーサラ	尚更、却って。
バカゲ(ニ)	無闇に。
ビッシラ(リ)	一面に。(「ラ」は程度・状態を表す接尾語)
ホウ(ダ)	然う(だ)。(ホウダ コテェヤ！)
マア マア	大体、凡そ、かなり。
マツト	もつと。
ミッシラ(リ)	しっかり、十分に。
ムサンコウ(ニ)	無闇やたらに。
ムツラ(リ)	ごっそり。沢山。
メッキラ(リ)	際立って。
モーエ	もう。(モエ ちっと)
ヤットコ	ようやく、辛うじて。

ヨック ラ (リ)	ゆっくり。
ヨッピテ	夜通し。
レーン(ト)	徐々に、ゆっくりと。
ワザ ワザ	丁寧に、努めて。

### 【 呼応 】

エーテェ	(打消) 決して…ない。
エックラ	(仮定) いくら…しても。
サッパリ	(打消) 全く…しない。
ジット	(推量) きっと…だろう。
ジョウヤ	(推量) 多分…だろう。
タッタ	(限定) ただ…だけだ。
チット (モ)	(打消) 少しも…ない。
テェ ゲェ	(推量) 大方…だろう。
テッキリ	(推測) きっと…だろう。
ドウリ (デ)	(確認) 成るほど…なのだ。
ナカナカ	(打消) 容易には…ない。
ナジョウ (シテ)	(疑問) どうして…するのか？
ナン (シタッテ)	(打消) どうしても…しない。
ナン (シテ)	(疑問) なぜ…するのか？
ナン セ	(詠嘆) 何しろ…だ。
ナン (ダスケェ) (デ・ニ)	(疑問) 何だから…するのか？
ナン (ダテガン) (デ)	(疑問) 何だと言う事で…するのか？
ナン (デ)	(疑問) どうして…するのか？
メッタ (ニヤ)	(打消) 滅多には…しない。
ヤッパシ (リ)	(推測) 矢張り…だろう。
ロクスッポ	(打消) まともに…しない。
ロク (ニ)	(打消) まともに…しない。

【 擬態語 】 (視覚・触覚で認識) 「…ト」「…ニ」の形を取ることが多い。

アタフタ (ト)	エサエサ (ト)	オドオド (ト)
オロオロ (ト)	ガツガツ (ト)	ギチギチ (ト)
キラキラ (ト)	ギラギラ (ト)	クタクタ (ト・ニ)
グニャグニャ (ト・ニ)	クラクラ (ト)	グラグラ (ト・ニ)
クウェクウェ (ト)	クワクワ (ト)	ゴタゴタ (ト・ニ)
コチコチ (ト・ニ)	ゴチャゴチャ (ト・ニ)	ザラザラ (ト・ニ)
ジクジク (ト・ニ)	シコシコ (ト)	シックラモックラ
シツチャカメツチャカ (ニ)	シツピラコツピラ (ト)	ジトジト (ト・ニ)
シナシナ (ト)	シャナシャナ (ト)	シャンシャン (ト)
スッカラカン (ト・ニ)	スラスラ (ト)	セカセカ (ト)
ソロソロ (ト)	ソワソワ (ト)	ダブダブ (ト)
ダラダラ (ト)	チマチマ (ト)	チャワチャワ (ト)
チョコチョコ (ト)	チョコマカ (ト)	チラチラ (ト)
ツルツル (ト・ニ)	テカテカ (ト・ニ)	デカデカ (ト)
テツツアマツツア	デレデレ (ト)	ドロドロ
ニカニカ (ト)	ヌルヌル (ト)	ネチャネチャ (ト)
ノコノコ (ト)	ノソノソ (ト)	ノロノロ (ト)
バタバタ (ト)	ヒラヒラ (ト)	フニャフニャ (ト・ニ)
フラフラ (ト・ニ)	ヘナヘナ (ト・ニ)	ポロポロ (ト・ニ)
メタメタ (ト・ニ)	モクモク (ト・ニ)	モサモサ (ト・ニ)
モザラモザラ (ト)	モジモジ (ト)	モソモソ (ト)
モゾモゾ (ト)	モタモタ (ト)	モリモリ (ト)
ヤワヤワ (ト)	ヨサヨサ (ト)	ヨタヨタ (ト・ニ)
ヨチヨチ (ト)	ヨラヨラ (ト)	ヨレヨレ (ニ)

カラット	キラット	グット	クラット	ケロット	コロット
サット	ジット	スット	ズット	ソット	ゾット
タント	チット	ツット	ヌット	ノット	ハット
フット	ホット	マット	モット	ヤット	ワット

★ 「ラ・リ(ン)」が付く語。(名詞)と見る説もある。「…ト」の形を取ることが多い。

ガックラ (リ・ン)      ギックラ (リ・ン)      ギッチラ (リ・ン)

ゲンナラ (リ)	ゲッソラ (リ)	ゲンナラ (リ)
コックラ (リ・ン)	コッソラ (リ)	ゴッソラ (リ)
ザッカラ (リ)	ザックラ (リ)	シックラ (リ)
ジックラ (リ)	ソックラ (リ)	ソロラ (リ・ン)
タップラ (リ)	チョックラ (リ)	チョッコラ (リ・ン)
デップラ (リ)	トップラ (リ)	ドップラ (リ)
ノッソラ (リ・ン)	ハッキラ (リ)	バッタラ (リ)
ヒッソラ (リ)	ヒョックラ (リ)	ヒョッコラ (リ)
フックラ (リ)	ポックラ (リ)	ホッソラ (リ)
ミッシラ (リ)	ムツツラ (リ)	メッキラ (リ)
モックラ (リ・ン)	モッターラ (リ)	モッソラ (リ)
ヨックラ (リ)	ヨッターラ (リ)	

【 擬音語 】 (聴覚で感受) 自然界・人工に発する物理的音響の模写。

「…ン」「…ト」の形を取る事が多い。

カタン (カタカタ)	ガタン (ガタガタ)	カチャン (カチカチ)
ガツン (ガツガツ)	ガボン (ガボガボ)	ガラン (ガラガラ)
コツン (ゴツゴツ)	ゴトン (ゴトゴト)	ストン (ストスト)
ズドン (ズドズド)	タラン (タラタラ)	ドサン (ドサドサ)
ドタン (ドタドタ)	バタン (バタバタ)	パタン (パタバタ)
ポタン (ポタポタ)	ポツン (ポツポツ)	ポトン (ポトポト)
ポリン (ポリポリ)	ミシン (ミシミシ)	メリン (メリメリ)

カーン (鐘)	ゴーン (鐘)	チーン (鈴)
ドーン (太鼓)	ポーン (柱時計)	ミーン (蟬)

ギーッ (扉)	ゴーツ (風)	ザーッ (雨)
ピーッ (笛)	ポーッ (汽笛)	ポー ポー (炎)

【 擬声語 】 (聴覚で認識) 生物の発する「声」の模写。「…ト」の形を取る事が多い。

アーン	(泣声) エーン ワーン クシュン
アハハ	(笑声) イヒヒ ウフフ エヘヘ オホホ
エヘン	(咳払)
オホン	(咳払)
カー カー	(烏) [名詞にもなる。]
カッコー	(郭公) [名詞にもなる。]
カナ カナ	(蟬) [名詞にもなる。]
ギシ ギシ	(燕) [名詞にもなる。]
ギャー	(泣声) [名詞にもなる。「嬰兒」]
ギャー ギャー	(椋鳥)
ギャク	(蛙) [名詞にもなる。]
グーグー	(鼾声)
クシュン	(泣声)
ゲーゲー	(嘔吐)
ケンケン ボトボト	(雉子)
コケコッコー	(鶏) [名詞にもなる。]
ゴホン	(咳払)
コン コン	(咳) [名詞にもなる。]
コン コン	(狐) [名詞にもなる。]
ジージー	(蟬) [名詞にもなる。]
スエッチョ	(馬追) [名詞にもなる。]
チュー チュー	(鼠) [名詞にもなる。]
チョン チョン	(雀) [名詞にもなる。]
テッペン カケタカ	(杜鵑)
ドテポッポー	(山鳩) [名詞にもなる。]
ニャン ニャン	(猫) [名詞にもなる。]
ノリツケホセ ホホー	(梟)
ハックション	(嚏)
ピー ヒョロ	(鳶)
ピー チク	(雲雀)
ヒン ヒン	(馬) [名詞にもなる。]
ブー ブー	(豚) [名詞にもなる。]



ブー	(屁) [名詞にもなる。]
ブッ ポー ソー	(仏法僧) [名詞にもなる。]
ホー ホケキョ	(鶯) [名詞にもなる。]
ポッ ポー	(鳩) [名詞にもなる。]
ポン ポコ	(狸) [名詞にもなる。]
ミーン ミーン	(狸蟬) [名詞にもなる。]
メェー メェー	(山羊) [名詞にもなる。]
モー モー	(牛) [名詞にもなる。]
リーン リーン	(鈴虫)
ワン ワン	(犬) [名詞にもなる。]

※ 「**擬音語**」「**擬声語**」は **象徴詞** (名詞の一種) と見る説もある。

犬は「ワン ワン と」吠える。(副詞)

犬は「ワン ワン」〔と〕吠える。(象徴詞と格助詞)

## 連体詞

※ 活用の無い「連体修飾語」である。

※ 複数語の結合によるものが多い。【指示代名詞の複合語】参照

※ 「…ナ」「…ノ」「…タ・ダ」の形を取る。

※ 古語の「いわゆる」「あらゆる」「さる」なども稀に使われる。

### 【 事物指示 】

アノ	あの
コノ	この
ソノ	その
ドノ	どの

### 【 様態 】

アン ナ	あんな
コン ナ	こんな
ソン ナ	そんな
ドン ナ	どんな
ナジ ノ	どんな
ナジョ ナ (ノ)	何様な
エーネエ ナ (ノ)	異様な
テェシ タ	大層な
トン ダ	意外な
ヘンテコリン ナ (ノ)	可笑な

#### 【 気配 】

アッ ケェ (ナ) (ノ)	あんな様の
アン ゲェ (ナ) (ノ)	あんな様の
コッ ケェ (ナ) (ノ)	こんな様の
コン ゲェ (ナ) (ノ)	こんな様の
スッ ケェ (ナ) (ノ)	そんな様の
スン ゲェ (ナ) (ノ)	そんな様の
ソッ ケェ (ナ) (ノ)	そんな様の
ソン ゲェ (ナ) (ノ)	そんな様の
ドッ ケェ (ナ) (ノ)	どんな様の
ドン ゲェ (ナ) (ノ)	どんな様の

#### 【 種類 】

アッ ツレェ (ナ) (ノ)	あんな類の
アン ツレェ (ナ) (ノ)	あんな類の
コッ ツレェ (ナ) (ノ)	こんな類の
コン ツレェ (ナ) (ノ)	こんな類の
スッ ツレェ (ナ) (ノ)	そんな類の
スン ツレェ (ナ) (ノ)	そんな類の

ソツ ツレエ (ナ) (ノ)	そんな類の
ソン ツレエ (ナ) (ノ)	そんな類の
フツ ツレエ (ナ) (ノ)	そんな類の
フン ツレエ (ナ) (ノ)	そんな類の
ドツ ツレエ (ナ) (ノ)	どんな類の
ドン ツレエ (ナ) (ノ)	どんな類の

### 【 程度 】

アン グレエ (ナ) (ノ)	あんな
コン グレエ (ナ) (ノ)	こんな
ソン グレエ (ナ) (ノ)	そんな
ドン グレエ (ナ) (ノ)	どんな
アッタラ (ナ) (ノ)	大切な
テェシタ	感心な
トンダ	意外な

## 接 続 詞

- ※ 語・句・文の接続に用いる。
- ※ 対等・順接条件・逆接条件の作用を持つ。
- ※ 複数語の結合から成る場合が多い。

### 【 対等関係 】

ジャア	で + は。(それでは。 <b>転換・発語</b> ) ジャア、始めよう。
ソリ カラ・ソン カラ	それ + から。(その後。 <b>継起</b> ) 顔を洗って、ソリカラ 朝飯を食べた。
ソリ デ・ソン デ	それ + で。(そして。 <b>継起</b> )

	芋を掘ってソリデ どうした？
<b>ハチャ</b>	果て + は。 (それでは。 <b>発語</b> ) ハチャ、寝よう。
<b>ハウ シ テ</b>	然う + し + て。 (そして。 <b>継起・追加</b> ) 川へ行き、ハウシテ 舟に乗った。

【 条件・順接 】

<b>ソリ ジャァ</b>	それ + で + は。 (ソソジャ。 <b>順接</b> ) ソソジャ、勘定が合わねえ。
<b>ソリ ダスケェ (デ) (ニ)</b>	そう + だ + から。 (だから。 <b>順接</b> ) 寝坊こえた。ソリ ダ スケェ遅れた。
<b>ソリ (ソソ) ダ バ</b>	そう + だ + ば。 (それなら。 <b>順接</b> ) 明日は雪だろう、ソソダバ 休もう。
<b>ダ スケェ (デ) (ニ)</b>	だ + すけえ (デ) (ニ)。 (だから。 <b>順接</b> ) 夏になった。ダスケェデ 暑え。
<b>ダン ナンガ</b>	で + ある + から。 (だから。 <b>順接</b> ) 銭はある。ダンナンガ買わんる。
<b>ハウ シェ バ</b>	然う + すれ + ば。 (そうすれば。 <b>順接</b> ) 読んで見ろ、ハウシェバ 解る。
<b>ハウ シルト</b>	然う + する + と。 (そうすると。 <b>順接</b> ) 焼えて見ろ。ハウシルト 喰わんる。

【 条件・逆接 】

<b>ソリ ダ ドモ (ニ)</b>	そう + だ + けれども。 (しかし。 <b>逆接</b> ) 春は来た、ソリ ダ ドモ 寒え。
<b>ソソ ダ ドモ (ニ)</b>	そう + だ + けれども。 (しかし。 <b>逆接</b> ) 仕事は嫌だ、ソソ ダ ドモ 仕方ねえ。
<b>ダッテ (モ)</b>	だ + と + 言って (も) (しかし。 <b>逆接</b> ) 二十歳になる、ダッテ まだ青二才だ。
<b>ダ ドモ (ニ)</b>	だ + ども (ニ)。 (だけれど。 <b>逆接</b> ) 学校へは入った。ダドモ 字は書けねえ。
<b>ハウダ ドモ (ニ)</b>	そう + だ + けれども。 (そうだけれど。 <b>逆接</b> )

	背は高い。ホウダドモ 子供だ。
ホンダ ドモ (ニ)	そう + だ + けれども。(そうだけれど。逆接)
	雪は降る。ホンダドモ 小雪だ。
ンダ ドモ (ニ)	そう + だ + けれども。(しかし。逆接)
	腹は減った、ンダドモ 我慢した。

## 感動詞

### 【 感嘆・呼び掛け・応答・挨拶 】

アエ!	「ハイ！」(肯定・納得・諒承の返事)
アッキヤ (サ) !	「アレッ マアッ！」(驚嘆)
アバヤ!	「さようなら！」(別れの挨拶)
アララ!	「アラ アラ！」(他人の過失を責める。)
アラ マァ!	「オヤッ 大変！」(驚嘆)
アンラ!	「アレラ！」とも。(他人の過失を責める。)
エエッ テバ!	「気に掛けないで！」(配慮)
オウ!	「ウン！」(同輩に対する返事)
オゴツタ!	「大変だ！」(困惑)
オハヨウ!	「お早う！」(朝の挨拶)
オバン!	「今晚ワ！」(夕方の挨拶)
オラッ!	「アラッ！」(驚嘆)
オンヤ?	「オヤッ？」(不審)
コラッ!	「コラッ！」(叱責)
コリヤ コリヤ!	「コレは コレは！」(賛嘆)
サァ!	「どうぞ！」(勧誘)
サァッ サ!	「サァ しまった！」(後悔)
シッ!	鳥獣を追う時。
セーノ コーラ!	力を合わせる時。(合図の掛け声)
ソレッ!	「頑張れ！」(応援の掛け声)

ドー！	牛馬の動きを制する時。(掛け声)
ドーレ！	「モノ モウ！」に対する。(応答)
ドーモ ドーモ！	「有難う」が省略された副詞から。(謝意)
ドレ！ <sup>〇</sup> ドレ！ <sup>〇</sup>	行動の開始。(掛け声)
ナア！	「ネエッ！水浴びに行ごうヨ。」(勧誘)
ナジヨウ モ！	「どうぞ 遠慮なく！」(応諾・配慮)
ナーンシ ナーンシ！	「否々！気にしないで！」(配慮)
ノウ！	「喃！」「モシモシ！」(発語・呼掛)
ハチャ！ <sup>〇</sup>	「それでは！」(「果ては」から成立か。離別)
ハツケ ヨエ・ノコッタ！	相撲の掛け声。
ホウ ケエ？ <sup>〇</sup>	「そうですかア？」(不審) <b>ホウ カエ？</b>
ホウッカ ホウッカ！ <sup>〇</sup>	「そうか そうか！」(諒解・納得)
ホウダ コテエヤ！ <sup>〇</sup>	「そうですトモ！」(当然)
ホウッチャレ！ <sup>〇</sup>	「そうだトモ！」(当然)
ホエ キタ！ <sup>〇</sup>	「ヨシ 来え！」「良えトモ！」(諒解)
ホレッ！	「ホラッ！」(注意喚起の掛け声)
マ！ <sup>〇</sup>	「またネ！」(又・復・再… の副詞から転成)
マア！ <sup>〇</sup>	「マア！ おごった！」(詠嘆)
モノ モウ！	「物申す！」(寺年始の挨拶語)
ヤア ヤア！ <sup>〇</sup>	「これは これは！」(久闊)
ヤダッ テエバ！ <sup>〇</sup>	「嫌だと言うノニッ！」(拒絶)
ヤヘエ ヤヘエ！ <sup>〇</sup>	「いやはや どうも！」(失敗)
ヨシ キタ！	「好いとも！」(発憤)
ヨシ コエ！	「サア 来い！」(発憤)
ヨシタ ヨシタ！	「好うした 好うした！」(賞賛)
ヨッコラ セ！	「ドッコイ ショ！」(休息時の掛け声)
ン！	「ウン！」(応諾・諒承の返事)
ン？	「何？」(怪訝)
ンニヤ！	「否！」(否定)
ンノッ クソ！ <sup>〇</sup>	「コン畜生メッ！」(立腹)

☆ [ 参考 ] 慣用の挨拶語

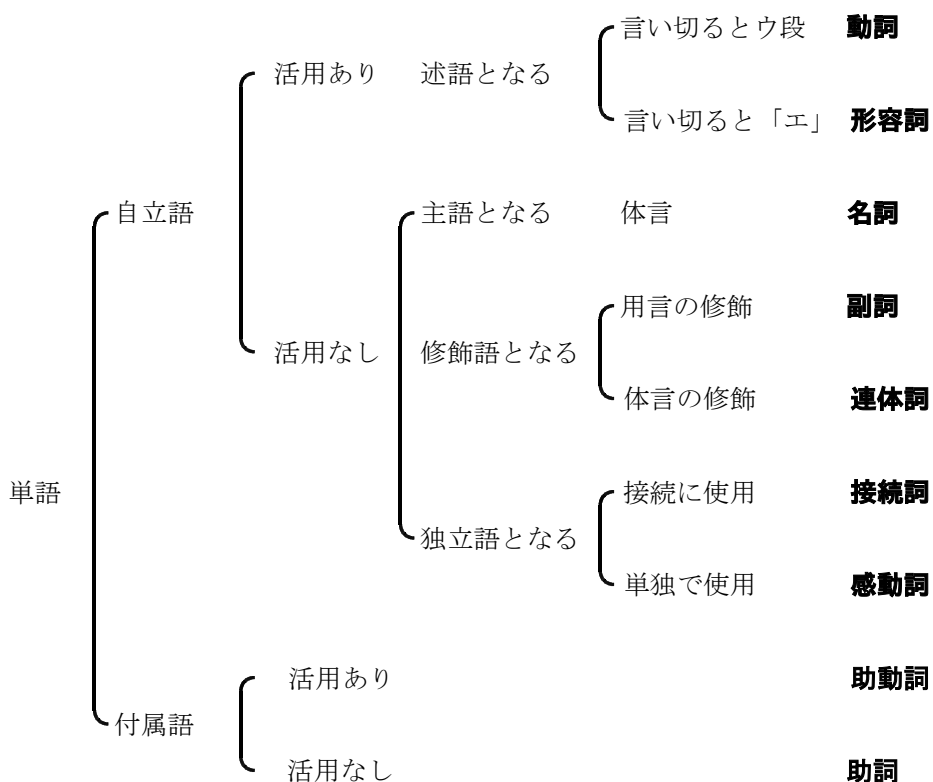
アガラ ッシャレ!	「お食べ下さい！」(勧誘)
エエ ヤンベエダ ノンシ!	「好い塩梅ですネエ！」(天候)
エツェ コッタ ノンシ!	「凄い事ですネ！」(賞賛)
ココン (ホコン) ショ!	「此処の衆！」「御免下さい！」(訪問挨拶)
ゴザッシャレ!	「お出で下さい！」(招待)
ゴメン ナンショ!	「御免 ナサレ！」(警女の挨拶語)
ソウエー ガン ダ テ!	「そう言う事ですテ！」(同意)
ソリ (ソエ) ジャ マタ!	「それでは また！」(別離)
ソン (ホン) ジャ マタ!	「それでは また！」(別離)
ダンダン ドーモ!	「常々お世話様です！」(謝意)
テエラニ サッシャレ!	「お楽しみになされ！」(安座の勧誘)
ナジダ (ナジラ) ノ?	「どんなだネ？」(病気の見舞)
ナジョダ ノンシ?	「いかがですか？」(病気の見舞)
ネマラッ シャレ!	「お楽にドーズ！」(足を伸ばす勧誘)
ハチャ マ!	「それでは また！」(別離)
フサン コッタ ノンシ!	「久しぶりです！」(久闊の挨拶)
ワリカッタ ノンシ!	「済みませんでしたネ！」(謝罪)

### Ⅲ 語法と付属語の部

【 品詞分類表 】 .....	137
【 代名詞 】 .....	138
《 人称代名詞 》 .....	138
《 指示代名詞との複合語 》 .....	138
【 形式名詞 】 .....	140
【 転成名詞 】 .....	141
【 代動詞 】 .....	142
【 代可能動詞 】 .....	144
【 活用 】 .....	145
《 動詞 》 .....	145
《 形容詞 》 .....	145
【 助動詞 】 .....	147
【 助詞 】 .....	157
《 格助詞 》 .....	157
《 接続助詞 》 .....	158
《 副助詞 》 .....	161
《 係助詞 》 .....	164
《 間投助詞 》 .....	165
《 並列助詞 》 .....	165
《 終助詞 》 .....	166
【 助詞と伝達動詞の結合 】 .....	173
【 接頭語 】 .....	175
【 接尾語 】 .....	177
【 延言 】 .....	187
【 紛れやすい語 】 .....	189



## 【 品詞分類表 】



- ※ 名詞は**代名詞・形式名詞・転成名詞**などの他、象徴詞・固有名詞・普通名詞・物質名詞・抽象名詞・数詞・量詞・場所詞・時間詞などに分類する事もある。
- ※ 動詞は**代動詞・可能動詞**などに分ける他、自動詞・他動詞などに分類する事ができる。
- ※ 学校文法では「自立語で活用があり述語・修飾語となる」語に形容動詞を認めるが、これは名詞と助動詞に分けて扱う事にした。
- ※ **接頭語**や**接尾語**は独立した品詞にはならない単語の成分である。
- ※ 文型は英語の五型に対し、「何が **なんだ。**」・「何が **どうする。**」・「何が **どんなだ。**」の三型である。

【 代名詞 】 ※ 名称に代えて人物・事物・方向などを表す語。

《 人称代名詞 》 「格」「性」「数」に依る語形変化は無い。格は助詞で表し、複数は「…ガタ」「…タ」「…タチ」「…ドモ」「…ラ」などの接尾語で表す。

	一人称	二人称	三人称	不定称
単 数	<b>オノ</b> (己)	<b>オノ</b> (お前)	<b>アエツ</b> (彼奴)	<b>ダレ</b> (誰)
	<b>オラ</b> (俺)	<b>オマン</b> (お前)	<b>キャツ</b> (彼奴)	<b>ダリ</b> (誰)
	<b>オレ</b> (俺)	<b>オメエ</b> (お前)		<b>ドエツ</b> (何奴)
		<b>ソント</b> (其方)		
		<b>ニシ</b> (主)		
		<b>ワリヤ</b> (汝は)		
		<b>ンナ</b> (汝)		
		<b>ンノ</b> (汝)		
複 数	<b>オエラ</b> (我等)	<b>アエラ</b> (君等)	<b>アエツラ</b> (彼奴等)	<b>ダレラ</b> (誰等)
	<b>オレタ</b> (俺等)	<b>オマンタ</b> (お前達)	<b>アンショ</b> (彼の衆)	<b>ドゴンショ</b> (何処の衆)
		<b>オメエガタ</b> (お前方)	<b>キャツラ</b> (彼奴等)	<b>ドエツラ</b> (何奴等)
		<b>ソントガタ</b> (お前方)		
		<b>テメエラ</b> (お前等)		
		<b>ニシラ</b> (主等)		
		<b>ネラ</b> (奴等)		
		<b>ネラドモ</b> (奴等共)		

《 指示代名詞との複合語 》 「コ・ソ (ス) (フ)・ア・ド」

	近称	中称	遠称	不定称	備考
事 物	<b>コノ</b>	<b>ソノ</b>	<b>アノ</b>	<b>ドノ</b>	連体詞
	<b>コレ</b>	<b>ソレ</b>	<b>アレ</b>	<b>ドレ</b>	代名詞

人	コエツ	ソエツ	アエツ	ドエツ	代名詞
場所	ココ	ソコ	アコ	ドコ・ドゴ	代名詞
方向	コッチ	ソッチ	アッチ	ドッチ	代名詞
程度	コングレエ	ソングレエ	アングレエ	ドングレエ	代名詞
	〃 ナ	〃 ナ	〃 ナ	〃 ナ	連体詞
	〃 ニ	〃 ニ	〃 ニ	〃 ニ	副詞
	〃 ノ	〃 ノ	〃 ノ	〃 ノ	連体詞
	コレツキシ	ソレツキシ	アレツキシ	ドレツキシ	名+副助
	コレツキリ	ソレツキリ	アレツキリ	ドレツキリ	名+副助
	コレツパカ	ソレツパカ	アレツパカ	ドレツパカ	名+副助
	コレツポチ	ソレツポチ	アレツポチ	ドレツポチ	名+副助
	コンダケ	ソンダケ	アンダケ	ドンダケ	名+副助
	様態	コッケエ	ソ(ス)ツッケエ	アツッケエ	ドツッケエ
〃 ナ		〃 ナ	〃 ナ	〃 ナ	連体詞
〃 ニ		〃 ニ	〃 ニ	〃 ニ	副詞
〃 ノ		〃 ノ	〃 ノ	〃 ノ	連体詞
コンゲエ		ソ(ス)ンゲエ	アングエ	ドングエ	代名詞
〃 ナ		〃 ナ	〃 ナ	〃 ナ	連体詞
〃 ニ		〃 ニ	〃 ニ	〃 ニ	副詞
〃 ノ		〃 ノ	〃 ノ	〃 ノ	連体詞
コツツレエ		ソ(ス・フ)ツツレエ	アツツレエ	ドツツレエ	代名詞
〃 ナ		〃 ナ	〃 ナ	〃 ナ	連体詞
〃 ニ		〃 ニ	〃 ニ	〃 ニ	副詞
〃 ノ		〃 ノ	〃 ノ	〃 ノ	連体詞
コンツレエ		ソ(ス・フ)ンツレエ	アンツレエ	ドンツレエ	代名詞
〃 ナ		〃 ナ	〃 ナ	〃 ナ	連体詞
〃 ニ		〃 ニ	〃 ニ	〃 ニ	副詞
〃 ノ		〃 ノ	〃 ノ	〃 ノ	連体詞
コンナ		ソナ	アンナ	ドンナ	連体詞
コンナニ		ソナニ	アンナニ	ドンナニ	副詞

※「コ・チ」は「処」、「グレエ」は「位」、「ケエ・ゲエ」は「気配」、「ツレエ」は「類」を表す。

## 【 形式名詞 】

※ 自立語ながら、連体修飾語を伴わないと意味を成さない名詞。

<sup>0</sup> ガン	〔形名〕	「コト」・「ヒト」・「モノ」
言う	ガン	→ (説明・話者・話題)
書く	ガン	→ (話材・作者・筆記具)
着る	ガン	→ (着る物・着る人・衣服)
切る	ガン	→ (切る対象・切る人・刃物)
喰う	ガン	→ (食事・喰う人・食物)
飲む	ガン	→ (嚙下・飲む人・飲み物)
見る	ガン	→ (見物・見物人・見世物)
割る	ガン	→ (割る対象・割る者・割り道具)

<sup>0</sup> ソエ	〔形名〕	「 <sup>せい</sup> 所為」
餅を食った	ソエ	で腹くっちえ。(原因)
勉強をした	ソエ	で合格した。(理由)

タメ	〔形名〕	「為」	(共通語と同様)
食う	タメ	に働く。(目的)	
遊ぶ	タメ	の金。(目的)	

ハズ	〔形名〕	「筈」	(共通語と同様)
2+2=4の	ハズ	だ。(必然)	
夜は暗え	ハズ	だ。(当然)	

マンマ	〔形名〕	「俣」
思う	マンマ	書け。(随意)
裸の	マンマ	跳びだした。(状態)

<sup>0</sup>モン [形名] 「物」「者」

- 有る モン → 有り物 (間に合わせ物)  
要る モン → 要る物 (必需品) (需要者)  
鑄る モン → 鑄る物 (鑄物) (鑄物師)  
売る モン → 売る物 (売り物) (売り手)  
織る モン → 織る物 (織り物) (織工)  
買う モン → 買う物 (買い物) (買い物手)  
切る モン → 切る物 (鋏・鉋) (裁断工)  
塗る モン → 塗る物 (塗り物) (塗師)  
乗る モン → 乗る物 (乗り物) (乗客)  
履く モン → 履く物 (履き物) (着用者)  
貼る モン → 貼る物 (貼り物) (貼り屋)  
拾う モン → 拾う物 (拾い物) (拾得者)  
彫る モン → 彫る物 (彫り物) (彫刻家)  
読む モン → 読む物 (読み物) (読者)

[ガ・ノ・ン] [準体助詞でもある] 「事」「物」「者」

- 売る [ガ・ノ・ン] が有る。  
買う [ガ・ノ・ン] が有る。  
喰う [ガ・ノ・ン] が有る。  
<sup>え</sup>良え [ガ・ノ・ン] は無え。  
高え [ガ・ノ・ン] は無え。  
安え [ガ・ノ・ン] は無え。

【 転成名詞 】 動詞の連用形 が [名詞] に変わった語。

[動詞] の連用形がそのまま名詞になった語。

<sup>え</sup>行き <sup>けえ</sup>帰り エジメ 泳ぎ 終わり 肩凝り  
切り盛り 蹴り 暮らし 騒ぎ しごき

すぐり 躓き 始め 飲み食べ 乗り降り  
読み書き

〔動詞〕の**連用形**と〔名詞〕が複合して出来た語。

有り物 置き物 書き方 飾り物 変わり者  
切り札 忍び声 泣きっ面 読み本 喚き声

〔動詞〕の**連用形**に接尾語「**プリ・プリ**」が付いた語。

書き **プリ** 暮らし **プリ** 泣き **プリ** 飲み **プリ**  
降りっ **プリ** 減りっ **プリ** 負けっ **プリ** 焼けっ **プリ**

〔形容詞〕の語幹に接尾語「**ゲ**」「**ヤカ**」「**ラカ**」が付いた語。

おとな 温和し **ゲ** おれ 嬉し **ゲ** 切な **ゲ** 強 **ゲ**  
軽 **ヤカ** 伸び **ヤカ** 冷 **ヤカ** 緩 **ヤカ**  
清 **ラカ** 高 **ラカ** なめ 滑 **ラカ** 柔 **ラカ**

〔形容詞〕の語幹に接尾語「**サ**」「**ミ**」が付いた語。

青 **サ** 白 **サ** 厚 **サ** 薄 **サ**  
暑 **サ** さが 寒 **サ** おれ 嬉し **サ** 切な **サ**  
赤 **ミ** 悲し **ミ** 楽し **ミ** 深 **ミ**

## 【代動詞】

※ 種々の動作の代わりに果たす動詞。

**カク**〔他カ五〕 「する」「出す」「見せる」などの代わり。

あぐし 胡座を **カク**。 (あし **カキ**) 安座  
せっこう **カク**。 (せっこ **カキ**) 慌て者  
恥を **カク**。 (はじ **カキ**) 赤面  
べそを **カク**。 (べそ **カキ**) 泣き虫  
欲を **カク**。 (よっ **カキ**) 欲張り

※ 連用形「**カキ**」は他の語と結合して転成名詞を作る。

**ケツカル**〔自ラ五〕 「居る」「言う」などの代わり。

遊んで **ケツカル**。

おち  
家に **ケツカル**。

御託を **ケツカル**。

泣えて **ケツカル**。

寝て **ケツカル**。

**コク**〔他カ五〕 「する」「言う」などの代わり。

嘘を **コク**。 (おす **コキ**)

損を **コク**。 (そん **コキ**)

デッポ **コク**。 (そん **コキ**)

寝坊を **コク**。 (ねぼっ **コキ**)

屁を **コク**。 (へっ **コキ**)

ベッチョ **コク**。 (ベッチョ **コキ**)

真似を **コク**。 (まね **コキ**)

※ 連用形「**コキ**」は他の語と結合して転成名詞を作る。

**シル**〔サ変・上一〕 「為る」 (提示の目的語が動作の内容を示す。)

アツパを **シル**。(排便する)

ションベを **シル**。(放尿する)

先生を **シル**。(勤める)

大病を **シル**。(患う)

田搔を **シル**。(耕す)

床屋を **シル**。(営む)

百姓を **シル**。(暮らす)

役者を **シル**。(演じる)

嫁取りを **シル**。(催す)

【可能動詞】 ※ 可能の「助動詞」で無く「得る」の結合した「下一段動詞」。

会 <sup>う</sup> [ワ五]	→ 会え得る	→ <b>会える</b>	会わ・れ (ン) る
行 <sup>く</sup> [ガ五]	→ 行 <sup>え</sup> ぎ得る	→ <b>行<sup>え</sup>げる</b>	行 <sup>え</sup> が・れ (ン) る
居 <sup>る</sup> [ア上一]	→ 居 <sup>え</sup> 得る	→ <b>居<sup>え</sup>れる</b>	居・られ (ン) る
苳 <sup>る</sup> [ラ五]	→ 苳 <sup>え</sup> り得る	→ <b>苳<sup>え</sup>れる</b>	苳ら・れ (ン) る
着 <sup>る</sup> [カ上一]	→ 着得る	→ <b>着れる</b>	着・られ (ン) る
切 <sup>る</sup> [ラ五]	→ 切 <sup>え</sup> り得る	→ <b>切<sup>え</sup>れる</b>	切ら・れ (ン) る
聞 <sup>く</sup> [カ五]	→ 聞 <sup>え</sup> き得る	→ <b>聞<sup>え</sup>ける</b>	聞か・れ (ン) る
来 <sup>る</sup> [カ変]	→ 来得る	→ <b>来れる</b>	来・られ (ン) る
消 <sup>す</sup> [サ五]	→ 消 <sup>え</sup> し得る	→ <b>消<sup>え</sup>せる</b>	消さ・れ (ン) る
扱 <sup>く</sup> [カ五]	→ 扱 <sup>え</sup> き得る	→ <b>扱<sup>え</sup>ける</b>	扱か・れ (ン) る
挿 <sup>す</sup> [サ五]	→ 挿 <sup>え</sup> し得る	→ <b>挿<sup>え</sup>せる</b>	挿さ・れ (ン) る
敷 <sup>く</sup> [カ五]	→ 敷 <sup>え</sup> き得る	→ <b>敷<sup>え</sup>ける</b>	敷か・れ (ン) る
為 <sup>る</sup> [サ変]	→ 為 <sup>え</sup> し得る	→ <b>為<sup>え</sup>える</b>	さ・れ (ン) る
堰 <sup>く</sup> [カ五]	→ 堰 <sup>え</sup> き得る	→ <b>堰<sup>え</sup>ける</b>	堰か・れ (ン) る
削 <sup>ぐ</sup> [ガ五]	→ 削 <sup>え</sup> ぎ得る	→ <b>削<sup>え</sup>げる</b>	削が・れ (ン) る
立 <sup>つ</sup> [タ五]	→ 立 <sup>え</sup> ち得る	→ <b>立<sup>え</sup>てる</b>	立た・れ (ン) る
契 <sup>る</sup> [ラ五]	→ 契 <sup>え</sup> り得る	→ <b>契<sup>え</sup>れる</b>	契ら・れ (ン) る
作 <sup>る</sup> [ラ五]	→ 作 <sup>え</sup> り得る	→ <b>作<sup>え</sup>れる</b>	作ら・れ (ン) る
出 <sup>る</sup> [ダ下一]	→ 出得る	→ <b>出れる</b>	出・られ (ン) る
取 <sup>る</sup> [タ五]	→ 取 <sup>え</sup> り得る	→ <b>取<sup>え</sup>れる</b>	取ら・れ (ン) る
泣 <sup>く</sup> [カ五]	→ 泣 <sup>え</sup> き得る	→ <b>泣<sup>え</sup>ける</b>	泣か・れ (ン) る
煮 <sup>る</sup> [ナ上一]	→ 煮得る	→ <b>煮れる</b>	煮・られ (ン) る
寝 <sup>る</sup> [ナ下一]	→ 寝得る	→ <b>寝れる</b>	寝・られ (ン) る
乗 <sup>る</sup> [ラ五]	→ 乗 <sup>え</sup> り得る	→ <b>乗<sup>え</sup>れる</b>	乗ら・れ (ン) る
貼 <sup>る</sup> [ラ五]	→ 貼 <sup>え</sup> り得る	→ <b>貼<sup>え</sup>れる</b>	貼ら・れ (ン) る
冷 <sup>やす</sup> [サ五]	→ 冷 <sup>え</sup> やし得る	→ <b>冷<sup>え</sup>やせる</b>	冷やさ・れ (ン) る
振 <sup>る</sup> [ラ五]	→ 振 <sup>え</sup> り得る	→ <b>振<sup>え</sup>れる</b>	振ら・れ (ン) る
減 <sup>らす</sup> [サ五]	→ 減 <sup>え</sup> らし得る	→ <b>減<sup>え</sup>らせる</b>	減らさ・れ (ン) る
干 <sup>す</sup> [サ五]	→ 干 <sup>え</sup> し得る	→ <b>干<sup>え</sup>せる</b>	干さ・れ (ン) る
負 <sup>かす</sup> [サ五]	→ 負 <sup>え</sup> かし得る	→ <b>負<sup>え</sup>かせる</b>	負かさ・れ (ン) る



見る〔マ上一〕	→ 見得る	→ <b>見れる</b>	見・られ(ン)る
結ぶ〔バ五〕	→ 結び得る	→ <b>結<sup>もす</sup>べる</b>	結ば・れ(ン)る
捲る〔ラ五〕	→ 捲り得る	→ <b>捲れる</b>	捲ら・れ(ン)る
潜る〔ラ五〕	→ 潜り得る	→ <b>潜れる</b>	潜ら・れ(ン)る
止める〔マ下一〕	→ 止め得る	→ <b>止めれる</b>	止め・られ(ン)る
寄る〔ラ五〕	→ 寄り得る	→ <b>寄れる</b>	寄ら・れ(ン)る
割る〔ラ五〕	→ 割り得る	→ <b>割れる</b>	割ら・れ(ン)る

※ 五段・サ変から下一段への音韻変化は「前母音の消去」である。

a u	→ a <u>i</u> e ru	→ a e ru	<b>会える</b>
ka ru	→ ka r <u>i</u> e ru	→ ka re ru	<b>刈れる</b>
sa su	→ sa s <u>i</u> e ru	→ sa se ru	<b>挿せる</b>
si ru	→ s <u>i</u> e ru	→ se e ru	<b>為<sup>せ</sup>える</b>
ta tu	→ ta t <u>i</u> e ru	→ ta te ru	<b>立てる</b>
na ku	→ na k <u>i</u> e ru	→ na ke ru	<b>泣ける</b>

※ 上一・下一・カ変から可能動詞への変化は「得」が「レ」に変わったものである。

方言では、助動詞の「レ」が「ン」に変化するのも特徴。

着 <b>得</b> る	→ 着 <b>レ</b> る	着・ら <b>ン</b> る
出 <b>得</b> る	→ 出 <b>レ</b> る	出・ら <b>ン</b> る
<sup>き</sup> 来 <b>得</b> る	→ <sup>き</sup> 来 <b>レ</b> る	<sup>き</sup> 来・ら <b>ン</b> る
<sup>し</sup> 為 <b>得</b> る	→ <sup>し</sup> さ <b>レ</b> る	さ <b>ン</b> る

※ 可能の「助動詞」と紛れやすい。「ラ抜き」現象)

居 <b>レ</b> る(下一)	居・ <u>られる</u>	居・ <u>ら<b>ン</b>る</u> (助動詞)
<sup>き</sup> 来 <b>レ</b> る(下一)	<sup>き</sup> 来・ <u>られる</u>	<sup>き</sup> 来・ <u>ら<b>ン</b>る</u> (助動詞)
止め <b>レ</b> る(下一)	止め・ <u>られる</u>	止め・ <u>ら<b>ン</b>る</u> (助動詞)

※ 広辞苑では五段動詞の変形と説明するが、方言では全ての動詞が可能動詞となる。

※ 可能動詞には命令形が無い。

## 【活用】

《動詞の活用》（五種類） 標準文法と異なる部分には下線を施した。

- 〔五段〕カ行の例（か・こ／き／く／く／け・きや／け） 掻く  
**カ・ガ・サ・タ・ナ・バ・マ・ラ・ワ** の行。
- 〔上一〕カ行の例（き／き／きる／きる／きれ・きりや／きれ・きる） 着る  
**ア・カ・ガ・ザ・タ・ナ・ハ・バ・マ・ラ** の行。
- 〔下一〕カ行の例（け／け／ける／ける／けれ・けりや／けれ・ける） お受ける  
**ア・カ・ガ・サ・ザ・タ・ダ・ナ・ハ・バ・マ・ラ** の行。
- 〔カ変〕カ行だけ（こ／き／くる／くる／くれ・くりや／こえ・こい） 来る
- 〔サ変〕サ行だけ（し・さ／し／しる／しる／しれ・しりや／しれ・しる） 為る

※ 仮定形は助詞「ば」が「あ」になり、「…や・あ」と拗音化する。

※ 命令形の「…れ」は「…ろ」より優しい感じを与える。

※ 「サ変」は終止形・連体形が「スル」でなく「**シル**」のため「サ行上一段」に近い。

勉強	シ ねえ。	未然形
愛	サ ねえ。(漢語と複合)	〃
合格	シ た。	連用形
我慢	<u>シル</u> 。	終止形
努力	<u>シル</u> 人。	連体形
草取り	<u>シレ</u> ば、( <u>シリヤ</u> )	仮定形
満足	<u>シレ</u> ! (シロ!)	命令形

【形容詞の活用】（一種類） 標準文法と異なる部分には下線を施した。

※ 口語では「ク活用」「シク活用」「カリ活用」などの分類には関係は無い。

※ 英語の様な「原級」「比較級」「最上級」の区別は無い。

アカ エ 「赤い」

(かる / かつ・く / え / え・かる / けれ・けりゃ / ○)

※ 終止形・連体形は「イ」で無く「エ」となる。

※ 連体形に「かる」の古形を残す。

※ 仮定形の拗音化は動詞の場合と同様。

※ 命令形は無い。

赤 **カロ** う。 未然形

赤 **カツ** た。(撥音便) 連用形

赤 **ク** なる。 //

赤 **エ** 。 終止形

赤 **エ** 時。(カル) 連体形

赤 **ケレ** ば、(ケリゃ) 仮定形

<sup>え</sup>好 **カロ** う。 未然形

<sup>え</sup>好 **カツ** た。(撥音便) 連用形

<sup>え</sup>好 **ク** なる。 //

<sup>え</sup>好 **エ** 。 終止形

<sup>え</sup>好 **エ** 子。(カル) 連体形

<sup>え</sup>好 **ケレ** ば、(ケリゃ) 仮定形

【 助動詞 】 共通語と大差ない助動詞は省略した。

**サセル** ※ 五段活用の動詞に接続する「**セル**」は省略。

〈意味〉 (使役) …させる

〈活用〉 (させ/さし・させ/させる/させる/させれ・させりゃ/させれ・させる)

〈接続〉 カ変・サ変・上一・下一段動詞の未然形。

来 <b>サセ</b> ねえ。	未然形
見 <b>サシ</b> た。	連用形
見 <b>サセ</b> た。	〃
着 <b>サセル</b> 。	終止形
煮 <b>サセル</b> 時。	連体形
居 <b>サセレ</b> ば、	仮定形
居 <b>サセリヤ</b> 、	〃
投げ <b>サセレ!</b>	命令形
投げ <b>サセロ!</b>	〃

## ジャ

- 〈意味〉 (断定) …だ  
 〈活用〉 (じゃろ / じゃっ / じゃ / ○ / じゃら / ○)  
 〈接続〉 各種の語。

誰 <sup>ン</sup> の <b>ジャロ</b> う。	未然形
其処は海 <b>ジャツ</b> た。	連用形
今は休み <b>ジャ</b> 。	終止形
皆が達者 <b>ジャラ</b> 好えガ。	仮定形

## シャル

- 〈意味〉 (尊敬) …なさる  
 〈活用〉 (しゃら・しゃん / しゃえ・しゃっ・しゃり / しゃる /  
しゃる / しゃれ・しゃりや / しゃえ・しゃれ)  
 〈接続〉 五段動詞の未然形

未然形 + 「ツ」の形を取る。S音前の促音化は「I・音韻の部」参照。

行がッ <b>シャラ</b> ねえ。	未然形
行がッ <b>シャん</b> ねえ。	〃
掻かッ <b>シャエ</b> ます。	連用形
掻かッ <b>シャツ</b> た。	〃

搔かッ	<u>シャリ</u> ます。	〃
剪らッ	<u>シャル</u> 。	終止形
立たッ	<u>シャル</u> 人。	連体形
泣かッ	<u>シャレ</u> ば、	假定形
泣かッ	<u>シャリヤ</u> 、	〃
飲まッ	<u>シャエ</u> ！	命令形
飲まッ	<u>シャレ</u> ！	〃

※ 江戸言葉では頻用された模様。（「江戸小咄辞典」）

## シャンス

〈意味〉	（尊敬） …れる・られる …なさる
〈活用〉	（ <u>しゃん</u> ／ <u>しゃんし</u> ／ <u>しゃんす</u> ／ <u>しゃんず</u> ／ <u>しゃんせ</u> ／ <u>しゃんせ</u> ）
〈接続〉	動詞の未然形。五段活用の場合は促音「ツ」を介する事が多い。

※ 魚沼方言では連用形に接続する場合がある。

「ホロリ ホロラと《泣き》しゃんす。」

「何がボツケで《泣き》しゃんす。」（付録・遊戯唄 参照）

動かッ	<u>シャン</u> ねえ。	未然形
読まッ	<u>シャンシ</u> た。	連用形
書かッ	<u>シャンス</u> 。	終止形
行がッ	<u>シャンス</u> 時、	連体形
泣かッ	<u>シャンセ</u> ば、	假定形
退かッ	<u>シャンセ</u> ！	命令形

※ 江戸言葉では頻用された模様。（「江戸小咄辞典」）

## セル

〈意味〉	（使役） …せる …させる
〈活用〉	（ <u>せ</u> ／ <u>せ</u> ・ <u>し</u> ／ <u>せる</u> ／ <u>せる</u> ／ <u>せれ</u> ・ <u>せりや</u> ／ <u>せれ</u> ・ <u>せろ</u> ）
〈接続〉	五段動詞の未然形。

書か	<u>セ</u> ねえ。	未然形
読ま	<u>セ</u> た。	連用形

読ま <u>シ</u> た。	〃
立た <b>セル</b> 。	終止形
黙ら <b>セル</b> 時、	連体形
釣ら <b>セレ</b> ば、	仮定形
釣ら <u>セリヤ</u> 、	〃
泣か <u>セレ!</u>	命令形
泣か <b>セロ!</b>	〃

※ 「着せる」「寝せる」「見せる」などは一語の下一段動詞であり、  
「着・させる」「寝・させる」「見・させる」は動詞 + 助動詞である。

## ダ

〈意味〉 (断定) …だ

〈活用〉 (だろ／だっ・で・に／だ／な／だら・なら・なりや／〇)

〈接続〉 体言、動詞・形容詞の連体形。

山 <b>ダロ</b> う。	未然形
川 <b>ダッ</b> た。	連用形
男 <b>デ</b> ある。	〃
静か <u>ニ</u> なる。(☆1)	〃
無駄 <b>ダ</b> 。	終止形
穏やか <u>ナ</u> 時、(☆2)	連体形
駄目 <u>ダラ</u> 、	仮定形
駄目 <b>ナラ</b> ば、	〃
駄目 <u>ナリヤ</u> 、	〃

※ (☆1) (☆2) は形容動詞を認めない事に因る。

※ 動詞に接続する場合は多く形式名詞「ガン・ノ」を介する。

読む (ガン・ノ) <b>ダロ</b> う。	未然形
書く (ガン・ノ) <b>ダッ</b> た。	連用形
動く (ガン・ノ) <b>デ</b> ある。	〃

泳ぐ (ガン・ノ)	ダ。	終止形
跳ぶ (ガン・ノ)	ダラ、	仮定形
煮る (ガン・ノ)	ナラ ば、	〃
寝る (ガン・ノ)	ナリヤ、	〃

※ 形容詞に接続する場合も多く形式名詞「ガン・ノ」を介する。

好え (ガン・ノ)	ダロ う。	未然形
高え (ガン・ノ)	ダッ た。	連用形
安え (ガン・ノ)	デ ある。	〃
狭え (ガン・ノ)	ダ。	終止形
広え (ガン・ノ)	ダラ、	仮定形
臭え (ガン・ノ)	ナラ、	〃
<sup>けなり</sup> 羨え (ガン・ノ)	ナリヤ、	〃

※ 促音・ツに付く場合は「ダ」→「タ」と清音化する。

(過去・完了の助動詞に似るが接続が異なる。「過去・完了」は連用形接続)

<sup>さぶ</sup> 寒えコツ (事)	タロ う。	未然形
何ちゅうコツ (事)	テ、	連用形
何ちゅうコツ (事)	タ。	終止形
他所のコツ (事)	タラ、	仮定形

※ 撥音・ンに付く場合は「ダ」の促。

<sup>さぶ</sup> 寒えコン (事)	ダロ う。	未然形
何ちゅうコン (事)	デ、	連用形
何ちゅうコン (事)	ダ。	終止形
他所のコン (事)	ダラ、	仮定形

## タガル

〈意味〉 (希望) …たがる (助動詞「タイ」+ 接尾語「ガル」)

〈活用〉 (たがら・たがる / たがっ・たがり / たがる / たがる / たがれ  
・たがりや / たがれ) ※ 方言では命令形がある。

〈接続〉 動詞の連用形。

遊び	<b>タガラ</b>	ねえ。	未然形
遊び	<b>タガロ</b>	う。	未然形
行き	<b>タガッ</b>	た。	連用形
行き	<b>タガリ</b>	ます。	〃
見	<b>タガル</b>	。	終止形
喰い	<b>タガル</b>	人。	連体形
寝	<b>タガレ</b>	ば、	仮定形
寝	<b>タガリヤ</b>	、	〃
呑み	<b>タガレ!</b>		命令形

## ナル

〈意味〉 (尊敬) …なさる (「さ」の消去)

〈活用〉 (なら・なる・なん/なり・なっ/なる/なる/なれ・なりや/なれ)

〈接続〉 動詞の連用形。

寄り	<b>ナラ</b>	ねえ。	未然形
寄り	<b>ナロ</b>	う。	〃
寄り	<b>ナン</b>	ねえ。	〃
来	<b>ナリ</b>	ます。	連用形
来	<b>ナッ</b>	た。	〃
書き	<b>ナル</b>	。	終止形
書き	<b>ナル</b>	本。	連体形
読み	<b>ナレ</b>	ば、	仮定形
読み	<b>ナリヤ</b>	、	〃
聞き	<b>ナレ!</b>		命令形

※ 命令形には終助詞「モ」の付く事が多い。

喰え **ナレ モ!** 飲み **ナレ モ!** (昔話)



## ナンス

〈意味〉 (尊敬) …なさる

〈活用〉 (○/なんし/なんす/なんす/なんせ・なんしや/なんし  
・なんしよ/なんせ)

〈接続〉 動詞の連用形。「御免ナンシヨ」は「御免**し**ナンシヨ」か。

寄り <u>ナンシ</u> た。	連用形
行き <u>ナンス</u> 。	終止形
行き <u>ナンス</u> 時、	連体形
立ち <u>ナンセ</u> ば、	仮定形
立ち <u>ナンシア</u> 、	〃
呑み <u>ナンシ!</u>	命令形
呑み <u>ナンシヨ!</u>	〃
寄り <u>ナンセ!</u>	〃

## ネエ (ン)

〈意味〉 (打消) …ない (文語の「ズ」も残る。)

〈活用〉 (ねえかる/ねえかつ・ねえく/ねえ/ねえ/ねえ・ねえけれ・ねえけりや・にや/○)

〈接続〉 未然形。

洗わ <u>ネエカロ</u> ( <u>シカロ</u> ) う。	未然形
濯 <sup>えす</sup> が <u>ネエカツ</u> ( <u>シカツ</u> ) た。	連用形
着 <u>ネエク</u> ( <u>シク</u> ) なる。	〃
脱が <u>ネエ</u> ( <u>ン</u> ) 。	終止形
履か <u>ネエ</u> ( <u>ン</u> ) 靴、	連体形
拭か <u>ネエ</u> ( <u>ン</u> ) ば、	仮定形
拭か <u>ネエケレ</u> ば、 ( <u>シケリヤ</u> )、	〃
拭か <u>ニヤ</u> 、	〃

※ 「先も見**ネエ**で」 → 「先も見**ズ**に」 (文語)

## ベエ (メエ)

- 〈意味〉 (意志) …う …よう  
〈活用〉 (○ / ○ / べえ・めえ / ○ / ○ / ○)  
〈接続〉 終止形。

種でも蒔く ベエ (メエ)。 終止形

草でも刈る ベエ (メエ)。 終止形

※「べ」と「め」が通韻のため、(意志)の意味であるか、次項の(打消推量)の意味かは前後関係で判断するしか無い。

## メエ

- 〈意味〉 (打消推量) …まい  
〈活用〉 (○ / ○ / めえ / ○ / ○ / ○) 終止形だけ  
〈接続〉 動詞・終止形でも通じるが、方言では活用型で異なる。

銭は有る メエ。 終止形 [五段・連体]

雪も降る メエ。 終止形 [五段・終止]

客は来(くる) メエ。 終止形 [カ変・未然]

仕事は為(する) メエ。 終止形 [サ変・連用]

上着は着(きる) メエ。 終止形 [上一・連用]

まだ晴れ(はれる) メエ。 終止形 [下一・連用]

## ヤンス

- 〈意味〉 (丁寧) …ます  
〈活用〉 (○ / やんし / やんす / やんす / やんせ / やんせ)  
〈接続〉 終止形。

雨が降り ヤンシ た。 連用形

風は止み ヤンス。 終止形

雪の散り ヤンス 時、 連体形

雷が鳴り	<u>ヤンセ</u> ば、	仮定形
通り	<u>ヤンセ!</u>	命令形

## ラッシャル

〈意味〉 (尊敬) …られる  
 〈活用〉 (らっしゃら・らっしゃん / らっしゃえ・らっしゃつ・らっしゃり  
 / らっしゃる / らっしゃる / らっしゃれ・らっしゃりや  
 / らっしゃえ・らっしゃれ)  
 〈接続〉 五段以外のカ変・サ変・上一・下一の未然形。

来	<u>ラッシャラ</u> ねえ。	未然形
来	<u>ラッシャん</u> ねえ。	〃
為	<u>ラッシャエ</u> ます。	連用形
為	<u>ラッシャつ</u> た。	〃
為	<u>ラッシャつり</u> ます。	〃
見	<u>ラッシャル</u> 。	終止形
着	<u>ラッシャル</u> 物。	連体形
居	<u>ラッシャレ</u> ば、	仮定形
居	<u>ラッシャリや</u> 、	〃
煮	<u>ラッシャエ!</u>	命令形
煮	<u>ラッシャレ!</u>	〃

## ランル

〈意味〉 (受身) (可能) …られる (「レ」が「ン」に変化)  
 〈活用〉 (らん / らん / らんる / らんる / らんりや・らんれ / らんれ)  
 〈接続〉 カ変・サ変・上一・下一の未然形。

来	<u>ラン</u> ねえ。	未然形
為	<u>ラン</u> た。	連用形
着	<u>ランル</u> 。	終止形
逃げ	<u>ランル</u> 時、	連体形
逃げ	<u>ランリや</u> 、	仮定形

逃げ ランレ ば、

〃

蹴 ランレ!

命令形 (可能の場合は命令形が無い。)

**ロウ (ヤ)** ※ 終助詞 (詠嘆) 「ヤ」を伴って用いられる事が多い。

〈意味〉 (推量) …だろう (ヨ) (断定・未然形の「ダ」が消去)

〈活用〉 (○ / ○ / ろう / ○ / ○ / ○)

〈接続〉 動詞・形容詞の終止形。

風は止む ロウ (ヤ)。  
終止形

月も出る ロウ (ヤ)。  
終止形

値は高え ロウ (ヤ)。  
終止形

銭は無え ロウ (ヤ)。  
終止形

## ンル

〈意味〉 (受身) (可能) …れる (「レ」が「ン」に変化)

〈活用〉 (ん / ん / んる / んる / んりゃ・んれ / んれ・んろ)

〈接続〉 五段型動詞の未然形。

跳ば ン ねえ。(可能) 未然形

叩か ン た。(受身) 連用形

泳が ンル。(可能) 終止形

動か ンル 時。(可能) 連体形

立た ンレ ば。(可能) 假定形

立た ンリゃ。(可能) 〃

泣かさ ンレ! (受身) 命令形

※ 可能の場合は命令形が無い。

【助詞】 ※ 例語の後の〔 〕は付属した語の品詞。

《格助詞》 ※ 共通語のガ・ノ・ヲ・ニ・ヘ・ト・カラ・ヨリ・デ・ヤなどは魚沼方言でも同様のため記載しない。

### ジャ

〈意味〉 (場所) 「…で」「…では」(格助詞「で」+係助詞「は」の結合。)

〈接続〉 体言

山 ジャ 藤の実、河原 ジャ 蓬。 [名詞]

藪 ジャ 騒ぐな。 [名詞]

### ツ

〈意味〉 (連体修飾) 「の」 (古語の残存「天つ羽衣」「沖つ白波」)

〈接続〉 体言 (名詞と名詞を繋ぐ。)

おつこ 男	ツ	こ 子	がけ 崖	ツ	ぶち 縁	くぞ 葛	ツ	ば 葉	こ 木	ツ	ば 端
つる 鶴	ツ	ばし 嘴	泥	ツ	こ 鱈	な 菜	ツ	ば 葉	こ 鮒	ツ	こ 子
みち 道	ツ	ばた 端。	(k・p 音の前が促音化する事とも関連。)						「I・音韻の部」参照		

### ン

〈意味〉 (連体修飾) 「の」 (no → n の変換は「I・音韻の部」参照)

〈接続〉 体言 (名詞と名詞を繋ぐ。)

あり 蟻	ン	ご 子	おち 家	ン	なか 中	おら 俺	ン	どこ どこ	こ 此	ン	しよ 衆
ど 何	ン	ご 処	め 目	ン	たま 玉	やま 山	ン	なか 中	よ 他	ン	こ 所

### ン

〈意味〉 (目的・対象) 「{こ}」(ni → n の変換は「I・音韻の部」参照)

〈接続〉 名詞 (転成名詞)。

くさか 草刈り	ン	で 出る。	[転成名詞]
人	ン	笑われる。	[名詞]
みずみ 水見	ン	え 行く。	[転成名詞]
ふね 舟	ン	の 乗る。	[名詞]
山	ン	な一れ!	[名詞]

## ン

〈意味〉 (準体言)「の」 (no → n の変換は「I・音韻の部」参照)  
 〈接続〉 活用語の連体形

着る	ン	は有る。	[動詞・連体]
為る	ン	は有る。	[動詞・連体]
焚く	ン	が無え。	[動詞・連体]
煮る	ン	は有る。	[動詞・連体]
安え	ン	は有る。	[形容詞・連体]
旨え	ン	が無え。	[形容詞・連体]
読めねえ	ン	は無え。	[助動詞・連体]

## 《 接続助詞 》

### ア

〈意味〉 (順接仮定)「ば」 (ba → a)  
 〈接続〉 活用語の仮定形。(動詞は連用形に接続した様な発音になる。)

書け	ア	判る。	(きьяア)	[動詞・仮定]
刺せ	ア	痛え。	(しьяア)	[動詞・仮定]
死ね	ア	おごった。	(にьяア)	[動詞・仮定]
立て	ア	届く。	(ちьяア)	[動詞・仮定]
泣け	ア	止める。	(きьяア)	[動詞・仮定]
履け	ア	履ける。	(きьяア)	[動詞・仮定]
高けれ	ア	買わねえ。	(りьяア)	[形容詞・仮定]
ひこ 低けれ	ア	越せる。	(りьяア)	[形容詞・仮定]

読ませれ**ア** 旨え。 (りやア) [助動詞・仮定]

## ガンニ

〈意味〉 (逆接確定) 「の(こ) (形式名詞「ガン」+ 格助詞「ニ」)

〈接続〉 活用語の連体形。

探す **ガンニ** 分らねえ。 [動詞・連体]  
盆だてえ**ガンニ** 踊らねえ。 [動詞・連体]  
明るえ **ガンニ** 見えねえ。 [形容詞・連体]  
寒<sup>さぶ</sup>え **ガンニ** 裸だ。 [形容詞・連体]  
殴らんる**ガンニ** 泣かねえ。 [助動詞・連体]

## シ

〈意味〉 (順接確定) 「から・ので」

〈接続〉 活用語の終止形。

銭<sup>ぜね</sup>は有る **シ** 心配<sup>しんべい</sup>は要<sup>え</sup>らねえ。 [動詞・終止]  
山<sup>たけ</sup>は高<sup>たけ</sup>え **シ** 気を付けろ。 [形容詞・終止]  
寒<sup>さぶ</sup>えろう **シ** 風邪<sup>さぶ</sup>を引くな。 [助動詞・終止] (寒<sup>さぶ</sup>かろう **シ**)

## シナ (ニ)

〈意味〉 (動作の併行) 「…しながら」

〈接続〉 動詞の連用形。

歩<sup>あよ</sup>び **シナ (ニ)** 喋<sup>な</sup>な！ [動詞・連用]  
立ち **シナ (ニ)** 呑<sup>む</sup>な！ [動詞・連用]  
寝 **シナ (ニ)** 喰<sup>う</sup>な！ [動詞・連用]

## ジャ (ア)

〈意味〉 (単純接続) 「ては」 (接続助詞「て」+ 係助詞「は」)

撥音便の関係で「て」が「で」になり、「では」が「ジャア」に変形した。

〈接続〉 動詞の連用形。

産<sup>お</sup>ん **ジャア** 亡くした。(産み テハ) [動詞・連用]  
 噛<sup>お</sup>ん **ジャア** 吐き出す。(噛み テハ) [動詞・連用]  
 摘<sup>お</sup>ん **ジャア** 頬張る。(摘み テハ) [動詞・連用]  
 飛<sup>お</sup>ん **ジャア** 落ちる。(飛び テハ) [動詞・連用]

## スケェ (ニ) (デ)

〈意味〉 (順接確定) 「から」「ので」 (「…さかい」の転か?)  
 〈接続〉 活用語の終止形。

行<sup>い</sup>ぐ **スケェ (ニ) (デ)** 待ってレ。 [動詞・終止]  
 暑<sup>あつち</sup>え **スケェ (ニ) (デ)** 笠を被れ。 [形容詞・終止]  
 春<sup>はる</sup>だ **スケェ (ニ) (デ)** 花も咲く。 [助動詞・終止]

## ダンガ (ナンガ)

〈意味〉 (順接確定) 「のだから」「ので」  
 〈接続〉 活用語の連体形。撥音 (ン) を介するのが普通。

読<sup>よ</sup>む<sup>ん</sup> **ダンガ (ナンガ)** 聞えて居れ。 [動詞・連体]  
 軽<sup>か</sup>え<sup>ん</sup> **ダンガ (ナンガ)** 持たんる。 [形容詞・連体]  
 読<sup>よ</sup>んだ<sup>ん</sup> **ダンガ (ナンガ)** 人に譲<sup>よ</sup>った。 [助動詞・連体]  
 軽<sup>か</sup>かった<sup>ん</sup> **ダンガ (ナンガ)** 浮き上がった。 [助動詞・連体]

## チャア・ジャア

〈意味〉 (単純接続) 「ては・では」 (接助・テ + 係助・ハ)  
 〈接続〉 活用語の連用形。

見<sup>み</sup> **チャア** 笑い、読<sup>よ</sup>ん **ジャア** 泣く。 [動詞・連用]  
 汚<sup>よ</sup>く **チャア** 嫌だ。 [形容詞・連用]  
 盗<sup>ぬ</sup>られ **チャア** おごった。(大変だ) [助動詞・連用]



## ドモ (二)・ロモ (二)

〈意味〉 (逆接確定)「けれども」

〈接続〉 活用語の終止形。(文語では已然形)

稼ぐ **ドモ (二)** 儲からねえ。〔動詞・終止〕

早え **ドモ (二)** 粗相だ。〔形容詞・終止〕

美人だ **ドモ (二)** 頭が弱え。〔助動詞・終止〕

## ナーガ

〈意味〉 (併行)「ながら」 (逆接)「のに」

〈接続〉 各種の語 (主に動詞の連用形)

食え **ナーガ** 喋んな。 (併行) 〔動詞・連用〕

女であり **ナーガ** 力持ちだ。 (逆接) 〔動詞・連用〕

のっこえ **ナーガ** 辛え。 (逆接) 〔形容詞・終止〕

子供 **ナーガ** <sup>おぞ</sup>賢え。 (逆接) 〔名詞〕

見たがり **ナーガ** 我慢する。 (逆接) 〔助動詞・連用〕

## 《 副助詞 》

**キシ・キリ** ※ **ギシ・ギリ** と濁音化することもある。

〈意味〉 (限定)「だけ」「ばかり」

〈接続〉 各種の語。(促音「ツ」を介する。)(活用語の場合は連体形)

あれっ **キシ・キリ** だ。 〔代名詞〕

これっ **キシ・キリ** だ。 〔代名詞〕

それっ **キシ・キリ** だ。 〔代名詞〕

どれっ **キシ・キリ** だ? 〔代名詞〕

泣くっ **キシ・キリ** だ。 〔動詞・連体〕

広えっ **キシ・キリ** の部屋。〔形容詞・連体〕

**ゴト (ニ・ノ)** ※ 接尾語と見る説もある。

〈意味〉 (包括)「丸ごと」 (個別)「毎に」 (度数)「度に」

〈接続〉 各種の語。(活用語の場合は連体形)

おち  
家 **ゴト** 流された。 (包括) [名詞]  
学校 **ゴト** の規則。 (個別) [名詞]  
書く (時) **ゴト** に腕が上がる。 (度数) [動詞・連体]  
飲む (度) **ゴト** に味が変わる。 (度数) [動詞・連体]

**シャ・セエ**

〈意味〉 (限定) (添加)「さえ」 ※ 音韻の結合から sa e → sē

〈接続〉 各種の語。(活用語の場合は連用形)

雨 **シャ・セエ** 降らなけりや、 [名詞]  
起き **シャ・セエ** すれば、 [動詞・連用]  
安く **シャ・セエ** あれば、 [形容詞・連用]  
斬られ**シャ・セエ** しなけりや、 [助動詞・連用]

**デモ**

〈意味〉 (類例) (例示) ※ 「テ」(接助) + 「モ」(係助) と異なる。

〈接続〉 各種の語。

餅 **デモ** 喰おう。 [名詞]  
読む **デモ** 無え。 [動詞・終止]  
山へ **デモ** 登ろう。 [助詞]  
咬まれ**デモ** すれば、 [助動詞・連用]

**ドゴ**

〈意味〉 (程度)「どころ」 ※ 否定と呼応する。

〈接続〉 各種の語。(活用語の場合は連体形)

花見 **ドゴ** じゃねエ。〔名詞〕  
あそ遊ぶ **ドゴ** じゃねエ。〔動詞・連体〕  
 有難え **ドゴ** じゃねエ。〔形容詞・連体〕  
 寝らんる **ドゴ** じゃねエ。〔助動詞・連体〕

## ドッカ

〈意味〉 (程度)「どころ」 ※ 否定と呼応する。  
 〈接続〉 各種の語。(活用語の場合は連体形)

花見 **ドッカ** ねエ。〔名詞〕  
あそ遊ぶ **ドッカ** ねエ。〔動詞・連体〕  
 有難え **ドッカ** ねエ。〔形容詞・連体〕  
 寝らんる **ドッカ** ねエ。〔助動詞・連体〕

## ナンズ・ナンザ

(「ナンザ」は係助詞「は・ア」の複合。「ナド」は)

〈意味〉 (例示) (軽視)「など」  
 〈接続〉 各種の語・句・文。

へっぺ (蛇) **ナンズ** 弄うな。〔名詞〕  
 「芝居を見る」 **ナンザ** 初めてだ。〔動詞〕  
 「熱が高え」 **ナンザ** 平気だ。〔形容詞〕

## バッカ (シ)・パカ (シ)

〈意味〉 (限定)「だけ」 (程度)「ばかり」 (時間)「直後」  
 〈接続〉 各種の語。

おめえ **バッカ・バッカシ** 喰うな。〔名詞〕  
 これっ **パカ (シ)** の野菜。〔代名詞〕  
あそ遊ぶ **バッカ・バッカシ** の子供。〔動詞〕  
 安え **バッカ・バッカシ** じゃ駄目だ。〔形容詞〕  
 ちっと **パカ (シ)** 甘い。〔副詞〕  
よ茹でた **バッカ・バッカシ** の藷。〔助動詞〕

寝て **バッカ・バッカシ** 居んな。 [助詞]

## ポチ

〈意味〉 (限定)「だけ」「きり」 (程度)「ばかり」

〈接続〉 各種の語。(主に指示代名詞に促音を介して。)

あれっ **ポチ** の駄賃。 [代名詞]

これっ **ポチ** の仕事。 [代名詞]

それっ **ポチ** の手間。 [代名詞]

どれっ **ポチ** の寄附。 [代名詞]

## 《 係助詞 》

### ア

〈意味〉 (区別)「は」 ( ha → a)

〈接続〉 各種の語。

これ **ア** <sup>すげ</sup> 凄え。 (こりゃア) [代名詞]

そえつ **ア** <sup>ごうぎ</sup> 豪気だノウ。 (そえつア) [代名詞]

あれ **ア** 馬鹿だ。 (ありゃア) [代名詞]

逃げ **ア** しねえ。 (にぎゃア) [転成名詞]

読み **ア** しねえ。 (よみゃア) [転成名詞]

書くと **ア** 魂消た。 (…たア) [助詞]

狭えの **ア** <sup>せべ</sup> 駄目だ。 (…なア) [助詞]

### クサア

〈意味〉 (強意)「こそ」 + 「は」 (係助詞 + 係助詞)

〈接続〉 主に体言。(促音「ツ」を介する事が多い。)

木登りっ **クサア** 得意だ。 [転成名詞]

あしたっ **クサア** 勝つゾ！ [名詞]

こんだっ **クサア** 負けねえ。 [名詞]

《 間投助詞 》 (時には終助詞と重複する。)

ノ

〈意味〉 (「ネ・サ・ヨ」) 多く女性が使用。

〈接続〉 各種の語・句の切れ目。(終助詞と紛れやすい。)

里じゃ<sup>えき</sup>ノ、雪が<sup>えき</sup>ノ、降り出して<sup>えわ</sup>ノ、弱ったガンだテ。

《 並立助詞 》 (時には他の部類に区分される。)

シ

〈意味〉 (並行) (添加) 「並びに」「同時に」「その上」

〈接続〉 活用語の終止形。

ぜね  
銭は有る シ 名も有るシ、 [動詞]

山は高え シ 道は急だシ、 [形容詞]

殴られる シ 蹴られるシ、 [助動詞]

ダノ・ノ

〈意味〉 (並立) 「や」「たり」

〈接続〉 各種の語

山 ダノ 川 ダノ を巡る。 [名詞]

踊る ダノ 唄う ダノ の大騒ぎ。 [動詞・終止]

打つ<sup>ぶ</sup>ノ 買う<sup>あす</sup>ノ と遊び呆ける。 [動詞・終止]

ヤラ

〈意味〉 (並立) 「や」

〈接続〉 各種の語。

鍋 ヤラ 釜 ヤラを並べる。 [名詞]

泣く **ヤラ** 喚く **ヤラ**の大騒ぎ。 [動詞。終止]  
高く **ヤラ** 低く **ヤラ**飛ぶ。 [形容詞・連用]

## 《 終助詞 》

### ガ(ン)？

〈意味〉 (疑問)「のか?」「の?」

〈接続〉 活用語の連体形。

ドゴから喰う **ガ(ン)？** [動詞・連体]  
なんして痛え **ガ(ン)？** [形容詞・連体]  
誰に怒られた **ガ(ン)？** [助動詞・連体]

### カエ(ケエ)？・カヤ？

〈意味〉 (疑問)「カイ?」

〈接続〉 各種の語。

本当 **カエ(ケエ)？・カヤ？** [名詞]  
着る **カエ(ケエ)？・カヤ？** [動詞・連体]  
広え **カエ(ケエ)？・カヤ？** [形容詞・連体]  
そう **カエ(ケエ)？・カヤ？** [副詞]  
嫌だ **カエ(ケエ)？・カヤ？** [助動詞・終止]

### ゲナ

〈意味〉 (伝聞)「トサ」「ソウダ」 (「ゲ」は気配、「ナ」は詠嘆か)

〈接続〉 終止形。

トーンと昔があった **ゲナ**。

※ 次の **ゲナ**は [名詞・気配] + ナ [断定・助動詞] である。)

「欲し**ゲ・ナ**様子」

「呑みた**ゲ・ナ**格好」

## コツツオ！

〈意味〉 (詠嘆) (当然) 「ことヨ！」

〈接続〉 各種の語。

人は喜ぶ **コツツオ！** [動詞・連体]

冬は寒え **コツツオ！** [形容詞・連体]

ホーだ (然) **コツツオ！** [助動詞・終止]

## コテェヤ！

〈意味〉 (詠嘆) (当然) 「ことヨ！」

〈接続〉 各種の語。

見れば判る **コテェヤ！** [動詞・連体]

嬉しえ **コテェヤ！** [形容詞・連体]

ホーだ (然) **コテェヤ！** [助動詞・終止]

ヤーだ (嫌) **コテェヤ！** [助動詞・終止]

## ザエ！ (ゼエ！)

〈意味〉 (詠嘆) 「ですネ」 (古語の「ぞえ・ぞヨ」から成立か。)

(勧誘) 「しようヨ！」 (丁寧) 「ですヨ！」

〈接続〉 文末。

「雪が降る。」 **ゼエ！** (丁寧) [動詞・終止]

「外は寒え。」 **ゼエ！** (丁寧) [形容詞・終止]

「めごげだ。」 **ザエ！** (詠嘆) [助動詞・終止]

「行ごう。」 **ザエ！** (勧誘) [助動詞・終止]

## メェシ！

〈意味〉 (詠嘆) 「マイ」 (助動詞) + 「シ」 (接続助詞) 「…まいのに！」

〈接続〉 活用語の終止形。(ラ変型は連体形)

雨も降る **メェシ！** [動詞・終止]

子供じゃあん **メェシ!** [動詞・連体]  
硬 カン **メェシ!** [形容詞・連体]

## タ・ダ!

〈意味〉 (命令)「しろ!」(過去の助動詞が強意に転化したか。)  
〈接続〉 動詞の連用形。(イ音便・撥音便・促音便)

立つ **タ** 立つ **タ!** (サア、立て!) [動詞・連用] 促音便  
ど退え **タ** ど退え **タ!** (サア、ど退け!) [動詞・連用] イ音便  
か擯ん **ダ** か擯ん **ダ!** (サア、か擯め!) [動詞・連用] 撥音便  
飲ん **ダ** 飲ん **ダ!** (サア、飲め!) [動詞・連用] 撥音便

## テ!

〈意味〉 (詠嘆)「ヨ!」 (勧誘)「しょうヨ!」  
〈接続〉 活用語の終止形。

俺が読んで見る **テ!** [動詞・終止]  
矢張り海ア広え **テ!** [形容詞・終止]  
一寸休憩しょう **テ!** [助動詞・終止]  
セツねえガンだ **テ!** [助動詞・終止]  
雪にやなるめえ **テ!** [助動詞・終止]

## テバ!

〈意味〉 (詠嘆)「のに!」 (「…と言えば」から転成。)  
〈接続〉 文末。(促音「ツ」を介す。)

「止めろ!」っ **テバ!** [動詞・命令]  
「エヤだ!」っ **テバ!** [助動詞・終止]

## ナ!

〈意味〉 (禁止)「な」 (共通語と同様)  
〈接続〉 動詞の終止形。(方言では、「る」で終わる動詞は全て「ン」に変化。)



居るな → 居ン ナ [動詞・終止]  
売るな → 売ン ナ [動詞・終止]  
折るな → 折ン ナ [動詞・終止]  
茹るな → 茹ン ナ [動詞・終止]  
切るな → 切ン ナ [動詞・終止]  
来るな → 来ン ナ [動詞・終止]  
蹴るな → 蹴ン ナ [動詞・終止]  
凝るな → 凝ン ナ [動詞・終止]  
為るな → 為ン ナ [動詞・終止]

## ナ!

〈意味〉 (勧誘) 「なさい!」  
〈接続〉 動詞の連用形。

書いて見 ナ! [動詞・連用]  
聞いて来 ナ! [動詞・連用]  
塵は棄て ナ! [動詞・連用]  
床を拭き ナ! [動詞・連用]

## ナ?

〈意味〉 (推測) (疑問) 「な ?」  
〈接続〉 各種の語。

知って居る ナ? [動詞・終止]  
餅を食った ナ? [助動詞・終止]  
さーて ナ? [副詞]

## ナァ!

〈意味〉 (詠嘆) 「ですネ!」 (独立した場合は呼び掛けの「感動詞」)  
〈接続〉 文末。

「暑っっちゃかった。」 **ナア!** [助動詞・終止]

「お前はでっこえ。」 **ナア!** [形容詞・終止]

## <sup>0</sup>**ナモ!**

〈意味〉 (詠嘆)「ですネ!」

〈接続〉 文末。

「今朝ア <sup>さぶ</sup>寒い。」 **ナモ!** [形容詞・終止]

「ニシや発明だ。」 **ナモ!** [助動詞・終止]

## **ネエ!**

〈意味〉 (勧誘) (命令)「なさい!」

〈接続〉 動詞の連用形。(「助動詞・打消」の場合は未然形に接続する。)

<sup>あよ</sup>歩いて行き <sup>え</sup>**ネエ!** [動詞・連用]

早く起き **ネエ!** [動詞・連用]

もっと飲み **ネエ!** [動詞・連用]

## **ノ?**

〈意味〉 (疑問)「のかしら?」

〈接続〉 活用語の連体形。

何を読んでる **ノ?** [動詞・連体]

ドゴが<sup>いた</sup>痛え **ノ?** [形容詞・連体]

手は洗った **ノ?** [助動詞・連体]

## <sup>0</sup>**ノウ!**

〈意味〉 (詠嘆)「ネエ!」「のう (喃) !」(主に男性)

〈接続〉 活用語の終止形。

よく降る **ノウ!** [動詞・終止]

背が高え **ノウ!** [形容詞・終止]

歳取りだ **ノウ!** [助動詞・終止]

※ 独立している場合は呼び掛けの感動詞。

## <sup>0</sup>ノンシ!

〈意味〉 (丁寧)「ですネ!」

〈接続〉 活用語の終止形。

精が出る **ノンシ!** [動詞・終止]

今日ア <sup>あっち</sup>暑え **ノンシ!** [形容詞・終止]

エエ <sup>やんべえ</sup>塩梅だ **ノンシ!** [助動詞・終止]

※ 漱石「坊っちゃん」の「ナモシ」に似る。

(城内地域では「ナエ!」と言う。良かった ナエ!)

(市野江地域では「ノエ!」と言う。ワリかった ノエ!)

(その他では「ノンシ!」が多い。好<sup>え</sup>かった ノンシ!)

## バ?

〈意味〉 (疑問・反語)「しょうか!」

〈接続〉 助動詞の終止形。(多く「…よう バ?」の形で。)

雨でも降ったら、どうしょう **バ?** [助動詞・終止]

宝物なんぞ、どうして出よう **バ?** [助動詞・終止]

## バッカシャ!

〈意味〉 (詠嘆)「ばかり は!」 (副助詞+係助詞からの転用。)

〈接続〉 体言。

まあっ、この子 **バッカシャ!** (困りものだ!) [名詞]

## ベナ・ツペナ

〈意味〉 (推量) (詠嘆) 「だろうナァ」(推量の助動詞・ベシ+詠嘆)

〈接続〉 活用語の終止形。

雪でも降る **ベナ・ツペナ。** [動詞・終止]

値は高え **ベナ・ツペナ。** [形容詞・終止]

里は春だ **ベナ・ツペナ。** [助動詞・終止]

## メ!

〈意味〉 (蔑視) 「叱責」

〈接続〉 体言。

畜生 **メ!** [名詞]

馬鹿 **メ!** [名詞]

## ナレモ!

〈意味〉 (勧誘) 「なさいヨ!」(尊敬の助動詞「ナル」の命令形に「モ」が結合)

〈接続〉 動詞の連用形。

食べ **ナレモ!** [動詞・連用]

呑み **ナレモ!** [動詞・連用]

## モウサ!・モウセ!

〈意味〉 (丁寧) 「ですよ!」「ますよ!」

〈接続〉 活用語の終止形。

腹が減る **モウサ!・モウセ!** [動詞・終止]

へつべ 蛇が おつかね 恐え **モウサ!・モウセ!** [形容詞・終止]

日曜日だ **モウサ!・モウセ!** [助動詞・終止]

## ヤ!

〈意味〉 (呼掛・忠告・勧誘) 「ヨ!」

〈接続〉 各種の語。

太郎 **ヤ!** [名詞]  
勉強しれ **ヤ!** [動詞・命令]  
落ちんな **ヤ!** [助動詞・終止]

### ヤ?

〈意味〉 (疑問・不審)「のか?」  
〈接続〉 各種の語。

この絵は誰が描いた **ヤ?** [助動詞・終止]  
猪にでも喰われたか **ヤ?** [助詞]

### ヤラ?

〈意味〉 (疑問・不審)「だろうか?」 (※ 並立助詞に似る。)  
〈接続〉 各種の語。

盗人は誰だ **ヤラ?** [助動詞・終止]  
嫁が食った **ヤラ?** [助動詞・終止]

## 【 助詞と伝達動詞の結合 】

**タツテ (モ)** 「……と 言っ て (も)」 (格助詞+動詞+接続助詞+係助詞)

来る **タツテ (モ)** 構わねえ。 (※ 副助詞とも考えられる。)  
来た **タツテ (モ)** 構わねえ。 (※ 過去の助動詞に付く例。)  
喰う **タツテ (モ)** 箸がねえ。 (※ 副助詞とも考えられる。)

「うまれでくる**タテ** こんだあこたに わりやのごとばかりで くるしまなあよに  
うまれでくる。」 宮沢賢治 〈永訣の朝〉

**ダッテ (モ)** 「……だと言つて(も)」(助動詞+格助詞+動詞+接続助詞)

花 **ダッテ** 散る。 (※ 副助詞とも考えられる。)

俺 **ダッテ** 男だ。 (※ 副助詞とも考えられる。)

**テエ** 「……と言う」(格助詞+動詞)

桜 **テエ** 花は見事だ。

山 **テエ** 山は雪景色だ。

**テエ ガンデ** 「……と言う事で」(格助詞+動詞+名詞+格助詞)

田植えだ **テエ ガンデ** 大忙しだ。

嫁取りだ **テエ ガンデ** 大騒ぎだ。

**テエ ガンニ** 「……と言うのに」(格助詞+動詞+接続助詞)

正月だ **テエガンニ** 松も飾らねえ。

盆だ **テエガンニ** 踊らぬ奴は、

**テエト** 「……と言うと」(格助詞+動詞+接続助詞)

好き **テエト** 笑われる。

見る **テエト** 青大将だった。

**テエバ** 「……と言え ば」(格助詞+動詞+接続助詞)

呑め **テエバ** 呑む。

止めろ **テエバ** 止める。

**テツテ** 「……と言つて」(格助詞+動詞+接続助詞)

子供だ **テツテ** 馬鹿にしな!

嫌だっ **テツテ** ごねる。

**テツチャア** 「……と言つては」(格助詞+動詞+接続助詞+係助詞)

雨だ **テツチャア** 仕事を休む。

<sup>おれ</sup>嬉しえ **テツチャア** 踊り出す。

**テンガノウ** 「……と 言う が のう」 (格助詞+動詞+接続助詞+終助詞)

爺サと 婆サが居た **テンガノウ**。

トーンと昔があった **テンガノウ**。

**トコテング** 「……所 と 言う の が」 (名詞+格助詞+動詞+格助詞+格助詞)

唄った **トコテング**、笑いモンになったト。

踏んだ **トコテング**、蛇の尻尾だった。

**トト** 「……と 言う と」 (格助詞+動詞+接続助詞)

携えて見る **トト** 軽かった。

山を越える **トト** 村があった。

## 【 接頭語 】 接頭語が結合しても品詞は変わらない。

**オスラ**… (大方) (概略) 「薄ら」

**オスラ** 馬鹿。[名]

**オスラ** 惚け。[名]

**オスラ** 暗え。[形]

**クソ**… (罵倒) 「糞」

**クソ** 爺。[名]

**クソ** 野郎。[名]

**コ**… (強調) 「とても」

**コ** うるせえ。[形]

**コ** 汚ねえ。[形]

**コ** ざっぱり。[副]

**コ** 生意気。[名]

- ゴウラ…** (悪態) (罵倒) 「野性」「粗暴」  
**ゴウラ** <sup>だっぼ</sup> 田圃。〔名〕  
**ゴウラ** 猫。〔名〕  
**ゴウラ** 息子。〔名〕
- コキ…** (強調) 「激しく」 (「扱く」の意を含むか。)  
**コキ** 下ろす。〔動〕  
**コキ** 使う。〔動〕
- スツ…** (強調) 「強く」  
**スツ** 転ぶ。〔動〕  
**スツ** 飛ぶ。〔動〕  
**スツ** 惚ける。〔動〕  
**スツ** 裸。〔名〕
- ド…** (罵倒) 「ひどく」  
**ド** 阿呆。〔名〕  
**ド** 助平。〔名〕  
**ド** 盲。〔名〕  
**ド** でけえ。〔形〕
- ドテ…** (強調) 「長大」 促音を介す。  
**ドテ** <sup>かぼちや</sup> ツ南瓜。〔名〕  
**ドテ** ツ腹。〔名〕
- ドラ…** (罵倒) 「野性」「粗暴」「放蕩」  
**ドラ** 猫。〔名〕  
**ドラ** 息子。〔名〕
- バカ…** (強調) 「無闇な」  
**バカ** 食え。〔転名〕



バカ 騒ぎ。〔転名〕

バカ 飲み。〔転名〕

ババア… (強調) 「長大」

ババア <sup>かじっか</sup> 鱒。〔名〕

ババア <sup>かぼちや</sup> 南瓜。〔名〕

※ 尊敬や丁寧の「御」(お・おん・ご・ぎょ・み) は、神仏・食事関係に使われたが、全体的には少ない。

オ菜 <sup>せえ</sup> オ汁 <sup>つよ</sup> オ粥 <sup>かよ</sup> オ札 <sup>ふだ</sup> オ宮 <sup>みや</sup> オ社 <sup>やしろ</sup>

## 【 接尾語 】

### …ガル

〈作用〉 (動詞化) ラ行五段**動詞**を作る。

〈活用〉 (ら・ろ/り/る/る/れ/れ・ろ)

〈結合〉 形容詞の語幹。

<sup>おれ</sup> 嬉し **ガル**。

<sup>けぶ</sup> 煙 **ガル**。 (助動詞の「…タガル」とは異なる。)

<sup>さぶ</sup> 寒 **ガル**。

欲し **ガル**。

※ 連用形は転じて**体言化**する。

暑っちゃ **ガリ** 寒 **ガリ** 眠た **ガリ**

※ 「…タガル」は助動詞として扱う。

食え **タガル** 泣き **タガル** 読み **タガル**

### …クソ

〈作用〉 (蔑意) 「…な奴」 **複合名詞**を作る。

〈結合〉 促音「ツ」を介して各種の語。

下手ッ **クソ**。

弱ッ **クソ**。

何ッ **クソ!**

### …ゲ

〈作用〉 (様態) (気配) 「…そう」 **体言化**する。

〈結合〉 形容詞の語幹を主としてその他各種の語。

有難 **ゲ**。

くやし **ゲ**。

<sup>けな</sup>羨り **ゲ**。

せつな **ゲ**。

めごー **ゲ**。

呑む **ゲ**。

嫌だ **ゲ**。

### …ケエ・ゲエ

〈作用〉 (様態) (程度) (気配) **体言化**する。

〈結合〉 促音「ツ」または撥音「ン」を介して指示代名詞。

あっ **ケエ**。 (あん **ゲエ**)

こっ **ケエ**。 (こん **ゲエ**)

すっ **ケエ**。 (すん **ゲエ**)

そっ **ケエ**。 (そん **ゲエ**)

どっ **ケエ**。 (どん **ゲエ**)

※ 語尾に更に「ナ」、「ニ」、「ノ」が付いた時の品詞は次の様になる。

… **ナ** → **連体詞**

… **ニ** → **副詞**

… **ノ** → **連体詞**

### …ケタ・ペタ

〈作用〉 (方位) (方向) 「…側」 **複合名詞**を作る。

〈結合〉 促音「ツ」を介して名詞・方位詞。

山っ **ケタ** (ペタ) ・ 川っ **ケタ** (ペタ)  
東っ **ケタ** (ペタ) ・ 西っ **ケタ** (ペタ)  
南っ **ケタ** (ペタ) ・ 北っ **ケタ** (ペタ)  
前っ **ケタ** (ペタ) ・ 後っ **ケタ** (ペタ)  
上っ **ケタ** (ペタ) ・ 下っ **ケタ** (ペタ)  
左っ **ケタ** (ペタ) ・ 右っ **ケタ** (ペタ)  
横っ **ケタ** (ペタ) ・ 脇っ **ケタ** (ペタ)

### …ゲ・ゲラ

〈作用〉 (様態) (気配)「ラ」は (状態) **複合名詞**を作る。

〈結合〉 各種の語。

飽きた <b>ゲ</b> の振り。	助動詞・連体形に結合
起きる <b>ゲ</b> の振り。	動詞・連体形に結合
食べた <b>ゲ</b> の顔。	助動詞の一部に結合
せつな <b>ゲ</b> の声。	形容詞の語幹に結合
ドラ猫 <b>ゲ</b> の鳴き方。	名詞に結合
めじよ <b>ゲ</b> の子。	形容詞の語幹に結合

### …コエ

〈作用〉 (形容詞の造語成分) **形容詞**を作る。

〈活用〉 (かる／かつ・く／え／え／けりゃ・けれ／〇)

〈結合〉 促音「ツ」を介して各種の語素。

しなっ **コエ**。(柔らかい)  
すべっ **コエ**。(滑らかだ)  
ちっ **コエ**。(小さい)  
だるっ **コエ**。(だるい)  
でっ **コエ**。(大きい)  
粘っ **コエ**。(粘着性がある)  
のっ **コエ**。(小さい)  
のめっ **コエ**。(流動性がある)  
温のるった **コエ**。(温い)

はっ コエ。 (冷たい)  
やっ コエ。 (柔らかい)

### …コキ

〈作用〉 (行為)「…する者」 代動詞「コク」の連用形が**体言化**。

〈結合〉 促音「ツ」を介して体言。

<sup>おす</sup>嘘っ コキ。 (嘘つき)  
だてっ コキ。 (おしゃれ)  
どすっ コキ。 (嘘つき)  
寝坊っ コキ。 (怠け者)  
屁っ コキ。 (放屁者)  
<sup>まね</sup>真似っ コキ。 (真似好き)  
悪さっ コキ。 (悪戯者)

### …ゴト

〈作用〉 (併合)・(個別)・(度合) 「**副助詞**」と見る説もある。

〈結合〉 各種の語。

皮 ゴト 食う。 (併合)  
丸 ゴト 呑む。 (併合)  
村 ゴト の決め。 (個別)  
喰う ゴト に旨え。 (度合)

### …サ

〈作用〉 (敬称)「さん・様」 敬意・親愛を持つ**複合名詞**を作る。

〈結合〉 名詞全般。

<sup>あね</sup>姉 サ。  
<sup>あん</sup>兄 サ。  
<sup>おつ</sup>弟 サ。  
爺 サ。  
婆 サ。

※ 形容詞の語幹に付き体言化する「サ」「ミ」は共通語と同様。

青サ・青ミ

白サ・白ミ

高サ・高ミ

### …ソツケル

〈作用〉 (失機) 「……しそびれる」 カ行下一段の**複合動詞**を作る。

〈活用〉 (け／け／ける／ける／けれ・けりゃ／けれ・ける)

〈結合〉 動詞の連用形。

寝 ソツケル。

食え ソツケル。

見 ソツケル。

### …タクル・…ダクル

〈作用〉 (強調) **ラ行五段動詞**を作る。(時には**ラ行下一動詞**)

〈活用〉 (ら・ろ／り／る／る／りゃ・れ／れ)

〈結合〉 促音「ツ」または撥音「ン」を介して動詞の連用形。

追ッ **タクル**。(追い立てる) (

蹴ッ **タクル**。(蹴っ飛ばす)

塗ッ **タクル**。(塗りつける)

飲ン **ダクレル**。(飲みまくる) 飲ン **ダクレ** (体言化)

引ッ **タクル**。(引ったくる) 引ッ **タクリ** (体言化)

踏ン **ダクル**。(踏み付ける)

奪ッ **タクル**。(奪い取る)

### …(タ)ゲ

〈作用〉 (希望の気配) 助動詞「**タイ**」+名詞「**ゲ**」で**体言化**する。

〈結合〉 動詞の連用形・

遊び **タゲ**だ。

行き **タゲ**である。

弄り **タゲ**の顔。

喰え **タゲ**な顔。

呑み **タゲ**だら、

呑み **タゲ**だら、

### …ダラケ

〈作用〉 (状態)「まみれ」 **複合名詞**を作る。

〈結合〉 名詞。

汗 **ダラケ**。

糞 **ダラケ**。

血 **ダラケ**。

泥 **ダラケ**。

### …タレ

〈作用〉 (行為の体言化)「する者」 **複合名詞**を作る。

〈結合〉 促音「ツ」を介して各種の語。

女っ **タレ**。 (女好き)

食いつ **タレ**。 (食いしん坊)

糞っ **タレ**。 (コン畜生)

ゴウっ **タレ**。 (鉄面皮)

こすっ **タレ**。 (狡猾者)

しょっ **タレ**。 (無精者)

泣きっ **タレ**。 (泣き虫)

洩っ **タレ**。 (青二才)

めえすっ **タレ**。 (おべっか野郎)

### …チ (チラ)

〈作用〉 (方向) (場所) **複合名詞**を作る。

〈結合〉 指示代名詞。

あッ **チ** (あ **チラ**)

こッ **チ** (こ **チラ**)

そッ **チ** (そ **チラ**)

どッ **チ** (ど **チラ**)

### …チャ

〈作用〉 (愛称)「ちゃん」 **複合名詞**を作る。

〈結合〉 名詞。(身近な人物)

あん 兄 **チャ。**

おっ 弟 **チャ。**

あね 姉 **チャ。**

※ 「チャ」「チャチャ」は単独で「母」の意にもなる。

### …チヨ

〈作用〉 (様態)「態」 **複合名詞**を作る。

〈結合〉 促音「ツ」を介して各種の語。

縦っ **チヨ。** (縦ざま)

でぶっ **チヨ。** (肥満ざま)

なぎっ **チヨ。** (斜めざま)

太っ **チヨ。** (太りざま)

痩せっ **チヨ。** (痩せざま)

### …チヨウ

〈作用〉 (場所)「処」 **複合名詞**を作る。

〈結合〉 促音「ツ」を介して名詞。

脇っ **チヨウ。** (傍ら)

横っ **チヨウ。** (傍ら)

### …ツァ・…ツァマ

〈作用〉 (敬称)「様」 **複合名詞**を作る。

〈結合〉 促音「ツ」を介して名詞。

とっ **ツァマ。** (父の意)

かっ **ツァマ。** (母の意)

※ 「ツァ」「ツァマ」は単独で「父」の意にもなる。

### …ドン

〈作用〉 (敬称)「殿」 **複合名詞**を作る。

〈結合〉 人名・職業・屋号に付ける。

徳次郎 **ドン**。

鍛冶屋 **ドン**。

木挽き **ドン**。

### …ナ

〈作用〉 (時間)「時・日・年」 **時間詞**の造語成分となる。

〈結合〉 各種の時間詞語素。

おっとえ **ナ**。 (一昨日)

きょねん **ナ**。 (去年)

きん **ナ**。 (昨日)

さつき **ナ**。 (先刻)

されえん **ナ**。 (再来年)

よっぺ **ナ**。 (昨夜)

れえん **ナ**。 (来年)

### …ブリ・プリ

〈作用〉 (様態)「…振り」 用言を**体言化**する。

〈結合〉 動詞の連用形。

書き **ブリ**。 書きっ **プリ**

喰え **ブリ**。 喰えっ **プリ**

読み **ブリ**。 読みっ **プリ**

### …ブル

〈作用〉 (様態)「…らしく振る舞う」 **動詞化**する。(ラ行五段)

〈活用〉 (ら・ろ/り/る/る/りゃ・れ/れ・ろ)

〈結合〉 名詞・形容詞語幹。

学者 **ブル**。

偉 **ブル**。



### …ボ・ボ

〈作用〉 (人の様子・態度)「坊」 **複合名詞**を作る。

〈結合〉 撥音「ン」・促音「ツ」を介して各種の語。

吝嗇**ン** **ボ**。

土筆**ン** **ボ**。

やし**ン** **ボ**。

吝嗇**っ** **ボ**。

伸**っ** **ボ**。

太**っ** **ボ**。

細**っ** **ボ**。

瘦せ**っ** **ボ**。

### …ポエ

〈作用〉 (様態・類似)「…がかかる」 **形容詞**を作る。

〈活用〉 (かる／かっ・く／え／え／けりゃ・けれ／〇)

〈結合〉 促音「っ」を介して各種の語。

色**っ****ポ** **カ**ロ う。 (未然形)

黒**っ****ポ** **カ**ツ た。 (連用形)

湿**っ****ポ** **ク** なる。 ( 〃 )

白**っ****ポ** **エ**。 (終止形)

女**っ****ポ** **エ** 声。 (連体形)

<sup>のめ</sup>滑**っ****ポ** **ケ**レ ば、 (仮定形)

<sup>のめ</sup>滑**っ****ポ** **ケ**リヤ、 ( 〃 )

### …マクル

〈作用〉 (強意)「大いに…する」 **ラ行五段動詞**を作る。

〈活用〉 (ら・ろ／り／る／る／りゃ・れ／れ・ろ)

〈結合〉 動詞の連用形。

食**い** **マ**クル。

飲**み** **マ**クル。

### …メ

〈作用〉 (程度)「気味」 **複合名詞**を作る。

〈結合〉 形容詞の語幹。

熱 **メ** の湯。

遅 **メ** の登校。

少な **メ** に盛る。

の  
温る **メ** の酎。

早 **メ** の桜。

※「畜生メ！」の「メ」は終助詞であり接尾語で無い。

※「割れ目」「傍目」の「メ」は名詞であり接尾語で無い。

### …ヤ (ヤン)

〈作用〉 (愛称)「さん」「ちゃん」 親愛感を添える**名詞**を作る。

〈結合〉 人物を表す名詞。

兄 **ヤ (ヤン)**。 (n 音の添加で「アンニヤ」となる。)

<sup>ばー</sup>  
婆 **ヤ (ヤン)**。

<sup>ねー</sup>  
姉 **ヤ (ヤン)**。

### …ヤカ

〈作用〉 (様態)「……そうな」 **名詞**を作る。

〈結合〉 各種の語素。

穏 **ヤカ**。

軽 **ヤカ**。

健 **ヤカ**。

賑 **ヤカ**。

華 **ヤカ**。

冷 **ヤカ**。

※ 学校文法では「形容動詞」の語幹である。

### …ラ

〈作用〉 (状態)「……した態」 **副詞**の造語成分となる。

〈結合〉 各種の語素。

たっぶ **ラ**。

でっぶ **ラ**。

どっぶ **ラ**。

のっそ **ラ**。

ひっそ **ラ**。

ほっそ **ラ**。

みっち **ラ**。

もっく **ラ**。

よっく **ラ**。

### …ラカ

〈作用〉 (状態)「ような態」 **名詞**を作る。

〈結合〉 各種の語素。

麗 **ラカ**。

清 **ラカ**。

滑 **ラカ**。

※ 学校文法では「形容動詞」の語幹である。

## 【 延言 】

《ハ行》 文語では「助動詞・反復」として扱う。音韻面では開音となる。

語る → 語<sup>かた</sup>らう・ふ。 (カタロー)

食う → 食<sup>く</sup>らう・ふ。 (クロー)

住む → 住<sup>す</sup>まう・ふ。 (スモー)

呼ぶ → 呼<sup>よ</sup>ばう・ふ。 (ヨボー)

《カ行》 カ行延言として旧時は体言化の接尾語「ク」を挙げていた。

曰く → 言うこと。

語らく → 語ること。

聞くならく → 聞くこと。

★ 方言の「カ」や「ク」は延言と見るべきか？

① 「カ」が加わっても本質的に意味の変わらない語。(魚沼方言)

あやす → 赤ん坊を あや カ す。

じゃらす → 猫を じゃら カ す。

ずらす → 日時を ずら カ す。

だま騙す → 人を だま騙 カ す。

散らす → 部屋を 散ら カ す。

寝せる → 赤ん坊を 寝 カ せる。

はぐらす → 気持ちを はぐら カ す。

冷やす → 西瓜を 冷や カ す。

減らす → 腹を 減ら カ す。

遣る → ヘマを 遣ら カ す。

① 「ク」が加わっても本質的に意味の変わらない語。

(意味を強める「繰る」が結合したか?)

えじ弄る → ヘソを弄 ク る。

こじ抉る → 穴を抉 ク る。

こね捏ねる → 泥を捏ね ク る。

しやべ喋る → 女は喋 ク る。

な舐める → 唇を舐め ク る。

ねじ振る → 蓋を振 ク る。

ひね捻る → 栓を捻 ク る。

ほ掘じる → 耳を掘じ ク る。

## 【 紛れやすい語 】

- カ**
- ① 山 **カ** 川のどっちでも、 副助詞（選択）
  - ② 俺も読んで見る **カ**！ 終助詞（意志）
  - ③ 雨は降るろう **カ**？ 終助詞（疑問）
- ガ**
- ① 俺 **ガ** 読む。 格助詞（主語）
  - ② 誰 <sup>だ</sup>**ガ** 本だ。 格助詞（連体修飾）
  - ③ 読む **ガ** 判らねえ。 接続助詞（逆接）
  - ④ 読む **ガ・ガン** は無え。 形式名詞（準体助詞）
  - ⑤ お前も読む **ガ**？ 終助詞（疑問）
- カス**
- ① <sup>だま</sup>騙**カス**。 サ行五段「<sup>だま</sup>騙す」と同じ動詞。（延言？）
  - ② <sup>えご</sup>動**カス**。 サ行五段の終止形語尾。
  - ③ 書**カ** ス。 カ行五段・未然形に文語の助動詞・使役。
- ゲナ**
- ① まめ**ゲ** **ナ** 躰。 複合名詞（気配）＋助動詞（断定）
  - ② トーンと昔があった **ゲナ**。 終助詞（伝聞）（昔話、そうだ）
- サセル**
- ① **サセル** 事。 連体詞。（たいした）
  - ② 仕事を **サ** **セル**。 サ変動詞・未然形＋助動詞・使役「セル」
  - ③ 手を 伸ば**サ** **セル**。 サ五動詞・未然形＋助動詞・使役「セル」
  - ④ 着物を 着 **サセル**。 助動詞・使役「サセル」。着**セル**とは別。
- シ**
- ① 美人だ**シ**、頭も好え。 接続助詞（並立）
  - ② 俺も行く**シ**、お前も行け！ 接続助詞（原因・理由）
- ジャ**
- ① 山 **ジャ** 雪だ。 格助詞・場所「で」＋係助詞「は」。（では）
  - ② 綺麗 **ジャ** 無え。 助動詞・断定「で」＋係助詞「は」。（では）
  - ③ 余は大名 **ジャ**。 助動詞・断定「だ」の終止形。

- ④ 読ん **ジャ** 泣く。 接続助詞「て」 + 係助詞「は」。(ては)  
 ⑤ **ジャ**、始めよう！ 接続詞。(発語 では)

- ス** ① 君を愛 **ス**。 複合サ変動詞・終止形の語尾。  
 ② 針を刺 **ス**。 サ行五動詞・終止形の語尾。

- セル** ① 薬を飲ま **セル**。 助動詞・使役。  
 ② 服を着 **サセル**。 助動詞・使役「サセル」の一部。  
 ③ 洋服を **着セル**。 サ行下一段動詞の終止形語尾。  
 ④ 蓋を **被<sup>かぶ</sup>セル**。 サ行下一段動詞の終止形語尾。  
 ⑤ 英語を **話セル**。 サ行下一段の可能動詞・終止形語尾。

- ダ** ① 蓑を編ん **ダ**。 助動詞・過去。(撥音に続く時は濁音化)  
 ② 夕焼け空 **ダ**。 助動詞・断定。

- タガル** ① 痛**タ** **ガル**。 形容詞の語幹 + 動詞化の接尾語「ガル」  
 ② か**タ** **ガル**。(片ガル・傾く) 動詞の一部。  
 ③ 寝 **タガル**。 助動詞・希望。

### ダスケエ (デ・ニ)

- ① 暑え、**ダスケエ** 泳ぐ。 接続詞・順接。(だから)  
 ② 呑ん**ダスケエ** 酔った。 助動詞・過去「ダ」 + 接続助詞「スケエ」  
 ③ 春 **ダスケエ** 暖こえ。 助動詞・断定 + 接続助詞。(だ・から)

- ダラ** ① 静か **ダラ** 聞こえる。 助動詞・断定の仮定形。(なら)  
 ② 飲ん **ダラ** 乗るな。 助動詞・過去の仮定形。(撥音便でダラ)

- デモ** ① **デモ**、空は青え。 接続詞  
 ② とん**デモ**ねえ。 形容詞の一部。  
 ③ 花 **デモ** 飾ろう。 係助詞。(類推)  
 ④ 村 **デモ** 評判だ。 格助詞 + 係助詞  
 ⑤ 読ん**デモ** 判らねえ。 接続助詞 + 係助詞 (デモ)

- ドッカ** ① **ドッカ** の家。 不定代名詞。(何処か)  
 ② 何 **ドッカ** ねえ。 副助詞。(…どころで)
- ナ** ① きん **ナ** (昨日)。 名詞の一部。おっとえナ・れえんナ…など。  
 ② さつき **ナ** (先刻) 名詞の一部。  
 ③ 静か **ナ** 海。 助動詞。(断定)  
 ④ 見る **ナ**。 終助詞。(禁止)  
 ⑤ 凄え **ナ!** 終助詞。(詠嘆)  
 ⑥ 誰か **ナ?** 終助詞。(疑問)
- ネエ** ① 銭が **ネエ**。 形容詞。(無い)  
 ② 行が **ネエ**。 助動詞。(打消)  
 ③ 呑み **ネエ**。 終助詞。(勧誘)  
 ④ 嫌だ **ネエ**。 終助詞。(詠嘆)  
 ⑤ **ネエ!** そこ搔えて。 感動詞。(呼掛)
- ノ** ① 雨**ノ**降る日。 格助詞。(主語)  
 ② 山**ノ**中。 格助詞。(連体)  
 ③ 喰う**ノ**が無え。 格助詞。(準体)  
 ④ 独りで行く**ノ**? 終助詞。(疑問)
- ヤ** ① 山 **ヤ** 川。 並立助詞。(並列)  
 ② 太郎**ヤ!** 終助詞。(呼掛)  
 ③ **ヤ!** また雨だ。 感動詞。(詠嘆)  
 ④ 坊**ヤ**。 接尾語。(愛称)
- ラ** ① アエツ **ラ**。 接尾語。(複数)  
 ② こっそ **ラ** 隠ねる。 副詞。(一部)  
 ③ 然う **ラ!** 助動詞。(断定)

- ン
- ① 山 ン中。 格助詞。(連体)
- ② 喰うンが無え。 格助詞。(準体)
- ③ 歩ば<sup>あよ</sup>ンた。 助動詞。(可能)
- ④ 殴ら<sup>な</sup>ンた。 助動詞。(受身)
- ⑤ 泣か<sup>な</sup>ン子。 助動詞。(打消)
- ⑥ 動・形・助動詞の一部「ラ・リ・ル・レ」が撥音化したもの。
- |   |  |                                       |                                     |           |
|---|--|---------------------------------------|-------------------------------------|-----------|
| 余 <sup>あま</sup> ら <sup>ん</sup> ねえ               | 知 <sup>し</sup> ら <sup>ん</sup> ねえ                     | 判 <sup>わか</sup> ら <sup>ん</sup> ねえ (動) | (ラ) → [ン]                           |           |
| 降 <sup>お</sup> り <sup>ん</sup> る                 | 借 <sup>か</sup> り <sup>ん</sup> る                      | 懲 <sup>こ</sup> り <sup>ん</sup> る       | 足 <sup>た</sup> り <sup>ん</sup> る (動) | (リ) → [ン] |
| 来 <sup>く</sup> る <sup>ん</sup> な                 | 為 <sup>し</sup> る <sup>ん</sup> な                      | 剃 <sup>し</sup> る <sup>ん</sup> な       | 見 <sup>み</sup> る <sup>ん</sup> な (動) | (ル) → [ン] |
| 良 <sup>よ</sup> か <sup>ん</sup> る <sup>ん</sup> めえ | 悪 <sup>わる</sup> か <sup>ん</sup> る <sup>ん</sup> めえ (形) |                                       | (ル) → [ン]                           |           |
| 枯 <sup>か</sup> れ <sup>ん</sup> る                 | 暮 <sup>く</sup> れ <sup>ん</sup> る                      | 晴 <sup>は</sup> れ <sup>ん</sup> る (動)   | (レ) → [ン]                           |           |
| 伐 <sup>た</sup> れ <sup>ん</sup> る                 | 割 <sup>わ</sup> れ <sup>ん</sup> る (助動)                 |                                       | (レ) → [ン]                           |           |



## 附録1 童唄・俗謡

【 遊戯唄 】	194
【 鬼の決め方 】	203
【 行事唄 】	205
【 呪い・祈祷 】	211
【 囃し・その他 】	212

## 附録2 念仏唄

【 光明和讃 】	214
【 光明真言 】	217
【 十三佛 】	218
【 三十三番御詠歌 】	218
【 毘沙門講 】	223
【 庚申講 】	223

## 附録3 昔話

一 アヤチュー チュー	224
二 聾猿えじめ	225
三 屁っこき アネサ	227
四 食えっタレ地藏	228
五 三枚の お札	230
六 太郎の寝小便	232
七 兎と貉	235
八 天邪鬼と瓜姫	240
九 猿の糞丸	242
十 狐の化かしっクラ	243
十一 サバ売り	245
十二 天マブリ 地マブリ	247
十三 ベロベロ カメロ	248
十四 猿と墓	249
十五 笠地藏	251

## 附録1 童唄・俗謡



### 【遊戯唄】 手毬・お手玉・身振り遊び・鬼ゴッコ などに伴う唄

#### 《1》 てんまる

あの手鞠は この手鞠は 好え手鞠で、京一番の オサカの娘。綾織り上手  
コヤ織り上手。後から見れば 大蛇のごとく、前から見れば 蟹子のごとく。  
朝結た髪を ソロラと解して、筭挿して 枕を入れて、盆だと思って 荊棘  
と搔えたれば、あの子ができ この子ができ。あの子は お母の 姫子だから、  
白えを着しよか 黒えを着しよか。三尺幅の 白えを着せて、高田へ参れば 夢見  
べと。夢はこのこと 今朝のこと。今朝出た舟は 誰が舟だ。それこそ身上の 舟  
だもの。また出た舟は 誰が舟だ。それこそ 官所の舟だもの。身上 続けて  
官所舟。

#### 《2》 小太郎さま

小太郎さま 小太郎さま。おらが 大尽の 娘の子。鼈甲の座敷に 並ばして、金  
の屏風を 立て申し、ホロラ ホロリと 泣きしやんす。何が惚けで 泣きしや  
んす。声の好えちやを 知るぞかえ、声の悪えちやを 知るぞかえ。ごへえの  
だら 出て行げよ。出ても行ぐども 道知らず。お宮の前まで 送り出し。  
そこへ出て 鳴く 鳥は何鳥だ。コウセンコウセン 鴨の鳥。賀茂の土産に 何  
貰た。一に香箱 二に葛籠 三に更紗の帷子を 洒落に着しよとて 貰て来た。  
おカン女は 死なれて 今日に七日、七日が過ぎたら どうしょうバ。裏の細  
道出て見れば、青竹三本に 松三本。松の中のキリギリス 声はしれども、目  
は見えねえ、目は見えねえ、キチヨ キチヨ 陸 エタチ。なんと 鬼灯立ち、  
帰命頂礼。五軒店 買え 板家を建て、板家 一番 伊達衆で御座る。五両で帯買  
って 三両で紵けて、紵けに紵け目の 紵け房つけて、織り目 織り目の 織り房  
つけて。風の吹く時 チンカラリンと カンカラリンと。

### 《3》 向こう通るは

向こう通るは あら誰が娘、母は三十三の末娘。歳は十六名はおヨネ。  
おヨネが器量の好えままに、家の船頭の仲人で 船の船頭に 貰われて、百万  
長者の嫁となり、嫁を三年経ぬ内に 大病患え 引き付けて、四天五天  
の医者にかへ 医者の薬を 尽くせども、あれとて さながら縁も無え これと  
てさながら縁も無え。正月三日の祭り時、盆の七日に 行ぎ着いた。

「おヨネ なぜ来た、なじよで来た？」「どごも苦しく無けれども、親元恋  
えしゆて それで来た。さあさ これから 譲物、槍や鉄砲 兄さんに 馬や乗  
り駕籠 弟さんに。嫁が仕立てた 振り袖は、七つナミコに 呉れてくれ。数珠  
や紙袋は婆さまに、櫛や笄 子供衆に。」

おヨネの念仏ア 南無阿弥陀一ぶ。

### 《4》 正月は

正月は 松挿て 竹挿て 慶ぶ。御膳は お子供衆 嫌がる。御膳は農より  
旦那の家来を お道連れ、一日明ければ 元日で、御年始 後生に 申しましょ。  
「お小僧や お小僧や お茶持って来え。」「何にもお構え くださんな。」「吸え物  
菜の物 はや持って来え。」「ひふみよえつ も なな や ここの とお。」  
「とんとん殿様 和え物は 一升えくらだネ。」「二百と五文に 負けてやる。  
あんまり ちゃけえが チャカラカポン。お前さんの ことだら 負けてやる。」

※ 以上の四曲は、平成九年刊『五箇のあゆみ』に記載されたものである。  
句読点も漢字も使わない平仮名だけの表記であった。判読に迷いなが  
ら漢字を当てて見たが、尚まだ疑問の点が多い。

※ 唄われた時代は明治の中期頃と思われ、知っている人も伝承した老婆  
を除いて殆ど生存して居ないことだろう。

※ 豪雪地の自然や風俗に無関係な内容は、関東方面からの流伝を魚沼方  
言で唄ったものと推察される。

### 《5》 もんだや もんだや

もんだや もんだや 一もめの もんだや。  
二もめの もんだや。  
三もめの もんだや。  
四もめの もんだや。  
五もめの もんだや。  
六もめの もんだや。  
七もめの もんだや。  
八もめの もんだや。  
九もめの もんだや。  
十もめの もんだや。

そーそれ そーそれ 一もめも そそれ。  
(十まで繰り返したら次に進む。)

つーかみ つーかみ 一もめも つかみ。  
(十まで繰り返したら次に進む。)

まーわせ まーわせ 一もめも まわせ。  
(十まで進んで終り。)

### 《6》 たんぼさん

おまんが簪 ささらば ささして さっさとせ。  
たんぼさんの長羽織、仕立てて着る時や よけれども、  
質屋へ出す時や 愛想がねえ。  
しちこま駒下駄 こまごまと 橋かけて、  
その橋 おスナが渡り初め。  
ひ・ふ・み・よ・えつ・も・なな・や・ここの・とお。

### 《7》 あんたがた どこサ

あんたがた どこサ。  
肥後サ。

肥後どこサ。  
熊本サ。  
熊本どこサ。  
せんばサ。せんば山には 狸がおってサ。  
それを猟師が 鉄砲で撃ってサ。  
煮てサ。焼いてサ。食ってサ。  
それを木の葉で チョエとかぶせ。

### 《8》 一れつ談判

一れつ談判破裂して、  
日露の戦争始まった。  
さっさと逃げるはロシヤの兵、  
死んでも尽くすは日本の兵。  
五万の兵を引き連れて、  
六人残して皆殺し。  
七月八日の戦いに、  
ハルピンまでも攻め寄せて、  
クロパトキンの首を取り、  
東郷大将 万々歳。万歳万歳みな万歳。  
勝利の旗も みな万歳。

### 《9》 餅づくし

- 一つ 火箸で焼いた餅。
- 二つ ふくれたフクデ餅。
- 三つ 見事なキナコ餅。
- 四つ 汚れたアンコ餅。
- 五つ えつ 医者どんのクソリ餅。
- 六つ もつ 聾どんのミヤゲ餅。
- 七つ 七草ゾウセ餅。
- 八つ 弥彦のカザリ餅。

九つ 転んだコーッタレ餅。

じょう 十に じょうめんぼう 十 麵棒で伸した餅。

### 《10》 一番初めは

一番初めは 一の宮。

二また 日光東照宮。

三また 佐倉の宗五郎。

四また 信濃の善光寺。

五つは 出雲の大社。

六つつ 村々鎮守様。

七つは 成田の不動様。

八あつ 八幡の八幡宮。

九つ 高野の高野山。

十に 東京 心願寺。

あれほど心願かけたのに、浪子の病は治らない。

轟々轟々と鳴る汽車は武雄と浪子の別れ汽車。

二度と逢えない汽車の窓、鳴いて血を吐く<sup>ほととぎす</sup>不如帰。

### 《11》 がんがらび

一つ がんがらび。

二つ 芙蓉の木。

三つ 蜜柑の木。

四つ ようざ 柚子の木。

五つ えつ えつちよ 銀杏の木。

六つ もつ 紅葉の木。

七つ 南天木。

八つ 八重桜。

九つ こうざ 椿の木。

十に とっておさめて十二がんがらで、もえ一つ足しましょ。

## 《12》 大黒様

- 大黒様と言う人は、
- 一に 俵を踏んまえて、
  - 二に にっこり笑って、
  - 三に 酒を造って、
  - 四つ 世の中好え様に、
  - 五つ 何時でもニッコニコ。
  - 六つ 無病息災に、
  - 七つ 何事無え様に、
  - 八つ 屋敷を おっ広げ、
  - 九つ 米倉 おっ建てて、
  - 十に とうとう福の神。

## 《13》 配給並び

- 一もめのエスケさん <sup>えも</sup> 諸配給並んで一万一千一百ほど一斗一斗一斗米の  
お札を納めて二もめに渡して通りゃんせ。
- 二もめのニスケさん <sup>にんじん</sup> 人参配給並んで二万二千二百ほど二斗二斗二斗米の  
お札を納めて三もめに渡して通りゃんせ。
- 三もめのサスケさん <sup>さんま</sup> 秋刀魚配給並んで三万三千三百ほど三斗三斗三斗米の  
お札を納めて四もめに渡して通りゃんせ。
- 四もめのシスケさん <sup>しお</sup> 塩配給並んで四万四千四百ほど四斗四斗四斗米の  
お札を納めて五もめに渡して通りゃんせ。
- 五もめのゴスケさん <sup>ごっぼ</sup> 牛蒡配給並んで五万五千五百ほど五斗五斗五斗米の  
お札を納めて六もめに渡して通りゃんせ。
- 六もめのロスケさん <sup>ろうそく</sup> 蝋燭配給並んで六万六千六百ほど六斗六斗六斗米の  
お札を納めて七もめに渡して通りゃんせ。
- 七もめのナスケさん <sup>なんばん</sup> 南蛮配給並んで七万七千七百ほど七斗七斗七斗米の  
お札を納めて八もめに渡して通りゃんせ。
- 八もめのハスケさん <sup>はす</sup> 蓮配給並んで八万八千八百ほど八斗八斗八斗米の  
お札を納めて九もめに渡して通りゃんせ。

九もめのクスケさん 栗くり 配給並んで九万九千九百ほど九斗九斗九斗米の  
お札を納めて十もめに渡して通りゃんせ。

十もめのトスケさん 豆腐とうふ配給並んで十万十千十百ほど十斗十斗十斗米の  
お札を納めて一もめに渡して通りゃんせ。

(※「配給並び」は戦中・戦後の侘びしい風俗であった。)

#### 《14》 西郷隆盛

一かけ 二かけて 三かけて、四かけて 五かけて 橋をかけ。

橋の欄干 腰掛けて、遙か向こうを 眺めれば、

十七八なる 姉さんが 花や線香 手に持って、

「姉さん 姉さん どの行くの？」

「わたしは 九州鹿児島の 西郷隆盛娘です。明治十年三月に 切腹なされた父上のお墓詣でに参ります。」

お墓の前で 手を合わせ、南無阿弥陀仏 ジャンケンポン！

#### 《15》 (大人対象の身振り数え唄)

一やもしんじよ 儂えちあ糸引わしかねえとど女工えとなりやこそ糸引えとえて参りましょ。

儂わしあ糸引えとかねど ちゃっからりんとゴメンナ。

二やもしんじよ 儂わしあ荷そは負わしわねそど小僧そなりやこそ荷そを負わしって参りましょ。

儂わしあ荷そは負わしわねど ちゃっからりんとゴメンナ。

三やもしんじよ 儂わしあ三味ひあ弾わしかねひど芸者ひなりやこそ三味ひ弾わしえて参りましょ。

儂わしあ三味ひあ弾わしかねど ちゃっからりんとゴメンナ。

四やもしんじよ 儂わしあ皺しわ寄わしらねしわど年寄しわりなりやこそ皺しわ寄わしって参りましょ。

儂わしあ皺しわ寄わしらねど ちゃっからりんとゴメンナ。

五やもしんじよ 儂わしあ碁わしは打わしたねわしど碁打わしちなりやこそ碁打わしって参りましょ。

儂わしあ碁わしあ打わしたねど ちゃっからりんとゴメンナ。

六やもしんじよ 儂わしあ艀ろは漕わしがねろど船頭ろなりやこそ艀ろ漕わしえて参りましょ。

儂わしあ艀ろあ漕わしがねど ちゃっからりんとゴメンナ。

七やもしんじよ 儂わしあ質わしあ置わしかねわしど質屋わしなりやこそ質置わしえて参りましょ。

儂わしあ質わしあ置わしかねど ちゃっからりんとゴメンナ。



八やもしんじよ 儂わしあ鉢わしあ持たねど庭師なりやこそ鉢わし持って参りましょ。

儂わしあ鉢わしあ持たねど ちゃっからりとゴメンナ。

九やもしんじよ 儂わしあ鋏わし持たねど百姓なりやこそ鋏わし持って参りましょ。

儂わしあ鋏わし持たねど ちゃっからりとゴメンナ。

十やもしんじよ 儂わしあ銃わしは持たねど兵隊なりやこそ銃わし持って参りましょ。

儂わしあ銃わしは持たねど ちゃっからりとゴメンナ。

(※ 村の演芸会などに、製糸工場の女工たちが伝えた唄である。)

### 《16》 サンギ サンギ

「鷺さんぎ 鷺さんぎ にしや 何故こうだ？」

「腹たつぽが減へえってこうだ。」

「田圃たつぽの中へ入へえって田螺つぶでも拾つって食くえナレモ！」

「足あしが汚かれるモウセ。」

「萱かやに掴つかまって洗せんえ！」

「手てが痺しびれるモウセ。」

「膏藥こうやく貼貼れヤ！」

「蠅へえが糞むしるモウセ。」

「団扇おちわで煽あおげ 煽あおげ！ おべったり けえけって煽あおげ 煽あおげ！」

### 《17》 沢ん蟹

沢がになる蟹がにが モンザラ モンザラ這ええ出して 壕えを掘えって居えたれば、鳥えと申えすクロ鳥えが フーワラ フーワラ飛えんで来て あっちへ突えつつき ぶん回もうしこっちへ突えつつき ぶん回もうす。カーラス カーラス あんまりだ おらもそりでも生えき物もんだ。

### 《18》 カラス カラス

「カラス カラス カンガラス おてえしよのが亭主えはドゴへ行えった？」

「糞こうじ はかりへ行えぎ申えした。」

「何石 何石はかった？」

「三石 三石はかった。」  
三石山の女郎衆が 白おすに乗って転び、錦きん きもんの着物を汚して、  
あれえ川で洗って、  
えすぎ川えすで濯いで、  
しばり川で搾って、  
外へ干せば しょーしだし、(恥ずかしいし)  
馬屋で干せば 馬が食う。  
二階で干せば 煤けるし、  
てんてん手箱えに入れたれば、  
鼠ねずが引えたやら 父ととが引えたやら、  
俺おらあ そらあ 知らーねえ 知らねえ。

### 《19》 通りゃんせ

通りゃんせ 通りゃんせ。  
ここは ドゴの細道じゃ。  
天神様の細道じゃ。  
どうか通して くだしゃんせ。  
御用の無い者 通しやせぬ。  
此の子の 七つのお祝えに お札を納めに参ります。  
行えぎは良え良え 帰りは怖え。  
怖えながらも 通りゃんせ 通りゃんせ。(東京方面からの伝来と言う。)

### 《20》 山寺の和尚さん

山寺の和尚さんは 毬はつきたし 毬は無し、  
猫を紙袋に ヘシこんで、  
ポンと蹴りや ニヤンと鳴く。  
ニヤン ポン 其そ処こにか、わしや此こ処こに、  
そりじゃ 一貫貸し申した。(東京方面からの伝来と言う。)

## 《21》 凍み渡り

しんばえ こんばえ 菜のコンコン畑。  
山じゃ藤の実 河原じゃ蓬。  
すずくだれ（雫垂れ？） スッポンボン。

## 《22》 コンペタさん

うちのコンペタさんは 本当に困ります 困ります。  
困った時には 涙がポロリとネ ポロリとネ。  
泣えた涙を 袂で拭きましょ 袂で拭きましょ。  
拭えた袂を 盥で洗えましょ 洗えましょ。  
洗った袂を お庭に干しましょ 干しましょ。  
干した袂を 箆笥に仕舞えましょ 仕舞えましょ。  
仕舞った着物を 鼠がカリリとネ カリリとネ。

## 【 鬼の決め方 】

### 《1》 かがめ かがめ

かがめ かがめ 籠の中の鳥は えつえつ出やる。  
夜明けの晩に 鶴と亀と つべった。  
<sup>おしろ</sup>後の正面 ダーレ？ （千葉方面からの伝来と言う。）

### 《2》 ずえ ずえ ずっころばし

ずえ ずえ ずっころばし 胡麻味噌ずえ。  
茶壺に追われて ドッピンシャン。  
<sup>の</sup>あげたら ドンドコシヨ。  
俵の鼠が 米食ってチュウ、  
チュウ チュウ チュウ。  
おっ父さんが 呼んでも おっ母さんが 呼んでも、  
<sup>え</sup>行ぎっこ 無しヨ。  
<sup>えど</sup>井戸の廻りで お茶碗<sup>け</sup>欠えたの ダーレ？ （東京方面からの伝来と言う。）

### 《3》 坊さん 坊さん

坊さん 坊さん ドゴ行ぐノ？

わたしは 田圃<sup>たつぼ</sup>へ 稲苳りに。

わたしも 一緒<sup>えっしょ</sup>に 連れしやんせ。

お前が来ると 邪魔になる。

このカンカン坊主 クソ坊主。

後<sup>おしろ</sup>の正面 ダーレ？

(栃木方面からの伝来と言う。)

### 《4》 ゼンメエ 採り採り

ゼンメエ 採り採り、

ワラビ 採り採り、

何が出ても おっかなくねえ。

(一斉に駆け出して遅れた者が鬼となる。)

### 《5》 ベントン

ベントン シュウベントン ウシラクラ ナマヨモギシ。(意味不明)

(「ベントン カタレ！」で集まった者が拳を重ね、唄い終わった時の拳に当たる者が鬼。)

### 《6》 シーヤ

ホラ ホラ シーヤ！

(ジャンケン ポン と同様の掛け声・女子)

## 【 行事唄 】

### 《1》 齊の神（注連飾りを焼きながら）

おしろやま  
後 山の子供は 意<sup>え</sup>地<sup>じ</sup>の悪<sup>わり</sup>え 子供で、  
せつちん  
雪隠口へ隠れて 指<sup>えび</sup>のマラを 吹えた吹えた。

### 《2》 鳥追い（雪の夜道を藁ブーシを被りきながら）

鳥追えだ 鳥追えだ。  
あらあ だが鳥追えだ。  
こらあ だが鳥追えだ。  
旦那どのの 鳥追えだ。  
どっから どごまで追ってった。  
信濃の国まで 追ってった。  
何を持って 追ってった。  
道ん端の柴を 抜<sup>の</sup>ぎ<sup>の</sup>抜<sup>の</sup>ぎ 追ってった 追ってった。  
柴ん鳥も 川ん鳥も 立ちやがれ ホーエ ホエ！

雀のガキ共が 稲<sup>えね</sup>三<sup>さつ</sup>把<sup>ば</sup> 盗<sup>のす</sup>んで、  
甘酒辛酒 造って、  
ドウとサンギを 呼んで来て、  
ドウに三杯<sup>さつべえ</sup> サンギに三杯<sup>さつべえ</sup>。  
酔った酔った こん時<sup>どき</sup>だ。  
雉子ん鳥に ボツアッて、  
佐渡が島へ 立ちやがれ ホーエ ホエ！

※ 次は『北越雪譜』（天保五年刊・越後塩沢の鈴木牧之撰）に記載されている  
**鳥追い唄** である。

あのと<sup>り</sup>(鳥)や どこ(何処)から お(追)つてき(来)た。

しなぬ(信濃)のくに(国)から おつてき(来)た。

なにをも(持)つて おつてき(来)た。

しば(柴)をぬく(束)べて おつてき(来)た。

しば(芝)のとり(鳥)も かば(川辺)のとり(鳥)も たちやがれ(可立) ホイ ホイ。

おら(己等)がうらの さなへだ(早苗田) のとり(鳥)は、

お(追)つても お(追)つても、

……

すずめ(雀) すはどり(鴟鳩) たちやがれ(可立) ホイ ホイ。

### 《3》 毘沙門祭り (サンゲツミッカ)

越後浦佐の 毘沙門様は、

国の宝よ 福の神さん。

三月三日は お雪の中で、

裸 裸足の 押し合い祭り、

アア サンヨ サンヨ。サンヨ サンヨ。

あがる蠟燭 日本一よ。

獅子に牡丹は 長岡でサ、

二十五貫は 小千谷の御講中。

みんな併せりゃ 百貫目。

アア サンヨ サンヨ。サンヨ サンヨ。

龍の口から 湧き出る水に、

禊ぎしてから 御堂入りヨ。

押しつ押しされつ 押しされつ押しつ、

七押し八踊りゃ 夜も更ける。

アア サンヨ サンヨ。サンヨ サンヨ。

#### 《4》 精霊迎え（芋穀火を焚きながら）

ジージゴたち バーバゴたち、  
ジース舟を漕ぎナレモ バーサ舟に乗りナレモ。  
この夜の灯りに ゴザーレ ゴザーレ！

#### 《5》 盆踊り

##### （音頭取りの交替と口説き）

わたしゃ ちっとばかり 声が潤れました。  
だれか どなたか 唄の継ぎを頼んだ。

お前 疲れたら お休みなされ。

儂がちっとばかり 御名代を致す。  
前の音頭様は どなたか知らぬ。  
声もよく立つ 唄の酣も上手だ。  
わたしゃ よくよく山中育ち。  
声も唄の酣も 及びは無えが、  
それで良ければ チットばかり口説く。  
儂が出るにや 側の衆が頼り、  
一にや若え衆や 二にや女中がたも、  
三にや定めし おが連れ達も、  
四にや諸国の 寄りかた衆も、  
側に立ち寄る 御見物がたも。  
足を鳴らして 手をエチロクに、  
ヨエサ ヨエコラサと 声張り上げて、  
囃し呉れるなら チットばかり遣るか。

新発田新町 町屋の娘。 姉が<sup>さんしち</sup>三七にて 妹が<sup>にはち</sup>二八。  
姉の三七にや 気は無えけれど、 妹二八に チョエと惚れまして、  
妹欲しさに 御諒願をかけた。 掛けし御諒願を 細かに読めば、  
一にや <sup>きのと</sup>乙の大日様へ。 二には 新潟の白山様へ。

三にや 讃岐の金比羅様へ。  
五には 五泉の若宮様へ。  
七つあ 長岡の蔵王様へ掛けた。  
九には <sup>くがみ</sup> 国上の<sup>こくじょうじ</sup> 国上寺様へ。

四には 信濃のお善光寺様へ。  
六つあ 村上 お天王様へ。  
八つあ 弥彦の御明神様へ。  
十には 栃尾の秋葉様へ掛けた。

お伊勢七度 <sup>ななたび</sup> 熊野へ八度 <sup>やたび</sup>  
掛けし御諒願の 叶わぬ時は、  
三十三尋の <sup>ひろ</sup> 大蛇となりて、  
さても こんげえの事  
さても これから 文句にかかる。

村の鎮守様へ 百二十四度。<sup>たび</sup>  
前の御手洗 <sup>みたらせ</sup> 身を投げ込んで、  
姉も妹も みな取り殺す。  
さらりと 止めて、

かかる文句が また何と聞けば、  
頃は元禄 十六年の、  
聞くも珍し 心中話。  
紺の暖簾に <sup>のれん</sup> 桔梗の<sup>ききよう</sup> 紋は、  
あまた女郎衆の 数ある中で  
歳は十九で 当世の育ち、  
歩く姿は <sup>ゆり</sup> 百合の花。  
我も我もと 名差して上がる。  
春は花咲く 青山辺の  
女房持ちにて 二人の子供、  
二人子供のあるその中で、  
見るに見かねた 女房のお安、  
わたしゃ女房で <sup>やす</sup> 妬くの<sup>や</sup> じゃ無えが、  
えくら お前が 侍じゃとて、  
どうせ切れるの 六段目には、  
二つ一つの 思案と見える。  
十九二十の <sup>はたち</sup> 身じゃあるめえに、  
止めておくれよ 女郎買えばかり。  
何を小癩な <sup>こしやく</sup> 女房の意見、  
女房ぐれえの 意見じゃ止まぬ。  
それが嫌なら 子供を連れて、

鈴木主水と <sup>もんど</sup> また白糸口説き。<sup>しらいとくど</sup>  
花のお江戸の その傍らに、  
ところ四ッ谷の 新宿町に、  
音に聞こえし 橋本屋とて、  
お職女郎の 白糸こそは、  
立てば芍薬 <sup>しやくやく</sup> 座れば牡丹 <sup>ぼたん</sup>。  
愛嬌良ければ <sup>あいきよう</sup> みな人様が、  
分けても客は どなたと聞けば、  
鈴木主水と <sup>もんど</sup> 言う侍で、  
五つ三つの 悪戯盛り。<sup>えたづら</sup>  
今日も明日もと 女郎買えばかり。  
ある日わが夫 <sup>つま</sup> 主水に向かえ、  
二人子供は <sup>だて</sup> 伊達には持たぬ。  
金のなる木は 持ちゃしゃんすまえ。  
連れて逃げるか 心中するか、  
しかし二人の 子供が不憫。<sup>ふびん</sup>  
人に意見も する年頃で、  
云えば主水は <sup>もんど</sup> 腹立ち顔で、  
己が心で <sup>おの</sup> 止まねえものが、  
愚痴な其方より <sup>ぐち</sup> 女郎衆が可愛え。<sup>そち</sup>  
そちがお里へ 出て行きゃしゃんせ。



愛想尽かした <sup>もんど</sup> 主水の言葉。  
またも行くのが 女郎買え姿。  
如何に男の <sup>えか</sup> 我が儘じゃとて、  
五つ三つの子に 引かされて、  
五つなる子が 側へと寄りて、  
気色悪けりや お菓あがれ。  
坊が泣きます 乳くださえナ。  
どこぞ痛くて 泣くのじゃ無えが、  
あまり <sup>とと</sup> 父さん 身持ちが悪え。  
<sup>たぶさ</sup> 髻 掴んで <sup>ちようちやく</sup> 打 擲なさる。  
わたしゃ これから 新宿町の、  
三つなる子を 背中におぶえ、  
行けば程なく 新宿町へ。  
見れば表に <sup>もんど</sup> 主水の草履。  
わたしゃこちらの 白糸さんに、  
云えば小職は 二階と上がり、  
どこの女中か 知らなえ方が、  
逢うてやらんせ 白糸さんヨ。  
<sup>わし</sup> 儂を訪ねる 女中とやらは、  
そこでお安は <sup>やす</sup> 初めて逢うて、  
お前見込んで 頼みがござる。  
日々の勤めも おろかにすれば、  
せめて此の子が 十五になれば、  
昼夜揚げ詰め なさると俣よ。  
お前女房に なるうと俣よ。  
三度来たなら 一度は上げて、  
云えば白糸 言葉に詰まり、  
何も知らずに 今まで居たが、  
意見しまししょう お帰りなされ。  
帰る姿の その憐れさよ。  
そこで白糸 <sup>もんど</sup> 主水に向かえ、  
<sup>わし</sup> 儂に頼みに 来ました程に、

ここで主水は <sup>もんど</sup> こ自棄となりて、  
後でお安は <sup>やす</sup> さて口惜しえ。と、  
自害しようと 覚悟はすれど、  
死ぬに死なれず 嘆えて居れば、  
これサ 母さん なぜ泣きしゃんす。  
どこぞ痛くば さすりてあげヨ。  
云えば <sup>やす</sup> お安は 顔振り上げて、  
幼えけれども よく聞け坊や、  
意見致せば <sup>こしやく</sup> 小癩な奴と、  
さても口惜しや 夫の心。  
女郎衆 頼んで 意見をしょ と、  
五つなる子の 手を引きまして、  
紺の暖簾に <sup>のれん</sup> 橋本屋とて、  
それを見るより 小職を招き、  
どうぞ逢えたえ 逢わしておくれ。  
これさ姐さん <sup>ねえ</sup> 白糸さんに、  
何かお前に 用あるそうナ。  
云えば白糸 二階を降りて、  
お前さんかえ 何用でござる。  
わたしゃ青山 <sup>もんど</sup> 主水が女房、  
<sup>もんど</sup> 主水身分は 勤めの身分、  
末は御扶持を <sup>ごふち</sup> 離れるほどに、  
日々の勤めは 此の子にさせて、  
または私の 下がらた後で、  
ここの道理を よく聞き分けて、  
二度は意見で 帰しておくれ。  
わたしゃ勤めの 身の上なれば、  
<sup>わし</sup> 儂もこれから <sup>もんど</sup> 主水様に、  
云えば お安は <sup>やす</sup> 子供を連れて、  
お安 我が家へ <sup>やす</sup> はや帰り来る。  
お前女房が 子供を連れて、  
今日はお帰り 泊めては済まぬ。

云えば主水は <sup>もんど</sup>ニコリと笑え、  
遂にその夜も 居続けなさる。  
待てど暮らせど 帰りもしねえ。  
支配方より お使えありて、  
<sup>ふ</sup>扶持も <sup>ちぎよう</sup>知行も みな取り上げる。  
思案しかねて 当惑致し、  
馬鹿だ <sup>たわけ</sup>白痴と 云われるよりは、  
二人子供を 寝かせて置いて、  
落とす涙が 硯の水よ。  
二人子供の 寝顔を見れば、  
思え切り刃を 逆手に持ちて、  
二人子供は はや目を覚まし、  
幼な心に ただ泣くばかり。  
女郎屋立ち出で ほろほろ酔えて、  
表口より 今戻った と、  
これサ <sup>とと</sup>父さん お帰りなされ。  
物も云わずに 一日ネンネ、  
どうぞ詫びして 下さりませ と、  
<sup>あえ</sup>間の唐紙 さらりと開けて、  
<sup>わし</sup>儂が心が 悪りえが故に、  
しばしその場に 両手を合わす。  
菰にくるんで <sup>せな</sup>背にと <sup>おぶ</sup>負え、  
行けばお寺で 葬りまする。  
今の出来事 話をすれば、  
わしの意見が 足りなえ故に、  
わしもこの俣 永らえおれば、  
死出の山路も 三途の川も、  
主水 <sup>もんど</sup>覚悟を <sup>とど</sup>白糸止め、  
お安さんへの <sup>やす</sup>言え訳立たぬ。  
二人子供を 成人させて、  
云うて白糸 一間に入り、  
義理を立てたり 意気地を立てた

置えておくれよ 心配要らぬ。  
お安 <sup>やす</sup>子供を 相手と致し、  
遂にその夜も はや明けければ、  
主水 <sup>もんど</sup>の勤めが 不埒な故に、  
そこでお安は <sup>やす</sup>途方に暮れて、  
扶持に離れて 長らえ居れば、  
武士の女房だ 自害をしよと、  
硯 取り出し 墨磨り流し、  
涙とどめて 書き置き致し、  
可愛え子供の 身に引かされる。  
グット <sup>やえぼ</sup>刃の 自害の音に、  
これサ母さん どうしました と、  
主水 <sup>もんど</sup>それとは 夢さら知らず、  
女房 <sup>じ</sup>焦らしの 小唄で帰る。  
云えば子供は 駆け出しながら、  
なぜか母さん <sup>こんにち</sup>今日かぎり、  
ほんに今まで <sup>えたずら</sup>悪戯したが、  
聞えて主水 <sup>もんど</sup>は 驚き入りて、  
見ればお安は <sup>やす</sup>血潮に染まる。  
自害したかや 不憫なこと と、  
お安 <sup>やす</sup>死骸を <sup>もんど</sup>主水様は、  
檀那寺へと 子供と共に、  
後で主水 <sup>もんど</sup>は 白糸さんに、  
聞えた白糸 びっくり致し、  
お安さんには 自害をさせた。  
お職女郎の 言え訳 立たぬ。  
お安さんへの <sup>やす</sup>手を引きましょ と、  
わしとお前と 心中しては、  
お前死なずに 永らえしやんせ。  
わしの為にも <sup>えこう</sup>回向を頼む。  
<sup>やえぼ</sup>刃 突き刺し 相果てまする。  
世にも珍しえ 話でござる。

**(甚句)**

アー オリヤー 盆だてがんに 踊らぬ奴は、  
子でも孕んだか 中産でもしたか。  
アー オリヤー でんでらでんの でっこえ嬢あ持てば、  
二百十日の 風除けになる。  
アー オリヤー 今夜の夜は 明けそうで明けぬ。  
鶏の鳴くまで 夜の明けるまで。

**【 呪文・祈祷 】**

《1》 小正月の烏呼び (臙料理をクシキに載せ、天に棲む三本足の烏を招く。)

「カーラ来え カラ来え！」

《2》 雷避け (縁側に香炉を持ち出し線香を焚きながら。)

「クワバラ エンジョ！」「クワバラ エンジョ！」

《3》 十二講 (雪の早朝、弓を射ながら)

「天<sup>てつちよう</sup>頂グリ 山グリ からグリ。

人の目に当たんな 飼え物の目に当たんな。

トッピ・カラスの 目に当たれ！

スッテラテンの テーン。」

《4》 シビレ除け (唾で濡らした藁シベを額に貼りながら。)

「シビレ シビレ 跳んで行け！

足の下<sup>しつた</sup>あ 狭<sup>せべ</sup>えぞ、

京の街あ 広えぞ。

京の街へ ヒョーンと跳べ！」

《5》 天気占い （下駄を投げ上げながら。）

「明日 天気にして おくれ！」

《6》 屁の主あて （穂先を曲げたノエゴを両掌に挟んで回しながら。）

「ベロベロ カメロ！」

屁を ブツとこえた方へ 向きやれ 向きやれ！」

《7》 抜け歯捨て （上歯は屋根に、下歯は縁の下投げ捨てながら。）

「ハヤ ハヤ <sup>お</sup>生えレ！」

《8》 虫騙かし

「アネサ アネサ！」 （屁臭虫を追いながら。）

「ホー ホー ホッタル来え！」

アッチの水あ 苦げえぞ！

コッチの水あ 甘めえぞ！」 （蚩を追いながら。）

「ダエロウ ダエロウ <sup>つ</sup>角出せ！」

出さんと 庄屋どんに 言え付けるゾ！」 （蝸牛と遊ぶ時。）

《9》 草騙かし

「ゴンベェ ゴンベェ 赤くなれ！」

赤くなりゃ 米一升喰わせるゾ！」 （スベリヒユを擦りながら。）

【 噓し・その他 】

「アサズキ あんさの チョンボの毛、

ノンビロ べろべろ ベッチョの毛。」 （毛モクジャラを噓う。）

「アララ アンラ アララ アンラ！」 （他人の過失を咎める。）

「今泣えた小僧が チョエと出て、笑った 笑った。」 (喧嘩)

「鬼さん こちら 手の鳴る方へ。」 (鬼ゴト)

「カーラス カラス 勘三郎 お前が鳴くすけえ <sup>けえ</sup> 帰ろ。」 (鳥に向かって)

「ガン ガン 竿ンなれ 竿ンなったら 鉤ンなれ！」 (鳥に向かって)

「たまげた 駒下駄 柱下駄。」 (喧嘩、他人の成功を妬む。)

「トッピ トッピ 馬鹿トッピ 8の字でも書えて見ろ！」 (鳥に向かって)

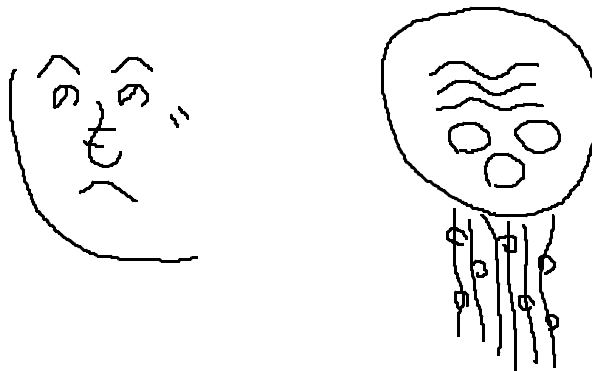
「泣き虫 毛虫 挟んで ぶちやれ、大川へぶちやれ！」 (喧嘩)

「負けて逃げるは カナギッチョ、ヘッペに追われて 仕方がねえ！」 (喧嘩)

「ダルマさん ダルマさん 睨めっこしましょ。笑うと拳骨。アップップ！」  
(睨めっこ)

「へへ のの もへじ。」 (落書き)

「メメズが三匹<sup>さっぴき</sup>這え出して、卵が三つ並んで、雨がザンザン降って来て、  
<sup>あなれ</sup>霰もバラバラ降って来て、オット たまげた<sup>たこ</sup>蛸入道。」 (落書き)



## 附録2 念仏唄

次は南魚の浦佐近在で、真言宗・普光寺の檀徒が唱えていた念仏唄である。口承が主であった為、意味の捉え難い表現もある。念仏声明は「調<sup>ちようしやう</sup>声取り」《チュウショウ取り》が鐘を鳴らしながら先導を勤めた。

(文語文のため、仮名遣いは旧仮名に依った。)

### 【光明和讃】

きみやうちやうらい だいいちそん 帰命頂礼 大日尊。	しよぶつによらい ほんじよ 諸佛如来の 本所にて、
われら ふも ごと 我等が父母の 如くなり。	もと ほとけ こ おも 基より佛は 子を憶ひ、
ふくうけんざく くわんのん 不空絹索 観 音の、	さんめんしき いただ 三面識の 頂きに、
うぬ て の な たま 有為の手を伸べ 撫で給ふ。	あまね しゅじやう ひ 普く衆生を 牽くやとて、
ごしき なは はす はな 五色の索に 蓮の花、	ぼだい じゆず しやう みづ 菩提や数珠や 漿の水。
しか かは げ さ 鹿の皮にて 袈裟をなし、	しやうじやうれんげ みやうおん 清浄蓮華の 冥 恩に、
こうみやうしんごん 光明真言 ほどこして、	やみお まよ ものとも 闇路に迷ふ 者共を、
たす あ がた 救けたまふぞ 有り難や。	おづ ほんじ にじゅうさん 僅か梵字は 二十三、
はちまんしよぎやう よ 八万書 経を 読むよりも、	くどく りやく 功德すぐれて 利益あり。
『オン』字の道理 深ければ、	いちだいきやうしゆ しやくそん 一代教主の 釈 尊も、
これにて成 仏 し給なり。	『アボキヤ』即ち 胎蔵の、
へんじやうによらい だら に 遍照如来の 陀羅尼なり。	『ペイルシャノウ』も 無上尊。
『マカ』は広 大 無辺際。	『ボダラ』は阿闍 如来なり。
『マニ』は元より 宝生尊。	『ハンドマ』すでに 阿弥陀仏。
『ジンバラ』同じく 釈迦佛。	『ハラ』は五佛の 胎蔵教。
『ハリタヤ』如来の 説法ぞ。	『ウン』字は即ち 金剛の、
だいいちそん 大日尊にて ましませば、	はじ をは もんじ 始め終りの 文字 (梵字) こそ、
こんたいりやうぶ まま 金胎両部の その俣に、	ちち はは みぎひだり 父や母やと 右左。
なか ほんじ まん だら 中にも梵字の 曼荼羅は、	おや かう こ ごと 親に孝ある 子の如く、
とり つばさ おん し 鳥や翼 (獣?) も 恩を知る。	いはん ひと う 況 や人と 生まれては、
しおん とく 四恩をおくるは 徳ぞかし。	かみ ほとけ まも 神や佛も 護るなり。

いよいよ後世の 大老は、  
 真言一遍 読みぬれば、  
 肩や背中の 上になり、  
 導きたまふ 事なれば、  
 無量の諸佛 諸菩薩も、  
 ことに女は 称ふべし、  
 変生男子 ある故に、  
 妄徳亡者の 科までも、  
 十身十佛 他所ながら、  
 観教立生 善道も、  
 光明得たる 徳ぞかし。  
 弄はず常に 称ふべし。  
 手をよく合はせ 身をまとひ、  
 『アン』と一声 言ひ初め、  
 印を結んで 『アア』と言ふ、  
 必ず佛に なり給ふ、  
 返す返すも 称念じ、

先立つ者の その為に、  
 弥陀も 歎び たまひつつ、  
 手を引き連れて 極楽へ、  
 深くも 尊び 申すべし。  
 皆々これを 読み来たり。  
 五障三障 罪深し。  
 十悪五逆の 無辺際。  
 即時に佛果と 顕れて、  
 文殊弘法 興教も、  
 忍辱仙人 婆羅門も、  
 たどひ不浄が あるとでも、  
 我々生まるる その時は、  
 出でて赤子の 産声に、  
 これにて末期の 言ふ句には、  
 『阿』字の古巢へ 立ち帰る。  
 このこと忘るな 束の間も。  
 返す返すも 称念じ。

(この後で「光明真言」を唱え、合掌礼拝する。)

※ 和讃全体は七五調・百五十二句で構成され、曲節は ① ～ ④句を基として、これを繰り返す単調なものである。

※ 次は編者が父母の口許を思い浮かべながら試みに付けた音譜である。発音は文字表記と異なる方言音で唱えられた。

(例 「い」「ぬ」「ゑ」 → 「え」	「たまふ」 → 「たも」う
「真言」 → 「しんぐん」	「十」 → 「じよう」
「数珠」 → 「じようず」	「仏」 → 「ほつけ」
「父母」 → 「ふも」	「施す」 → 「ふどくす」

① きみよ<sup>う</sup>ちよ<sup>う</sup>ら<sup>え</sup>  
③ しょ<sup>ぶ</sup>つ<sup>に</sup>よ<sup>ら</sup><sup>え</sup>の

❶ われ<sup>ら</sup>が<sup>ふ</sup>も<sup>の</sup>  
❸ も<sup>と</sup>よ<sup>り</sup>ほ<sup>つ</sup>け<sup>は</sup>

① ふ<sup>く</sup>う<sup>け</sup>ん<sup>ぎ</sup>く  
③ さ<sup>ん</sup>め<sup>ん</sup>し<sup>き</sup>の

❶ う<sup>え</sup>の<sup>て</sup>を<sup>の</sup>べ  
❸ あ<sup>ま</sup>ね<sup>く</sup>し<sup>ゅ</sup>じ<sup>ょう</sup>を

① ご<sup>し</sup>き<sup>の</sup>な<sup>わ</sup>に  
③ ぼ<sup>だ</sup><sup>え</sup>や<sup>じ</sup>ょう<sup>ず</sup>や

❶ し<sup>か</sup>の<sup>か</sup>わ<sup>に</sup>て  
❸ し<sup>ょう</sup>じ<sup>ょう</sup>れ<sup>ん</sup>げ<sup>の</sup>

① こ<sup>う</sup>み<sup>よ</sup>う<sup>し</sup>ん<sup>ぐ</sup>ん  
③ や<sup>み</sup>じ<sup>に</sup>ま<sup>よ</sup>う

❶ た<sup>す</sup>け<sup>た</sup>も<sup>う</sup>ぞ  
❸ わ<sup>ず</sup>か<sup>も</sup>ん<sup>じ</sup>は

① は<sup>ち</sup>ま<sup>ん</sup>し<sup>ょ</sup>ぎ<sup>ょう</sup>を  
② く<sup>ど</sup>く<sup>す</sup>ぐ<sup>れ</sup>て

② だ<sup>え</sup>に<sup>ち</sup>そ<sup>ん</sup>  
④ ほ<sup>ん</sup>じ<sup>ょ</sup>に<sup>て</sup>

❷ ご<sup>と</sup>く<sup>な</sup>り  
❹ こ<sup>を</sup>お<sup>も</sup><sup>え</sup>

② く<sup>わ</sup>ん<sup>の</sup>ん<sup>の</sup>  
④ え<sup>た</sup>だ<sup>き</sup>に

❷ な<sup>で</sup>た<sup>も</sup>う  
❹ ふ<sup>く</sup>や<sup>と</sup>て

② は<sup>す</sup>の<sup>は</sup>な  
④ し<sup>ょう</sup>の<sup>み</sup>ず

❷ け<sup>さ</sup>を<sup>な</sup>し  
❹ み<sup>よ</sup>う<sup>お</sup>ん<sup>に</sup>

② ふ<sup>ど</sup>く<sup>し</sup>て  
④ も<sup>の</sup>ど<sup>も</sup>を

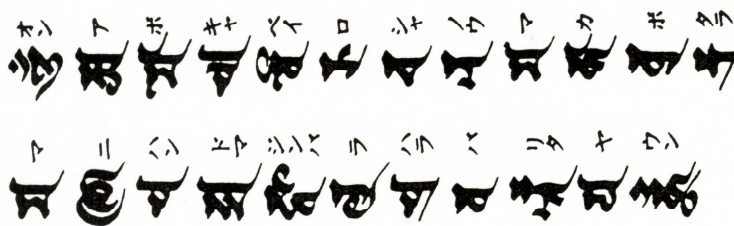
❷ あ<sup>り</sup>が<sup>た</sup>や  
❹ に<sup>じ</sup>ょう<sup>う</sup>さ<sup>ん</sup>

② よ<sup>む</sup>よ<sup>り</sup>も  
④ り<sup>や</sup>く<sup>あ</sup>り

(以下略)



【 光明真言 】



おん あぼきや べいろしやのう まか ぼたら まに ほんどま  
 『唵 阿謨伽 尾廬遮那 摩訶 穆陀羅 摩尼 婆頭摩  
 じんぼら ぼら ぼりたや うん  
 蘇婆羅 波羅 波唎多耶 吽』

おん	唵	大日如来の金剛界（知徳）を示す。
あぼきや	阿謨伽	胎蔵の遍照如来の陀羅尼（梵文）。
べいろしやのう	尾廬遮那	無上尊。
まか	摩訶	廣大無辺際、偉大・極大の意。
ぼたら	穆陀羅	阿闍宝生如来。大日如来の平等性智の徳を司る。
まに	摩尼	宝玉・珠玉の意。
ほんどま	婆頭摩	阿弥陀如来。
じんぼら	蘇婆羅	釈迦如来。
ぼら	波羅	胎蔵教。
ぼりたや	波唎多耶	如来の説法。
うん	吽	大日如来の胎蔵界（慈悲）を示す。

※ 真言宗の信者は毎晩就寝前に唱え、この後で「南無大師遍照金剛」と百遍繰り返した。

【 十三佛 】

なむ	不動大聖明王	ナムアミダーアア
南無	釈迦牟尼佛	ナムアミダーアア
なむ	文殊智賢佛	ナムアミダーアア
南無	普賢大菩薩	ナムアミダーアア
なむ	地藏大菩薩	ナムアミダーアア
南無	弥勒大菩薩	ナムアミダーアア
なむ	薬師瑠璃光如来	ナムアミダーアア
南無	観世音大菩薩	ナムアミダーアア
なむ	勢至大菩薩	ナムアミダーアア
南無	阿弥陀栄光如来	ナムアミダーアア
なむ	阿閼室生如来	ナムアミダーアア
南無	大日金剛如来	ナムアミダーアア
なむ	虚空蔵大菩薩	ナムアミダーアア

おん あぼきや べいろしやのう まか ぼたら まに ほんどま  
 『唵 阿謨伽 尾廬遮那 摩訶 穆陀羅 摩尼 婆頭摩  
 蘇婆羅 波羅 波唎多耶 吽』 (光明真言・五十遍)

なむ	大師遍照金剛	(十五遍)
南無	興教大師	(十五遍・合掌礼拝)
なむ	阿弥陀佛	(二百遍・合掌礼拝)

【 三十三番御詠歌 】

次は、父・亮輔の諳んじていたものを、兄・虎男が書き留めてくれた御詠歌である。( )内は 西国礼所会編・「西国巡礼」所載とは異なる魚沼独特の唱え方である。

(一番にや紀の国那智山) 普陀落や 岸うつ波は 三熊野の 那智のお  
 山に ひびく滝つ瀬

(二番にや<sup>きみいでら</sup>紀三井寺) <sup>ふるさと</sup>古里を はるばるここに 紀三井寺 花の都も  
 近くなるらむ  
 (三番にや<sup>こかわでら</sup>粉川寺) 父母の 恵みも深き 粉川寺 佛の誓ひ たのもし  
 きかな  
 (四番にや<sup>いずみ まき お</sup>和泉の槇の尾の寺) <sup>みやまじ</sup>深山路や <sup>ひばらまつばら</sup>桧原松原 分け行けば 槇の  
 尾寺に (お山に) (尾山に) 駒ぞ勇める  
 (五番にや<sup>ふじみでら</sup>河内の藤井寺) まるるより 頼みをかくる 藤井寺 花のう  
 てなに 紫の雲  
 (六番にや<sup>つぼざか</sup>大和の壺坂) 岩を立て 水をたたへて 壺坂の <sup>いさご</sup>庭の砂も  
 浄土なるらむ  
 (七番にや<sup>おかでら</sup>岡寺) 今朝みれば つゆ岡寺の 庭の苔 さながら<sup>るり</sup>瑠璃の  
 光なりけり  
 (八番にや<sup>はせでら</sup>長谷寺) いくたびも まるる心は はつせ寺 山も誓ひも  
 深き谷川  
 (九番にや<sup>なんえんだう</sup>奈良の南円堂) 春の日は 南円堂に かがやきて 三笠の山  
 に晴るる薄雲  
 (十番にや<sup>みむろど</sup>宇治の三室戸) 夜もすがら 月を三室と わけゆけば 宇治  
 の川瀬に 立つは (や) 白波  
 (十一番にや<sup>かみ だいごじ</sup>上の醍醐寺) <sup>ぎやくえん</sup>逆縁も 洩らさで救ふ 願なれば <sup>じゆんていどう</sup>准胝堂  
 (巡礼堂) も たのもしきかな  
 (十二番にや<sup>あふみ いわまでら</sup>近江の岩間寺) 水上は いづくなるらむ 岩間寺 岸打つ  
 波は松風の音  
 (十三番にや<sup>いしやま</sup>石山) 後の世を 願ふ心は かるくとも 佛の誓ひ 重き  
 石山  
 (十四番にや<sup>みみでら</sup>大津の三井寺) いでいるや 波間の月は 三井寺の 鐘のひ  
 びきに あくる湖  
 (十五番にや<sup>いまぐま</sup>京の今熊) 昔より 立つとも知らぬ 今熊野 佛の誓ひ あ  
 らたなりけり  
 (十六番にや<sup>きよみづ</sup>清水) 松風や <sup>おとわ</sup>音羽の滝の <sup>きよみづ</sup>清水を 結ぶ心は 涼しかるら  
 む  
 (十七番にや<sup>ろくはらだう</sup>六波羅堂) 重くとも 五つの罪は よもあらし 六波羅堂へ  
 参る身なれば

- (十八番にや六角堂) わが思ふ 心の内は 六つの角 ただ円かれと 祈  
るなりけり (祈るわが身は)
- (十九番にや一条の草堂) 花を見て 今は望みも (の) 草堂の 庭の千  
草も 盛りなるらむ
- (二十番にや善峰) 野をも過ぎ 山路に向かふ 雨の空 善峰よりも 晴  
るる夕立
- (二十一番にや丹波の穴太寺) かかる世に 生まれ合ふ身の あな憂やと  
思はで頼め 十声一声
- (二十二番にや津の国総持寺) おしなべて 高き賤しき 総持寺の 佛の  
誓ひ 頼まぬはなし
- (二十三番にや勝尾寺) 重くとも 罪には法の 勝尾寺 佛を頼む 身こ  
そ安けれ
- (二十四番にや中山) 野をも過ぎ 里をも行きて 中山の 寺へ参るは  
後の世のため
- (二十五番にや播磨の清水) 憐れみや あまねき門の 品々に 何をか波  
の (に) ここに清水
- (二十六番にや法華山) 春は花 夏は橘 秋は菊 いつも妙なる (絶えせ  
ぬ) 法の華山
- (二十七番にや書写山) 遙々と 登れば書写の 山 嵐 松の響きも 御法  
なるらむ
- (二十八番にや丹後の成相) 波の音 松の響きも 成相の 風吹き渡す  
天の橋立
- (二十九番にや若狭の松の尾の寺) そのかみは 幾世経ぬらむ 便りをば  
千歳もここに 松の尾の寺
- (三十番にや竹生島) 月も日も 波間に浮かぶ 竹生島 舟に宝を 積む  
心地して
- (三十一番にや長命寺) 八千歳や 柳に (は) 長き いのち寺 運ぶ歩み  
の (も) かざしなるらむ
- (三十二番にや観音寺) あな尊 みちびき給へ 観音寺 遠き国より 運  
ぶ歩みを (も)
- (三十三番にや美濃の谷汲) 世を照らす 佛のしるし ありければ まだ灯火  
も 消えずありけり (消えぬなりけり)

※ 魚沼では更に続けて次の歌を加えていた。

(よろづ世の 願ひをここに 納め置く 水は苔より 出づる<sup>たにくみ</sup>谷汲)  
(今までは 親と頼みし<sup>おいずる</sup> 笈摺を 脱ぎておさむる 美濃<sup>み の たにくみ</sup>の谷汲)

(津の国<sup>まやさん</sup>摩耶山 山の名を 佛の母と 聞く時は これぞ誠<sup>じ ひ</sup>の 慈悲<sup>みなかみ</sup>の水上)

(合掌礼拝)

ナムアミダンプニツ 《南無阿弥陀仏》

ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ  
ナムアミダンプニツ 《南無阿弥陀仏》

ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ  
ナムアミダンプニツ 《南無阿弥陀仏》

ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ  
ナムアミダー 《南無阿弥陀》  
七遍返し  
合掌礼拝

ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ  
ナムクワンゼオンボサツ 《南無観世音菩薩》

ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ  
ナムアミダー 《南無阿弥陀》

ナームクワンゼオンボサツ 《南無觀世音菩薩》

ナムアミーダー 《南無阿弥陀》

ナームクワンゼオンボサツ 《南無觀世音菩薩》

ナムーアミーダー 《南無阿弥陀》  
合掌礼拝

ナムヂゾウダエボサツ 《南無地藏大菩薩》

ナムアミダー 《南無阿弥陀》

ナムヂゾウダエボサツ 《南無地藏大菩薩》

ナムアミーダー 《南無阿弥陀》

ナムヂゾウダエボサツ 《南無地藏大菩薩》

ナムーアミーダー 《南無阿弥陀》  
合掌礼拝

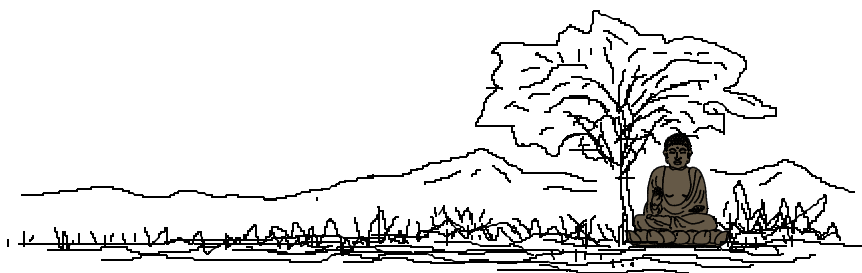
### 【毘沙門講】

オンセン ニッシン エエ ソワカ  
オンベエ シラマンダヤ(エ) ソワカ  
オンマカ シーリヤ エエ ソワカ  
オンヤク セエベエ エエ ソワカ  
オンロキャロ キャロキャロヤー ソワカ

※ 「ソワカ」 蘇婆訶・娑婆訶を宛て、円満・成就の意を表す梵語。  
真言陀羅尼の後に付ける。「功德あれ！」  
おん あびらうんけん そわか  
唵 阿鼻羅吽欠 蘇婆訶。(大日如来を祈る時の言葉)

### 【庚申講】

オコウシンデ コウシンデ マエタリマエタリ ソワカ



峠の地藏様

## 附録3 昔話



### 一、アヤ チューチュー

トーンと昔むかしがあったゲナ。山やま中のある村なかに、柴むらを刈しばったり狭かえ畑せべを畝はたけたりしナーガ暮おならす爺ぢさまと婆ばさまが居えたト。  
春はるの暖あつたけえ日ひ、「雪えきも消けえたコツたし、陽よう気きも良えくなつたんだんガ、種たね蒔まきでもしょうメエか。」てつて、爺ぢさまあ栗あわの種たねを入えれた瓢ひょう箆たんと鋏くわを携たげえて、一人ひとりで山やまっピラの畑はたけへ向むかつたト。

畑はたけを畝おねえ上げてつから、栗あ粒わつぶを噛かんでみたりしナーガ一えつぶく服えして居ると、ドッカから一えちわ羽とりの鳥とが飛とんで来て、立たてた鋏くわの柄えにヒヨックラ止とまつたト。

「メゴゲな鳥とりだナモ。」と、目めを細ほそめナーが腕おでを伸のばすと、逃にげもしねえで爺ぢさまの掌てにヒヨックラ乗のり移おつつたト。ほうして「アヤ チューチュー コヤ チューチュー ニシキ サラサラゴヨノ サカズキ モツテメエロウ ビビラビーン」てつて鳴なくテンガノウ。

「ハテ異ええねえ様な鳥とりだ。これまでも鳥とりの鳴なき声ごえア色えろえろ々聞きえたども、コッケエにおかしな鳴なき声ごえア初あわつぶめてだテ。」とオモシヨがつて栗あわ粒かをくれたりして居る内おちに、だんだん馴なれて、肩かたへ止とまつたり栗あわを噛かんだ口くち中なかまで入へえつたりして甘そべえたト。

ほうして居る内えに、ナーンとしたコツた、爺ぢさまが唾つばきを呑のみ込んだ拍こ子ひょうしに、この鳥とりまで一えつしよ緒はらに腹なか中へえへ入こり込こじまつたト。

「さあッ オーゴツタ！ ナジョウしたらエえもんだ？」爺ぢさまあ指えびを突つっこんだり、胸おねを叩たてえて見みたりしたドモ どうしょうも無ねえかつたト。

チツトばかり経たつてから、下した腹ばらで動えごくモンがあるんだんガ撫なでて見みたれば、へソの穴あなから鳥とりのシツポがチョックラ覗のぞえて居たト。

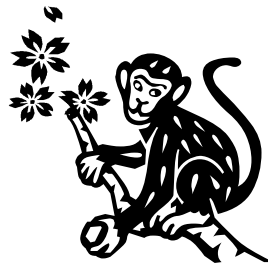


「オエ、そっから<sup>で</sup>出<sup>こ</sup>て来られるけえ？」爺<sup>じ</sup>さまはそのシッポを引<sup>ひ</sup>張<sup>ば</sup>って見<sup>み</sup>たども、やっぱし<sup>の</sup>抜<sup>だ</sup>け出せねえで、腹<sup>ばら</sup>中<sup>なか</sup>で「アヤ チューチュー コヤ チューチュー ニシキ サラサラ ゴヨノサカズキ モツテ メェロウ ビビラビーン」てって鳴<sup>な</sup>き続<sup>つづ</sup>けたト。

爺<sup>じ</sup>さまあ タマゲたども、婆<sup>ば</sup>さまや村<sup>むら</sup>ン衆<sup>しよ</sup>はもっとタマゲたト。ハウシテあげく<sup>は</sup>の果<sup>との</sup>てにや、殿<sup>との</sup>様<sup>さま</sup>んドゴまで伝<sup>つた</sup>わって、お城<sup>しろ</sup>で「アヤ チューチュー」を鳴<sup>な</sup>かせることにな<sup>な</sup>ったト。爺<sup>じ</sup>さまが腹<sup>はら</sup>を出<sup>だ</sup>して鳥<sup>とり</sup>のシッポをクツクツと引<sup>ひ</sup>つ張<sup>ば</sup>ると、「アヤ チューチュー コヤ チューチュー ニシキ サラサラ ゴヨノサカズキ モツテ メェロウ ビビラ ビーン」てって鳴<sup>な</sup>くんダンが、殿<sup>との</sup>様<sup>さま</sup>あ オモシヨが<sup>な</sup>って「もエ 一<sup>え</sup>度<sup>と</sup>、もエ 一<sup>え</sup>度<sup>と</sup>。」とセガ<sup>ひ</sup>ン<sup>な</sup>じゃ、日<sup>ひ</sup>永<sup>なが</sup>の一日<sup>いちにち</sup>を鳴<sup>な</sup>かせ続<sup>つづ</sup>けたト。

肌<sup>は</sup>脱<sup>だ</sup>ぎん<sup>の</sup>な<sup>じ</sup>った爺<sup>じ</sup>さまあ大<sup>て</sup>層<sup>えそう</sup>だ<sup>じ</sup>ったドモ、殿<sup>との</sup>様<sup>さま</sup>から ゴ<sup>ほう</sup>ギ<sup>び</sup>な褒<sup>もら</sup>美<sup>め</sup>を貰<sup>もら</sup>ったんダンが、それからあ 山<sup>やま</sup>っピ<sup>ば</sup>ラの<sup>え</sup>畑<sup>たけ</sup>へも行<sup>え</sup>が<sup>え</sup>んでエエ<sup>え</sup>よ<sup>え</sup>うな暮<sup>く</sup>らしにな<sup>な</sup>ったガ<sup>え</sup>ン<sup>え</sup>だト、好<sup>え</sup>か<sup>え</sup>った<sup>え</sup>ノウ。

エーチゴ サケエ モーシタ、ナーベンシッタァ カーリカリ。



## 二、<sup>もこざる</sup>智<sup>ち</sup>猿<sup>ざる</sup>え<sup>え</sup>じ<sup>め</sup>

トーンと昔<sup>むかし</sup>があ<sup>あ</sup>ったゲナ。山<sup>やま</sup>中<sup>なか</sup>のチ<sup>ち</sup>ッ<sup>っ</sup>コ<sup>こ</sup>エ<sup>え</sup>村<sup>むら</sup>に、女<sup>おんな</sup>っ<sup>こ</sup>子<sup>ご</sup>ば<sup>ば</sup>っ<sup>か</sup>三<sup>さん</sup>人<sup>にん</sup>持<sup>も</sup>った爺<sup>じ</sup>さまが居<sup>え</sup>たト。

春<sup>はる</sup>先<sup>さき</sup>の晴<sup>は</sup>れた日<sup>ひ</sup>、畑<sup>ばたけ</sup>に出<sup>で</sup>て畝<sup>おね</sup>を起<sup>お</sup>こそうとしたドモ、雪<sup>えき</sup>で<sup>お</sup>圧<sup>べ</sup>された土<sup>かた</sup>は固<sup>かた</sup>く締<sup>か</sup>まって、年<sup>とし</sup>寄<sup>よ</sup>りにあ 大<sup>て</sup>層<sup>えそう</sup>な仕<sup>し</sup>事<sup>ごと</sup>だ<sup>だ</sup>ったト。畔<sup>くろ</sup>に腰<sup>こし</sup>を下<sup>お</sup>ろして休<sup>やす</sup>んで居<sup>え</sup>た爺<sup>じ</sup>さまあ、「誰<sup>だれ</sup>か扶<sup>す</sup>けてくれるモンは居<sup>え</sup>ねえかノウ。オラ<sup>お</sup>ど<sup>ど</sup>こにや、娘<sup>むすめ</sup>が三<sup>さん</sup>人<sup>にん</sup>も居<sup>え</sup>るんダンが、誰<sup>だれ</sup>か一<sup>ひとり</sup>人<sup>にん</sup> 嫁<sup>よめ</sup>に呉<sup>く</sup>れてやるがノウ。」と<sup>つ</sup>ば<sup>や</sup>えたト。

ほうしるてえと、それを聞<sup>き</sup>きつけた一<sup>え</sup>匹<sup>びき</sup>の山<sup>やま</sup>猿<sup>ざる</sup>が 林<sup>はやし</sup>中<sup>なか</sup>から飛<sup>と</sup>び出<sup>だ</sup>して来<sup>き</sup>て「爺<sup>じ</sup>さま 爺<sup>じ</sup>さま、オラ<sup>お</sup>ん<sup>ん</sup>ド<sup>ど</sup>コへ嫁<sup>よめ</sup>に呉<sup>く</sup>んねえかノンシ。畑<sup>はたけ</sup>畝<sup>おね</sup>えならエツ

クラでも扶けてやるスケエ。」てって、爺さまの鍬を取ると、見てる間に畝え上げて呉れたト。

家へ戻ってから、爺さまあ姉嬢に訊えて見たト。「約束しちまったんだが、お前サルンドコへ嫁に行っちゃくれメえかノウ？」

ほうしると、姉嬢は「バカばっか言わっしやんな。サルンドコなんざあ、誰だって行くモンなあ無えってコツツオ。」と相手にもしねえかったト。

仕方ねえんだんが、こんだあ中の嬢に訊えて見たト。「約束しちまったんだが、お前サルンドコへ嫁に行っちゃくれメえかノウ？」ほうしると、中の嬢も「ヤーダヤダッ。サルンドコなんざ誰だって行き手あ無えってコツツオ。」とやっぱし相手にもしねえかったト。爺様は諦めかけたドモ、末娘ならドウだろうと「約束しちまったんだが、お前サルンドコへ嫁に行っちゃくれメえかノウ？」と訊えたト。ほうしると、末の嬢は、「アーエ、爺さまの言うコッたら、ドゴへでも行くぜノー。」と、願え通りの返事をしてくれたト。

祝言も終わって、初泊まりの日が近くなった時、聳ザルが嫁に相談したト。「手持にや何がエエだろうノウ？爺さまのエッチ好きなモンは何だヤ？」嫁はチットばか考えてっから言ったト。

「爺さまのエッチ好きなガンは搗きたてのフカフカ餅だテ。板に伸した切り餅あ板臭えし、日が経った餅あ固えてって見向きもしねえガンだテ……。」

「ホッカホッカ。ソリじゃア餅は取り止めだナモ。」聳ザルが考えこむと、嫁あ平気っ面して、「ダスケエで、ソントが搗きたてのフカフカ餅を臼ごと背負って行けばエエガンだテ。ほうしえば、爺さまあ大キゲンの筈だテ。」と言うんだんが、聳ザルも「判かった、ソリじゃそうええことにしっぺえ。」てって、搗き立てのフカフカ餅を臼のまんま背負って行くことに決めたト。

重てえ臼を背負った聳ザルと後に従えた嫁が山道を下りて行くと、崖のテッコウに見事な桜が咲えて居たト。花をメックた嫁が「爺さまあ桜も好きなガンだテ。」と言うと、聳ザルは「ホッカホッカ、ソリじゃオレが折って来らあ。」と、背負った臼をおろして、崖に搔き上ろうとしたト。

ほうしると、嫁は「ダメダメッ！臼を下ろすと、餅がベト臭くなるてって、スッケえな餅にや爺さまあ箸もつけねえガンだテ。」と背負った臼をお

せえたト。聳もこザルあ「ホッカや、鼻はなのエエ爺じさまのコッタすけえのう。」てつて、仕方しかたなく 臼おすを背負そった儘まんまで 崖がけに搔かき上あがることにしたト。ほうして 手てが着つく下枝したえだを 折おしよろうとしたれば、下したから見み上げて居あた嫁よめが「ダメ ダメッ!

下枝したえだあ ベト臭くせえてつて、スツクえな花はなにや爺じいさまは 見み向むきもしねえガンだテ。」と、高たけえ声こえを出だすんだんが、臼おすを背負そったマンマの聳もこザルは 木きのテッペンまで搔かき上あがって「これなら どうだ?」と訊きき返けえしたト。

下したに居あた嫁よめが「こっからじゃ よく見めえねえスケェで、力ちからエッペエ搔よさぶつてクンロ!」とドナつたト。聳もこザルは オッカナかつたども、言よわれた通とおりに、掴つかまった枝えだをエッサン ブッサン搔よさぶつて見みせたト。ほうしると ナントしたコッタ、跨またごえた枝えだあ メリメリッと裂さけちまうし、掴つかまって居あた枝えだあ ボッキーンと折おしよれちちまって、臼おすと一緒にえっしよの聳もこザルあ 崖がけ下のした沢さわン中なかまで マクレエ落おつてしまつたト。

沢さわにや、ちょうど春はる先のさき雪えき解どけ水みずがゴオン ゴオン流ながれて居あたども、嫁よめあ 助たすけようとしねえで、「♪ サールあ 下したん ナーレ、オースあ テッチョウン ナーレ。」てつて囃はやし立たつて居あたんだんが、臼おすを背負そったマンマの聳もこザルあ 手て足あしもジョウ(自由)にならねえで、そつくら アップリ搔けえて死しんじまつたト。

エーチゴ サケエ モーシタ、ナーベンシッタァ カーリカリ。



### 三、屁へっこきアネサ

トーンと 昔むかしがあつたゲナ。前手めえで(昔)つから、あちこちの村むらにや おかしな 話はなしがエッペエあつてノウ。この咄はなしもギナシ(義無)のコッタと思うドモ…………。

隣となんの村むらの ある旦那衆だんなしよで嫁取よめどりがあつたト。嫁よめは器量好きりようよしだし、行列ぎょうれつあゴ一ごギだつたスケェに、村むら中ちゆう衆しゆうが嫁見よめみに集たかつて大騒おおさわぎだつたト。

ゴツクが<sup>お</sup>終わって、嫁<sup>おしれえ</sup>ア 白粉<sup>お</sup>を落<sup>つら</sup>としたども、面<sup>えろ</sup>の色<sup>しれ</sup>あ 白え<sup>え</sup>マンマで、笑<sup>え</sup>むことも無<sup>ね</sup>えかつたんだんガ、心配<sup>しんべえ</sup>した 舅<sup>しよーと</sup> 爺<sup>じ</sup>さまがコッスリ<sup>き</sup>訊<sup>き</sup>えてみたト。

「アネサ アネサ。ソ<sup>かおえろ</sup>ンタあ顔<sup>え</sup>色が良<sup>え</sup>くねえようだが、何<sup>なん</sup>か氣<sup>き</sup>に病<sup>や</sup>むコトでもあるガンだかエ？」ほうしると、嫁<sup>よめ</sup>は「ドッ<sup>わり</sup>コも悪<sup>あか</sup>かねえども、ジョウヤ<sup>へ</sup>尻<sup>あか</sup>をガマン<sup>あか</sup>してるソエだノンシ。」と、チッ<sup>あか</sup>トばか ホッ<sup>あか</sup>ペタ<sup>あか</sup>を紅<sup>あか</sup>くしたト。

「尻<sup>えんりよ</sup>ぐれえ 遠慮<sup>な</sup>無しにコエてくれヤ。尻<sup>へ</sup>で身<sup>しんしよ</sup>上<sup>つ</sup>が潰<sup>つぶ</sup>れたって話<sup>はなし</sup>あ 聞<sup>き</sup>えたこともねえし。」とメジョウゲラがると、嫁<sup>よめ</sup>はショウシげに「ソリ<sup>し</sup>ジャ、コカ<sup>もら</sup>して貰<sup>じ</sup>うども、爺<sup>ば</sup>さまと婆<sup>ろえん</sup>さまあ 炉<sup>ろえん</sup>縁<sup>つか</sup>にしっかり掴<sup>つか</sup>まってて クラッ<sup>たの</sup>シャレ。」と頼<sup>ふたり</sup>んだト。二人<sup>ええねえ</sup>あ 異<sup>おも</sup>様なコッタと思<sup>よ</sup>ったども、言<sup>と</sup>う通<sup>おと</sup>りに炉<sup>ろえん</sup>縁<sup>つか</sup>に掴<sup>つか</sup>まって居ると、ソ<sup>え</sup>ンマ<sup>ようだつ</sup>タ立<sup>おと</sup>ツア<sup>おと</sup>マの落<sup>おおさわ</sup>ちるよな音<sup>おおさわ</sup>がして、大<sup>じ</sup>風<sup>ふ</sup>が吹<sup>おおかぜ</sup>き荒<sup>あ</sup>れて屋<sup>や</sup>根<sup>ね</sup>を飛<sup>と</sup>ばすヤラ 壁<sup>かべ</sup>を崩<sup>くず</sup>すヤラの大<sup>おおさわ</sup>騒<sup>おおさわ</sup>ぎにな<sup>し</sup>ったト。爺<sup>じ</sup>さまと婆<sup>ば</sup>さまは 炉<sup>ろえん</sup>縁<sup>えつしよ</sup>と一緒<sup>め</sup>にテン<sup>あ</sup>ジヨ<sup>き</sup>ク<sup>つ</sup>まで舞<sup>どき</sup>え上<sup>むら</sup>がって、氣<sup>むら</sup>が付<sup>すぎ</sup>えた時<sup>むら</sup>にや オ<sup>むら</sup>ラ<sup>すぎ</sup>あ村<sup>むら</sup>の杉<sup>すぎ</sup>ン<sup>き</sup>木<sup>ひ</sup>に引<sup>ひ</sup>つ掛<sup>か</sup>って居<sup>え</sup>たト。

枝<sup>えだ</sup>からヤ<sup>へ</sup>ットコ這<sup>お</sup>え下<sup>ふたり</sup>りた二人<sup>くせ</sup>あ 「臭<sup>へ</sup>え尻<sup>へ</sup>はゴツ<sup>へ</sup>ツオ<sup>へ</sup>じゃねえども、デッ<sup>へ</sup>コエ尻<sup>へ</sup>でえガ<sup>へ</sup>んは オ<sup>へ</sup>ッカ<sup>へ</sup>ネえもんだ<sup>へ</sup>ノウ。」てって、家<sup>おち</sup>あ潰<sup>つ</sup>れたドモ 命<sup>おち</sup>が助<sup>つ</sup>か<sup>つ</sup>つた<sup>えのち</sup>んだん<sup>たす</sup>ガ 諦<sup>あきら</sup>めることにしたト。

エーチゴ サケエ モーシタ、ナーベンシッタァ カーリカリ。

えっくら デッ<sup>へ</sup>コエ尻<sup>へ</sup>だ<sup>へ</sup>タ<sup>へ</sup>ツテ、家<sup>おち</sup>が潰<sup>つ</sup>れる訳<sup>わけ</sup>あ無<sup>ね</sup>えだろうドモ、『ち<sup>ね</sup>ょうど 尻<sup>へ</sup>と一緒<sup>えつしよ</sup>に《竜<sup>たつ</sup>巻<sup>まき</sup>》てえヤ<sup>お</sup>ラ<sup>お</sup>が起<sup>お</sup>きた所<sup>せ</sup>為<sup>え</sup>だ<sup>え</sup>ロウ。』てって語<sup>かた</sup>るモ<sup>かた</sup>ンも居<sup>え</sup>るが<sup>え</sup>ノウ。

#### 四、食<sup>く</sup>え<sup>じぞう</sup>ッタレ地<sup>じ</sup>蔵<sup>ぞう</sup>



トーンと昔<sup>むかし</sup>があ<sup>えきぶけ</sup>つた<sup>むらざと</sup>ゲナ。雪<sup>きよーれき</sup>深<sup>しんぐわつ</sup>え村<sup>き</sup>里<sup>め</sup>でも 旧<sup>き</sup> 曆<sup>め</sup>の四<sup>き</sup> 月<sup>め</sup>つてえ<sup>き</sup>ば、木<sup>き</sup>の芽<sup>め</sup>ア<sup>き</sup>萌<sup>め</sup>くし 道<sup>みち</sup>端<sup>はた</sup>のヨ<sup>よ</sup>モ<sup>も</sup>ギ<sup>ぎ</sup>はホー<sup>ほ</sup>ケ<sup>け</sup>ル<sup>る</sup>ん<sup>ん</sup>ダ<sup>だ</sup>ン<sup>ん</sup>ガ、釈<sup>しや</sup>迦<sup>か</sup>の生<sup>ん</sup>ま<sup>ま</sup>れた《四<sup>しんぐわつ</sup>月<sup>げつ</sup>八<sup>ぱつ</sup>日<sup>じつ</sup>》に<sup>に</sup>や、村<sup>むら</sup>衆<sup>しよ</sup>は《甘<sup>あま</sup>茶<sup>ちや</sup>》と新<sup>しん</sup>ヨ<sup>よ</sup>モ<sup>も</sup>ギ<sup>ぎ</sup>で拵<sup>こしや</sup>った《ツ<sup>つ</sup>キ<sup>き</sup>ゲ<sup>げ</sup>エ<sup>え</sup>シ》を携<sup>たげ</sup>えて、森<sup>もり</sup>の祠<sup>ほこ</sup>ま<sup>ま</sup>で お<sup>めえ</sup>参<sup>え</sup>りに行<sup>い</sup>つた<sup>い</sup>ト。

山<sup>やま</sup>で 木<sup>き</sup>を伐<sup>き</sup>つたり挽<sup>ふ</sup>えたりして暮<sup>く</sup>らすコ<sup>こ</sup>ビ<sup>び</sup>キ<sup>き</sup>の爺<sup>じ</sup>さまが居<sup>え</sup>て、《釈<sup>しや</sup>迦<sup>か</sup>参<sup>めえ</sup>り》は婆<sup>ば</sup>さまに任<sup>まか</sup>して、ソ<sup>ひ</sup>ン日<sup>に</sup>も 何<sup>え</sup>時<sup>つ</sup>も通<sup>ど</sup>りに山<sup>やま</sup>へ向<sup>む</sup>かつたト。

前の晩に目立てした鋸と拵ったバッカのツキゲエシを背負って山道を登って行くと、《地藏清水》で、冷てえ水の湧き出る処があって、山仕事に出た時の昼飯にゃちょうど好え休み場になって居たト。

「そうだ、ツキゲエシにアリンゴが集らねえよう、地藏様に番して貰おう。」爺さまは、ツキゲエシの入ったタスを地藏の首にひっ掛けると、手を合わせてっから山へ向かったト。

爺さまの姿が林中へ消えると、地藏は目を開けて「旨マゲなツキゲエシだノウ。四月八日はお釈迦様がケナリエこったテ。コビキどんにゃ悪えども、番付き賃の一つぐれえはエエだろう。」と、タスの中へ手を突っ込んで一つゴツツオになったト。まだ温けえツキゲエシは、一つで止めようと思っただも、あんまり旨えんだんが「モエーつ。」「モエーつ」てって食って居る内に、みんな平らげちまったト。

昼時になって、腹を減らした爺さまが休み場へ戻って見ると、タスはカラッポになって、ツキゲエシあ一つも無えくなって居るんだんが、「ハテ？アリンゴが食えっ尽るワケもあるめえが、モジナにでもヤラれたかヤ？」と泣きつらして居ると、クチベロにアンコを付けた地藏さまが謝って言ったト。

「ショーシだども、ツキゲエシを食ったガンはこの地藏だテ。あんまり旨えんだんが、『モエーつ、モエーつ』てって食って居る内にみんな平らげちまったガンだテ。ソ年代わり、鬼の宝物を呉れてやるんだんが、カンベンして今夜あここへ泊まってクラッシャレ。」

爺さまが目をパチクリして居ると、「今夜、鬼共が此処で寄り合えを為る事になってるガンだテ。そん最中に鶏の鳴き声を立てて貰えばエエんだが…」と頼んだト。

あたりが薄暗えヨーサリになると、あっちこっちから寄っ集って来た鬼共は酒盛りしナーガ、各々持ち寄った宝物の自慢話を始めたト。ほうして、酔った赤鬼が踊り出した時、地藏さまが肩を竦めて合図したんだんが、それまで地藏の後に隠れて居た爺さまは、携えた箕をバタバタッと叩いて、ありったけの声で「コケッココーッ！」と怒鳴ったト。

ほうしるってェと、鬼共はテツアマツア搔えて「ほうら、夜が明け

るゾッ！ トットと隠れろッ！」てって、宝物も何も投げっ散らかしたまんま 周りの森中へ逃げ込んだ。ト。

そりから、爺さまがひと眠りして本当の夜が明けた時、休み場にや鬼どももの置き忘れた宝物がゴロゴロ転がって居たト。爺さまは森中からヤットコ携くほどの鋸を一丁拾って家へ戻ったト。

その鋸あ、クジラの形をした大鋸で、今でも『鬼鋸』てって、おらア家に伝わって居るガンだズや。ホラ、お前の頭のテッコウだ。

エーチゴ サケエ モーシタ、ナーベンシッタァ カーリカリ。



## 五、三枚のお札

トーンと昔があったゲナ。ある山寺に預けられた小僧っ子で、和尚さまの言うこたあチットも聞かねえし、お経もチットも覚えようとしねえワルサッコキの小僧が居たト。

ある時、愛想をつかした和尚さまが「親にクドかれて小僧にしたども、ハテサテお前にや手のつけようもねえ。暇を呉れてやるんだンガ、ドゴへでも好きなドコへ行きナレモ。」てって、三枚のお札を呉れて「オオゴトの時にや、このお札に縋ればエエ。」と寺から追え出してしまったト。

「家に戻ったって、勘当されるに決まってるし……………」小僧はアテも無えマンマ、暮れた山道をトボトボ歩び続けたト。暗くなって方角も判らねえ谷の間に、ヨラヨラ動く明かりを見つけたんだンガ、「今夜ああの家で泊めて貰おう。」と、這うように辿り着いて宿を頼んだト。ほうすると、中から白髪の婆が出て来て小僧の姿をシゲシゲ見た後、「食えもんナ無えども、エエかったらナジョウモ泊まってクラッシャレ。」と言ったト。

ひと眠りした小僧が目を覚ますと、水屋の奥で異様な音がしるんだンガ、  
「夜中だでガンに、何ゴツタろう？」と、コッスリ覗えて見たれば、サッキ  
ナの婆が頭から角を生やして口は耳まで裂けた鬼婆になって、包丁を磨  
えて居たト。

ほうして「人を食うなあ フサンコった。若え小僧っ子だすけえ、ジョウ  
ヤ旨えコツたろう。」と薄ら笑えを浮かべナーが涎を垂らして居たト。

腰が脱げるほどタマげた小僧が、逃げ出そうとバタバタ音を立てると、  
「ンノクソッ小僧っ子メ、逃がしてナンズなるもんカ！」と、鬼婆は小僧  
の首っ玉を掴めると、今にもカブリつつくげに見えたト。

「逃げやしねえスケエ、雪隠へだけ行がしてくんろ。ソンマ戻るスケエ。」  
小僧がダメカシて、なんとか逃げようとしると、「ヨシ、ソリじゃ縄で繫え  
でっからダ。」と、鬼婆は小僧の腰に荒縄をギリギリ巻き付けたト。ほうして、  
雪隠でシャゴナって居る小僧をグツグツと引っ張っちゃ、「エエか エエか？」  
てって催促するテンガノウ。小僧は「マーダ マーダ、今あ ビービー アッ  
パの最中だ。」と、デッポこえて手間稼ぎしどもまたチットばかり経つと、  
「エエか エエか？」てって引っ張るんだンガ、小僧は「マーダ マーダ、今  
あ シッカタマリの最中だ。」と言えシナに、腰の縄を雪隠柱に結え替えて、  
和尚から貰ったお札を一枚貼り付けると、外の暗闇へ転げるように逃げ出し  
たト。

気が付かねえ鬼婆は、何時まで経っても「マーダ マーダ。」とバッカ言う  
んだンガ、肝焼えて力一杯に縄を引ったくったト。ほうしると小僧ドッカ  
ねえ雪隠柱がボッキーンと折れて、小屋あグアラグアラッと潰れちま  
ったト。

鬼婆の宿を裸足で逃げ出した小僧が山を幾つも越えてっから、ヤットコ夜  
が明けて、「ここまで来りゃあ、もうアチコタあんめえ。」と沢ん縁でダック  
リして居ると、ナーンとソンマそこまで追っかけて来る鬼婆が目に入ったト。

「休んでるドッカ無え。」と、沢を飛び越えた小僧は「川んナーレ 川ん  
ナーレ！」てって二枚目のお札を後へ投げつけて逃げまくったト。ほうし  
ると、それまでのチョロチョロ沢は水が溢れけえって忽ち大川に変わったト。

お 追っかけて来た鬼婆は、アッチ コッチと舟を探すども、山<sup>やま</sup>中で舟が見つかるワケもねえんだんが、川<sup>かわ</sup>の縁<sup>ふち</sup>へ腹<sup>はら</sup>這<sup>べ</sup>えって大川<sup>おおかわ</sup>の水<sup>みづ</sup>をゴク<sup>の</sup>ゴク<sup>ほ</sup>呑み乾し始めたト。ほうしると、今まで<sup>まじ</sup> ゴオン<sup>えま</sup> ゴオン<sup>なが</sup>流<sup>なが</sup>れてた大川<sup>おおかわ</sup>は見る間に乾<sup>ま</sup>上<sup>ま</sup>がって 跨<sup>また</sup>けるぐれえの堀<sup>ほり</sup>になっちまったト。

「サアッ オゴツタ。えよえよダメだ！」 諦<sup>あきら</sup>めかけた小僧<sup>こぞ</sup>は、三枚目<sup>さんめえめ</sup>のお札<sup>ふだ</sup>を取り出して、「山<sup>やま</sup>ナーレ 山<sup>やま</sup>ナーレ！」って怒鳴<sup>どな</sup>りナー<sup>おしろ</sup>が後<sup>な</sup>へ投げつけて逃げたト。ほうしると こんだあ、草木<sup>くさき</sup>のボウボウ<sup>お</sup>生<sup>やぶつ</sup>えた藪<sup>やま</sup>だらけの ゴーギ<sup>やま</sup>な山<sup>やま</sup>ができたト。

疲<sup>くた</sup>れて足<sup>あし</sup>も動<sup>えご</sup>かねえくな<sup>こ</sup>った小僧<sup>ぞ</sup>が、背<sup>せ</sup>丈<sup>たけ</sup>を越<sup>こ</sup>す草<sup>くさ</sup>ん中<sup>なか</sup>へ ノメリ<sup>こ</sup>込んでジツとして居ると、鬼婆<sup>えま</sup>は目<sup>め</sup>を皿<sup>さら</sup>にしてコザキ<sup>まわ</sup>廻<sup>まわ</sup>るども、ナジョウ<sup>つえ</sup>してもメッけるコタあならねえで、遂<sup>つえ</sup>に 諦<sup>あきら</sup>めて引<sup>ひ</sup>き返<sup>けえ</sup>しちまったト。

小僧<sup>こぞ</sup>が藪<sup>やぶつ</sup>へ隠<sup>かく</sup>れた時<sup>とき</sup>、生<sup>お</sup>えてた草<sup>くさ</sup>あ、《ショウブ》と《ヨモギ》だ<sup>き</sup>ったてえんだんが、そ<sup>えま</sup>りで今<sup>ご</sup>でも五<sup>ご</sup>月<sup>がつ</sup>の節<sup>せ</sup>句<sup>く</sup>にや、ショウブ<sup>の</sup>とヨモギ<sup>き</sup>を軒<sup>の</sup>端<sup>き</sup>に挿<sup>さ</sup>して祓<sup>は</sup>えにしるがんだト。お前<sup>はれ</sup>たちも 親<sup>めえ</sup>の言<sup>おや</sup>うこと<sup>よ</sup>を聴<sup>き</sup>かねえと、この小僧<sup>こぞ</sup>っ子<sup>こ</sup>みてえになるガ<sup>な</sup>ンダ<sup>だ</sup>ザヤ。

エーチゴ サケエ モーシタ、ナーベンシッタァ カーリカリ。

## 六、太郎<sup>たろう</sup>の寝<sup>よ</sup>小便<sup>ばり</sup>



トーンと昔<sup>むかし</sup>があ<sup>あ</sup>ったゲナ。雨<sup>あめ</sup>上<sup>あ</sup>りの川<sup>かわ</sup>端<sup>はた</sup>にや、決<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>って流<sup>よ</sup>木<sup>ろ</sup>が流<sup>なが</sup>れ着<sup>つ</sup>くん<sup>ん</sup>だんが、その流<sup>よ</sup>木<sup>ろ</sup>を拾<sup>ひろ</sup>って シッケ<sup>かせ</sup>エ稼<sup>かせ</sup>ぎをし<sup>じ</sup>る ヤゴメ<sup>え</sup>の爺<sup>じい</sup>サ<sup>え</sup>が居<sup>い</sup>たト。

土<sup>ど</sup>用<sup>よう</sup>の陽<sup>ひ</sup>がアツ<sup>あ</sup>チャク<sup>く</sup>て、濡<sup>ぬ</sup>れた流<sup>よ</sup>木<sup>ろ</sup>もたちま<sup>かわ</sup>ち乾<sup>かわ</sup>えてしもうよう<sup>ひ</sup>な日<sup>ひ</sup>だ<sup>だ</sup>ったト。川<sup>かわ</sup>原<sup>はら</sup>を採<sup>さ</sup>し廻<sup>まわ</sup>って居<sup>い</sup>た爺<sup>じい</sup>サ<sup>え</sup>は、川<sup>かわ</sup>の縁<sup>ふち</sup>のヤナギ<sup>な</sup>に掛<sup>か</sup>か<sup>か</sup>った好<sup>え</sup>え香<sup>か</sup>をたてるコロモ<sup>こ</sup>をメ<sup>め</sup>ッ<sup>つ</sup>けたト。

「こ<sup>ね</sup>らあ、メ<sup>お</sup>ツ<sup>り</sup>にや無<sup>な</sup>え織<sup>お</sup>物<sup>も</sup>だ。流<sup>よ</sup>木<sup>ろ</sup>よりあ<sup>よ</sup>りあ<sup>ろ</sup>り<sup>き</sup>がてえ」と、背<sup>そ</sup>負<sup>お</sup>った馬<sup>ま</sup>籠<sup>かご</sup>の底<sup>そこ</sup>にコ<sup>か</sup>ス<sup>く</sup>リ<sup>か</sup>隠<sup>かく</sup>して、また流<sup>よ</sup>木<sup>ろ</sup>を拾<sup>ひろ</sup>え続<sup>つづ</sup>けたト。

ほうし<sup>ど</sup>てるト、土<sup>ど</sup>手<sup>て</sup>陰<sup>かげ</sup>から裸<sup>はだか</sup>のメ<sup>め</sup>ゴ<sup>ご</sup>ー<sup>げ</sup>なア<sup>あ</sup>ネ<sup>ね</sup>サ<sup>さ</sup>が<sup>で</sup>出<sup>で</sup>て来<sup>き</sup>て、「このヤナ



ギに掛けた着物を見なかったかノンシ？」と訊えたト。んだども 爺一サあとボけて、「オラあヨロツ木拾えで 足元バッカ見てるスケエ、木のテッコウにや目が行がねえガンだテ。」とデッポこえて知らんプリしたト。

アネサは、「テンジヨクから来たガンだドモ、あんまりアツチェンダンが水浴してたガンだテ。だども、コロモが無くちゃ テンジヨクへ戻ることアならねえし、どうしたらエエもんだろ？」てって 涙を出してセツナがったト。

爺サは、『メジウゲラなコトをしちまったかヤ。』と思ったども、後へ退くこともならねえで、「ホウッカ ホッカ、そらあ オゴツタなモ。えっくらアツチャくたって、若えアネサがエトリ一枚じゃのウ……。そうだ、行くドコが無えかったら、オレンドコへ嫁に来てくれヤ。オラあ 一人モンだすけえ。」てって、アネサを連れて帰ることにしたト。ほうして 日が経つと、二人の間にや 赤ッ子の太郎も生たト。

何年か経って、爺サが何時も通り流木拾えに出た後で、太郎を子守りしナーが 虫干して居たアネサは、長持の底に爺サの隠したコロモをめつけてしまったト。

「ヤッパリ……………」アネサは太郎を抱きしめて《別れ》を泣えたドモ、コロモが めっかれれば、テンジヨクへ戻るってえ宿命だったンなが、「カッカアに会えてえくなったら、爺サにボツアッてテンジヨクへ来てくれヤ。」と、太郎の手に夕顔の種を一粒 握らせると、「爺サの居ねえ間に。」てって、衣を羽織るとテンジヨクへ舞え上がってしまったト。

カッカアが居ねえくになると、太郎はテンジヨクを見上げちや 毎日 泣えてバッカ居るんだンが、爺サは夕顔の種を蒔えてみることにしたト。

晩方蒔えた種は、ゴオン ゴオン伸びて、一晩の内に蔓は雲を抜けて テンジヨクまでくつつえたト。

太郎をボツた爺サが、汗掻きナーガ蔓を這え上がって行くと、テンジヨクは広え原っぱになって居て、カッカアも喜んで迎えに出て来てくれたト。

「よーく来た よく来た。くたぶれたコッタろう、腹も減ったコッタろう。テンジヨクにや 食べモンは何でもあるスケエ、辞儀無しに食ってくれヤ。

んだども、スェクワだけあ 食って呉れんなヤ。それだけあ カンベンして呉れヤ。」と言ったト。

だども、太郎をボツた爺サは汗搔えて居たし、太郎は甘エモンが大好きだ  
ったスケエ、カッカアが目を離した小間に スェクワ の畑へ飛び込んで、  
「一ツぐれえは エエだろう。」てって、メッケたスェクワにカブリつえたト。

ほうしるってえと、急に夕立ツァマが鳴り出して、雨が滝のように降  
って来たト。河原にや水が押し寄せ、二人あ 着物も何もジト濡れんなっちま  
って、「オゴツタ！ オゴツタ！。クワバラエンジョ クワバラエンジョ。」  
とおおさわ え おち じい たらう あし すべ  
と大騒ぎして居る内に、爺サと太郎は足を滑らして、グワラグワラ ドッシ  
ーンと テンジョクからマクレエ落ってしまったト。落った処は太郎の家の  
やね ぶ し えた め さ どき たらう  
屋根だったども、打った尻ツペタの痛さで目を覚ました時、太郎のビーノジ  
は まだ ずく た え  
は まだ雫が垂れて居たト。

テンジョクに湧えた大水あ、実あ 夢を見ナーがヤラかした 太郎の寝小便  
だったガンだト。ヤーダねえ。

エーチゴ サケエ モーシタ、ナーベンシッタァ カーリカリ。

## 七、兔と貉



トーンと昔があったゲナ。ある山間の村で暮らして居た爺さまが、八朔に  
こしや たげ か と ちげ やまだ みずおと で ひ たか  
拵ったボタモチを携えて刈り取り近え山田の水落しに出かけたト。陽が高  
くなって、「腹も減ったコツタ。ヒーリでも食うメえか。」と、畦に蓑を敷え  
て腰を下ろすと、脇の藪から這え出て来たモジナが「♪ ジージが ボタモチ  
を 食べば オレが ケツあ シックラ モックラ するよーだ するよだ。」てっ  
て 嘩すテンガノウ。

「コエツめ、昼間だてがんに 人を化かす気かヤ。」と、鍬の頭でコッキ  
ンとクラシつけると、モジナあ クルツとひっくり返って 死んだ真似コエた  
ト。

「ええ ヤンベェだ。今夜あ モジナ汁でも拵って温まろう。」爺さまはモジナを担ぐと、早あがりて婆さまの夕飯支度に間に合わせようと急えだト。

手足をひとつに縛られたモジナは 水屋の梁に吊されたども、婆さまがホー口から大鍋を出そうとガタゴトさせると、薄目を開けて「婆さま 婆さま、重てえ鍋あ オレが携えてやるんだンガ、縄をチットばか緩めてクダサレ。」てって縛られた手を摺って 頼んだト。

婆さまが 油断して 結んだ縄を緩めてくれると、えきなり モジナあ 婆さまの首つ玉に跳びつ付けて婆さまを噛み殺しちまったト。ほうして、婆さまに化けたモジナは手前の替わりの《ババ汁》を拵って「オラあ、腹がモギレるスケェで、ソントー人で夕飯にしてクラッシュヤレ。」てって、蒲団に潜り込む振りしナーが、裏口から逃げ出しちまったト。

何にも知らねえ爺さまは、モジナ汁だとぼっか思っ吸って居たども、中にヒトの爪が混じって居たんだンガ、ヤットコ気が付けて、赤っ子がジャミルように声を立てて泣きわめえたト。

.....

チッコエ時から、爺さまにメゴがられて 育ったオサギが居て、爺さまの泣き声を聞きつけると、「ナンとか 恩返しに、仇討ちしてクリョウ。」と考えたト。

ある日、オサギが沢のへつりを歩んで居ると、頭にコブをでかしたモジナにバッタリ出逢ったト。「モジナどん モジナどん、今年あ メッタにや無え大雪だつてエが、ソントあ 冬支度は終わったかノウ？。まだのコツたら、雪囲えのカヤ刈りでも一緒にナジヨだノウ？」と声をかけると、モジナは「実あオレも、そのつもりで居たガンだテ。」と話に乗って、一緒に山っピラのカヤ場へ向こうことになったト。

晩方になって、刈ったカヤを背負った二匹が山道を下る時、後に付いたオサギが ピョコタン ピョコタンと歩んで居ると、モジナあ 後向きして訊えたト。

「オサギどん オサギどん、ソントあ 足でも傷めたかヤ？」ほうしると、オサギは顔をシカめて「そうエえガンだテ、カヤの切りっ株で足をブッ通し

ちまったガンだテ。」とデッポ吐えて、痛ゲに足を引きずって見せたト。

「ソウッカ ソッカ、そらあ オゴったナモ。そりじゃ オレが荷を背負ってやるんだんが、ソンタもカヤのテッコウへ乗りなれモ。」てって背中を向けて呉れたト。

「足が痛え。」てってたオサギだども、モジナの背中へ ピョーンと飛び乗ると、携えた火打石を《カチ カチ カチッ カチッ》と鳴らしナーが、カヤの葉っぱに火を着けようとしたト。

その音を聞きつけたモジナが 「オサギどん オサギどん、サッキナからカチカチ カチカチってエ音がしるども、あらア何の音だベノウ？」と耳を動かして怪しがったト。

オサギが トボケて、「ここらあ カチカチ山ってエ処だスケエ、カチカチ鳥が鳴くガンだテ。」とデタラメを教えると、気付かねえモジナあ 又そのマンマ歩ひ続けたト。

ソン内に、火はだんだんデッコクなって《ボウ ボウ ボウッ ボウッ》と音を立てて燃え出したんだんが、こんだア その音を聞きつけたモジナが、「オサギどん オサギどん、サッキナから ボウ ボウ ボウッ ボウッ てエ音がしるども、あらア何の音だベノウ？」と足を止めて怪しがったト。

オサギがまたトボケて「心配 要らネエテ。ここらあ ボウボウ山ってえ処だすけえ、ボウボウ鳥が鳴くガンだテ。」と 同 じようにデッポ吐えてトボケたト。

ほうして、火がデッコクなった時、背中から ピョーンと飛び降りると、「ええ キビだ！」と、アカメンクシャレシナーガ 林 中へ逃げ込んだト。その後で、モジナあ 背中の中の火に気が付えたども、荷縄で縛ったカヤは急に降ろすこともならねえで、「アツチェ！ アツチェ！」と 転げ回って、ヤットコ命 だけア助かったト。

幾日か経って、背中 中 ヤケツパタ搔えたモジナが、「んノックソッ！ オサギめッ！。こんだ めつけたら、タダじゃ置かねえッ！」と、腹を立てナーガ探し廻って居ると、林 中で木の実を拾ってるオサギをめつけたト。

「コネエーダは、ヒデュー目に遭わしてくれたッ。チットやソットじゃ カンベンならねえッ！」と 嚇すと、「コネエーダ たあ、何のコッタベえ？。オ

ラあ『栢っ原』のオサギってガンで、こっから出たこともねえんだンガ、何のコッタやら サッパリ訳あ わからねえテ。」と、知らん振りで栢の実を拾え続けたト。

煙に巻かれたモジナが、「ホウッカや？ じゃあ別のオサギだったるかノウ。そりで、ソントあ ここで何してるガンだテ？」と訊くと、「見た通り、拾った栢の実を摺り潰して《膏葉》を拵ってるガンだテ。」と教えたト。

「ホウッカ ホッカ、そらア 拍子のエエこった。その膏葉あ 焼けッパタにも効くべえかノウ？」って、モジナがケナリがると、「アア 効くとも、これを塗けりゃアカミドコっからも毛が生えるぐれえに効くガンだテ。」とギナシを教えたト。

騙されたモジナあ 焼けただれた背中を出して「オレにもチツばか塗けちや貰えめえカ。」と頼んだト。

「ナジョウモ ナジョウモ。塗る時あ チツばか痛えども ガマンしててくんねえ。」オサギはモジナをアッチ向きさせると、膏葉ドッカあ無え 田っぼのドロを塗ったくって、「えっキビだ！」と言えナーが、林ノ奥へ逃げ込んじまったト。

ヤケッパタがノーサラ悪くなつたモジナが、「んノックソ オサギめッ！。こんだクサあ タダじゃおかねえッ！」と肝焼きナーが探し廻って居ると、こんだあ 竹 林ン中で、竹を割ってるオサギをめつけたト。

「コネエーダは、ヒデエー目に遭わしてくれしたッ。今日てえ今日ア 勘弁ならねえッ！」と嚇すと、「コネエーダ たあ 何のコッタベえ？ オラあ『竹原』のオサギってガンで、こっから出たこともねえんだンガ、何のコッタやら サッパリ訳あ わからねえテ。」と、知らん振りで竹を割り続けたト。

「ホウッカや？ じゃあ別のオサギだったるかノウ。そりで、ソントあ ここで何してるガンだテ？」と、竹割りが腑に落ちねえモジナが訊えたト。

「見た通り、竹を割って『尻フタギ』を拵って居るがんだテ。」と教えるト、「ホウッカ ホッカ、そりで その『尻フタギ』ってやらあ 一体何に効くガンだヤ？」と モジナが首を傾げると、「今年あ 大雪だつてえんだンガ、食べ物が底を突くに違えねえ。それにや、食ったモンが出ねえように、尻の穴を塞いで置くガンが一番だと思つてノウ。」と、デタラメを言うと、聞えたモジナは「そらあ エエ考えだ。オレにも嵌めて貰えめえカ？」と頼んだト。

「ナジョウモ ナジョウモ。嵌める時や チットばか痛えども ガマンして  
てくんねえ。」オサギはモジナをアッチ向きさせると、割り竹をムリヤリ尻 穴  
に刺し込んで、「えっキビだ！」と言えシナに、また 林 ン中へ逃げ込んでし  
まったト。

二・三日経って、出るモンは出ねえし腹あ膨るし、転げ回って苦しんだモ  
ジナは、木の根っこや石っコロに尻の穴を 擦りつけて、ヤットコ竹を外した  
ども、ジットして居られねえほど腹が立つんだンガ、「んノックソツ オサギ  
めッ！。こんだっクサあ、フントウにタダじゃおかねえッ！」と、ドングリ 眼  
で 探し廻って居ると、こんだあ ブナ 林 ン中で トッカーン トッカーンと  
ブナの大木を伐るオサギをめつけたト。

「コネエーダは、ヒデュー目に遭わしてくれたッ！ 今日でえ今日クサあ  
カンベンならねえッ！」と嚇すと、「コネエーダ とは何のコッタベえ？。オ  
ラあ『ブナ山』のオサギってガンで、こっからあ 出たこともねえんだンガ、何  
のコッタやら サッパリ訳あ わからねえテ。」と、トボケて マサツカリを振  
り続けたト。

また 煙に巻かれたモジナが、「ホウツカや？ じゃあ 別のオサギだったろ  
うかノウ。そりて、ソインタあ ここで何してるがんだテ？」と訊くと、「見た通  
り、オラあブナ山の舟大工だんなんが舟を 拵ってるガンだテ。」と教えたト。  
「ホウツカ ホウツカ。そりて その舟あ 何に使うガンだヤ？」てって訊くと、  
「今年あ サケニヨがエツペエ 川を上るてえんだンガ、年取りザケでも捕ろ  
うと思つてノウ。」と、食えつたれモジナの気を惹くように教えたト。

ほうしると ヤシンボウのモジナは、「そらあ ケナリエこったナモ。ソインタ  
のエエ腕で、オレにもひとつ 拵っちゃ貰えメエカ？」とメエースたれて頼  
んだト。「ナジョウモ ナジョウモ。んだども、木の舟あ 揺れて 素人にや 向  
かねえガンだテ。ベト舟にサツシャリや、ソン方が 揺れねえしサケニヨもエ  
ツペエ捕れるガンだテ。」とダマカシて、「ヤケツパタの背中にや、チットば  
か痛かろうども。」と、ベト背負えを言えつけたト。

オサギは軽一えブナの舟、モジナは重一えベトの舟を 川まで担えで浮か  
べて見ると、ブナ舟あ ツーエ ツーエと進むども、ベト舟あ ブク ブク  
ブクッ ブクッと沈むばっかで漕ぐ事もならねえかったト。

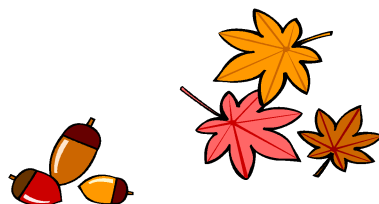
その内に、ベト舟に乗ったモジナが「オーエ オサギどん、オゴッタ オゴ  
ツタ！穴が開えて水が入って来るッ！」と騒ぎ立てたト。ンだども オサギあ  
「アチコタあねえテ。サケニヨは そっから跳び込んで来るスケエ、穴あ デ  
ツコエ程がエエがんだテ。」と笑えナーガ、「♪ ブナ舟あ ツーエ ツエ、ベト舟  
あ ポックラコ。」てって、携えた棹で穴を突つつくんだンガ、ベト舟あ 遂に  
川底へブクブクッと沈んじまったト。

舟が沈めば、水浴びの下手なモジナが 助かるワケも無えコテヤのう。ハッ  
コエ雪水の中で、アツプリ搔えて死んじまったト。

エーチゴ サケエ モーシタ、ナーベンシッタァ カーリカリ。

オモシヨかったかエ？ 学校本(教科書)に出て来る「カチカチ山」あ、《オ  
サギ》と《タノキ》だドモ、この辺りじゃ 《オサギ》と《モジナ》になつて  
るガンだテ。ソにしでも《尻フタギ》なんザ 嫌なコッタのう。

## 八、天邪鬼と瓜姫



トーンと昔があったゲナ。ある村に子持たずの爺さまと婆さまが居て、  
「子供が欲しえもんだノウ。えっくら チッコくたってエエすけえ…………。」  
てって毎日 地蔵さまにお参りして居たト。

ある日、何時ものように お参りに行くと 姿あ見えねえども、赤っ子の泣  
き声がしるんだンガ、「ハテ 面妖なコッタ。どこで泣えてるガンだろ？」と、  
ヨク ヨク見たれば、地蔵さまの कोरोモの壁に、ドングリ笠をツグラにした女  
っ子をめつけたト。

「オンヤ まあ、メゴゲな 赤っ子だコト！ 地蔵さまからの授かりモンに違  
えねえ。」婆さまは 掌に載つけて家へ持ち帰ったト。

口のチッコエ赤っ子だったスケエ、マンマ粒あ 縦にして食わせ、瓜の殻に入

れて育てたんダンガ、『瓜姫』ってえ名を付けてメジョウがったト。

始めは小指ぐれえだったども、だんだんデッコになると、器量好しで界限じゃ評判だったト。

村の若え衆がアマサレたりしるとオゴツたてえガんで、外へも出さず風にも当てねえほどだったども、祭の日になった時、「お宮参りに行ってもエエかノシ？」と、瓜姫が頼むんだんが、爺さまあ心配しナーガ、「じゃあ、駕籠ン乗って行けばエエ、駕籠から出て鬼に掠われたりしんなヤ。」とシブシブ承知したト。

駕籠が山道ンかかった時、瓜姫のエエ香を嗅ぎつけたアマンジャクが出て来て、駕籠舁きを追っ払うと、「俺の嫁ンなってくれヤ。」てってセガんだト。

タマゲた瓜姫が声も出せねえでジツして居ると、「そりじゃ、腹ん中へ入れて掠って行ごう。」てって、耳まで裂けた口でソックラ瓜姫を呑み込んだまいったト。ほうして、腹クツチャクになったアマンジャクは、そのマンマ 駕籠にノメリ込んで眠ってしまったト。

隠れて居た駕籠搔きが戻って来て、また担ごうとしたども、駕籠はバカげに重てえし、中から「♪ オーリヒメの 乗りカゴに アーマンジャクが 乗ったれモー。」てって、セツナげな唄声が聞こえるんだんが、「ハテ おかしなコッタ。瓜姫あ ドゴへ行つたがんだらう？」と中を覗えて見たれば、アマンジャクが鼻を搔えて寝て居たト。

二人の駕籠搔きは「ヨーシ！。寝てる間に ブチャツてくりょうッ！」てって、谷底目掛けて 駕籠をフルケ投げてしまったト。

駕籠はブッコオれて、アマンジャクは骨をオツポショって死んじまったト。だども、セツナげな「♪ オーリヒメの 乗り駕籠に アーマンジャクが 乗ったれモー。」てえ唄声だけあ何時までも止むコタあ 無えかったト。

谷底で唄って居たがんは、誰だったんだらうノウ？ 瓜姫あ食われたハズだし、アマンジャクも 死んだハズだし……………。

実あノウ、瓜姫の頭に挿した《ツゲ櫛》が脱げ落つて唄って居たがんだト。櫛あ アラタカナモンだすけえ、ナーンもカも知って居て、人の知らねえ事をおせ教えてくれたがんだト。

エーチゴ サケェ モーシタ、ナーベンシッタァ カーリカリ。





## 九、<sup>さる</sup> <sup>へつくり</sup> 猿の糞丸

トーンと昔<sup>むかし</sup>があったゲナ。山<sup>やま</sup>中<sup>なか</sup>のあるチッコエ村<sup>むら</sup>に仕事<sup>しごと</sup>好き<sup>ず</sup>の爺<sup>じ</sup>さまが居<sup>え</sup>て、春<sup>はる</sup>から秋<sup>あき</sup>まで毎日<sup>めえんち</sup>のように畑<sup>はたけ</sup>へ出<sup>で</sup>ちや草<sup>くさ</sup>を刈<sup>か</sup>ったりセツツエもんを見<sup>まわ</sup>て廻<sup>え</sup>ったりして居<sup>まわ</sup>たト。

そん日も、何時<sup>ひ</sup>も通りガシン<sup>えつ</sup>に稼<sup>どお</sup>いで居<sup>あき</sup>ると、秋<sup>てんき</sup>の天気<sup>か</sup>あ変<sup>か</sup>わりやすくて急<sup>きよ</sup>に雨<sup>あめ</sup>が降<sup>ふ</sup>り出<sup>だ</sup>したト。「ちょうどエエ おシメリだ。一服<sup>えつぷく</sup>してればソソマ止<sup>や</sup>むべえ。」と、近<sup>ちか</sup>くの洞<sup>ほら</sup>穴<sup>あな</sup>へ潜<sup>もぐ</sup>り込<sup>こ</sup>んで休<sup>やす</sup>むことにしたト。だども雨<sup>あめ</sup>あなかなか止<sup>や</sup>まねえで、目<sup>め</sup>をシク<sup>え</sup>って居<sup>おち</sup>る内<sup>ねぶ</sup>に つえ オトオト眠<sup>こ</sup>り込<sup>こ</sup>んでしま<sup>こ</sup>ったト。

薄<sup>おす</sup>暗<sup>ぐら</sup>くなってから、同<sup>おんな</sup>じように雨<sup>あま</sup>宿<sup>やど</sup>りを探<sup>さが</sup>してた一<sup>えつ</sup>匹<sup>びき</sup>の山<sup>やま</sup>ザル<sup>へ</sup>が這<sup>こ</sup>え込<sup>こ</sup>んで来<sup>き</sup>て、ジツトして動<sup>えご</sup>かねえ爺<sup>じ</sup>さまを め<sup>め</sup>つけると、「オウ オウ、暗<sup>くれ</sup>え穴<sup>あな</sup>蔵<sup>ぐら</sup>じゃ お参<sup>めえ</sup>りしるモンもあんメエに……。」てつて、携<sup>たげ</sup>えた食<sup>く</sup>え物<sup>もん</sup>を 爺<sup>じ</sup>さまの膝<sup>ひざ</sup>にゴツツラ載<sup>の</sup>っけてくれたト。

アケブ・エモゴウ・クッシバミ・コクワ。銀<sup>えつ</sup>杏<sup>ちよ</sup>・柿<sup>かき</sup>・栗<sup>くり</sup>・胡<sup>くる</sup>桃<sup>み</sup>・栃<sup>とち</sup>。山<sup>やま</sup>芋<sup>もも</sup>・山<sup>やま</sup>梨<sup>なし</sup>・山<sup>やま</sup>葡萄<sup>ぶどう</sup>……。山<sup>やま</sup>で採<sup>と</sup>れるサル<sup>と</sup>の食<sup>く</sup>え物<sup>もん</sup>あ そ<sup>ひ</sup>つくら 人<sup>ひと</sup>のゴツツオにもな<sup>な</sup>ったト。

食<sup>く</sup>え切<sup>き</sup>れねえサル<sup>そね</sup>の供<sup>もん</sup>え物<sup>ほら</sup>で 腹<sup>はら</sup>一杯<sup>えつ</sup>にな<sup>べ</sup>った爺<sup>じ</sup>さまが、家<sup>おち</sup>へ戻<sup>もど</sup>ってつから 村<sup>むら</sup>人<sup>しよ</sup>衆<sup>かた</sup>に語<sup>し</sup>ると、仕<sup>し</sup>事<sup>ごと</sup>嫌<sup>ぎれ</sup>えの真<sup>ま</sup>似<sup>ね</sup>コキ爺<sup>じ</sup>一<sup>き</sup>サが聞<sup>き</sup>きつけて、「オレもサル<sup>じ</sup>のゴツツオを食<sup>く</sup>って見<sup>み</sup>てえもんだ。躰<sup>からだ</sup>を動<sup>えご</sup>かさんでエエ地<sup>じ</sup>蔵<sup>ぞう</sup>のマネだら、ラクなコツたろう。」と山<sup>やま</sup>の洞<sup>ほら</sup>穴<sup>あな</sup>へ潜<sup>もぐ</sup>り込<sup>こ</sup>むことにしたト。

真<sup>ま</sup>似<sup>ね</sup>コキ爺<sup>じ</sup>一<sup>き</sup>サが洞<sup>ほら</sup>でジツト動<sup>えご</sup>かねえで居<sup>え</sup>ると、また前<sup>めえ</sup>のサル<sup>へ</sup>が入<sup>き</sup>って来<sup>き</sup>て、昨<sup>きの</sup>日<sup>な</sup> 供<sup>あ</sup>た山<sup>やま</sup>の採<sup>と</sup>りモンが ひとつも無<sup>ね</sup>えくな<sup>え</sup>って居<sup>え</sup>るンだんが、「石<sup>いし</sup>の地<sup>じ</sup>蔵<sup>ぞう</sup>さままでガンに、本<sup>ほん</sup>当<sup>と</sup>にアガラッシャッタかヤ？」とよ<sup>よ</sup>えナ<sup>え</sup>ーが、「トニカク<sup>え</sup>くれ 暗<sup>くれ</sup>え穴<sup>あな</sup>蔵<sup>ぐら</sup>じゃ お参<sup>めえ</sup>りしるモンもオゴツタすけえ、日<sup>ひ</sup>当<sup>あた</sup>りのエエ処<sup>ど</sup>へ移<sup>おつ</sup>し

てやるめえか。」てって、仲間<sup>ななかま</sup>のサル共<sup>とも</sup>を呼<sup>よ</sup>ばって来<sup>き</sup>て、地蔵<sup>じぞう</sup>を担<sup>かつ</sup>ぎ出すこと  
にしたト。

坂道<sup>さかみち</sup>を下<sup>お</sup>りて 沢<sup>さわ</sup>を渡<sup>わた</sup>る時<sup>とき</sup>、組<sup>く</sup>んだ肩<sup>かた</sup>に地蔵<sup>じぞう</sup>の<sup>の</sup>を載<sup>の</sup>せたサル共<sup>とも</sup>は 声<sup>こゑ</sup>を揃<sup>そろ</sup>えて唄<sup>おた</sup>  
ったト。

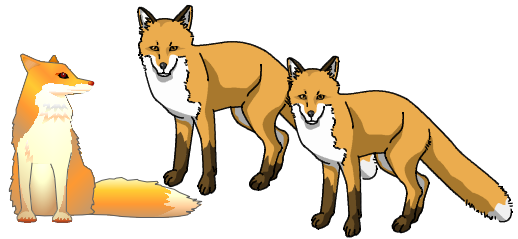
「♪ サールのヘックリあ 濡<sup>ぬ</sup>れても地蔵<sup>じぞう</sup>のヘックリあ 濡<sup>ぬ</sup>れシナ。」「♪ サ  
ールのヘックリあ 濡<sup>ぬ</sup>れても地蔵<sup>じぞう</sup>のヘックリあ 濡<sup>ぬ</sup>れシナ。ワッセエー ワッ  
セエー。」

聞<sup>き</sup>えて居<sup>え</sup>てあんまりオモシ<sup>おた</sup>ョエ唄<sup>まね</sup>だったスケエ、真<sup>ま</sup>似<sup>ね</sup>コキ爺<sup>じ</sup>ーサあ ツェツ  
ェ笑<sup>わ</sup>え声<sup>こゑ</sup>を立て<sup>た</sup>ててしまったト。

ほうしると、大<sup>て</sup>将<sup>えし</sup>役<sup>じぞう</sup>のサルは「石<sup>えし</sup>地蔵<sup>じぞう</sup>が笑<sup>わろ</sup>うハズも あんめえ、ヤッパシ  
こえつあ 贗<sup>まげえ</sup>もんだ。」てって「エーチ ニノ サンツ」で、沢<sup>さわ</sup>ん中<sup>なか</sup>へ投<sup>な</sup>げ込  
んじまったト。

だすけえで、真<sup>ま</sup>似<sup>ね</sup>コキ爺<sup>じ</sup>ーサの食<sup>く</sup>ったモンは ゴツツオどつか無<sup>ね</sup>え《コーツ  
タレ餅<sup>もち</sup>》(川<sup>かわ</sup>渡<sup>わた</sup>り餅<sup>もち</sup>・衣<sup>い</sup>服<sup>ふく</sup>を濡<sup>ぬ</sup>らす災<sup>さい</sup>難<sup>なん</sup>)だったト。

エーチゴ サケエ モーシタ、ナーベンシッタァ カーリカリ。



## 十、狐<sup>きつね</sup>の化<sup>ば</sup>かしっクラ

トーンと昔<sup>むかし</sup>があったゲナ。村<sup>むら</sup>外<sup>はず</sup>れの森<sup>もり</sup>や原<sup>はら</sup>っぱの林<sup>はやし</sup>にや、古<sup>ふる</sup>くっから  
棲<sup>す</sup>みつク狐<sup>きつね</sup>どもが居<sup>え</sup>て、中<sup>なか</sup>でも《池<sup>え</sup>田<sup>た</sup>》の天<sup>え</sup>丸<sup>だ</sup>と、《鍛<sup>てん</sup>冶<sup>まる</sup>屋<sup>ま</sup>っ原<sup>ら</sup>》の三<sup>か</sup>助<sup>じ</sup>と、  
《百<sup>び</sup>欠<sup>や</sup>》の孫<sup>ま</sup>左<sup>ご</sup>衛<sup>ぜ</sup>門<sup>もん</sup>てえ三<sup>さ</sup>匹<sup>びき</sup>は ワルサッコキの憎<sup>にく</sup>まれモンで評<sup>ひょう</sup>判<sup>ばん</sup>だったト。

ある時<sup>とき</sup>、《池<sup>え</sup>田<sup>た</sup>》の天<sup>てん</sup>丸<sup>まる</sup>が他<sup>ほか</sup>の二<sup>に</sup>匹<sup>びき</sup>に向<sup>む</sup>かって、「化<sup>ば</sup>けたり化<sup>ば</sup>かしたりの術<sup>すぶ</sup>  
あ 界<sup>け</sup>限<sup>えん</sup>で知<sup>し</sup>らねえモンは無<sup>ね</sup>えども、三<sup>さん</sup>匹<sup>びき</sup>の内<sup>うち</sup>で一<sup>いち</sup>番<sup>ばん</sup>の腕<sup>うで</sup>前<sup>め</sup>は誰<sup>だれ</sup>だか決<sup>き</sup>めよう  
じゃねえか。」てって、化<sup>ば</sup>かしっクラを為<sup>し</sup>ることに決<sup>き</sup>めたト。

「シヨッパナあ オレが勤めるすけえ、まあ 見ててくんねえ。」天丸ギツネは ちょうど通りがかった《荒金》の法印さまをめつけると、「ヨシ ヨシ、オモシレエ。」と言えシナに、道端で拾った草鞋を額に載つけると、クルッと Denguri 返しを打って、メゴゲな花嫁に化けたト。ほうして 法印さまの前に立って、シャナーリ シャナーリと歩んだト。

法印さまあ「サクキナまで誰も居ねえかったてガンに……？」と目をこすども、「嫁取りゴツタクだら、目出でえこった。祝儀の酒も出るコツタろう。」と、正月前のお札配りもそちのけにして、花嫁の後にくっ付けてヒョコ ヒョコ歩んだト。そうして居る内に、水ッ溜まりへ踏み込むヤラ、お札を濡らすヤラの、さんざんなテエタラクだったト。

花嫁姿の天丸ギツネは、旨え具合に法印さまをモウゾツ搔きにさしたと思えな一が、内股歩びを続けて居たども、その内に《前島》の鉄炮撃ちが飼って居た 犬っコロに正体を嗅ぎつけられてしまったト。

犬っコロあ 化けソクネた天丸ギツネのシッポをめつけて吠え立てるんだんが、「オッカネエ オッカネエ。犬に噛み付かれりや <化かしクラ>どっかあ無え。」てって、シッポを巻えて逃げ帰っちゃまったト。

次に、孫左衛門ギツネが「こんだあ オレの番だ。」てって、歯っ欠けの爺一サに化けたト。ほうして、《死ん事騒ぎ》のあつた家へ化け込んで お齋をゴツツオになろうと考えたト。「お経や念仏が始まったら、眠ったフリして聞き流せばエエ、とにかくゲロを吐くほどに 油揚げを食って見てえもんだ。」と言えシナに、皆に紛れて数珠を揉んで居たト。

お経が終わって、お齋が始まる前に お茶が出されたト。お茶にや 豆煎りが 付きモンだったスケエ、変わったコツちゃ無えかったども、歯っ欠けギツネの孫左衛門にや 噛る術も無えかったト。ンだども、取り回しの重箱が巡って来た時、「そりじゃ、……。」てって、一掴み 頬張って見たト。

ほうしてると、欠け残った歯までボロッと掬って、痛えの何の ガマンもならず、「これじゃあ、目当ての 油揚げも食うドッカアねえ。」てって、ホッペタ抑えナ一ガ 逃げ帰っちゃまったト。

つぎ さんすけ  
次に、三助ギツネが「こんだあ オレの番だ。」てって、サケニョ 捕りの若  
え衆に化けたト。

サケニョ 捕りにあ、《カギ》だの《エクリ》だのと色々あったども、三助ギ  
ツネあ 《待ち小屋》てえガンを架けることにしたト。

しば くんだりカヤを ぐえたりして 小屋架けが仕舞になった時、小便したく  
なつて、川っ縁の崖へ上がった三助あ、シヨン シヨンと水鉄砲のように飛ば  
したト。

ほうしると、それを見つけた 隣の小屋番が「片足あげて 小便したあ 犬  
コロみてえだナ。だども 犬が化けるワケもあんめえ。サテあ 化けギツネだ  
ナッ！」てって背後からドンと突ツコクったト。片足立ちの三助あ 川ん中へ  
バツシャーんとマクレエ落つて、ヤットコ 川から這えあがったドモ 寒さで  
ふる 震えナーガ「参った 参った。正 体は見破られるし、コーツタレ餅あ食うし、  
サケニョどっこの騒ぎじゃ無え。」てって、やっばし 逃げ帰っちまったト。

エーチゴ サケエ モーシタ、ナーベンシッタァ カーリカリ。

みんなが失敗しちまった《化かシククラ》あ、一体 誰が勝ったことになる  
ンだヤラのう。オメエたちが遊び回る《鍛冶屋っ原》は判るだろうが、《池田》  
つてえば「ドジョっ堀」のあたりだし、《百 欠》てえば「沢ん土手」辺りの  
コッタズヤ。《前島》は、今あ 田ッポだども、めえでは川ん中の島だったに違  
えねえ。《荒金》たア、オメエたちの婆さまが生まれた村たズヤ。

## 十一、サバ売り



トーンと 昔があつたゲナ。秋も末になるつてえと、歳取りに欠かせねえサ  
ケニョを携えて、山ん村まで売りに行く《サバ売り》が居たト。

峠を幾つも越えて、草臥れちまったサバ売りが「ヤレ ヤレ、ここ迄来り  
やあ、モエ一息だ。」てって 道端で汗を拭つて居ると、背後つけたの 林か

ら「サバ売り サバ売り、サバー一枚くんねえと、オノごと 何ごと呑んじもう  
ゾッ！」と嚇すモンが居たト。タマげたサバ売りが薄暗え藪を覗えて見たれ  
ば、口から 火でも吐くげな鬼婆が、毛モクジャラの腕を伸ばして、今にも跳  
びつくげの構えだったト。

息が止まるほどタマげたサバ売りが、「ソリじゃあ、一枚 食えなれモツ！」  
てって、一匹投げつけて呉れると、三尺もあるサバを忽ち平らげて、ソ  
ンマまた「サバ売り サバ売り、サバー一枚くんねえと、オノごと 何ごと呑んじ  
もうゾッ！」と嚇すテンガのう。

サバ売りあ《この大マクレメツ。こりじゃあ、助かりそうも無え。》と鬼婆  
目がけて箆ゴト投げつけると、「好きなだけ 食えナレモツ！」てって、鬼婆  
が食らってる間に盲滅法逃げ出したト。

商えもできず逃げ廻って居る内に、日は暮れるし 道にや 迷うし、「今夜  
あ 木の洞で明かすより仕方あんめえ。」と、藪をコザエて行くと、明りが一  
つ目に入ったト。キビの悪え一軒家だったども、コッスリ覗えて見たれば、  
なんと サッキナの鬼婆の家だったト。大鍋に甘酒を沸かしナーガ 炉縁端で  
横寝して居たども、脇にや 空っぽのサカナ箆も転がって居たト。

「チクショウめツ！ サバあ 残らず食っちゃったんだ。ヨーシ、寝てる間  
に仕返し してくりよう！」と、裏口へ廻ったサバ売りは天井梁まで這え上  
ったト。ほうして、屋根から抜えだ葎を鍋へ垂らし込んで、温 けえ甘酒をツ  
ーツーみんな飲み干してクレたト。

ちっとバカ経って、目を覚ました鬼婆は空っぽの鍋を見て、「眠ってる間に  
干上がっちゃったかヤ？ 甘酒あ 諦めて 餅でも食うめえか。」と、こんだ  
あ 餅をワタシに掛けて焼き始めたト。だども、またソンマ 横寝して 軒をか  
き始めたんだンガ、天井梁のサバ売りは、「甘酒の後の餅たあ、ありがてえ。」  
てって、葎の先で突き刺しちや食え 突き刺しちや食って みーんな平らげて  
しまったト。

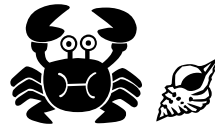
その後で、目を覚ました鬼婆は、「眠ってる間に 灰になっちゃったかヤ？  
サバを食ったソエで 腹クツチェすけえ、今夜あ 寝よう 寝よう……。」てっ  
て寝床へ入ることにしたト。

鬼の寝床ってえガンは、長持みてえなゲーッコエ筐で、《木床》と《金床》  
の二つがあったト。鬼婆は「今夜あ 寒えすけえ、金床にしよう。」てって  
唐金作りの寝床へ潜り込んだト。

鬼婆が 躰を搔き出してっから、天井梁を下りたサバ売りは、「今だッ！」  
 と言えシナに、グワアラ グワアラ煮立った茶釜の湯を 鬼婆の金床へ ジャー  
 ジャー流し込んでクレたト。ほうしると、金床の鬼婆あ出ることもならねえ  
 で「ギャアッ！」と大声を立てて、寒えどつかねえ アツチエー お湯に茹  
 でられて真っ赤になって死んじまったト。

エーチゴ サケエ モーシタ、ナーベンシッタァ カーリカリ。

## 十二、天マブリ 地マブリ



トーンと昔があつたゲナ。谷間の森に、ハシッコエ 獺とノメシコキの 猪  
 が棲んで居たト。

歳も暮れ近え日、カワソがモジナの処へ《出し合え》の相談に行つて、「ソ  
 ンタ、藪コギあヨテ(得意)だども、サカナ捕りあ苦手のようだナモ。オレあ、  
 サカナ捕りはマアママだが、山騒ぎあ 苦手なガンだテ。お互えに力を合わ  
 せりや 旨えもんが食われめえかノウ。」てつて、これからあ 捕つたモンは、  
 《分けッコ》しる事に決めたト。

何日か経つて、サカナを一杯携えたカワソが、「モジナどん モジナどん、  
 オレあ 川でサカナを捕つて来たども、ソント 山の方はナジョウだったナ  
 モ？」と訊くと、モジナはテッコウ向えたまんま、「オラあ《天マブリ》で、  
 どっこへも出らんねえんだんが、こうして テッコウ向きしてるガンだテ。約束  
 だすけえ、獲物だけあ 半分コにしてくんねえ。」と動きもしねえで、サカナ  
 だけを置えて行がせたト。

また日が経つて、サカナをエツペエ捕つたカワソが、「モジナどん モジナ  
 どん、オレあ川へ行つて来たども、ソントあ 山の方はナジョウだったナモ？」  
 と訊くと、モジナはこんだア下向えたまんま、「オラあ《地マブリ》で、どっ  
 こへも出られねえんだんが、こうして下向きして居るガンだテ。約束だすけ

え 獲物<sup>えもん</sup>だけあ 半分<sup>はんぶん</sup>コにしてくんねえ。」てって、戸口<sup>とぐち</sup>へも出<sup>で</sup>ねえかったト。

カワソは ノメシコキのモジナに肝<sup>きもや</sup>焼<sup>や</sup>えて、「よーシ、そりじゃあ こっちも意<sup>え</sup>地<sup>じ</sup>悪<sup>わり</sup>してくりよう。」と企<sup>たくら</sup>んだト。

「<sup>からだ</sup>軀<sup>えご</sup>を動か<sup>と</sup>かさんでも サカナを捕<sup>と</sup>る術<sup>すべ</sup>があるガンだが、ソント<sup>き</sup> やって<sup>よ</sup>みる気<sup>き</sup>あ無<sup>な</sup>えかノ？ 網<sup>あみ</sup>も<sup>ざる</sup> 箆<sup>え</sup>も要<sup>え</sup>らねえし、ジツト<sup>え</sup>してるだけでエエ<sup>え</sup>がんだテ。」と言<sup>い</sup>うと、仕事<sup>しごと</sup>嫌<sup>きら</sup>えのモジナも ヤツト<sup>こし</sup>コ腰<sup>こし</sup>をあげて「そりじゃあ、試<sup>ため</sup>して<sup>み</sup>見る<sup>め</sup>えか。」と、川<sup>かわ</sup>の端<sup>はた</sup>まで付<sup>つ</sup>えて<sup>え</sup>行く<sup>え</sup>ことにしたト。

「ヨーサりん<sup>かわ</sup>なったら、川<sup>かわ</sup>へ シッポ<sup>た</sup>を垂<sup>た</sup>らして居<sup>え</sup>るだけでエエ<sup>え</sup>がんだテ。寒<sup>かん</sup>の小<sup>こ</sup>ザカナ<sup>ふよ</sup>あ、冬<sup>ふゆ</sup>ごもり<sup>と</sup>にやエエ<sup>え</sup>巣<sup>す</sup>だと思<sup>おも</sup>って 寄<sup>よ</sup>っ集<sup>たか</sup>って来<sup>く</sup>るンだんが、そん時<sup>とき</sup> シッポ<sup>ひ</sup>を引<sup>ひ</sup>っ張<sup>ば</sup>り上<sup>あ</sup>げりや、サカナあ 《鈴<sup>すず</sup>生<sup>な</sup>り》<sup>さんだん</sup>てえ算<sup>え</sup>段<sup>だ</sup>だ。」

カワソの言<sup>い</sup>った通<sup>とお</sup>り、川<sup>かわ</sup>の縁<sup>ふち</sup>にシャゴ<sup>みず</sup>なって、シッポ<sup>つ</sup>を水<sup>みず</sup>に漬<sup>つ</sup>けて居<sup>え</sup>たモジナが、朝<sup>あさ</sup>方<sup>がた</sup>な<sup>た</sup>って引<sup>ひ</sup>っ張<sup>ば</sup>り上<sup>あ</sup>げようとしたれば、シッポ<sup>おも</sup>は重<sup>おも</sup>て<sup>え</sup>くてチツト<sup>えご</sup>も動<sup>うご</sup>か<sup>え</sup>ねえ<sup>え</sup>かったト。

「よっぼどの鈴<sup>すず</sup>生<sup>な</sup>りに違<sup>ちが</sup>え無<sup>な</sup>え。」ホク<sup>ほく</sup>ホク<sup>ほく</sup>面<sup>づら</sup>をしたモジナが馬<sup>ば</sup>鹿<sup>か</sup>力<sup>ちから</sup>で無<sup>む</sup>理<sup>り</sup>矢<sup>や</sup>理<sup>り</sup> ゴエツ<sup>ごえつ</sup>と引<sup>ひ</sup>っ張<sup>ば</sup>ると、凍<sup>こ</sup>み<sup>つ</sup>付<sup>え</sup>て居<sup>え</sup>たシッポ<sup>ねもと</sup>は根<sup>ね</sup>元<sup>もと</sup>からボッキ<sup>お</sup>リ<sup>お</sup>掬<sup>く</sup>げ落<sup>お</sup>ち<sup>ま</sup>ったト。

ノメシコキのモジナは、だす<sup>な</sup>け<sup>われ</sup>えで シッポ<sup>な</sup>無<sup>な</sup>しの笑<sup>わ</sup>え<sup>れ</sup>モン<sup>な</sup>にな<sup>な</sup>ち<sup>な</sup>ま<sup>な</sup>った<sup>な</sup>ガン<sup>な</sup>だト。

エーチゴ サケエ モーシタ、ナーベンシッタア カーリカリ。

お前<sup>めえ</sup>たちも「シッポ<sup>な</sup>無<sup>な</sup>し」の様<sup>やう</sup>だ<sup>な</sup>ドモ、「ノメシコキ」にや<sup>や</sup>なん<sup>なん</sup>な<sup>な</sup>ヤ。

### 十三、ベロベロ カメロ



トーンと昔<sup>むかし</sup>があったゲナ。これも隣<sup>となん</sup>の村<sup>むら</sup>のコツたども、あんまり仲<sup>なか</sup>の好<sup>え</sup>くねえ 爺<sup>じ</sup>一<sup>いち</sup>サと婆<sup>ば</sup>一<sup>いち</sup>サが居<sup>え</sup>て、喧嘩<sup>えさげえ</sup>しナーが一緒<sup>えっしょ</sup>に暮<sup>くら</sup>らして居<sup>え</sup>たト。

正<sup>しょう</sup>月<sup>ぐわつ</sup>が近<sup>ちか</sup>くな<sup>どき</sup>った時<sup>とき</sup>、「煤<sup>すす</sup>掃<sup>はき</sup>でもしるめえか。」と相談<sup>そうだん</sup>したども、ノメシコキの婆<sup>ば</sup>一<sup>いち</sup>サは行火<sup>あんか</sup>にシガミつ<sup>じ</sup>えて 爺<sup>じ</sup>一<sup>いち</sup>サ一人<sup>ひとり</sup>に仕<sup>し</sup>事<sup>ごと</sup>を押し付<sup>お</sup>けたト。

爺<sup>じ</sup>一<sup>いち</sup>サが頬<sup>ほ</sup>こつ<sup>こ</sup>かぶ<sup>ぶ</sup>りして、煤<sup>すす</sup>を払<sup>はら</sup>ったり 筵<sup>みしろ</sup>を叩<sup>たて</sup>えたりして居<sup>え</sup>ると、敷居<sup>しきえ</sup>の下<sup>した</sup>から豆<sup>まめ</sup>つ<sup>つ</sup>が<sup>が</sup>一<sup>ひと</sup>撮<sup>と</sup>み<sup>み</sup>転<sup>てん</sup>がり出<sup>で</sup>て来<sup>き</sup>たト。

「幾<sup>いく</sup>つもねえども、ノメシコキの婆<sup>ば</sup>一<sup>いち</sup>サに呉<sup>く</sup>れるなあ 勿<sup>も</sup>体<sup>て</sup>ねえし……。」

てって、戸<sup>と</sup>棚<sup>だ</sup>の隅<sup>すみ</sup>にコッスリ隠<sup>かく</sup>したト。

爺<sup>じ</sup>一<sup>いち</sup>サが留守<sup>ろす</sup>ンな<sup>どき</sup>った時<sup>とき</sup>、婆<sup>ば</sup>一<sup>いち</sup>サは《棚<sup>たな</sup>もと探<sup>さが</sup>し》して、この豆<sup>まめ</sup>をめつ<sup>め</sup>けたト。

「鼠<sup>ねずみ</sup>にカズけて チョロまかそう。ンだども、豆腐<sup>とうふ</sup>拵<sup>ごしや</sup>えあ 面倒<sup>めんど</sup>だし、豆煎<sup>まめえ</sup>りあ 固<sup>かた</sup>くて食<sup>く</sup>わんねえし……。」と考<sup>かん</sup>え<sup>げ</sup>たあげ<sup>げ</sup>く、「そうだ、粉<sup>こな</sup>に挽<sup>ふ</sup>けばエエ。」てって《キナコ》を拵<sup>ごしや</sup>うこと<sup>こと</sup>にしたト。

石臼<sup>えすす</sup>で、ち<sup>ち</sup>ょう<sup>な</sup>ど<sup>な</sup>粉<sup>こな</sup>が<sup>どき</sup>できあ<sup>ま</sup>が<sup>わり</sup>った時<sup>とき</sup>、間<sup>ま</sup>の悪<sup>わり</sup>えこと<sup>き</sup>に 爺<sup>じ</sup>一<sup>いち</sup>サが帰<sup>けえ</sup>って来<sup>き</sup>ち<sup>ま</sup>ったト。

タマゲて石臼<sup>えすす</sup>を片<sup>かた</sup>付<sup>づ</sup>けよう<sup>え</sup>としたども、ズクなしの婆<sup>ば</sup>一<sup>いち</sup>サにや、急<sup>きよ</sup>に動<sup>えご</sup>かす<sup>え</sup>ことも<sup>え</sup>なら<sup>え</sup>ね<sup>え</sup>で、襦<sup>ど</sup>袢<sup>と</sup>褌<sup>ら</sup>の裾<sup>そそ</sup>を捲<sup>まく</sup>ると 石臼<sup>えすす</sup>をマ<sup>ま</sup>タ<sup>た</sup>ゴ<sup>ご</sup>エて 覆<sup>お</sup>つ<sup>か</sup>く<sup>く</sup>隠<sup>かく</sup>すこと<sup>こと</sup>にしたト。

石臼<sup>えすす</sup>あ エ<sup>え</sup>ヤ<sup>や</sup>ン<sup>ん</sup>ベ<sup>べ</sup>エに隠<sup>かく</sup>れたども、冷<sup>つ</sup>て<sup>べ</sup>え<sup>え</sup>石<sup>し</sup>にく<sup>く</sup>つ<sup>つ</sup>え<sup>え</sup>た尻<sup>し</sup>ツ<sup>ツ</sup>ペ<sup>ペ</sup>タが 咳<sup>せき</sup>でも<sup>え</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>に、屁<sup>へ</sup>をブ<sup>ぶ</sup>ツと<sup>と</sup>コ<sup>こ</sup>エて<sup>て</sup>しま<sup>ま</sup>ったト。だ<sup>だ</sup>す<sup>す</sup>け<sup>け</sup>え<sup>え</sup>で、せ<sup>せ</sup>つ<sup>つ</sup>か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>キ<sup>キ</sup>ナ<sup>ナ</sup>コも 股<sup>また</sup>グ<sup>ぐ</sup>ラ<sup>ら</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>み<sup>み</sup>ん<sup>ん</sup>な<sup>な</sup>煙<sup>けぶ</sup>の<sup>の</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>に舞<sup>め</sup>え<sup>え</sup>上<sup>あ</sup>が<sup>が</sup>ち<sup>ち</sup>ま<sup>ま</sup>ったト。

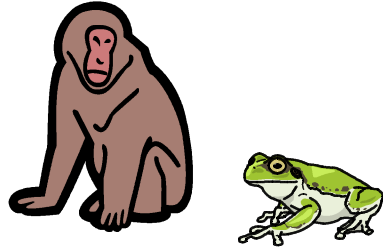
「ヤ<sup>か</sup>ヘ<sup>く</sup>エ ヤ<sup>か</sup>ヘ<sup>く</sup>エ。隠<sup>かく</sup>し<sup>し</sup>ッ<sup>ッ</sup>ク<sup>ク</sup>ラ<sup>ラ</sup>あ エ<sup>え</sup>ー<sup>ー</sup>コ<sup>こ</sup>だ<sup>だ</sup>ナ<sup>ナ</sup>モ。」と、ふ<sup>ふ</sup>た<sup>た</sup>り<sup>り</sup>は笑<sup>われ</sup>え<sup>あ</sup>合<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>て、それ<sup>それ</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>あ 喧<sup>え</sup>嘩<sup>さ</sup>もし<sup>し</sup>ね<sup>ね</sup>え<sup>え</sup>で暮<sup>くら</sup>す<sup>す</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>にな<sup>な</sup>った<sup>た</sup>ガ<sup>ガ</sup>ン<sup>ン</sup>だト。

他<sup>ひ</sup>人<sup>と</sup>の《隠<sup>かく</sup>し<sup>し</sup>ッ<sup>ッ</sup>屁<sup>べ</sup>》を<sup>あ</sup>当<sup>あ</sup>てる<sup>る</sup>に<sup>に</sup>や、「♪ ベ<sup>べ</sup>ロ<sup>ロ</sup> ベ<sup>べ</sup>ロ<sup>ロ</sup> カ<sup>カ</sup>メ<sup>メ</sup>ロ、屁<sup>へ</sup>を<sup>へ</sup>ブ<sup>ぶ</sup>ツと<sup>と</sup>コ<sup>こ</sup>エ<sup>え</sup>た<sup>た</sup>方<sup>ほう</sup>へ 向<sup>む</sup>き<sup>き</sup>や<sup>や</sup>ー<sup>ー</sup>れ 向<sup>む</sup>き<sup>き</sup>や<sup>や</sup>れ。」て<sup>て</sup>って、ノ<sup>ノ</sup>エ<sup>え</sup>ゴ<sup>ご</sup>を<sup>ま</sup>回<sup>ま</sup>す<sup>す</sup> 呪<sup>まじ</sup>が<sup>ま</sup>ある<sup>る</sup>ども、



キナコが舞<sup>め</sup>え<sup>あ</sup>上がってしめえば、目に見える<sup>め</sup>んだんが ソックラ判<sup>わか</sup>つちもうコ  
テエやノウ。

エーチゴ サケエ モーシタ、ナーベンシッタァ カーリカリ。



#### 十四、猿<sup>さる</sup>と蟷<sup>ひき</sup>

トーンと昔<sup>むかし</sup>があったゲナ。ドゴン家<sup>おち</sup>でも 正<sup>しょう</sup>月<sup>ぐわつ</sup> 近<sup>ちか</sup>くなるってエと、餅<sup>もち</sup>搗<sup>つつ</sup>  
きをしるんだんが、ペッターン ペッターンてえ 音<sup>おと</sup>は森<sup>もり</sup>や林<sup>はやし</sup>を越<sup>こ</sup>えて山<sup>やま</sup>中<sup>なか</sup>  
まで伝<sup>つた</sup>わったト。

餅<sup>もち</sup>搗<sup>つつ</sup>きの音<sup>おと</sup>を聞<sup>き</sup>きつけた山<sup>やま</sup>ザルが、ジツトしちや居<sup>え</sup>られねえで 村<sup>むら</sup>里<sup>ざと</sup>まで出<sup>で</sup>  
て来<sup>く</sup>ると、ヒキ蛙<sup>ひき</sup>にバツタリ出<sup>で</sup>逢<sup>お</sup>ったト。

「ヒキどん ヒキどん、ソントあ 搗<sup>つ</sup>きたての フワフワ餅<sup>もち</sup>を 食<sup>く</sup>えたかア無<sup>ね</sup>  
えかヤ？」と訊<sup>き</sup>くと、ヒキ蛙<sup>ひき</sup>は「食<sup>く</sup>えてえトモ。サルどんの百<sup>ひやく</sup>倍<sup>べん</sup>も食<sup>く</sup>えて  
えガンだテ。」と言<sup>よ</sup>ったト。

「搗<sup>つ</sup>きたての 餅<sup>もち</sup>を盗<sup>ぬす</sup>み出<sup>だ</sup>す手<sup>て</sup>があるんだが、ソントあ カタラねえか？」

「エエとも、仲<sup>なか</sup>間<sup>ま</sup>にしてくんねえ。」

ヒキが乗り気<sup>の</sup>になって、目<sup>め</sup>ん玉<sup>たま</sup>をパチクリさせると、サルは計<sup>けい</sup>略<sup>りやく</sup>を打<sup>ぶ</sup>ち明<sup>あ</sup>  
けたト。

「餅<sup>もち</sup>搗<sup>つつ</sup>やノウ。蒸<sup>ふか</sup>すモン 搗<sup>つ</sup>くモン 伸<sup>の</sup>すモンと、家<sup>おち</sup>中<sup>じょー</sup>が大<sup>お</sup>騒<sup>おさ</sup>ぎなんじゃ。」

「ふん ふん。」

「邪<sup>じゃ</sup>魔<sup>ま</sup>モンは 赤<sup>あか</sup>っ子<sup>こ</sup>だけじゃ。」

「ふん ふん。」

「邪<sup>じゃ</sup>魔<sup>ま</sup>モンの 赤<sup>あか</sup>っ子<sup>こ</sup>あ ツグラに入れて置<sup>お</sup>くドモ、その子<sup>こ</sup>が這<sup>へ</sup>え出<sup>だ</sup>して雪<sup>えき</sup>

ダナ へ落<sup>お</sup>つたとしら、ドウし<sup>おも</sup>うと思う？」

「家<sup>おち</sup>中<sup>じょー</sup> タマゲて外<sup>そと</sup>へ飛<sup>と</sup>び出<sup>だ</sup>すだろう。」

「ソウダ、その隙に臼を盗んで逃げようってえ 算段だ。」

「ナルホド。そりじゃあ 赤っ子を雪ダナへ投げ込むってコトか？」

「バカ、スツケえな悪えこたあ しちゃんねえ。」

「ふん ふん。」

「ソントが跳び込んで《バシャーン》てえ 音を立てりゃ エエがんだテ。」

企み通り旨く運んで、餅の入った臼を担ぎ出したサルが、山のテッペンまで逃げてっから 言ったト。

「こんだあ 餅の分けッコだが、半分コじゃあ 当たり前すぎてオモシロか無え。」

「ふん ふん。」

「山から臼を転がして、先に 掴えたモンがソックラ貰うてえナァ どうだろう？」

ノロマのヒキは、ハシッコえ サルに敵うワケもねえんだンガ、「コッスエなあ。」と思っただも、諦めてサルの言うなりに任したト。

横にした臼を転がして、一緒に追っかけた時、サルはピョーン ピョーンと飛び跳ねるども、ヒキはバツタリ バツタリ歩んだト。

麓まで転がった臼を先に 掴えたサルが、「どうだ、オレの頭と足にや敵うめえ。」と、臼を起こして見たれば、中あ空っぽで何にも無えかったト。

サルに遅れたヒキは「フワフワ餅は食えソクネたナモ。」と、ショゲなーが坂を降りて行くと、木の枝に引かかった白えモンが目に入ったト。

「今頃、咲く花もあんめえニ……。」と、手を伸ばして見たれば、ナーントまだ湯気の立つ 温 けえフワ フワ餅だったト。

「♪ テッコウから食おうが 下から食おうが、取ったモンのすき好き。」

ヒキは伸ばしたり縮めたりしナーガ、サルをケナリがらせたども、「約束だすけえでノウ。」と、サルにゃ一口も呉れてやらねえかったト。

エーチゴ サケエ モーシタ、ナーベンシッタァ カーリカリ。

## 十五、笠地蔵

トーンと昔<sup>むかし</sup>があったゲナ。山奥<sup>やまおく</sup>の村<sup>むら</sup>に爺<sup>じ</sup>さまと婆<sup>ば</sup>さまが暮<sup>くら</sup>らして居<sup>え</sup>て、雪<sup>えき</sup>が降<sup>ふ</sup>ると外<sup>そと</sup>へも出<sup>で</sup>られねえんダंगा、爺<sup>じ</sup>さまは土間<sup>どま</sup>でヒロロの笠<sup>かさ</sup>を編<sup>あ</sup>み、婆<sup>ば</sup>さまは行<sup>あんか</sup>火<sup>を</sup>で芋<sup>お</sup>を績<sup>す</sup>んで過<sup>す</sup>ごしたト。



歳<sup>としと</sup>取りの朝<sup>あさ</sup>げ、爺<sup>じ</sup>さまは「笠<sup>かさ</sup>が売<sup>お</sup>れたら、正<sup>しょうぐわつ</sup>月<sup>た</sup>ゴツツオの足<sup>た</sup>しになるモンでも買<sup>しげ</sup>って来<sup>こ</sup>めえか。」てって、拵<sup>こしや</sup>えた笠<sup>かさ</sup>を背<sup>せ</sup>負<sup>え</sup>って市<sup>いち</sup>まで雪<sup>えき</sup>道<sup>みち</sup>をコザクことにしたト。村<sup>むら</sup>のはずれまで行<sup>え</sup>ぐと、そこ<sup>ろくじぞう</sup>にや六<sup>なら</sup>地<sup>え</sup>蔵<sup>ぞう</sup>が並<sup>なら</sup>んで居<sup>え</sup>て、ナジョウにも寒<sup>さぶ</sup>げに見<sup>め</sup>えたト。

「オウ オウ メジョウゲラなコツた。冷<sup>つべ</sup>たかろうに笠<sup>かさ</sup>も被<sup>かぶ</sup>らねえで……。」爺<sup>じ</sup>さまは背<sup>そ</sup>負<sup>かさ</sup>った笠<sup>お</sup>を下<sup>じぞう</sup>ろして、地<sup>じよんじよん</sup>蔵<sup>かぶ</sup>さまに順<sup>か</sup>々に被<sup>か</sup>せてやると、笠<sup>かさ</sup>は五<sup>ごめえ</sup>枚<sup>えちめえ</sup>だったスケエ一枚<sup>いちまい</sup>たりねえかったト。

「そうだ、オレ<sup>かさ</sup>の笠<sup>かぶ</sup>を被<sup>わけ</sup>せりやエエ訳<sup>わけ</sup>だ。」爺<sup>じ</sup>さまア手<sup>てめえ</sup>前<sup>の</sup>が濡<sup>ぬ</sup>れるのも構<sup>かんま</sup>わねえで、脱<sup>ぬ</sup>えた笠<sup>かさ</sup>を地<sup>じぞう</sup>蔵<sup>かぶ</sup>さまに被<sup>か</sup>せてやったト。

売<sup>お</sup>る笠<sup>かさ</sup>が無<sup>な</sup>えくな<sup>な</sup>った爺<sup>じ</sup>さまは、市<sup>いち</sup>へも行<sup>え</sup>がずに引<sup>ひ</sup>っ返<sup>けえ</sup>して婆<sup>ば</sup>さまにワケ<sup>かた</sup>を語<sup>かた</sup>ったト。聞<sup>き</sup>えた婆<sup>ば</sup>さまは、「ホウカ ホウツカ。そらあ エエ事<sup>こと</sup>をサツシヤったノンシ。年<sup>としよ</sup>寄<sup>よ</sup>りにや、正<sup>しょうぐわつ</sup>月<sup>た</sup>ゴツツオなんザ要<sup>え</sup>らねえガンだテ。」と、腹<sup>はら</sup>を立<sup>た</sup>てる事<sup>こと</sup>も無<sup>な</sup>えかったト。

あり合<sup>あ</sup>わせの夕<sup>よーばん</sup>飯<sup>としと</sup>で年<sup>あと</sup>取<sup>じよや</sup>りをした後<sup>ご</sup>、除<sup>こんや</sup>夜<sup>あ</sup>だすけえ、今<sup>こんや</sup>夜<sup>あ</sup>火<sup>ほ</sup>所<sup>ど</sup>の火<sup>ひ</sup>を絶<sup>た</sup>やさねえように。」てって、火<sup>ひ</sup>床<sup>ど</sup>の火<sup>かこ</sup>をチツコク圍<sup>かこ</sup>って寝<sup>ね</sup>床<sup>ど</sup>へ入<sup>へ</sup>ろうとした時<sup>とき</sup>、庭<sup>にわ</sup>先<sup>さき</sup>で何<sup>なに</sup>やらドッシン ドッシンと響<sup>ひび</sup>く音<sup>おと</sup>がしたト。

「ジョウヤどっかで雪<sup>な</sup>崩<sup>ぜ</sup>でも衝<sup>つ</sup>えたガンだろう。」と、爺<sup>じ</sup>さまが破<sup>やぶ</sup>け障<sup>しょうじ</sup>子<sup>こ</sup>の穴<sup>あな</sup>から覗<sup>のぞ</sup>えて見<sup>み</sup>ると、黙<sup>だま</sup>ったまんまの男<sup>おつこしよ</sup>衆<sup>そり</sup>が櫓<sup>にものつ</sup>に積<sup>お</sup>んだ荷<sup>え</sup>物を降<sup>お</sup>ろして居<sup>え</sup>るドコだったト。

男<sup>おつこしよ</sup>衆<sup>にものつ</sup>は荷<sup>お</sup>物を降<sup>け</sup>ろすと、ソ<sup>ふ</sup>ンマ消<sup>たり</sup>えてしま<sup>に</sup>ったドモ、二<sup>に</sup>人<sup>に</sup>が庭<sup>で</sup>へ出<sup>み</sup>て見<sup>み</sup>

と タマげたことに、その荷物<sup>にもつ</sup>あ 正<sup>しょうぐわつ</sup> 月ゴツタクに 欠<sup>か</sup>かせねえモンばっかし  
だったト。

かどまつ しめなわ もち さげ こぶまき ほ がき ほ ぐり こんやく とうふ  
門松・注連縄・フクデ餅、鮭ニョ・昆布巻・干し柿・干し栗、蒟蒻・豆腐  
・納豆・脛……。市へ出たらシゲって来るつもりのモンばっかだったト。

えきあ め おつこしよ かず もつたり かぶ かさ じ あ  
雪明かりに見えた男 衆の数あ六人で、被<sup>かぶ</sup>ってた笠<sup>かさ</sup>あ 爺<sup>じ</sup>さまの編<sup>あ</sup>んだモン  
に違<sup>たが</sup>え無<sup>ね</sup>えかったト。

じ え しょうぐわつ むけ  
爺<sup>じ</sup>さまと婆<sup>ば</sup>さまは、好<sup>え</sup>え正<sup>しょうぐわつ</sup> 月<sup>むけ</sup>を迎<sup>む</sup>えらんたコツたろうノウ。

エーチゴ サケエ モーシタ、ナーベンシッタァ カーリカリ。



## 昔噺 あとがき

ここに綴った昔噺は、雪国の民家で語り継がれた 背景も題材も狭く小さな物語である。テレビ・ラジオは無く 書物は乏しく 野良遊びにも出られなかった冬の夜の子供たちには、ささやかながら またとない娯楽であった。

里の山野と風俗・言語を学ぶ家庭教育でもあった。語り手は方言に身振りを交えて聞き手の興味をそそったが、ひとたび伝えられると、口承は形を留める事なく消えてしまった。絵本などで伝えられた花形童話に比べれば何とも儚ない運命であった。いま記録に残さなければ、永遠に忘却されるだろうと懼れた。

童心に刻まれた印象は強烈だった。七十年を経た今でも、子守唄替わりに聞いた昔噺は郷里の山河や亡き父母・祖父母の俤と共に蘇る。

核家族化・都市型生活化、そして《方言追放》を地方文化の発展と捉える現今では、昔噺の衰退は必然であろう。《語り手》も《聞き手》も《語りの場》も次々と消えて行く。聞き手の興味関心も昔噺を超えた遊具やゲームに向かう世相となった。孫達に読んで貰う期待より、老人の郷愁に依る慰みである。

ふぶよ やさぶろばあ いつこ  
「吹雪く夜の 彌三郎婆 いま何処」

## あとがき

旧時（昭和初年代）の生活を思い出しながら収集した魚沼の方言である。俗語・卑語・差別語など現代の社会では排斥すべき語も混じっているが、史的資料と考えて敢えて省く事をしなかった。辞書に載せられず、活字に残る事も無く消えて行く方言への挽歌である。

祖父と母は《南魚・浦佐の五箇》に生まれ育った。父は《雷土》に生まれた。曾祖母は《赤羽》から、祖母は《押切》から嫁いでいた。その家庭に育った子供が耳にした日常語は、魚沼方言の中でも「八色方言」と呼ばれて良いものだったろう。

同じ南魚沼でも、『……ですネ』を、《城内》では、『……だナイ』と言い、《市野江》では『……だノイ』と言い、《浦佐》近辺では『……だノンシ』と言った。微妙な相違は家毎にも認められた。

《塩沢》で高校の同期会が開かれた時、『モエ チットバカ アガラッシャレ。』と勧めてくれた女性が居て、地域言葉の根深い繋がりに驚嘆させられた。

東京語が共通語（標準語）と呼ばれるに至り、かつて「源氏物語」や「枕草子」に使われた上方語（関西弁）も方言の一つと見られるようになった。

上州の「ベェベェ」言葉、東北の「ズーザー」弁、《セ》を《シェ》と発音する九州弁……、方言の特徴は様々ながら地域差を卑下する必要は更に無いだろう。東京にも「シ」と「ヒ」を区別できなかつたり、「汚い」を「バッチイ」などと言う子供が居た。

魚沼方言で「イ」を「エ」と発音し、「ウ」を「オ」と発音したのは、慎ましやかな口元を好む雪国人の素朴を反映したものであったろう。

方言を用いないと素直に生活感情を表せない場合が多い。戦後、「綴り方教

育」がもてはやされ「やまびこ学校」（無着成恭）や「方言詩」（大関松三郎）などが話題になった。方言に誇りを持たせる事は誤った指導では無かったろう。しかし、方言だけの生活が「倅せ」とばかりは言えなかった。里言葉は愛おしく懐かしい限りながら、時に足手纏いになる厄介な面をも露呈した。

生活様式の均一化が進み、地域格差は日に日に縮められている。情報機器の普及した現代社会では、方言を使っていると、逆に不便を感じずる事すら多くなった。

寂しい事ながら、方言は今や刻々と消えつつある。滅び去る前の収集と整理は方言に育てられた者の責務と思われた。

平成十九年八月



平成十五年十一月二十七日（七十歳）



## 非売品

平成十九年八月十五日	初版
平成二十年三月十五日	二版
平成二十一年四月二日	三版
平成二十五年四月二日	四版